

世界を旅する神

天龍神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ISの白騎士事件を解明した天夏達は新しくなった第二茶熊学園で日々を過ごして、龍姫達も同じように異世界を行ったり来たりと次元武偵の仕事をこなしながら学生生活を楽しんでいたのだが、また波乱の幕開けがきたのであった。

目次

第1章

プロローグ	1
天夏達の変身!!	4
作戦実行!!	8
次元武偵の指輪の魔法使い!!	12
巻貝のアンデッド	15
強盗犯、お縄に着くのだ	18
ゼロと猫と風の都	22
黒いカマキリの仮面ライダーと仮面ライダーの正体	25
仮面ライダーと教師と上級アンデッド	29

連行される仮面ライダーと地位を失
し王女を救う龍姫(りゆうひめ)

事情説明と言う名の告白	36
龍姫(りゆうひめ)と涙を流す少女達	39
神姫と皇女と涙	43
素奈緒な新しい自分へ&ジョーカーと女神	46
碧の戦乙女の決意と風都の仮面ライダー	50
理世の初めてのアルバイト	54
ご注文は〇〇ですか?	57

	カロルの苦手	60		88
	後の祭りとスノーホワイトの特訓			人語を話す熊とハートの戦士
64				91
	第二章 始動!			
	各世界の	67		I Sの過去
				94
	仮面ライダーとツインテールと変態			向こうで
				97
				蒼紅のカブトムシ
				100
71				ウダイオスの段
				104
				飛翔せよ!!
				108
	旅立ちの準備	78		仮面ライダーの準備
				112
	素奈緒(アンジュ)の騎士&哀れな妹			祐姫(ステラ・ヴァーミリオン)が魔法
82				使いになった理由と奈風海(ナオミ)の新
	転生の間に来たるはピンクの少女			しい家族
				117
85				アイズの入院事情&ベルの死んだふり
	ナオミの受け入れ先は緑の鬼の龍			?
				120

なぎさの・・・	124	並行世界での日常	163
車の仮面ライダーなぎさ	127	BOARDの所長	167
やりすぎなライダーキック	130	朱音達が仮面ライダーになった理由&	
報酬は山分け	133	並行世界の筈（弥生）	171
大龍整体所	136	実家に戻ったスミレ達と龍姫の葛藤	
第三章		175	
統制者の存在と天夏と弥生のパラレル	139	並行世界のIS学園寮の夜	179
ワールド		天夏の説教とアイズの経過と新王国で	
並行世界のISの世界	142	の光景	183
テイルブルー改め	146	紫龍と黒龍魔王	186
並行世界の自己紹介	151	一戦を終えて	190
三世界の出来事前編	155	やるしかないならやってみるまでだ!!	193
赤いクワガタライダーと共闘	159		

ファイルフィの今後	199
白狼龍VS蒼い雫	203
一週間前の	208
桐原の嫉妬	212
元妹と	216
並行世界の模擬戦終了	219
223 イーグルアンデッドと♣と天使	
並行世界のクラス代表決定	227
奈風海（ナオミ）の中学生活	230
パラレルワールドの実技訓練	233
変幻自在の花陽！	238
セイグリッド姉妹の変身	242

飛翔斬を喰らった三葉虫のアンデッド	246
喫茶店に集いし仮面ライダー達	251
ライダーとソウルボードとお弁当	255
255 並行世界の鈴（朱音）	258
なぎさの準備と龍姫と龍美の仕事	261
ノイズの前に現れたし仮面の戦士	265
例の約束	269
天羽々斬と絆龍の乙女&小さき龍の悩	

	バリアジャケットとシンフォギアと蛇	273
	蛇VS蛇	279
	それぞれの	282
	クラス代表戦、開始!!	286
	無人機	289
	赤の竜の巫女との遭遇	293
	ロードクリムゾンの初陣	296
	磁力のアンデット	300
	事件は会議室で起きてるんじゃない	305
310	絶剣の保険医、参上!!	315
	絶剣と模擬戦	318
	パラレルワールドのセシリアと鈴の模 擬戦	321
	オリハルコンエレメントの説明と朱音 の日常	324
	赤い龍の仮面ライダーVS象のアン デット	327
	白鳥の姉妹	332
	光の力	336
	カイザの所有者	339
	パラレルワールドのなぎさ(ラウラ)& 星奈(シャルロット・デユノア)	342

	新たな陰謀の幕開け	346
	部屋移動	350
	ラウラの暴走 I	356
359	教師としての&ラウラの暴走IIの段	
	組んでほしい	365
	パラレルワールドのクラス別トーナメント	370
	試合開始!!	374
378	ラウラとなぎさと555として	
384	555とオートバジンと水棲類	
	夢の守り人	388
	ISじゃない!! 仮面ライダーだ!!	
	の段	392
	並行世界のシャルロット	396
	新たな	400
	臨海学校の約束	404
	並行世界での買い物	408
	二つの世界の合流	412
	並行世界の臨海学校 初日	
	く凜として水着く	416
	並行世界のIS学園の臨海学校く波打ち際く	419
	夜の	424

	パラレルワールドの天災	428
	銀の福音 再び	432
	復活!! 仮面ライダー剣	435
	銀の福音と装甲機竜とソニックダイ	
	バー隊	442
	銀の福音と仮面ライダー	446
450	通りすがりの仮面ライダーだ!!	
	明かされる真実	454
	目覚めよ!! その魂!!	457
	砂浜での戦い	461
466	二人の「篠ノ之箒」のライダーキック	

いざ!! 異世界へ!!

第1章

プロローグ

名深市を巻き込んだ魔法少女バトルロワイヤル事件を解決したがそれでも助けられなかった命があつたことは忘れていけない龍音はそのことは次元武偵になってから心に決めていたのだから。

天界ではまた新たな仕事が舞い込んできたのであつた。

「テストが終わって翌日が土曜日ってのは」

「いいじゃない」

「あれ、山田先生じゃない」

天夏達は期末テストは問題なかったがほかの生徒達はISの科目が出なかったことが災いして補習を受けている生徒が出てしまったのであつた。

天夏達は外出届けを出して現在第二茶熊学園からモノレールで行けるショッピングモール「レゾナンス」に仕事で来ていたのであつた。

内容はIS関係の犯罪集団がこのレゾナンス付近で銀行を襲って資金に言う

情報を未来樹の精霊ラクアから次元武偵の先輩で姉貴分である鳴流神龍姫からメールで教えられたのであった。

そこに偶然ベンチに座っている天夏達の担任教師こと神姫である山田真耶を発見してしまったのだが天夏達はそのままラクアが言った場所へ向かうことにしたのであった。

「スクール先生に外へ気分転換して来るように言われてきたのは良かったんですけど、どうしてでしょうね、剣崎一真さんの事が頭から離れないのは？」

山田真耶はどうやら仮面ライダーでありジョーカーというアンデッドである剣崎一真にあの迷子になった剣崎一真を案内した際に一目惚れしてしまっていることを元亡国企業の工作員にして現第二茶熊学園教師のスクール・ミューゼルに見抜かれてしまい気分転換して来ればと言われてレゾナンスまでやってきたのはいいのだが何をすればいいのかわからずレゾナンスのベンチに座ってぼーとしていたのであった。

「ここがISが盛んだった世界なんだったことを忘れそうだな」

どうやら山田真耶の思い人である仮面ライダーこと剣崎一真も第一茶熊学園で知り合ったバイク仲間でガレア達から偶に羽を伸ばして来いと言われたので以前から気になっていた第一茶熊学園から見えていた街に繰り出していたのであった。

こういったことに縁がなかった剣崎一真は折角なのでISがまだ展示されていると

いうブースに行くことにしたのであった。

念の為此の世界にアンデッドが出てくる可能性を考えてラウズカードを持ってジョーカーラウザーがいつでも使える状態である。

「これがISか（確か仮面ライダーに一度でもなれたら男でも乗れるらしいんだっけ。天夏達がいい例だな。睦月も乗れるかな？）」

IS「打鉄」が展示されているブースにやってきた剣崎一真はいつもとは違う顔で眺めていたのであった。

元の世界の仲間達がISの事を聞いたら絶対に馬鹿らしいと言うだろうなど考えながら見ていたのであった。

天夏達の変身!!

天夏達は仕事でレゾナンスに来ている所に偶然担任教師山田真耶が上の空になってベンチに座っている場所に遭遇してたがそつとして置こうということで現場に直行して、山田真耶は自分が仮面ライダーことジョーカーである剣崎一真に惚れてしまっていることに気づいてなかったのだがその剣崎一真がこの世界にISを見にやって来ているのであった。

この時すでに運命の歯車が動く時が動き出したことにこの時誰も知る由もなかったのであった。

「動くな!!」

「銀行強盗!!」

「嫌な予感がします!!」

正しく天夏達の仕事で向かったであろうレゾナンス付近に位置する銀行にどこぞの女尊男卑狂言集団が手に銃火器類などを携えて乗り込んできた音に気付いた剣崎一真と山田真耶は別の場所に居るのにも関わらず現場である銀行に走って行ったのであった。

「ラクアの予言は本当だったか!!」

「不味いよ。(。D。)ノ!! そうだ!!」

「なるほどな」

「アタシ達にはこれがあつたの忘れてた!!」

天夏達はラクアの予言では場所が特定できなかつたので襲われそうな銀行の目星を付けていた時に銀行が襲われてしまったことに気づいて駆けつけたが強盗団は元より警察が邪魔で人質を救出することが出来ないどころか侵入することが出来ないでしばらく作戦を立てようとおもつたが弥生が徐にあの「デイケイドライブ」を取り出して腰に巻いたのを見た天夏達も続くように取り出したのであつた。

「さてと」

スマイレ&朱音「変身!!」

「行つてくるわね!!」

「ボクも変身!!」

「K A M E N R I D E !! d d d デイケイド!!」

「これだね」

「アタックライド!! R Y U !! R Y U !! 龍騎!!」

「行つてきます!!」

そう何を隠そう仮面ライダーに変身できるツールを取り出しスミレは金色の蝙蝠が描かれたカードデツキを、朱音は金色の龍の顔が描かれたカードデツキを今いる銀行の路地にある窓に向けて二人の腰にVバックルが巻かれて、スミレは右掌を見せながら左手に持っているトランスコアのAIが宿ったカードデツキをVバックルに差し込んで銀と黒の装甲の仮面ライダーナイトに変身し、朱音は右腕を斜め上に持って行きその勢いで左手に持っているカードデツキを入れて赤と銀の装甲の龍の仮面ライダー龍騎に変身して窓ガラスのミラーワールドに入って行ったのであった。

弥生もライドブツカーからディケイドのカードをディケイドライバーに差し込んでドラゴニック・オーバードロードの能力を使ってディケイドライバーの両端を押し込んで10を意味する「十」と「X」の黒のラインが入ったマセダンの仮面ライダーディケイドに変身し以前初めて朱音が仮面ライダー龍騎になった際に手に入れた仮面ライダー龍騎のカードをディケイドライバーに入れて仮面ライダー龍騎に変身して二人が入って行った窓ガラスに入って行ったのであった。

「キュー!!」

「オレはこれだな」

「スモール〜♪」

「その通気口から入ってくれ!!」

天夏はワイザードライバーに自身を小さくできる指輪「スモール」をベルトの手の形の部分に当てて小さくなってプラモンスター「レッドガルーダ」に乗って通気口から中に侵入したのであった。

作戦実行!!

天夏達が銀行強盗事件を解決に取り掛かっている頃銀行内にいる強盗犯達という
と警察に人質を盾に要求を出していたのであった。

「これじゃあ突入が出来ないな」

「人質がどうなってもいいの？」

「きゃ〜（。D。）ノ!!」

「（どうすればいいんだ）」

強盗犯の要求内容は至って簡単で警察の特殊部隊の退去と逃走用の車両で銀行に立
てこもっていたのであった。

剣崎一真は警察の目が届かない野次馬の後ろの方から何処からか侵入する場所を探
していたのであった。

「変身!!」

「あれはたしか・・・朱音ちゃんとスミレちゃんの声だ。変身つて、まさか!!」

剣崎一真はどうか野次馬の外へ投げ出されてその瞬間にスミレと朱音が仮面ライ
ダー龍騎とナイトに変身した声を聞いたようでその路地へ向かったのであった。

「なるほど。あの二人と一緒に窓ガラスに入って行ったんだな。!! 此処のドアなら」

「カチャ!!」

「なんで開いてるんだ? まあいい!!」

天夏達が居た路地にはもう天夏達が入って行った後だったのであたりを見まわした結果銀行の裏口らしいドアを見つけてドアノブを回してみたらなぜか鍵が掛かってなかったの一旦ドアを閉めてゆっくりと右手にAチェンジ・ビートルのカードを持ったまま右手の甲を外に向けて伸ばし切った瞬間、勢いよくジョーカーラウザーにチェンジ・ビートルのカードをラウズして

「変身!!」

青の異形の仮面ライダーになってを銀行内に侵入したのであった。

もちろん律儀にドアの鍵を閉めたのであった。

「こうなったら」

「うえくん;つ口、)!!」

「犯人に告ぐ!! 完全に包囲した!! 人質を今すぐ解放しなさい。(口。口)ノ!!」

相変わらず警察と強盗団の駆け引きがまだ続いていたのであった。

人質は銀行員とお客を含めて合計で十人と少なかったが強盗団のうち何人がISを待機状態で身に着けていたので警察は何もできなかったのである。

「流石の警察もI.Sには敵わないってどこねアハハハは（〇〇）／＼!!」

強盗団の数人が勝ち誇ったかのように高笑いをしながら裏口に通じるドアを見張っている強盗団の構成員がドアを開けて入って行った瞬間、

「ダリナンダアンタイツタイ（誰なんだアンタ一体?）」

「おまえが言えた口か化けもん（。 ㊦。）ノ!!」

「ウエイ（。 ㊦。）ノ!!」

「（剣崎さん? いいタイミング。こっちも）」

初めて入った通路は一応一本道だったためか入ってきた強盗犯はブレイドジョーカーに変身している剣崎一真と鉢合わせし剣崎はいつも通りに構えたが初めてみる仮面ライダーに驚いた強盗犯は持つていた拳銃を乱射したが剣崎は元の世界の仲間である橘朔也が変身している仮面ライダーギヤレンの銃撃を見ていた所為かあっさりとは言え持つていた剣で防いで気絶させてしまったのである。

これに好機を見出したスミレと朱音と弥生は強化ガラス前に立っていた強盗犯数人の項に向かって、

「ドサツ!!」

「もう大丈夫よ」

「観念するんだね」

「こつちにはISがあるんだよ!!」

「弥生。劍崎さん。後は任せます!!」

「ああ」

延髄斬りの要領で鏡から奇襲として蹴り込んで気絶させて無事に強盗犯から人質を救出した弥生達はISを持っている強盗犯のリーダーと対面したのだ。

IS「ラファール・リヴァイヴ」を纏った強盗犯のリーダーを弥生と天井に隠れている天夏と劍崎に任せてスマイレと朱音は人質を連れて外へ変身したまま撤退したのであった。

次元武偵の指輪の魔法使い!!

IS「ラファール・リヴアイヴ」に搭乗した強盗犯のリーダーの女性とディケイドライバーで仮面ライダー龍騎に変身している弥生とブレイドジョーカーに変身中の劍崎一真と天井裏で突入の機会を伺っている指輪の魔法使いこと天夏の三人が現場を請け負うことになったのであった。

「困ったな。劍崎さん変身してるけど、ブレイドのカードが使えないよ。(。D。)ノ!!
龍騎には確か)」

「ATTACK RIDE!! SWORD VENT!!」

「そんなちっこい剣でこのISとやろうっての? アハハツはアは(≡◇≡)!!」
「それじゃあ!! 虎牙破斬!!」

弥生はブレイドのカードがなぜか使えないようで、以前勝美が変身した時もなぜか絵柄が真っ白なままだったのである。

その劍崎一真が困ったことにジョーカーラウザーでビートル・アンデッドに近い姿のブレイドジョーカーに変身しているのであった。

どうやら劍崎一真が変身した仮面ライダーブレイドでなければならぬのかという

仮説が立てられているらしく、仕方なく弥生はライドブツカーから龍騎のカードの「S
WORDVENT」をディケイドライバーに入れて赤い柄の柳葉刀の片手剣サイズの
「ドラグセイバー」を呼び出してライドブツカーを剣形態にしてお得意の二刀流に構え
たのであった。

対する強盗犯のリーダーは勝ち誇ったかのように大笑いしていたので弥生がアドリ
ビトム組またはフラクシナスの大半のメンバーが覚える剣技「虎牙破斬」という斬り上
げながら飛んで重力を利用して叩き斬るといふ初歩的な二段斬りを強盗犯のリーダー
が纏っているIS「ラファール・リヴァイヴ」の右腕の装甲目掛けて斬りつけたのであつ
た。

「スパーン!!」

「ウソよドンドコドーン（嘘よそんなこと。㊦。ノ!!）」

「（行くぜ!!）」

「どくん!!」

「これ以上、やるって言うなら!!」

「Driver ON!!」

まるで豆腐のように綺麗に切り裂かれたので強盗犯のリーダーの女性は驚きの余り
活舌が可笑しくなった所で天井裏に隠れていた天夏が点検用の扉から飛び降りて腰に

巻かれたウイザードライバーを出現させて、

「シャバドゥビタツチヘンション!!」

「変身!!」

「ヒーヒーヒーヒー!!」

左利きに切り替えてラップ調の音声が鳴り響いている天夏は左中指に嵌められた恋龍が赤いルーンで作り上げた指輪の金具を下ろしてウイザードライバーの黒い手に翳すと赤い魔法陣が現れて天夏にゆつくりと近づいて行き通り抜けると、

「天夏も仮面ライダーだったのか(owo) / !!」

「話は後で!! さあ!! ショータイムだ!!」

「さあ。おまえの罪を数えろ!!」

「キイイイイ!! そのふざけたISで!!」

嵌めている指輪と同じ紅い水晶で黒いロングコートの指輪の魔法使い。言うなれば「仮面ライダーウイザード」に変身した天夏に同じく仮面ライダーの先輩の剣崎一真は驚いてしまったが気を取り直して強盗犯のライダーと交戦することになったのであった。

巻貝のアンデッド

指輪の魔法使い「仮面ライダーウィザード」に変身した天夏はノーマルフォームになるフレイルムスタイルで手にウィザードライバーに付いている黒い掌と同じ形が付いている可変式剣「ウィザードソードガン」と言う武器を持つて三人の仮面ライダーが揃いも揃って剣を構えているという状況でIS「ラファール・リヴァイヴ」を纏っている強盗犯のリーダーと交戦することになったのであった。

一方で人質を逃がしていたスミレと朱音は、

「ありがとうございます!!」

「お気になさらずに」

「さてと、ここは警察に任せてと!!」

変身を解かずに人質と強盗犯の構成員の身柄を引き渡して二人は天夏達の加勢に向かったのであった。

なぎさと星奈はというとレゾナンスからさほど遠くない人気がない砂浜にやってきていたのであった。

「まさか、この世界にアンデッドが送り込まれるなんて!! 行くよベルトさん!! 変身

!!

「ボクも!!」

「アーイ!! バッチリミナー!! カイガン!! オレ!! 覚悟!! ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!!」
「ジョーカーはどこだ!!」

どうやら天界から天夏達のいる世界にアンデッドが紛れ込んだらしくなげさと星奈のインテリジェントデバイスに映し出された場所がレゾナンス近くの人がない浜辺だったようで到着すると巻貝のアンデッドで♥カテゴリー5「シエルアンデッド」がなぜか地上に出てきていたのでこのままほっとくと被害が出てしまうのでなげさと星奈は敢てバリアジャケットではなく人格A Iが搭載されたドライブドライバーとゴーストドライバーでなげさが仮面ライダードライブに星奈が仮面ライダーゴーストに変身したのであった。

どうやら剣崎一真に反応しているようでこのままでは街に行ってしまうのでなげさと星奈はここでシエルアンデッドを倒すことにしたのである。

「おまえらのようなガキに用はない!! ジョーカーに用がある!!」

「はいそうですかと!! このままレゾナンスへ行かせると思ってる? ひとっ走り付き合っつて!!」

「なげさ。無茶しないように何かあったらわたしが龍臣とはやてとその取り巻きに…」

「行くよ!!」

シエルアンデッドは完全になぎさと星奈に目もくれずジョーカーである剣崎一真に戦いを挑む気満々だったのであった。

このままシエルアンデッドをレゾナンスへ行かせたら確実に被害が出る以上シエルアンデッドに有利な浜辺ではあるが此処で戦うしかなかったのである。

トライドロンが入って来れなかったのでシフトカーで変身したので武器は粒子化して持っていた機攻殻剣「クジキリコンゴウ」を抜刀し、星奈はデフォルトで装備されていた可変式兵器「ガンガンセイバー」を構えてシエルアンデッドに戦いを挑んだのであった。

強盗犯、お縄に着くの段

レゾナンス近くの浜辺でハートのカテゴリ5「シエルアンデッド」を見つけた第一茶熊学園の龍美達から送られた映像で現場に天夏達と別れて到着したなぎさと星奈が仮面ライダーに変身し戦いを挑んでいたのであった。

「星奈!!」

「うん!!」

なぎさと星奈「滅爪乱牙!!」

「ガキにこのアンデッドであるオレが……」

「それじゃあ!! 決めちゃおう!!」

「うん!!」

海に逃げ込まれないようにシエルアンデッドを挟み撃ちという戦法で戦っていたのである。

シエルアンデッドもまさか高校生が変身した仮面ライダーに実力を見誤ったとはいえここままでやられるとは思っていなかったようで幸いにもバツクルが開いてないことが救いなのだろうが、もう終わりを告げるのであった。

なぎさ&星奈 「鳳凰天駆!!」

「ふぎやあああゝ!!」

「ラウズカードで封印しなきゃいけないんだけど」

「無理そうだね（*、ω、*）」

まさか二人の仮面ライダーが前動作なしでいきなり飛びあがって鳳凰の形をした炎を纏ったライダーダブルキックを繰り出してくるとは思ってたシエルアンデッドは右腕の触手もなぎさと星奈が切り落としたので使えないのでそのままバツクルが開くどころかただの炭になってしまったのであった。

二人は変身を解除し天夏達の元へ帰ろうとした時、

「ラウズカード（。D。）ノ!!」

「どこから?」

「星奈!! あそこ（。D。）ノ!!」

「待ってください!!」

「行っちゃったか、もしかすると剣崎さんの知り合いだよね?」

「取り敢えず天夏達の所へ戻ろう」

一枚のラウズカードが回転しながら斜め後方から飛んできて緑色の光になってシエルアンデッドは封印されてラウズカードが戻って行った方向を見ると黒いカマキリの

仮面ライダーを見つけて声を掛けたが足早に立ち去ってしまったのでなぎさと星奈は天夏達の元へ戻ることにしたのであった。

一方、

「誰よアンタ達は!!」

「通りすがりの仮面ライダーだよ!! 覚えておけ!!」

「アンタに構ってる暇はない。そろそろ、ファイナーだ!!」

「チヨロイイネ!! キックストライク!! サイコー!!」

「劍崎さんも準備できてます?」

『FINAL ATTACK RIDE!! RYURYU 龍騎!!』

「わかった（幸いにも龍美達がラウズカードを複製してくれたから封印しなくて済んだけど。龍美がキングを封印不能にしちゃったのは驚いたな〜）」

『THUNDER!! KICK!! LIGHTNING BLAST!!』

「こっちはISなのよ（。D。）ノ!!」

もう既に処刑タイムに入っているが殺すわけではないのであくまでISを解除させて戦闘不能に追い込むのが目的なのだがどう見てもやめてあげてという状況であるが強盗犯に甘くなるはずがなく劍崎一真もジョーカーラウザーに龍美達を作ってくれたラウズカードをラウズして持っていた剣を逆手に持って床に突き刺して腰を落として、

天夏&弥生&剣崎 「うえええっえええい (O W O) !!」

【弥生様。やりすぎなような。(。口。)ノ】

【確かにやりすぎた感はあるが強盗を働いた以上はいい薬になっただろう】

三人同時にライダーキックを放つという通称「ライダートリプルキック」をIS「ラファール・リヴアイヴ」を纏っている強盗犯のライダーの女性目掛けて放ちISが解除されて無傷で女性を拘束したが天夏と弥生の相棒の機攻殻剣の「リアル」と「オーバーロード」は苦笑いをしていたのであった。

』

ゼロと猫と風の都

無事にIS「ラファール・リヴァイヴ」を纏っていた強盗犯のリーダーを戦闘不能にした天夏達は強盗犯のリーダーを警察に引き渡すことにしたのであった。

「なんで男でISに乗ってるんだ。(。D。)ノ!!」

「仮面ライダーだ(owo)!!」

「そういうことです。では!!」

「ガラスに入って行った。(。D。)ノ!!」

「ではオレ達も行きましょうか?」

無事に強盗犯のリーダーを警察に引き渡して人質は全員が無事だったのだがライダーシステムのことをISと勘違いし出した女性警察官に剣崎一真は変身したままライダーシステムだと返答して弥生はディケイド龍騎のまま近くにあった窓ガラスに入って行ったのであった。

この隙に天夏達も姿を晦ましたのであった。

一方

「月渚。この街に二人で一人の探偵がいるのね?」

「そのとおりですよ。姫。行きましようか」

ピンクのロングヘアを風に靡かせながら白いジャケットに動きやすそうな紺色の短パンを履いた少女の名はハルゲニアの貴族の末娘にして神姫もとい次元武偵ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールこと通称ルイズと艶艶な腰まである黒髪をポニーテールに束ねて男物のジャケットにカーゴパンツを履いた猫の妖怪にして神姫または次元武偵にしてルイズの使い魔屋神月渚は現在仕事で街の大半を風力発電で賄っている街「風都」にやってきたのであった。

どうやら今回の仕事は簡単な天界からのお使いらしいのだがそれが騒動に巻き込まれるとは二人は知る由もなかったのであった。

「此処ね」

「すいません〜!!」

ルイズと月渚は無事に鳴海探偵事務所前に天界の次元武偵本部から自分のスマホに送られた地図を頼りに辿り着いたのでドアをノックしたのであった。

出てきたのは、

「お客さん?」

「はい。フラクシナスの使いの者ですが、左翔太郎さんはご在宅でしょうか?」

「それが依頼で出かけとるんや!!」

「そうね探偵だし、他の人も依頼を持ってくるから忙しいのね。時間を置いて来ること伝えてくれませんか？」

「そう伝えて置くね!!」

受付の人と思われる女性が出迎えてくれたのだが肝心の探偵の左翔太郎が別件で留守と言うことでルイズと月渚は折角異世界の街に来たので風都を見て回ることにして女性にまた来ることを伝えて鳴海探偵事務所を後にしたのであった。

「キヤアつアアゝ（。D。）ノ」

「姫!!」

「うん。間違いないわね」

「きええつえええゝ!!」

風都の街を観光していたルイズと月渚だったが悲鳴が聞こえてきたのでその場所へ行ってみると二足歩行で右にアサシンブレードを装備し左指が鋭利なナイフになっている◆のカテゴリー4に君臨するペツカーアンドデッドを発見して戦う構えを取ったのであった。

黒いカマキリの仮面ライダーと仮面ライダーの正体

風都の街を訪れていたルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールことルイズとその使い魔星神月渚はキッツキのアンデッド「ペッカーアンデッド」を発見してしまったのでこれ以上被害が出る前に倒すことにしたのであった。

エンシエントドラゴンの戦いからルイズ達は日々努力を積み重ねて神姫能力もコントロール出来るまでになったが今いる場所では大混乱を招かないとは言いい切れないので粒子化していた愛刀とインテリジェントソード「デルフリンガー」を取り出し抜刀したのであった。

そこに、

「お嬢ちゃん達。その刀を鞘に納めな。お嬢さん達の手を汚すわけには行けねえからな」

「左さんですか？」

「話は後でな!! ファイリッブ!!」

「ジョーカー!!」

「サイクロン!!」

「変身!!」

帽子をかぶった男性が姿を現してルイズ達に刀を納めるように言いUSBメモリーのような物を取り出した瞬間なんと腰に変身ベルトが巻かれて片方に緑のUSBメモリーが現れて男性が持つていた紫色のUSBメモリーを差し込んで横に倒した瞬間、

「さあ。おまえの罪を数えろ!!」

「きえっえええ（ジョーカー!!）」

「(!!) 変身!!」

「Change!!」

「誰だ!!」

「もしかして、龍姫達が言ってた、仮面ライダー?」

緑と紫の左右対称のボディの仮面ライダーが姿を現したのであった。

ペッカーアンデッドはさっきの音声のジョーカーに反応したようで興奮状態になってしまった所に赤い複眼の黒いカマキリのような仮面ライダーが姿を現したことで二人の仮面ライダーが風都の街に現れたことになったのである。

「きっええっええ!!（ジョーカー!!）」

「(!!)!!」

「魔神剣!!」

「!!」

「わたし達のこと忘れないで!!」

「姫に危害を加えるのであれば、この星神月渚が許しません!!」

「翔太郎、この子達なんか強そう・・・」

『FLOAT!! DRILL!! TORNADO!! SPINNING DANCE

!!』

「ぎっえっええ!!」

「おい!!」

結局ルイズと月渚も参戦しペツカーアンデッドを追い込んで最後は黒い紅い複眼の仮面ライダーがラウズカードを使って錐揉み上に回転しながら蹴り込んでいくというライダーキックで止めを刺してホルダーから鎖が描かれたラウズカードを取り出して手裏剣の要領で放たれたラウズカードは緑色の光を吸収して放った主の手元に戻ってきて足早に立ち去ろうとしたところを緑と紫色の左右対称になっている仮面ライダーに止められていたのであった。

一方で

「此処なら」

「はあ・・・はあ・・・!!」

「ウエイ。(。D。)ノ!!」

銀行強盗事件を解決した剣崎一真は人気がない路地で変身を解いたところで振り返ると第二茶熊学園の天夏達の担任教師の山田真耶に変身を解除したところを見られてしまったのであった。

仮面ライダーと教師と上級アンデツドの段

路地裏で変身を解除した剣崎一真は振り返ると息を切らしている第二茶熊学園の天夏達のクラスを担当教師「山田真耶」が立っていたのであった。

「(さて、どうしたらいいんだ?)」

「剣崎さん!! そんなところで何をしてるんですか!!」

「それは・・・(変身して天夏達のサポートしてましたって言えない!!)」

どうやら完全に変身を解除したところを見られていた上に何をしていたのかと問いただされてしまい剣崎一真は内心此処にはいない仲間達に助けを求めていたのであった。

と言うのも天夏とは数秒前に別れてしまったので今は剣崎一真と山田真耶の二人だけという状況下に置かれてしまったのであった。

「天夏、剣崎さんは?」

「ああ。その辺りを見て回るって言って別れたけど?」

「それが山田先生に変身解除した瞬間を見られちゃったみたい(・ω・)」

天夏は無事にハリケーンスタイルで弥生達と合流したのだが星奈がスマホの画面を

見せながら山田真耶に問い詰められている剣崎一真が映し出されており呆れていたのであった。

その時天夏達はこの二人がまた騒動に巻き込まれるとは知る由もなかったのであった。

「フォー（O△O）———！！！！」

「危ない！！」

「久しぶりですね。仮面ライダー、いや剣崎一真。それとも・・・」

「（こんな時に上級アンデッド。それも厄介なこいつか！！ 山田先生を人質にする気だ。」

山田先生は確か全く戦闘術はやってないんだっけ）狙いはオレだろ！！」

「どうしたのかしら？」

剣崎一真が山田真耶に問いたただされている所に鋭利な刃が山田真耶目掛けて飛んできたので剣崎一真はとっさに山田真耶を庇いながら飛んできた刃をかわしたのであった。

飛んできた方向を向くとあの元の世界で別のアンデッドと手を組んで数少ない友である白井虎太郎を人質にしたくらい卑怯だが実力はある◆カテゴリーQという女性型アンデッドが多い部門に分類されるヤギのアンデッドで、人間としてはどこぞの歌手と同じ「矢沢」と名乗っている「カプリコーンアンデッド」が人間状態で立っていたので

あつた。

山田真耶は剣崎一真の後方に立っており完全にカプリコーンアンデッドの攻撃範囲内にいるために迂闊に変身が出来ない状況に置かれてしまったのであつた。

変身すれば自分がアンデッドであることを山田真耶に明かすことになるのだ。

天夏達は神姫であるためか剣崎一真がジョーカーアンデッドであることは剣心から知らされており受け入れていたのである。

「やるしかない!!」

剣崎一真の決断は早かつた。

ホルダーからスピードのAつまり「チェンジ・ビートル」のカードを右手に持つてそのまま斜め上まで手の甲を見せながら伸ばし切つた瞬間言い慣れたあの

「変身!!」

「Change!!」

「ウソですよね(;。∩。) !!」

「とうとうやっちゃたよ!! その女!! こいつはジョーカーつて言うアンデッドだよ

!! ぎゃはっ(≡◇≡) !!」

「アンギョン和田(相手はオレだ!!) !! カプリコーンアンデッド!!」

山田真耶を助けるためとはいえブレイドジョーカーの異形の姿に変身した剣崎一真

を見て山田真耶は呆然と見ていることしかできずそれを見たカプリコーンアンデッド
こと矢沢は抱腹絶倒と言った感じで大笑いしていたのであった。
こうして剣崎一真の二戦目が始まったのであった。

連行される仮面ライダーと地位を失いし王女を救う龍姫
(りゅうひめ)

山田真耶に問いただされていた所で、[◆]のカテゴリQのカプリコーンアンデッドに遭遇してしまった剣崎一真は山田真耶の目の前でジョーカーラウザーで変身してブレイドジョーカーに変身したのであった。

「チッ!!」

「待て!! クソ!!」

ブレイドジョーカーに変身した剣崎一真を見たカプリコーンアンデッドは敢て戦略的撤退をしまい剣崎一真はカプリコーンアンデッドを取り逃がしてしまったのであった。

そして変身を解いた剣崎一真はそのまま立ち去ろうとしたのだ。

それを止める人物がいたことに気が付かなかったのだ。

「(しまった!! さつき山田先生を助けた時か!!)」

「血が出るんじゃないですか!! 待っててください!!」

「うえ(; 皿)?」

「これでもう大丈夫です。さてと。さっきの姿に付いて話してくれますね？」

「・・・はい（何だろう逃げられそうにないこの雰囲気は）」

どうやらカプリコーンアンデッドの攻撃から山田真耶を助けた時に手を擦り剥いたらしくそこから人間本来の赤い血ではなく緑色の血が出ていたことに気が付き足早に立ち去ろうとした瞬間、山田真耶が剣崎一真の腕を掴んで顔色一つ変えずに治癒術を発動し剣崎一真の掠り傷を治したのであった。

まさかこつちの世界でも魔術が出来る人間がいることに驚いてしまった剣崎一真はそのまま山田真耶に連れていかれてしまったのであった。

一方で

「此処がミスルギ皇国か〜」

『マスター。仕事を忘れないでください!!』

「それじゃあ!! アルゼナルへ!!」

お尻まで伸びた美しい黒髪を運命という意味の名を持つ人物からもらったリボンでポニーテールに束ねている全体的に黒っぽい服装に両手に紺色のフィガーレスグローブに安全靴にカーゴパンツと言ったボーイッシュな雰囲気を出している都立来禅高校二年生にしてテルカ・リユミレスとリーゼ・マクシアからは英雄と称えられているが本人は全くそんな気はない少女にして神姫そして天界でも「タギツヒメ」という名を持

つ次元武偵にして秘密結社「ラタトクス」の一員でもある鳴流神家次女「鳴流神龍姫」は現在恋人で婚約者の五河士道と別件で単独でミスルギ皇国の元王女を保護する目的でやってきたのであった。

相棒のインテリジェントデバイス「イルミナル」と「バルディッシュ」と一緒にアルゼナルという一団に会いにその場所へ向かったのであった。

姉の龍美からアンデッドなども注意するように言われているためいつでも戦う準備をしているのであった。

こうして異世界を巻き込んだ戦いが始まろうとしていたのであった。

事情説明と言う名の告白

龍姫は婚約者の五河士道と別件で現在とある異世界の国「ミスルギ王国」の街はずれにやってきたのであった。

もちろん単独での仕事はゲームギョウ界でやってきたので慣れているのである。

一方で山田真耶に捕まった剣崎一真は第二茶熊学園の応接室に連れてこられたのであった。

「正直に話して下さい!!」

「(困ったな) 実はオレは、人間じゃない。さっきの矢沢と名乗っていたカプリコーンアンデッドと同じ不死身の生命体、アンデッドのジョーカーなんだ・・・そして仮面ライダーとして戦っていた」

「アンデッド? 仮面ライダー?」

「(そうだなこの世界には仮面ライダーって天夏達が初めてだしな) まずは仮面ライダーから説明しないとな」

「それと、一応剣崎さんは生徒なんですから!! わたしにはなるべく敬語で話してください!!」

「ハイ!!」

街から第二茶熊学園までの道中で物凄い視線が突き刺さっていたので剣崎一真は物凄く気まづかった。

何故ならば剣崎一真は180cm以上の身長の為自分より約30〜40cmも低い山田真耶に腕を引っ張られて連れていかれる様子をまるで親子のように見られていたように気まづかったのであった。

言っておくが山田真耶はこれでも大学を卒業したれっきとした24歳の大人なのだ、胸は立派なのだが身長が下手すれば9歳の夏龍と冬龍の二人に抜かされているほどのだ。

そんなことはさて置き剣崎一真は敢て本当の理由は言わないで自分がこの世界では軽蔑される不死身の化け物「アンデッド」でありその一体のジョーカーだと明かしたのであった。

それに付けくわえて仮面ライダーだと言うことも明かしたのだが今いる第二茶熊学園の世界ではISが流通していたこともあってライダーシステムは開発していなかった。なので仮面ライダーは何かと問いかけられたの説明しようとしたが自分が生徒と言う立場と言うことを忘れていたのか山田真耶になるべく敬語で話すように怒られてしまったのであった。

それから生まれた世界つまり此処とは違うパラレルワールドの地球で産まれたこと
幼い頃に火事で両親と死に別れたこと、仮面ライダーになった経緯は敢て誤魔化しなが
ら山田真耶に話したのであった。

自分が友のために人間を辞めてアンデッドになったなんて言えない。

「そうですか。あの〜」

「どうしました？（目のやり場に困る（*・ω・*））」

どうやら納得してくれたらしいが急に山田真耶が顔を赤くしながら何かを言おうと
していたが剣崎一真は山田真耶の立派な胸部装甲に目のやり場に困っていたのであつ
た。

そして、

「剣崎さん!! わたしとお付き合ひして下さい!!」

「・・・Σ（。∩。）・・・ウェイイイイ（owo）／??（睦月。助けてくれ!!）」

なんと山田真耶の愛の告白をされてしまった剣崎一真はしばらくラウズカード「ti
me」をラウズしたかのようにしばらく間が空いてから驚いてしまったのであった。

此処にはいない後輩の仮面ライダーレンゲルこと上条睦月に助けを求めたのは言う
までもなかった。

龍姫（りゅうひめ）と涙を流す少女達

第二茶熊学園の応接室で劍崎一真は山田真耶から告白されてしまったのであった。

一方、

『マスター!! 大変です!! アンジュリーゼさんが』

「行くよ!! セットアップ!!（本当なら変身って言いたいんだけど仮面ライダーじゃないからね）」

ミスルギ皇国からアルゼナルの拠点に潜入することにしたのも束の間、なんと保護対象のアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギことアンジュがミスルギ皇国に捕まってしまったという知らせが入ってきたのだ。

こういうことになるのも予測していたのか龍姫は至って冷静な態度で人気がない平原だったこともあってそのままインテリジェントデバイスを掲げてバリアジャケツト並びに神姫化と武装を装着して龍の紫色の兜で顔を隠してミスルギ皇国の王宮に単独で乗り込んでいったのであった。

龍姫は確かに姉と慕う旧姓高町現在獅子神なのはが11歳の時に単騎特攻を上層部の圧力があつたとはいえ行つて死の淵を彷徨い母、剣心が神姫化させないように神姫の

力を封じながら治療したことを知っている以上確かに無謀なのかもしれないが龍姫はたとえ無謀でもやってしまう体質なのだ。

そのなのも神姫になってしまったのだが。

顔を知らぬ助けを求めるアンジュに会うべく龍姫は空を飛んで行ったのであった。

「此処だね!!」

「あう!! 嫌ああッア!」

「ふははっは (≡◇≡) !! ウゲ? 誰だ!!」

「あなた誰よΣ(。Д。) !!」

「通りすがりの姫侍だ!! 覚えておけ!」

ミスルギ皇国の王宮上空に到着した龍姫はステルス状態になって王宮に近づき開いていた窓から中を覗くと義姉のフェイトに似ている自分と同じ年頃の少女が金髪の男性に執着していた現場を完全に目撃並びに自動撮影しているので完全に証拠が残っているため龍姫は金髪の男性を某赤いカブトムシの仮面ライダーのクロックアップ並みの速さで近づき殴り飛ばして態とステルスを解除して通りすがりの仮面ライダーならぬ姫侍と名乗ったのであった。

「わたしの名は(こ)こは本名でいいか) 鳴流神龍姫よ。あなたがアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギね」

「そうだけど。なんでわたしの名前知ってるのΣ（。∩。）!!」

「話は後でね。さて、ぶっ飛ばされてアンジュ開放するのとアンジュ返してぶっ飛ばされるか選んでくれる？　そして、さあ。おまえの罪を数えろ!!」

「お断りしよう!!」

「獅子戦吼!!」

「ふぎやあああつああΣ（。∩。）!!」

「あなた!!」

「わたしはここから脱出するけど。決めるのは」

「勿論よ!!　行くわよ!!」

「待って!!」

「まとめて行きますか!!　プレパイプ起動?」

金髪の男性ことエンブリヲと対面した龍姫は完全に怒りを燃やしており啖呵を切つてエンブリヲが龍姫の要求を断つたので龍姫に獅子の鬨気を叩き込まれて壁を軽く何枚かぶち抜いてぶっ飛ばしてアンジュリレーゼ・斑鳩・ミスルギを無事に救出したところにアンジュの仲間らしき龍姫の元の姿同様に黒髪をツインテールに結っている少女とアンジュの付き人らしきメイドも駆けつけて来たので一緒にプレパイプでフラクシナスへ転送したのであった。

もちろんこの後、

「強姦罪で逮捕!! 後でじっくりと話してもらってから!!」

「オレはわるくねえっえええ!!」

エンブリヲと一緒に今回の事件の火種になったジュリオ・飛鳥・ミスルギも芋蔓式に逮捕され仲良く刑務所送りになったとき。

めでたしめでたし。

神姫と皇女と涙

アンジュリリーゼ・斑鳩・ミスルギと仲間達と思われる人物を保護することに成功した龍姫はテレパイプで拠点のフラクシナスへ戻ってきたのであった。

「あれ？ 龍姫ちゃん。もう終わったの？」

「思いのほか早く片付いちゃった!!」

「わたし達はこれからどうなるのよ？」

「（龍姫ちゃんとフェイトさんの声聞いているみたい）取り敢えず場所を変えよう!!」

龍姫は今回の仕事は土日の二日間で取りかかる予定がたった数分で片付いてしまったので、保護したアンジュリリーゼ・斑鳩・ミスルギ達を連れて通路を歩いていたら、偶然にも幼馴染の一人の金髪碧眼の龍姫と同様に俗に言うわがままボデイを持っている神姫「アマツミカボシ」にして龍姫と同じクラス之都立来禅高校二年生である獅子神家次女「獅子神星龍」と遭遇しアンジュリリーゼ・斑鳩・ミスルギ達の処遇について話し合うためフラクシナスの応接間に向かったのであった。

「それじゃあ。自己紹介がまだだったね」

「龍姫ちゃんΣ（。D。）!! この子達まだ神姫化したところ見るの初めてなんだよΣ

「。D。）!!」

「え？ さっきのお方ですか。（。D。）!!」

「（ここならわたしの趣味も）」

「ごめん。こつちが普段の姿なんだ。改めて。ボクはこのフラクシナスの運営しているラタトスク所属でそつちで言う軍位は「大将」している流星の絆の統括責任者の鳴流神龍姫。よろしくね」

「同じく流星の絆で副将を務めている獅子神星龍。よろしくね」

応接間に場所を移した龍姫と星龍と保護されたアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ達は初めてさっきの龍の仮面の侍が一瞬で黒髪のパニーテールに束ねている人物になったのでしばらく固まってしまったので星龍が龍姫にツツコミを入れたのであった。

龍姫と星龍の二人のいつものやり取りもアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ達からすればあの日から失った物の一つなのだろうとどこかしら羨ましそうに見ていたのであった。

「わたしは、龍姫に教えたけど、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ」

「サリア。よろしく」

「モモカ・荻野目と申します」

「それじゃあ。これからの事を決めようか？」

「どうせ・・・」

「ノーマつまり魔術が使えないからってここではそんな建前は通用しないよ。それにかの世界じゃ魔術は論理と理論で構成されてる以上誰でも行使できる武醒魔導器もあるけど？」

「もう。泣きたいときは泣いていいんだよ。アンジュリーゼちゃん!!」

「わたしは、わたしは、あああああああ(T|T)／＼／＼」

アンジュリーゼ達は元の世界に戻ることは出来ないため超神次元ゲームギョウ界で戸籍を作り暮らしてもらったことにしたがアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギは龍姫が目の前で魔術を使っていたところを見ていたので龍姫に劣等感を抱いていたのであった。

龍姫には全部お見通しらしくこれも幼い頃からの体質なのだろう星龍もアンジュリーゼに泣きたいときは泣いていいと言った途端、アンジュリーゼは思いつ切り龍姫と星龍に抱きついて泣き出したのであった。

素奈緒な新しい自分へ&ジョーカーと女神

ミスルギ王国で龍姫に命を救われたアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギは龍姫と星龍に抱きつき思いっきり泣いたのであった。

しばらくして泣き止んだので本題であるアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ達の身の振り方を決めることにしたのであった。

「超神次元ゲームギョウ界で生活することにしたんだね」

「ええ。それに龍姫達に会えてよかった」

「そうそう、サリアちゃん。大龍さんが診てくれるって」

「どこが悪いんですか？」

「つて言ったそばから」

「お迎えきたで〜ほな行こうか」

「どこへ（。 ㊦。 ）ノ!!」

「大丈夫だよ。大龍さんだし（。・ω・。）」

アンジュリーゼ達は超神次元ゲームギョウ界で暮らすことになってしばらくは自分達でなんとかかすると言い龍姫から生活する部屋の鍵を受け取ってサリアが自分の体の

ある分目で悩みを抱えていたをのを見抜いた龍姫は密かに姉貴分の一人である大龍にメールで連絡した所わずか数秒で次元転送してきて一目でサリアを認識してそのまま背後から羽交い絞めにしてそのまま律儀に転送ルームに連れて行ってしまったのであった。

「名前は変えちゃっていいんだね？」

「ええ。もうわたしはアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギとして死んだ。だからこれからは日本人として生きたいの!! 変われるよね？」

「変われるよ。改めてよろしくね!! 素奈緒!!」

「それじゃあ! ボクからの餞別受け取って!!」

残されたアンジュリーゼとモモカは超神次元ゲームギョウ界で暮らすための戸籍を書き終えて龍姫と星龍に渡したのであった。

アンジュリーゼは龍姫と星龍に新しい自分として扱ってほしいと言う意味で名前を「アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ」から「近衛素奈緒」と名前と日本国籍を手に入れたのであった。

先ほど武醒魔導器を貰う手続きも終えていたので後はこのまま超神次元ゲームギョウ界で暮らす家に向かうだけなのだが星龍が餞別と言いながら指パッチンした瞬間、

「髪が伸びたΣ(。Д。)!!」

「まさか。餞別って言うのは」

「折角の綺麗な髪だったんだよね。それに新しい自分として生きるんだしいいじゃない
(≡◇≡) !!」

「束ねるならこれ使って」

「ありがとう。それじゃあ落ち着いたら遊びに来てね」

素奈緒の髪が腰まで伸びてしまったことでもますますフェイトに近い雰囲気になってしまったのである。

素奈緒は満更ではないようで龍姫から友情の印だろうかアイテムパックから紫色のリボンを二本取り出して素奈緒に渡して素奈緒とモモカは超神次元ゲームギョウ界のプラネテューヌへ転送していったのであった。

一方で

「困った。こういうのは睦月が専門なんだよな(*´ω`*)」

第二茶熊学園の応接室で山田真耶からの告白にどう対処しようか困ってしまった剣崎一真は此処にはいない後輩の上城睦月に助けを求めていたのであった。

今の剣崎一真の脳裏に映った光景は、

(OMO)「.....」

「ダディヤーナザン!! ナズエミデルンデイス(OWO) / !! (橘さん!! 何見てるん

です!!」

自分が♠のカテゴリリー5のローカストアンデッドと戦っているのを物陰から見ている橘朔也こと仮面ライダーギヤレンのことがよぎったのは言うまでもなかったのである。

「けど・・・オレは!!」

「わたしも元人間です!!　これが証拠だよ!!」

「・・・と言うことは」

「はい。女神なんだよ(≧◇≦)!!」

劍崎一真は自分が不老不死に近い存在であるため告白を断ろうとした矢先に山田真耶に先手を打たれて山田真耶から自分もなりたくてなったわけじゃない神姫であることを証明するためその場で170cm位で体型はそのまま髪がピンクで緑色の甲冑の身に纏い腰に何故か一振りで十分なのだが剣術をしたことのない山田真耶には似つかない片手両刃剣と日本刀の二振りを帯刀して先ほどの敬語から一変して龍姫達と変わらない言葉遣いになった姿を劍崎一真に見せたのであった。

碧の戦乙女の決意と風都の仮面ライダー

剣崎一真は自分に惚れているらしい第二茶熊学園の教師で見た目は童顔も相まって子供に見えてしまう天夏のクラス担任の山田真耶から自身が人間ではく事故とは言え女神の血を飲んでしまつて女神になつたことを目の前で仮面ライダーがいる前でノーマルフォームである薄緑の甲冑の戦乙女風の女神で侍の姿になつて口調が先ほどの堅苦しい敬語が一変して砕けた口調になつたのであつた。

「いいのか？ オレ……」

「アンデッドがなんだ!!」

「!!」

「あまり深くは聞かないよ!! 一真、ボクはそれを含めて一真が好きになつたの!!」

「(オレはどうすればいいんだ?) オレで良いんだな?」

「勿論だよ!! 一真!! だって一真を一人にすると、勝手にどこかに行っちゃいそうなんだもん!!」

「!!」

色恋沙汰に縁がなかつた剣崎一真は自分に教師という立場であるのにも拘らず思い

をぶつけて来る現在神姫化している山田真耶からさん付の名字ではなく「一真」と呼ばれたことに驚きそして内心では白井虎太郎や相川始達にもう一度会いたいがジョーカーの闘争本能が暴走してしまうかという恐怖に怯えていたことを見抜かれてしまったことに驚いてしまったのであった。

「オレってそういうやこういったことは経験ないな。睦月に教えてもらえばよかった。取り敢えず）今日は仕事の方は良いのか？ それに元の姿に戻って欲しいんだけど？」

「あ!! すいませんでした（>）（<）!! はい!! 今日は理事長から休暇を貰っていたので、もし劍崎さんが良ければなんですけど、一緒にどこか出かけませんか？」

「えくと、うん、今からだ、あ!! 葵屋って店にも行きたかったんだ!!」

「葵屋？」

「場所は龍美から教えてもらったから」

「それじゃあ!! 行きましよう!!」

劍崎一真は取り敢えず山田真耶に元の姿に戻るよう言い山田真耶は元の姿に戻る理事長から休暇を貰っていることを明かしデートを申し込んだのであった。

この時劍崎一真は後輩である仮面ライダーレンゲルこと上城睦月に異性との交流に仕方を教わっておけばと思っていた所でレゾナンスのI.Sを見た後は鳴流神兄妹の実家が経営している和風喫茶「葵屋」に行くことを真耶に明かして一緒に葵屋に行くこと

になったのであった。

一方で

「この前の一件はありがとうございました。報告書の記入漏れはないようですし、報酬はお振込みでよろしいですか？」

「それでいいよ!!」

「フィリップ!!」

「こつちの話は終わったけど、アンタは？」

「オレは、相川始、仮面ライダーだ」

「それは済まなかった。オレはこの鳴海探偵事務所の左翔太郎だ。同じ仮面ライダー同士だ。これからよろしく!!」

『相川始って、確か、剣崎一真の知り合いよね?』

『はい。それで合ってます。仮面ライダーカリス。またはジョーカーアンデッド』

風都で遭遇したアンデッドの封印に成功したルイズ達一行は鳴海探偵事務所での報酬について探偵で自称「ハードボイルド」の青年の左翔太郎とその相棒フィリップは先の戦闘で乱入してアンデッドをラウズカードで封印した者こそ剣崎一真と一緒に戦っていた仮面ライダーカリスこともう一人のジョーカーアンデッド「相川始」だったのであった。

数分前までレゾナンス付近でシエルアンデッドを封印してどういう経緯かわからないがここ風都にやって来て偶然アンデッドと戦闘していたルイズ達を見かけて助けに入ったのであった。

翔太郎と始はお互い仮面ライダーと言うことで仲良くすることにしたようでそれを見ていたルイズと月渚は念話で話していたのであった。

□

理世の初めてのアルバイト

風都でまさか仮面ライダー同士が出会うという機会に恵まれてしまったルイズと月渚はその光景を見ていたのであった。

「あの。会わないのですか？」

「姫!!」

「君は怖くないのか、目の前にアンデッドがいることに？」

「わたしは、この世界の住人ではないです。ハルゲニアという場所から来たんです!!」

なので、アンデッドより強い魔物と戦ったこともありますので、では、また会えることを楽しみにしています!!」

「!! 面白いえば名前は？ オレは相川始」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと言います。長いので、ルイズでいいです」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール姫の守り刀の星神月渚と申します。お気軽に、月渚とお呼びください。では」

「劍崎・・・」

鳴海探偵事務所での話を終えて出てきたルイズと月渚は仮面ライダーカリスこと相川始に剣崎一真には会わないのかとルイズに問われてジョーカーアンデッドである自分が怖くないのかとルイズに聞くとルイズは龍美達に出会ったことでアンデッドより強い者達と戦ったのである。

ルイズは面と向かつて怖くないと答えたのだ。

それを聞いた始は内心で驚きルイズに名を聞いてルイズから長いのでルイズでいいと言われて二組はそこで別れたのであった。

一方では、

「リハビリと思えばいいんですね」

「理世さん。似合ってるね」

「ありがとうございます」

金髪碧眼で黒縁伊達眼鏡で変装して第二茶熊学園の生徒として籍を置いている旧名セリスティアこと天々座理世はリハビリを兼ねて現在土曜限定であるが、鳴流神家が経営している和風喫茶「葵屋」でアルバイトをしていたのであった。

理世自身が精神世界で出会ったもう一人の自分と出会ったのが喫茶店での時着ていた服を自分も着てみたいと前から思っていたので左足のギプスが取れたので剣心にアルバイトを申し込んだところ承諾してもらい今日がアルバイト初日なのである。

そして今日のアルバイトできる制服は、

「似合ってますか？」

「似合ってます」

そう何を隠そうあの薄紫色のジャンパースカート型の制服を無理を承知で頼んだところコスプレや衣装づくりが趣味の勇龍達があつという間に企画書というゲームギョウ界では一瞬で素材さえあれば作れてしまう代物で理世が精神世界で出会ったもう一人の自分が着ていた服を作ってもらって用意してもらったのであった。

そして一応食品を扱う店なので髪を紫色のヘアゴムでツインテールに束ねて黒縁伊達眼鏡を外し更衣室のロッカーに付いている鏡で自分の姿を確認して店のホールへ、元超神次元ゲームギョウ界の女神「パープルハート」だった旧名ネプテューヌこと真龍姫とうずめと龍姫と一緒に向かったのであった。

ご注文は〇〇ですか？

理世がアルバイト初日の和風喫茶なのだが基本決まった制服はないので龍姫はウエーター姿で真龍姫はスタンダードなウエイトレス姿でうずめがヘッドドレスを着けているウエイトレス風の制服で理世はジャンパースカートの制服でお客さんを相手にしていたのであった。

「此処かく行くか」

「そうですね（＼＼＼）」

葵屋の前に第二茶熊学園で付き合うことになった剣崎一真と山田真耶がやってきたのである。

「どうやって次元を超えているかと言うと前もって龍美達が剣崎一真に転送用のデバイスを渡しているのでも剣崎一真は自分の世界の地球に帰ることが出来るのだが剣崎一真はどうしても帰れないわけがあるので今は第一茶熊学園の講師ではなく生徒として男子寮に寝泊まりをしている。」

閑話休題

二人は早速葵屋の昔ながらの引き戸を開けて暖簾を潜って店内に入って行ったので

ある。

それをある人物が

「ウフフ（ゝ——）——☆ あの奥手の真耶があんな大胆な行動を起して彼を落とすなんてね。さてと、わたしは行こうかしら」

元亡国企業のエージェントにして大龍が一般生徒を庇ったとは言え掠り傷を負わせてその流血した血液が一滴だけだが飲んでしまつて神姫になつた金髪の麗しい美女が可愛いものが大好きという一面を見せるスコール・ミューゼルは葵屋の近くの路地からナズエミテルンデイス!!よろしく傍観して自宅に戻つて行つたのであつた。

「いらつしやいませ!!」

「お客様、此方の席へどうぞ」

「（あれ？龍美がいる？ まあここ龍美の実家がしている喫茶店だしな）取り敢えずメニユーを見ないとな」

ミューゼルに見られていたとは知らずに店内に入った劍崎一真と山田真耶はウェーター姿の龍姫の案内の下席に着き劍崎一真は龍姫を見て龍美がジエニミでも使つていのかと思ひながら山田真耶とメニユーを見て取り敢えずアイスコーヒーと、

「三色団子が二つ。ほかにご注文はよろしいですか？ では、ごゆっくりどうぞ（初日に山田先生が劍崎さんを連れて来るとは）」

「理世もここで働いてるんだな」

「そういえばこの前アルバイトの許可を出しに来てましたね」

薄紫色のジャンパースカートに胸元に紫のリボンが付いたツインテールに束ねているウェイトレス姿の理世が二人の席の注文を顔色一つ変えずに取り厨房へオーダーを出しに行ったのであった。

二人はまさか理世のアルバイト先が今いる葵屋だとは思ってなかったので苦笑いをしていたのであった。

「此処が今日のお仕事の場所か」

『マスター。気を抜かないで』

橙色の髪を風に靡かせて気にいったのか白とオレンジのパーカワンプに短パンという服装で今だ成長しているナイスボディを隠した八舞耶俱矢はとある別次元の地球に仕事にやってきたのであった。

カロルの苦手

八舞耶俱矢は仕事である別次元の世界にやってきたのであった。

その場所は、

「カロルが暴走していないことを祈るよ（・ω・）」

『まあ、アンデッドには虫以外がいますから大丈夫ですよ。多分（・ω・）」』

なんと剣崎一真の故郷の地球に先に乗り込んでいたであろうカロル達を手伝いに来たのだがカロルが暴走していないかと思いつながらペンダント型インテリジェントデバイス「楓雅」と一緒に現場に向かったのであった。

「此処がローカストアンデッドが出るんだよね？」

「あ、耶俱矢!!」

「カロル!! ユーリさんも!!」

「おう!! 今日には耶俱矢が手伝いに来たのか。槍だけじゃなく剣も出来るようになったって聞いたぜ!!」

「勿論です!!」

今回の目的は◆のカテゴリ5「ローカストアンデッド」を封印若しくは倒すという

仕事を受けているのである。

耶俱矢は神姫に覚醒してから槍術だけではなく剣術も夕弦と切磋琢磨しながら仕事を行っている日々を送っていたのであった。

今回はまさかのBOARD付近の雑木林だったのである。

「ん？ これイナゴ？　なんで？」

「どうやらお客さんだぜ！！」

「うゝ！！」

現場で待ち伏せていたらなんと小さなイナゴが飛んできたので辺りを見回した所なんと物凄い数のイナゴを含むバッタの大群が飛び跳ねていたのであった。

そしてその中に人間くらいの大きさの目的のローカストアンデッドを発見したので一斉に武器を構えたのであった。

此処で注意してほしいのがカロールが大の虫嫌いという点である。

弾が仮面ライダーガタックに変身した時は視界に入らなかったが、今回は見渡す限りのバッタの大群とバッタのアンデッドのローカストアンデッドが討伐対象になっている今回の仕事内容だ。

もうお分かりだろう。

「ブーン！！」

「カロール!! 間に合わねえ!!」

「しまった!!」

「え? むむむ虫いいいい(。D。)ノ!!」

「誰だ!!」

「チツ!! 行くぞカロール!!」

「虫虫虫・・・(。D。)ノへあq w s e d r f t g y ふじこ!!」

そうカロールはローカストアンデッドに持っているハンマーで殴り倒してそのまま馬乗りになって和尚さんが叩く木魚のごとくローカストアンデッドをタコ殴りにし始めたり、リタからもらった殺虫剤を使ったりとローカストアンデッドが夥しい緑の血を流しながらバツクルが開いているがもう既に封印不能レベルにされた所で誰かの声が聞こえてきたので恐慌状態のカロールを抱えて一目散に逃げることにした耶俱矢達であった。

「今日は楽しかったです!!」

「オレもです」

「此処では真耶でいいです」

「それじゃあ」

「珠ちゃんにもいい人が現れますように!! さてと、着替えますか!!」

一方で劍崎一真と山田真耶は葵屋での一時を満喫して劍崎一真が山田真耶を第二茶熊学園の校門前まで送ってそのまま第一茶熊学園の男子寮に戻って行ったのであった。

後の祭りとスノーホワイトの特訓

ローカストアンデッドが若干12歳の少年に虫嫌いとはいえ手も足も出ないで緑色の血を流しながら息絶えてしまったのであった。

流石に耶俱矢達もこれには苦笑いをしながら一目散に恐慌状態のカロルを抱えて逃走したのであった。

幸いにも防犯カメラが設置されていない場所だったので顔を撮られていなかったのであつた。

「橘さん!!」

「睦月。一足遅かったようだ」

「これ、一体誰が?」

「後姿だけがハンマーを持った生身の少年がやったらしい」

「子供に(。口。)ノ!!」

先ほどの声の主はBOARDの職員で剣崎一真の先輩である仮面ライダーギヤレンの変身者である橘朔也と、現在大学生の青年で仮面ライダーレンゲルの変身者の上城睦月がローカストアンデッドの亡骸を見て驚いていたのであった。

橘朔也は後姿だけだがカロールを目撃していたようでローカストアンデッドの傷跡からカロールが何度もハンマーでタコ殴りにしたことになり気が付いたのであった。

それを聞いた上城睦月は驚いていたのであった。

一方で

「もつと!! 腰を下ろして!!」

「とう!!」

「やってる!!」

名深市魔法少女バトルロワイヤルを解決して平穏な生活を送っていたスノーホワイトこと姫河小雪は現在神姫化して白と紅と黒のバリアジャケット姿の龍音に剣術をはじめとするあらゆる護身術を教わっていたのであった。

場所は名深市のシスターナナが拠点にしていた廃墟で行っているのである。

今回は龍音の幼馴染みの一人である天龍もヴィヴィオのバリアジャケットの白黒版のバリアジャケット姿で交代制で鍛錬を付けていたのであった。

今やってるのは剣術の基本「素振り」を行っているのであった。

元は支援型の魔法少女なので竹刀とはいえこういったことは慣れてなかったのはじめのころは50回が限界だったが今では、

「1998!! 1999!! 2000!!」

「今日の素振りのノルマは達成ね。けど、まだ初歩段階だからね!!」

「うん（アスナちゃん達は重くないのかな?）」

問題なく200回の上段からの素振りを熟すほど体力が付いたようで龍音からまだ序の口と釘を刺されていたのであった。

スノーホワイトは軽い金属とはいえ真剣の日本刀を軽々と振るう龍音達を見て感心していたのであった。

「次は、軽く実戦形式でやってみる?」

「うん!!」

次の鍛錬は軽い実戦形式での模擬戦を行うことにしたのだった。

「力みすぎ!! もつと肩の力を抜いて!!」

「魔神剣!!」

「そんなんじや、足止めも出来ないわよ!!」

といった感じで時間が許すまで鍛錬が続いたのであった。

「天夏達にあの仕事をやらせてもらおうかしら」

自宅の書斎で天界の仕事をしていた剣心は天夏達にある仕事をしてもらうことを思いついたのであった。

それが天夏達を含む次元武偵達の転機になろうとは知る由もなかったのであった。

第二章 始動！

各世界の

天夏達が銀行強盗を懲らしめてから三日が過ぎたのであった。

「今日から夏休みか」

「次元武偵の仕事があるわよ」

「そうだな。サラ先生の実技がためになるな」

「確かにI・Sばかりが戦う手段じゃないしな」

天夏達の第二茶熊学園は今日で一学期が修了したらしく今から夏休みを満喫する気だったのであった。

一方で龍姫達はまだ夏休みどころかまだパラレルワールドの為か時差の影響でまだ六月に入ったばかりなので今も学校で授業を受けているのである。

天夏達はサラ・バレンスタインが実技教員になってから生身での戦い方を復習していたがほかの生徒はのほほさん以外の人間の生徒には無理が祟って寝込む者も出ていたが問題なく補習者が出たが生存しているのであった。

一方で

「そういえば、アイズ達は？」

「オラリオに戻ってダンジョン攻略だって」

「オラリオってこの前、ベルが抗議してくれた場所だよな」

第一茶熊学園も夏休みという感じの時期に入っておりベル・クラネル達は一足先に元の世界に戻ってダンジョン攻略に向かったのであった。

迷宮都市「オラリオ」に一度でも行ってみたいと剣崎一真は思っていたのである。「行ってみたらどうだ？」

「そうだな。滅多にできないことだしな（始、虎太郎、オレは元気にやってるよ）」

クラスメイトの番長のような制服を着たオウガに行ってみたらどうかと言われたので今日の授業が終わり次第向かうことにした剣崎一真は此処にはいない友に自分が元気でやっているかと心の中で呟いていたのであった。

「失礼します!!」

「来たわね。夏休みに入っていきなりだけど、仕事を持ってきたわ!!」

「わかりました」

「取り敢えず、天夏と弥生の二人である世界へ行つてほしいの」

「内容は？」

「それはお楽しみよ!!」

「わかった!! 行くぜ!!」

フラクシナスの一室に呼び出された天夏と弥生は部屋に居た剣心からある世界へ行って次元武偵の役目を果たしてきてほしいと告げたのであった。

天夏は剣心が敢て内容を告げないのとは何か理由があるのだが、天夏はそれを楽しい仕事になりそうだと思ひ弥生と一緒にその目的の世界へ向かったのであった。

天夏と弥生と別れて行動しているスミレと朱音も天夏と弥生が行く世界とは別の世界に来ていたのであった。

「もかけ〜!!」

街の住人「キヤ〜Σ(。D。)!!」

「何これ(・ω・) ツインテールの子しか狙ってないんですけど・・・」

「あなたが囿になってくれるのかしら?」

「誰が囿ですってく、く、く>!! 行くわよ!!」

「そうね!!」

二人がいる世界はまだ四月らしく入学シーズン真つ最中と言った感じ漂う世界らしいのだが突然大きなドームから悲鳴が聞こえてきたのでアイテムパックから愛車のスクーター型のイメージカラーに合わせた燃料をルーンで行っているバイクにフルフェイスのヘルメットを顎紐をちゃんと装着し走らせて到着したまでは良かったのだが、な

ぜか怪人であろう存在が見事に朱音とツインテールに束ねている女の子ばかり襲っていたので呆れていたいたのであった。

一応ヘルメットを被る都合上朱音はツインテールを魔術で解いてロングヘアー状態でバイクを運転するので降りている今はその逆をしているのであった。

閑話休題

流石にこのままほっとくわけには行かないので近くにあった車のガラスにカードデッキを映して腰にVバックルが巻かれたのを確認して朱音はいつもの右腕を斜め上にして、スミレも変身ポーズを取って、

スミレ&朱音「変身!!」

「あの子にまかせっきりにする訳にはいかないわ!!」
「行くわよ!!」

Vバックルにカードデッキを入れて変身して怪人(?)を倒しに行くのであった。

仮面ライダーとツインテールと変態

スマレと朱音は扱いに困るツインテールの女性ばかり襲う怪人（？）集団のボスであろう怪人を倒すことにしたのであった。

【朱音。あの子は・・・】

「男でしょ!! それより!!」

☒SWORD VENT!!☒

「わたしも」

☒SWORD VENT!!☒

仮面ライダーに変身しているスマレと朱音には全く目もくれずひたすらツインテールの女性ばかり銃を持って襲い掛かっていたので朱音とスマレが素手で倒していったが相棒の発言で朱音が左腕に装備されている龍召機甲「ドラグバイザー」にカードをベントインして元故郷の中国の刀の柳葉刀の形をしたドラグセイバーを右手で掴み、スマレも同じく翼召剣「ダークバイザー」にカードをベントインしてウイングランサーを呼び寄せて掴んで、

スマレ&朱音「いい加減にしなさい!!」

「うわ〜ん；つひ、）。ヒク・・・」

「もう大丈夫よ」

「うん。ありがとう、ヒーローのお姉ちゃん達」

「ツインテールだからって幼い子まで襲うなんて!!」

「キエ〜!!」

「魔神剣!!」

まだ幼い子を襲っていたのでその場のノリでなぜか息が合った槍と剣による強打が決まり怪人はぶっ飛んだところでスミレがしゃがんでツインテールの女の子をあやして逃がしてお礼をされてまた戦場に戻ったのであった。

「あれがこの怪人のボスじゃない?」

「そうみたいね、それに先客がいるけど戦ってる場所がこつちに有利なフィールドよ!!」
「勿論」

スミレと朱音はふとある建物を向くと怪人集団の隊長であろうトカゲ怪人を見つけて先に戦っているツインテールの赤髪の少女が男であることはとつくに気づいていた上に、戦っている場所がガラスのような屋根の上だったのでその建物の入り口のガラスからミラーワールドに入って行ったのであった。

「ツインテールを我が手中に納める!!」

「この野郎!!」

スマイレ&朱音「せーの!!」

「おまえら誰だよ。(。D。)ノ!!」

「悪いわね。そうね、仮面ライダーよ」

「仮面ライダー。(。D。)ノ?」

「さっさと片付けるわよ」

「そうね」

⊠『FINAL VENT!!』⊠

「はあっあっあっあっあ!!」

トカゲ怪人と戦っている赤髪のツインテールの剣士の後ろのガラスから飛び出して飛び蹴りで蹴り倒した所で驚かれたが説明を後にしてスマイレと朱音はバイザーに「FINAL VENT」のカードをベントインして朱音は跳躍の構えをしてスマイレは持っていたウイングランサーに左手を添えて二人同時に飛びあがってトカゲ怪人目掛けて、

「ぎにあっあっああー。(。D。)ノ」

「なあ」

「わかったわ。アンタに付いて行ってあげるから」

朱音が「ドラゴンライダーキック」を、スマイレがウイングウォールをドリル状にして

そのまま「飛翔斬」でトカゲ怪人を倒したのであった。

先に戦っていた赤髪のツインテールの剣士は開いた口が塞がらなかったが二人は変身したまま一緒に行くことになったのであった。

「あのお方かっこいいです（≡◇≡）!!」
「?」

「すみません!! 危ないところを助けて下さって」

「いいの、それじゃあ」

「神堂慧理恵と言います。お名前を教えてください・・・」

「仮面ライダーよ」

「仮面ライダー様!!」

建物から地上に降りたのだが先ほど助けた金髪の小柄な少女「神堂慧理恵」に好意的な視線を送られてしまったので仮面ライダー龍騎に変身中の朱音が仮面ライダーと言いつつ立ち去ったのであった。

「どういうことなんですか!! ツインテールズが無双する展開が（。∩。）ノ!!」
「誰?」

「仕方ないわね」

スマイレと朱音はとある秘密結社の基地に連れてこられたようでどうやらさっきの戦

いを見ていたらしくモニター画面に仮面ライダーに変身している自分達の姿が映っていたのであった。

銀髪碧眼のわがままボディの女性は山田真耶同様に胸部装甲を揺らしながらひどくボドボドもといボロボロに燃え尽きかけていたのであった。

そこにいた黒髪のツインテールの少女に敵意を向かれたので二人はVバックルからカードデッキを抜いて変身を解除したのであった。

「……」

「どうしたのよ。あんなだけ知ってたがってた仮面ライダーに変身している人物よ」

「ウソー!! 女の子(。D。)ノ!!」

「それに……;つD、)」

「なるほど」

「れれれ恋龍さん(。D。)ノ!!」

しばらく沈黙した後元の姿に戻っていた赤髪の少年「観束総二」達は大声で驚いていたのであった。

まさか仮面ライダーが自分達と同年代で女の子とは思ってなかったので約一名はまたひどく燃え尽きていて黒髪のツインテールの少女「津辺愛香」は何かを察して泣き出した所に何の前触れもなくいつの間居たのであろうスミレと朱音の姉貴分な存在の

神楽堂恋龍が泣いている愛香に近づいてしゃがんで右手首に嵌められている腕輪を見ながら愛香の悩みを見抜いたのであった。

「ボクの名前は神楽堂恋龍、その腕輪を外して見せてもらえるかな？」

「はい・・・」

「・・・」

「バキツ!!」

「何してくれてるんですか（。D。）ノ!! わたしの傑作が（*、ω、*）」

「悩める子は君やな？」

「えええつえ（。D。）ノ!!」

「驚かんといてや、恋龍ちゃんの幼馴染みの御子神大龍や。君と同じ悩みを持った子をたくさん診て来てさかい、ほな行こか〜」

「はい（≡◇≡）!!」

「それじゃあ。また会いましょう」

恋龍は愛香の青い腕輪を見た瞬間その場で握力だけで握りつぶして破壊したのであった。

銀髪碧眼の女性はまた膝を付いて開いた口から魂が抜けそうになっていた所に、隙間妖怪並みに現れた大龍に救いの手を差し伸べられた愛香はその手を取って一緒に転移

してしまったのでスミレと朱音も元の世界へ帰って行ったのであった。

旅立ちの準備

スミレと朱音が各自実家に戻っている頃、新たな人生を生きることにした旧名アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギこと近衛素奈緒は現在付き人のモモカ・荻野目と一緒に超神次元ゲームギョウ界で暮らしているのであった。

「龍姫と星龍にホント借りが返しきれないわね」

「本当ですね」

「この武醒魔導器のおかげで魔法が使えるようになるなんて、思ってたなかった」

「素奈緒様もあれから龍姫さんを見習って剣術を学び、日夜命がけの次元武偵生活を送って、どんどんたくましいです」

「ノーマ。けどあとで、ノーマという名前の人物に会うなんて思ってたなかった。あの子 は名前はノーマだけどノーマじゃない普通のトレジャーハンターだって胸張って言えるなってね」

龍姫に命を救われて新たな道を作ってもらった素奈緒は何年掛かっても龍姫に借りを返せないだろうと語ったのであった。

あれから軍に居た時に身に着けた戦闘術を駆使した剣術などを修得してそれで現在

次元武偵B級ライセンスを取得したばかりである。

ところ変わって天夏と弥生はそれぞれの実家に戻っていたのであった。

「ただいま〜!!」

「弥生お帰りなさい」

「うん。三日後にはお仕事でしばらく帰れないけど」

「折角、姉妹の絆の手術をしようとしたのに。(。D。)ノ」

「あのね」

「カスミちゃんはお姉ちゃんの妹でしょ、慰めてよ。(。D。)ノ!!」

クジヨウ島の実家に戻った弥生はセツナ達と一緒に戻ってきて三日後に仕事でしばらくは帰れないと明かしたのであった。

久しぶりに姉妹でいられると思っていた朝宮睦月はひどく拗ねていたのであった。

一方で

「天夏と弥生は夫婦そろって仕事か？」

「まだ結婚できる年齢になってねえよ」

「あの弥生と天夏お兄ちゃんの子か」

野井原の実家に兄妹そろって戻っていた天夏は弥生達の仲を応援されていたのであった。

相変わらずの雰囲気で三日後の仕事の準備を始める天夏であった。

「一刀も次元武偵として頑張ってるようで良かった」

「うん。父さん」

一刀も実家に戻って家族と楽しいひと時を楽しんでいたのであった。

「お姉ちゃん、学校はどう？」

「楽しんでるわよ」

「よかった。妹が行くであろう学校の雰囲気が良くて」

祐姫も実家の神崎家に戻って兄弟達と仲良く話をしていたのであった。

「さてと、授業が終わったし、オラリオに行ってみるか」

「ブーン」

「そういえばこいつに自動操縦機能があったの忘れてた」

第一茶熊学園の授業が終わってオラリオに行くことにした剣崎一真は男子寮に戻るために校門目指して歩いていたところに相棒のバイクで燃料をガソリンからルーンで動かせるように改造された自動AI持ちの「ブルースペイダー」が自動で走って来て自分の前で止まったのであった。

「まさか、悩みの種だったのが嘘のようね」

サリアは大龍に悩みだったべったんこだった胸の事を話したところ熱心になって施

術を施してくれた成果でまだ出会って一週間弱ほどしかたつてないのに真ん丸に成長した自分の胸を見てうれしそうにしていたのであった。

趣味のコスプレに関しては勇龍達など仲間が出来たらしく勇龍達とはたまにだが一緒に街のショップ巡りに行くほどの仲良くなったのであった。

「こつちですわね」

一足先にオラリオに戻っていたベルは主神であるヘステイアとともにダンジョンに潜っていたのであった。

そう、一目惚れとは言えアイズの隣に立ち戦うためでもある。

一方で、

「今度はどこだ？」

「ブーン!!」

「!!」

「(剣崎!!)」

BOARDが作った試作品の転送装置で今度はアラマキ島に転移させられた仮面ライダーカリスでありジョーカーアンデッドである相川始は街道を道なりに歩いていたところであるバイクに乗った人物とすれ違ったのであった。

それが友である剣崎一真だったことに

素奈緒（アンジュ）の騎士&哀れな妹

第一茶熊学園があるアラマキ島に偶然飛ばされたことが災いしてしまったようで会わないと言った二人のジョーカーアンデッドが同じ島に存在してしまっているのであつた。

「待て、会っちゃいけないな（そういえば、剣崎の服装・・・）」

すれ違ったのが見間違える訳がない剣崎一真だったことに驚いたがもしここで会いに言ったら闘争本能で暴走して取り返しのつかないことをまた起こしてしまうかもしれないと相川始はそのまま剣崎一真が走り去っていた方向とは逆に学園がある方向に歩みを進めたのであつた。

「アンジュ、どこ行つたんだ？」

「待つてたよ。タスク。嫌、アンジュの騎士」

「君は？」

「あ、ごめん、本当なら自分が先に名乗るよね。オレは五河士道。ラタトスクの次元武偵だ」

「どうやらミスルギ皇国にアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギこと素奈緒を助けに来た青

年は手当たり次第に王宮を探し回ったが龍姫が保護してから一週間が経っていたことに気が付かなかつたのも無理はない。

王宮は今も龍姫が介入したことで裏でやらかしたことが明るみ出たことで一気に国民の信頼を失くし全員を刑務所送りにしたのだから。

慌てて探している茶髪の青年は背後から声を掛けられたのであった。

その人物は龍姫の婚約者にして神姫化を龍姫とキスしたことでコピーしてしまったことで不老不死になってしまった少年「五河土道」が私服姿で立っていたのだが、土道が名乗るのを忘れていたので名乗ったのであった。

「次元武偵？ アンジュは!!」

「オレの仲間が保護して新しい土地で戸籍を変えて暮らしている」

「お願いだ!! アンジュのそこへ連れてくれないか?」

「そのつもりで此処に来たからな。それじゃあ、行くぞ!!」

「何(。 皿。)ノ!!」

青年タクスは土道からアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギが戸籍を変えて別の土地で暮らしていると話すとタクスは自分をその場所へ連れて行ってほしいと言ったので土道はアイテムパックからテレパイプを取り出して起動しフラクシナスへ戻って行ったのであった。

「あのバカは死なないと治らないのよ!! あはははは(≡▽≡)!!」

「ドンツ!!」

「誰? !!」

「はしやぎすぎたなシルヴィア。そろそろ舞台から降りてくれないか?」

「誰か!! 誰かいないの。(。D。)ノ!!」

ジュリオと結託して実の姉や両親を使い捨てにした少女「シルヴィア・斑鳩・ミスルギ」は未だに現実を受け入れておらず逆に自分の思い通りに事が進まないことを他人の所為に嘲笑っている時だった、後ろの扉が吹っ飛んで壁にぶつかって破壊されたことに驚いたシルヴィアは扉があった方向に向くと黒紫の髪をポニーテール束ねた紫炎の甲冑を身に纏った精霊「夜刀神十香」が生気のない目でシルヴィアを見ながら持っている大剣「虐殺公」をちらつかせながらゆっくりと歩いてシルヴィアはそのまま恐怖に支配されて壁に追い込まれたがとつくに手下達は逮捕された後だったのだ。

どのみち助けが来る前に逮捕する予定だったから。

「気絶したか。タイホーする!!」

どうやら恐怖のあまり気絶してしまったようで十香はそのまま素の性格に戻って気絶しているシルヴィアを拘束して施設へ送還したのであった。

転生の間に來たるはピンクの少女

土道と十香の二人は無事にフラクシナスへ歸つて來たころ天界にある転生の間にまた新たな魂がやってきたのであった。

「此処どこ?」

「ようこそ。転生の間へ」

「転生の間?」

「簡単に申しますと、新たな自分に転生してもらおう場所ですね」

「つまり、わたし生き返るの(。∩。ノ!!」

「はい、申し遅れました。わたしはあなたを担当する「タギツヒメ」と申します」

「わたしは、ナオミ。名字は奪われて、無くなつたから」

「生前は借金がすごかつたらしいと記録が出てましたが死んでしまったことで借金は帳消しなってますね」

「よかつた。転生してまた借金地獄なんて嫌よ!!」

転生の間にやってきた魂はピンクの長い髪を二つの団子結びにしてポニーテールように束ねている紫色の瞳の龍音と同じくらいの年頃らしくその割には龍音には敵わな

いがプロポーションは平均以上という少女でタギツヒメで白の着物に藍色の袴に頭に龍の紋章が彫られた鉄板が付いた鉢金という物をして髪型はツインテールではなくポニーテールに白い布で束ねている龍姫が今回の道先案内人ならぬ道先案内神の仕事を任せれることになっていたので土道と十香がタスクを迎えに行くということになったのであった。

龍姫が担当する魂の記録資料を見ながらどこへ転生させるか考えていたのであった。

「ご希望はありますか？」

「取り敢えず戸籍とお金と住むところがあればそれで十分!! 借金さえなければ!! それとこの姿のまままでお願い!!!」

「わかりました。転生先は超神次元ゲームギョウ界のリーンボックスです。到着したらリーンボックス武偵所本部を訪ねてください。ではご武運を!!」

ナオミと龍姫はお互い話し合った結果、超神次元ゲームギョウ界のリーンボックスに転生させることになったのである。

ナオミに最後に何か希望があれば許す限り提供すると言うと借金0の生活できる所持金と通帳と住居と戸籍と言うわかりやすい要望だったので龍姫も受け入れてナオミを転生させることにして転生したら武偵所を訪ねるように言っただけで転生させたのであった。

「此処がリンボックスね。え〜とこれよね」

転生されたナオミは目が覚めると街が見える丘の上にいたようで街を見渡した後転生する際に要望した物が入っているポーチ即ちアイテムパックの中身を確認することにしたのであった。

「財布に、印鑑、スマートフォン？ それと地図と手紙とこの液体が入った瓶か、取り敢えず手紙を読むか」

通帳以外が入っていたようでナオミは龍姫からの手紙を読むことにしたのであった。

「これと呼んでると言うことはちゃんと転生されているようです。通帳は武偵所で用意されます、戸籍は武偵所で確認してください。それと一緒に入っていた液体はいざという時に飲んでくださいか、楽しい再スタートが始まったよ!! さてと、武偵所へ行きませんか!!」

一緒に入っていた手紙には敢て敬語で書かれていた文章で通帳や戸籍に関する事などが書かれていたようでナオミは手紙を読み終えるとアイテムパックに締まってリンボックスの街の武偵所本部へ向かって第二の生を満喫するために歩み始めたのであった。

ナオミの受け入れ先は緑の鬼の龍

龍姫に超神次元ゲームギョウ界で唯一の島国であるリーンボックスの街が見渡せる丘の上に転生したナオミはアイテムパックを腰に装着して街にある武偵所本部を地図を見ながら歩道を歩いていたのであった。

「……よね？ 入ってみるか？」

現在ナオミは戸籍が無い状態なため仕事してもらえないが流石にマズいので戸籍を手に入れるために武偵所にやってきたのであった。

取り敢えず中に入ることにしたのであった。

「受付に行けばいいのね？」

ナオミは武偵所の受付のカウンターに設置してある番号が書かれている紙が出てくる機械から番号が書かれている紙を取って待合ロビーのベンチに座って番号を呼ばれるまで待つことにしたのであった。

しばらくして自分の番号を呼ばれたので受付に向かったのであった。

「今日はどのような件でご利用ですか？」

「此処で戸籍が作れるって聞いて来たんですけど？」

「では、お名前をお教えできますか？」

「ナオミ。名字は無いんです」

「ナオミ。ちよつとお待ちしてもらっていいですか？」

「はい」

受け付けで戸籍を作ることにしたのでナオミは名字を失くしていたので名前しか言えなかったので受付の人が何か思いだしたかのように後ろの方へ下がって行ったのであった。

しばらく待つてみることにしたナオミは内心不安を募らせていたのであった。

前世ではノーマとして迫害されたあげくの借金まみれになった上に殉職してしまつたのだからもちろん両親にも捨てられたのだから。

そして受付に女性が戻ってきて何やら書類を持っていたのであった。

それは龍姫がナオミの里親を探しておいたものだったのである。

「神楽堂様が養子なさってますね」

「神楽堂？」

「はい。このリーンボックス武偵所本部の本部長の神楽堂恋龍の兄、神楽堂龍臣・すずか夫妻が養子に引き取る手続きを成されていますね「神楽堂奈凰海（ナオミ）」として、これがその戸籍表です」

「ありがとうございます。どこへ行けば？」

「だったら、ボクが連れ上げて上げるよ。ようこそ、このリーンボックス次元武偵所本部、所長で君の義理の叔母になる、神楽堂恋龍だ」

「えくと、失礼だと思うけど、歳は？」

「18だ。お兄ちゃんは、22歳だ」

「わたし14歳ですよ。(。D。)ノ!!」

「ボクは気にしない。それに早く姪っ子に会えてよかった。さあ、行こうか」

ナオミは龍姫が前もって養子の受け入れ先を幼馴染みの兄夫婦が受け入れてくれるように手配していたようでナオミはうれしかったのである。

そこに義理の叔母になる恋龍がやって来て歳が近かったので驚いたが一緒に家まで行くことになったのであった。

こうしてナオミは張れて「神楽堂奈凰海」として新しい人生をスタートしたのであった。

人語を話す熊とハートの戦士

ナオミが神楽堂入りが決まって恋龍に家まで送ってもらっている頃アラマキ島に転移してしまった相川始は第一茶熊学園前に辿り着いたのであった。

「まさか、こんなところに学校が在るとは」

「バイパーだ。おまえは誰だ？」

「仮面ライダーだ」

「一真もだが、オレもだ。オレが知りたいのは人としての名だ」

「日本語は通じるならよかった。オレは相川始、剣崎の友だ」

「その様子だと、何か訳ありの様だな、ここで立ち話もなんだ、ついて来い」

「(見た所、剣崎と歳が変わらないのになんで高校生の制服を着てるんだ?)」

まさか異世界の島に学校が建設されているとは思ってなかった相川始は校舎前の広場に建てられているアカデミックドレスを着ている熊の銅像を見て驚いていたところ
にこの世界の仮面ライダー王蛇である銀髪の上半身を露出させているバイパー・ナイト
アダーに声を掛けられて咄嗟に仮面ライダーと話すバイパーがふくらはぎのポーチ
から紫色の長方形に金色のコブラの絵柄のカードデッキを見せて自身も仮面ライダー

と明かすと相川始と名乗り、バイパーに言われるがまま第一茶熊学園の中に入って行ったのであった。

「どうぞ、入ってください!!」

「失礼する」

「失礼します。!! ベアアンデッドか!!」

「勘違いしているようですね。わたしは真正正銘の熊のカムイと申します」

「すまなかつた。まさか熊がしゃべるとは思ってたので（橘だったら確実に変身してるか怒ってるな。睦月は大丈夫だろ）」

「どうぞ。そこに掛けてください」

バイパーに案内されてやってきたのは学長室でバイパーが扉をノックして中から入って来るように言われたので入ったのであった。

入った瞬間、相川始は学長が熊だったために人ならざる者の証であるジョーカーラウザーを出現させてハート・カテゴリーA「チェンジ・マンティス」を構えたのだがカムイが止めて事なきを得てほっとしてソファアに座って話すことになったのであった。

「では、この第一茶熊学園の学長のカムイです」

「相川始です。先ほどはどうもすいませんでした」

「慣れてますよ。仮面ライダーさん」

「聞きたいことが、劍崎一真を知っていますか？」

「おや？ 劍崎さんのお知り合いでしたか。劍崎さんはここの生徒として在籍しているんですよ」

「劍崎が学生として？ 講師とかではなく？」

「ここでは講師兼生徒として籍を置くことになっている。どうやら入れ違いだ」

「いいんだ」

「ジョーカーとしての闘争本能が暴走することを恐れているようですね」

「何故、そのことを!!」

カムイは先ほどのことを気にするほどではなく何事もなかったかのように自己紹介をして相川始からの質問に劍崎一真が学生として第一茶熊学園に在籍していると明かすと聞き直したがバイパーが説明して劍崎一真が先ほど寮に戻ったことを教えると会わなくていいんだと言いカムイはそれがジョーカーアンデッドの闘争本能が暴走することを恐れていることを見抜いたのであった。

I Sの過去

第一茶熊学園の学長のカムイと対談することになった相川始はバイパー立ち合いの下で行っていたのであった。

「なるほど、以前に劍崎がアンデッドに就いて授業を行ったということか」

「その通りだ。劍崎なりの授業だったぞ。そうだ何かの縁だ。これをやる」

「なんだ？ I Sの参考書か、にしても字しか書かれてない本だな」

「劍崎が来る前ある馬鹿が作った物で女しかほぼ乗れないのだが、稀に男でも乗ることが可能らしいんだが、その所為でその世界が女性が優位な世界へと変わってしまった」

「なんだと、仮面ライダーはいないのか。(。D。)ノ」

「ああ、宇宙に行くために作った物だしな本来は」

「本来は？」

カムイとの対談を終えて学長室を出てバイパーが開発室に招き入れてバイパーが徐々にI Sの参考書を持ってきたのであった。

相川始はそれを見てこれはタウンページではないかと思つたが開くと字しか書いてないのでよくわからないと言いまらうことになったのであった。

バイパーがそれが女尊男卑の原因だと述べてるとライダーシステムは無かったのかと相川始が驚いていたがバイパーがISが元々は宇宙に行くための代物だと説明して、

「織斑千冬が白騎士に乗り込んで篠ノ之東がハッキングして1000のミサイルを放つて撃ち落とさせたテロ事件で世界中が女尊男卑に染まったと言うわけだ」

「アンデッドのバトルファイトよりひどい」

「そして、篠ノ之箒が日本政府に保護という名目で強姦された」

「その子には罪が無いはずだ!!」

「ああ、それでも政府は許せなかったんだろ、テロを起こした篠之東の妹が」

「でその子はどうした？」

「鳴流神剣心という女が保護した後、IS学園へ強制入学させられた。適性が最低ランクにも関わらず、そしてルエル・サクラリッジ襲撃事件で命を落とした」

「何をしてたんだ!!」

「早い話がそいつらを生贄に捧げた教師達かな」

「ルエルはアンデッドか？」

「白騎士事件についてそして篠ノ之箒現在の朝宮弥生が政府に強姦されたことを説明しルエルに殺されたことを明かしたのであった。」

それを聞いた相川始はバトルファイトより酷いと評したのであった。

ルエルがアンデッドなのかとパイパーに尋ねたら、

「違うな、分かりやすく言えば魔物だ」

「魔物。そんな生物にI Sが敵うはずない!!」

「その通りだ。そしてもうI S委員会はオレたちの手で潰した。もちろんちゃんとした証拠をばら撒いて」

「そうか、その子達は浮かべれるな」

「それつらは第二の自分に生まれ変わって、名を変え、姿を変えて第二茶熊学園の生徒として籍を置いている」

「なるほど、転生か、人間は死んだら生まれ変わると言われているからな」

「まあそういうことだ。忘れる所だったな、これを使えばいつでもここに来ることが出来る」

「ありがとう。また会おう」

分かりやすく魔物と返してパイパーは相川始に携帯型転移装置を渡してそれで元の地球に戻って行ったのであった。

向こうで

相川始は同じカメラマン同士のバイパーと交流を深めてバイパーからもらった携帯型次元転送装置で生活をしている地球に戻ってきたのであった。

一方で

「アンデッドですか？」

「ああ。最近になって、また活動を始めたらしい、上級アンデッドは一般市民に擬態している」

「エピタフの作業ですか？ アンデッドは魔術などでなら仮面ライダーに変身しなくてもいいんですけど」

「星也のそれはもしもの時になって恋龍がくれた物なんだし」

「うん!!」

アドリビトム組もバンエルティア号で上級アンデッドの話題を話していたのであった。

バトルファイトはクラトスが産まれる遙か昔のため4,000年生きているクラトスも分からないことが多いのである。

何をされても倒せないアンデッドなのだがそれは世界の理がそうさせているだけで異世界の力なら普通に倒すことが出来ることをディケイドならぬディセンダーであり仮面ライダーに変身できる神桜星也が経験論で説明してくれたのである。

アドリビトム組のリーダーのアンジユ・セレーナはアンデッドのことを頭に入れたのである。

スキット：二刀流仲間

コレット「ロイド。何か嬉しそうだね（———）☆」

ロイド「だって!! オレと同じ二刀流の使い手が増えたんだぜ!!」

スパーダ「あの上玉の姉妹達に、一真にキリトに十香達もか」

リオン「どいつもこいつも、二刀流なんだ!!」

クラトス「地球には二刀流を使う剣士の偉人が存在していたらしい、特に有名なのは、宮本武蔵だな。二天一流という流派を立ち上げた剣豪だ」

スタン「そんな人がいたんですか」

「戻ったぞ」

「すまないね。それは一体?」

「これは向こうの世界でもらったISの参考書ですけど?」

「すまないがそれを見せてもらってもいいかな」

「どうぞ？」

相川始は無事にBOARDに戻って来れたようで、BOARDの所長である中年男性が出迎えてくれたのである。

その人こそが剣崎一真達が使っているライダーシステムを作り上げた張本人の烏丸啓が白衣姿で相川始の持っている明らか普通の参考書の五冊分くらいの厚さのISの参考書を見たいと言い出したのでISの参考書を渡したのであった。

「始!!」

「橘か、戻ったぞ」

「剣崎は？」

「済まない、入れ違いだったらしい」

「そうか、これを渡したかったんだが、それは一体？」

「これか相川が手土産に向こうの世界でもらった物だ。字しか書いてないがな」

「そのちようど仮面ライダーギャレンの変身者の橘朔也が入ってきたのである。」

橘から剣崎一真と聞かれて入れ違いになったことを告げて、烏丸が呼んでいる物は向こうでもらった物だと説明したのであった。

蒼紅のカブトムシ

人類基盤史研究所「BOARD」で相川始が持つて帰つて来たバイパーからもらったISの参考書を読みまわしていたのであった。

「読んでみたが、どれもライダーシステムに応用できそうにない」

「それにほぼ女性しか扱えないのは、融合係数の関係だろ」

「仮面ライダーになった男性は乗ることが出来る可能性が高い」

「テロを犯してまで広める価値があったかと言うのは問題だ。宇宙に行くためなら普通に宇宙に行つて映像を撮影してこればいいだけ」

「当時高校生の二人がやらかした結果が幼い子を地獄へ落とすという現実」

「そして、それに深くかかわった六人が命を落とす転生したということだ」

ISの参考書を読みまわし終えて出た結論がこれを元に新しいライダーシステムを作ることが出来ないという結論に至つたのであった。

流石のBOARDの所長の烏丸でも白騎士事件のことはやりすぎだと斬り捨てたのであった。

アンデッドから人々を守つてきた仮面ライダーである二人は呆れて物が言えなかつ

たのであった。

ところ変わって、

「確か、この辺りでいいんだよな」

「そうだよ」

「!!」

「チツ!! また避けたのか!! 今度はガキなのか!!」

「理輝。行けるか?」

「勿論。来い!! カプトゼクター!」

「ガキの癖して!!」

レゾナンスの路地で剣崎一真と山田真耶を襲ったが戦略的撤退をして姿を晦ましていた矢沢こと♣のカテグリーQの唯一の男性個体のカプリコーンアンドドの反応をBOARDのアンドドサーチより先に天界の方が見つけたが流石に生身でも戦えるとはいえセドナと天馬と瑛夏の身を案じてオラリオに向かってもらい勝美と理輝はカプリコーンアンドドの反応があつたレゾナンス付近の並木道にやってきて、態と不意打ちが可能な場所で停止した瞬間、予想通りのブーメランが飛んできて二人は無駄のない動きで躲した後飛んできた方向を向き直すと矢沢という男に擬態しているカプリコーンアンドドがサングラスを掛けて立っていたのであった。

二人を見るなりガキと見下したカプリコーンアンデッドは本来の姿のヤギのアンデッドの姿に変化したので、勝美は恋龍が設計作成したブレイバックルに♠のカテゴリーA「ビートルアンデッド」ではなく、カードファイトヴァンガードのロイヤルパラディンのFV「ういんがるぶれいぶ」を入れてベルトが巻かれて劍崎一真と同じく右腕を挑発するように指を動かしながら伸ばしていき、理輝は右腕を伸ばして天に向って高らかに大声で叫んで赤いカブトムシの小さな機械が飛んできてカプリコーンアンデッドを攻撃して転倒させた後、理輝の右手に納まり腰に銀色のベルトが巻かれ、二人同時に!!

勝美&理輝「変身!!」

「TURN UP!!」

「HENS HIN!!」

「コケにしやがって!!」

「理輝。キャストオフは良いのか?」

「それじゃあ、勝美が変身した意味ないよ」

勝美は展開したオリジナルのオリハルコンエレメントを潜り抜けて劍崎一真と同じ銀色のヘラクレスオオカブトをモチーフにした青い仮面ライダーブレイドに変身し、理輝は銀色と赤い装甲に複眼は青いスーツは黒い仮面ライダーブレイドと同じくモチーフ

フはカブトムシの仮面ライダーカブトに変身したのであった。

ウダイオスの段

カプリコーンアンデッドを封印または討伐することになった仮面ライダーブレイドに変身している勝美と仮面ライダーカブトマスクドフォームで戦っている理輝をガキだと嘲笑っていたカプリコーンアンデッドは姑息な手段を使おうにも二体一というこの状況で何より今いる場所は休日とはいえ街から離れた並木道なので人質にする通行人もいないのである。

「ふざけんなく!! カード使えよ。(。D。)ノ!!」

「アンタ、オレと理輝が変身してないと戦えないと思つてたのかよ。魔王炎撃波!!」

「牙狼撃!!」

「フギヤアアッア。(。D。)ノ!!」

勝美が変身している仮面ライダーブレイドは確かにラウズカードを使うのだがそれはあくまでBOARDの作ったライダーシステムだった場合で勝美は元からの戦闘術があるのでカードなしでも術技を行使できるように武醒魔導器の機能が搭載されているのである。

つまりアブソバーでキングフォームにならなくてもラウズなしで技が放てるとい

う状態になつているのである。

理輝は元からワームと言うクロックアップという能力に対抗するために作られたマスコドライダーなので今のマスコドフォーム状態でも動きは申し分ないがその代り攻撃と防御には優れているので問題ない。

しいて言うなら搭載されている武器が「短刀」&「銃」&「斧」に変形するカプトクナイガンという武器だが、いざとなれば機攻殻剣を呼び出せば済むことなのである。

そんな仮面ライダー二人に大口を叩いたカプリコーンアンデッドは情けないことを言い出したのであった。

これが身から出た錆と言うものを物語っているのであった。

そして、

「決める!! 鳳凰天駆!!」

「違うだろ(〃。ω。〃)ノ!!」

「ドカ〜ン!!」

「あばよ!!」

カプリコーンアンデッドは満身創痍になつているがバックルが開いてなかったのもまだ戦うというより逃げ出したので勝美がああ「KICK」「THUNDER」「Mach」のラウズカードをラウズするのではなくそのままカプリコーンアンデッド目掛けて

雷ではなくまさかの鳳凰を纏つてのライダーキック版「鳳凰天駆」を命中させてカプリコーンアンデッドは爆散し勝美と理輝によって倒されたのであった。

「封印出来ないよね・・・」

「試すか？ 出来た!？」

「オラリオに行くぜ!! 転送開始!!」

理輝は変身を解除して苦笑いでカプリコーンアンデッドだった物を指していたので勝美は表情を変えずに醒剣ブレイラウザーから鎖が描かれているカードを手裏剣のよう放つて緑の光になって吸収されたことで封印は成功されたので二人は急いで天馬達に向かったオラリオに転送したのであった。

「あれ？ 話には聞いてたけど、ここって結構強いんじゃないのか？ この匂い!!」

「あ、一真さん!! ? この匂い、血?」

「その通りだ」

「つまり、この先に負傷者がいると言うことですね」

「急ぐよ」

オラリオのダンジョン探索にやってきた剣崎一真はそのままダンジョンの深層域までたどり着いてしまったのであった。

そのあとを追うように深層域に慣れた様子で左腰に日本刀を差している天馬達が到

着したと同時に、人間の血の匂いを嗅ぎ取ったのであった。

天馬達は猫妖怪で剣崎一真はジョーカーアンデッドの能力で察知したようで匂いがある方向へ急いで向かったのであった。

「アイズ!! 両手足どころか大半が骨折してるじゃないか!! 変身!!」

「はあ・・・はあ・・・」

「アイズさん!! こちら、チユリ、至急、負傷者の受け入れの許可を、両手足の骨折、肋骨骨折」

「行くか」

「行くこう!!」

血の臭いを追ってやってきた場所は外壁が真っ白い広い場所「白宮殿」で真ん中に下半身が無い黒い骸骨の魔物「ウダイオス」がアイズの鎧を破壊していたのであった。

幸いにも下にインナーウェアを着ていたのとんでもない場面は避けられたのだが医療初心者の剣崎一真でもアイズの傷の度合いを見て戦わせる訳には行かずジョーカーラウザーを呼び出して◆のA「チェンジビートル」のラウズカードを右手に持ってラウザーしてブレイドジョーカーに変身し、遅れること数秒後、天馬達がやって来てアイズが負傷しても戦うと聞かなかったので負傷者の受け入れ要請を出して転送させたのであった。

飛翔せよ!!

劍姫と称えられるアイズを戦闘不能に追い込んだ骸骨の怪物「ウダイオス」に探索に来ていた劍崎一真はジョーカーラウザーを呼び出していつもの掛け声ともにブレイドジョーカーに変身して手に醒劍ブレイラウザーではないが西洋剣を右手に持ってアイズによって手傷を負わされたウダイオスに立ち向かって行ったところで天馬達がアイズの容態を確認して応急手当て治療術を発動して天馬がコードネームで患者の受け入れを申請して、受け入れの許可が下りたのでアイズは天界の病院へ緊急搬送されたのであった。

「うわー、急所は無事なのが奇跡的だよ。さて、術式開始!!」

天界の病院に緊急転送されたアイズは意識はあったのだがそのまま手術室で緊急手術になり今は麻酔で眠らされて執刀医の龍美が手術着に着替えてレントゲンを見てあれ程の怪我なのに運がいいのか肋骨が肺に刺さってなかったのと脊髄が損傷していないという奇跡的な光景に驚いていたが早速執刀したのであった。

一方で

「ぐーおーおーおー!!」

「!! (困ったな、こんなことになるだったら、素直に恋龍からブレイバツクルを貰えばよかつたな)」

「デモンスランス!!」

「ウエ (owo) ?」

「一真さん!!」

「確か、天馬達なのか!!」

「話は後です!! 氷結は終焉、せめて刹那に砕けよ!! インブレスエンド!!」

「ぐおおお」

「そのの奴!! なにぼさつとしてんだ!! 逃げるか戦うかどっちかしろ!!」

巨大な骸骨の魔物「ウダイオス」と戦っていたブレイドジョーカーに変身した剣崎一真は苦戦を強いられていたのだ。

というのもアンデッドが人型だったせいでこのような巨大生物と戦ったことがないので自分が得意な間合いに入れないのであった。

そこに後方から巨大な黒い槍を投げ飛ばした瑛夏がゆっくりと降りて来て天馬とセドナが機攻殻剣と日本刀を二本差しにしてブレイドジョーカーに変身している剣崎一真の元へ駆け寄ってセドナが詠唱の構えを取って巨大な氷塊をウダイオスに落として地上に降り立った瑛夏は声を荒げながら近くにいたアイズの仲間らしき魔導師達に戦

うか、逃げるかと言い、自身は抜刀して戦うことにしたのであった。

「瑛夏、セドナ、少し時間稼げない?」

「なるべく早くしろ」

「その間に片付けても怒らないでくださいね!!」

「(O W O)?」

「(さて、確か、これなら今の一真さんならジャックフォーム並みの飛行が出来る物があつたはず)」

ウダイオスは天馬達の攻撃を受けているがまだ倒れる気配がなかったので、天馬は何か閃いたようで、瑛夏とセドナに足止めをお願いし、剣崎一真は何をするのかわからなかったが天馬は空中にモニター画面を映し出して指で動かしながらある物を探していたのであつた。

「あつた!! 転送!!」

「ウエ(O W O)? これなら!!」

「Jのカテゴリーの存在価値が無いな」

「いいじゃないですか」

「THUNDER!! SLASH!! LIGHTINGSLASH!!」

「ウエーイ(O W O) / !!」

「ガツシャーン!!」

「なんだ、あれは」

なんと天馬が閃いて探していたのはゲームギョウ界で手に入るウイングプロフェツサーユニットで本来ならばそれは守護女神か女神候補生が装備するのだが今は女神政権が終わり人間国家になった今でも製作されたりまたはデータ化してダンジョンに落ちていたりと割と手に入るもので天馬は一応神姫化で飛行できるので、従姉妹の真龍姫からもらっていたあのウイングユニットをブレイドジョーカーに変身している劍崎一真の背中に装着させて劍崎一真に飛行能力を与えてそのまま「THUNDER」と「SLASH」のカードをラウズして「LIGHTING SLASH」を脳天から叩き込んで見事ウダイオスを倒したのであった。

仮面ライダーの準備

オラリオのダンジョンの魔物「ウダイオス」を見事天馬の采配で見事討ち取ったのであった。

「オレ、ラウズアブソーバなしで飛んでるんだけど（〇w〇）」

「取り敢えず、降りて来て下さいよ〜!!」

「ああ」

「なんだ、あの異形は」

「さてと、ナズエミテルだ（何故、見てるんだ）もう少しオレが遅れたらどうするつもりだった!!」

「あれはアイズが」

「アイズさんが言ったからって助けないのは別だろ!!」

「申し訳ない」

エルフの魔導士であろう女性に剣崎一真は何故、アイズを助けに入らなかったのかといつものしゃべり方で問い出した所黙り込んでしまったので、追い打ちを掛けるように瑛夏も叱咤したのであった。

アイズが望んで単独撃破を狙ったのだが、それで命を落としたら話にならないのは幼い頃に両親を火事で目の前で亡くした剣崎一真だからこそである。

今になっては不死身の生命体になってしまったが。

元亡国企業の工作員の瑛夏が怒っているのは余程の事なのだろうと同一年の義姉の天馬と親友のセドナは鞘に刀を納めて黙って見ていたのであった。

「わかつたんだつたらそれでいい」

「そうだな。あ、申し遅れた、わたしの名は、リヴェリアだ」

「オレは剣崎一真だ。職業は仮面ライダーだ」

「ケンザキカズマ？ 変わった名前だな、それと、カメンライダーとは何だ？」

「さっきのように変身し鎧を身に纏って戦う人達のことを仮面ライダーと呼びます」

「なるほど、そうか、ありがとう仮面ライダー」

エルフの魔導士の女性性は申し訳なきように言い、問いただすのを辞めてお互い自己紹介をしたのであった。

エルフの魔導士「リヴェリア」は仮面ライダーとはなんだと質問してきたのでセドナが簡単に丁寧の説明してリヴェリアは仲間の元へ戻って行ったのであった。

「なんだ、終わったのか」

「理輝、勝美」

「こつちも終わったからな、これ」

「あ、カプリコーンアンデッド（。D。）ノ!!」

「オレは必要ないんです」

「そういえば、勝美のブレイバツクルは恋龍が設計したオーダーメイドだったな」

遅れて理輝達も合流して剣崎一真に◆のカテゴリーQ「カプリコーンアンデッド」のラウズカードを渡して改めて勝美のブレイバツクルの性能がいいことに納得していた剣崎一真だったのであった。

「素奈緒様（。D。）ノ!!」

「どうしたの？ え（；。D。）!!」

「探したよ、アンジュ。今は素奈緒って呼べばいいのかな？」

「タスク（≡◇≡）!!」

「元氣そうだ良かった。？ その服は？」

「これ二学期からだけど、わたし第二茶熊学園に編入することにしたの。それとタスクもっ。」

「うん、一緒のクラスじゃないけど、第二茶熊学園に編入することになったんだ」

一方で超神次元ゲームギョウ界で生活を送っているアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギこと現在近衛素奈緒は隣接している教会の聖堂で女神像の前で立っていたら血相を変

えて走ってきたモモカに気づき走ってきた方向を向くと、タスクが入ってきたのであった。

久しぶりの再会に素奈緒はタスクに抱きついて見た目は同じだがエンブリヲに弄られた肉体を捨てクローン技術の肉体なのだが胸のサイズを態と大きくするように素奈緒が注文して魂を移した肉体で抱きついたのでタスクは対応に困ったのであった。

二人とも第二茶熊学園の編入を決めたのであった。

一方で

「取り敢えずは使えるカードで戦わないとね」

クジヨウ島の実家に戻っている弥生は自分の部屋でデイケイドライバーに使うライダークードを文机の上に並べて使えるカードを確認していたのであった。

使えるカードは、

「クウガ」・「アギト」・「龍騎」・「ナイト」・「555」・「響鬼」・「カブト」・「W」・「ウィザード」・「ドライブ」・「ゴースト」

これでも十分なのだがコンボで多種多様な能力が使える「オーズ」と鎧武者の仮面ライダー「鎧武」とゲーマーライダー「エグゼイド」と飛翔態に変身できる「キバ」のカード、そして何よりあの「ブレイド」のカードも手に入れてないのであった。

「わたしは一刀の希望になったんだから」

祐姫も実家の部屋の机の上に天夏と同じウイザードライバーを眺めて一刀の希望で
あり妻になったことを確認していたのであった。

祐姫（ステラ・ヴァーミリオン）が魔法使いになった理由 と奈凰海（ナオミ）の新しい家族

祐姫が何故指輪の魔法使いになった理由は天夏と同じで前世で一刀が一輝だった頃に妹以外の家族に捨てられたも同然で家出して織斑千冬すら倒して行くという道場破りの毎日を送っていたことを破軍学園の理事長「新宮寺黒乃」から聞かされてから一刀の希望つまりお嫁さんになることを心に決め、恋龍が天夏のウィザードライバーと同じものを土下座までして作ってもらい元から時空管理局で言うなら「SS」級に匹敵する魔力も相まってボーテックスの助力もあるので使いこなしているのであった。

今では一刀も弥生と同じだがイメージカラーである黒をモチーフにした仮面ライダーダークデイケイドに変身することが出来るデイケイドライバーとライドブツカーを恋龍から転送でもらったのであった。

つまり、二人は夫婦で仮面ライダーなのである。

「ボクも仮面ライダーになるなんて思ってたな。珠雫にはいつか謝らないとな、それと使えるカードも結構あるけど」

一方で実家に戻っていた一刀は自分の部屋の机の上でライダーカードを眺めていた

のであった。

使えるカードは弥生と同じだが、やっぱりブレイドのカードはまだ真っ白いままだったのであった。

一方で、

「着いたぞ。此処が今日から奈凰海が暮らす家だ」

「ありがとう……恋龍お姉ちゃん」

「別に気を遣わなくていい!! 叔母さんで構わない。それより、お兄ちゃん!!」

「待ってたぞ」

「え」と

「こんなところで話すより中に入って」

アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギこと近衛素奈緒が入る前に殉職したナオミこと現在御子神奈凰海は四つ上だが血縁上は叔母になる恋龍が運転する戦闘用に作られた前輪が二つ後輪が一つで両端の装甲が収納できるようにになっているバイクにヘルメットをちゃんと被って二人乗りで恋龍の実兄夫妻の家にして奈凰海が暮らす場所になる一軒家に到着したのであった。

恋龍がまだ18という年齢なので「叔母」というのは避けて「お姉ちゃん」と気を遣ったのだが恋龍が受け入れやすく間が抜けているので叔母でいいと逆に気を遣われて恋

龍が玄関のインターホンを鳴らしながら兄の龍臣を呼んだら、義姉で龍臣の妻の旧姓月村、現神楽堂すずかと龍臣が出迎えてくれて中に入ることになったのであった。

「(どうしよう、どう見ても、お義父さんと言う年齢じゃないよ)」

「奈風海、今日からおまえのお義父さんの龍臣だ」

「お母さんのすずか。歳は春龍と同じくらいなのね」

「14歳だけど」

「つて言うことは同じ年の叔母と姪になるのね」

「それに、はい、これが三日後に通う学校の制服と生徒手帳だ」

「今日からお願います。えくと、お義父さん！ お母さん！」

家に入った奈風海と恋龍はリビングのソファで対面して座って今日から家族として受け入れられたので恋龍から龍音達が通っている中学校の制服をプレゼントして編入手続きまで行つたことを奈風海に話して新たな生活を送ることになったのであった。

アイズの入院事情&ベルの死んだふり？

奈風海が龍音達と同じ中学校に通うことに決まって神楽堂という名字を貰って新しい生活を送ることになったのであった。

一方で

「ピ・ピ・ピ・ピ」

「うくん・・・!？」

「ダメだよ!! 剣崎さんと天馬達が来なかったら転生の間へ送られてるよ」

「(口が動かない)」

「急所と脊髄と脳が無事だったから良かったけど、手当たり次第に骨折してるし、肋骨が肺に刺さってたし」

「(どうしよう、どうやって伝えれば)」

「伝わってるよ」

「(え(；。))!!)」

ウダイオスに挑んで完膚なきまでに倒されて戦闘不能に陥ったアイズはそのまま天界の病院に緊急搬送されてその日に緊急手術を受けて数時間後、気が付いたが自分がど

うなっているのかわからない状態だったので動こうとしたがウダイオスにやられて骨折した全箇所激痛が走り、そこに白衣姿の龍美がやって来て怪我の度合いを説明されたのであった。

だがどうやら頭部も数か所骨折していたらしく口が動かせないほど顎もやられて完全にギプスが巻かれて両目にも包帯を巻かれていたのであった。

もちろん両手足は完全にギプスでグルグル巻きになって上に肋骨を折れていたのと同じようにバストバンドがグルグルにまかれて首もコルセットで固定されているというより完全にミイラ状態で呼吸が出来るように鼻の形に固定されているギプスに鼻の穴の部分にちゃんと穴が開けられており食事は完全に点滴で補っている状態でバイオリクターまたは治療用のカプセルに入れられているのであった。

アイズは口が動かせないので困っていたら龍美が伝わっていると返したので表情には出せないが驚いていたのであった。

「アイズは無意識に念話が出来るようになっていたんだよ」

「念話？」

「簡単に言えば、テレパシーだね。このままの調子で行けば、全治二週間だね。オラリオのお祭りには間に合うよ」

『ありがとう』

「医者として当然のことをしたまでだよ。それじゃあ」

『ちやんと言えなくても伝わる。こういうことなんだ』

そう、なんとアイズは無意識に念話で会話が出来るようになっていたことに気付かされたのであった。

龍美からこのまま安静にしていれば天界の医療技術を持つてすれば全治二週間だと告げられて龍美が出ようとしたので念話でお礼を言うと龍美は医者として当然だと言っ出て行っただけであった。

一方で、

「あ!! ベル!!」

「起きろ!!」

「!! ぎゃあつアアあ。(。D。)ノ!!」

「はい!! なぜ逃げるんです?」

「落ち着け、オレだ!! 剣崎一真だ!!」

オラリオのダンジョンでウダイオスを倒した剣崎一真御一行は人の気配を感じたのでそのまま感じた方向へ向かうとベルが気を失っており近くに魔物が潜んでいたのですぐさまベルを起したらいきなり悲鳴を上げて逃走しようとしたのでセドナがとっ捕まえて落ち着かせたのであった。

「大方、ベルが泣き叫んでる間に片付いたぞ」

「ほへ（。口。）ノ？」

「ベル、なんで一人なんだ？　ヘスティア達は？」

「えくと（。口。）ノ!!」

「取り敢えず、オレたちと一緒に戻ろう」

ベルが気を失っている間に周辺にいた魔物は勝美と理輝が人間体で機攻殻剣で片付けて血払いをして鞘に納刀しベルを連れて街に戻ることにしたのであった。

なぎさの・・・

ベル・クラネルがなぜか気絶していたので起こした途端いきなり悲鳴を上げて全力疾走で逃走しようとしたのでセドナが捕まえて大人しくさせてこのままにしておくのは気が引けないので町まで送ることになったのであった。

「すいませんでした」

「まさか、ベル一人しかメンバーがいらないとは。(。D。)ノ」

「けど、次元武偵になる前は何処も門前払いでしたので」

「まあ、そう簡単に雇ってもらえるとは思えないからな(オレも就職して初日に職場が無くなったし)」

ベルを自宅まで送った一行はまさか廃墟同然とは思ってなかったようで、そこで男女二人で暮らしていることに驚くのは無理もないのである。

劍崎一真もこの前恋人が出来たばかりだが同棲はしていないというよりお互いが異世界で暮らしている上に生徒と教師という身分の為にできることはないが流石にマズいと考えていたのであった。

ベルがギルドに門前払いをされていたことを話したので一真も就職したBOARD

が一夜で壊滅して残高が二桁しかなかったり、アパートを強制退去させられたりと踏んだり蹴ったりだったことを思いだしていたのであった。

「あ!! 一真さん、これ渡しておきますね」

「カプリコーンアンデッドのカード（。D。）ノ!!」

「確か、この前の授業でカプリコーンアンデッドは上級アンデッドで卑怯な戦法を好む性格でしたよね」

「ああ。まさか」

「倒して封印して来ました」

「そっか二人も仮面ライダーだったもんな」

勝美はここに来る前に封印した♠のカテゴリーQ「カプリコーンアンデッド」のラウズカードを一真に渡したのであった。

それを見たベルは以前一真がアンデッドに関する授業をしていたことを思い出してそれが上級アンデッドであることを認識したのであった。

一真は勝美と理輝が仮面ライダーであることを思いだしたのであった。

一方で、

「ベルトさん、天夏と弥生、大丈夫かな？」

『そればかりはわたしもわからない』

超次元ゲームギョウ界のルウィーの実家のガレージでトライドロンを洗車していたなぎさはドライブドライバーことベルトさんに弥生がまた精神崩壊を起さないか心配で話していたのであった。

流石のベルトさんもそればかりはわからないと言い、なぎさはいつでも助けに行けるように別のベルトも用意されていたのであった。

『トライドロンではIS学園には乗り込めないからな』

「ごめんね、あまり活躍させてあげられないで」

【安心しろ。妾が着いておるのだ。このオートバジンと機攻殻剣としてな】

「（もし、天夏と弥生が行く世界が並行世界のIS学園だった場合、向こうのわたしがいるんだよね、ラウラ・ボーヴィツヒとして）」

予備としてファイズギアとオートバジンにクジキリコンゴウの人格を転写したセットを現在アイテムバックに入れているのである。

もし助太刀する世界がIS学園が存在する世界ならもう一人の自分「ラウラ・ボーヴィツヒ」に出会いそして戦うことになるのだろうと考えていたのであった。

車の仮面ライダーなぎさ

なぎさが実家のガレージでトライドロンを洗車しながらベルトさんと話しながら機
攻殻剣「クジキリコンゴウ」の人格を転写したオートバジンとベルトさんと話してい
たのであった。

そこに、

《アンデッド反応です!! 場所はルウィー雪原です!!》

「ベルトさん!! 行くよ!!」

《油断は禁物だ!!》

アンデッドが出現したとフラクシナスからのオペレーションルームの美緒から報告
が入り場所がルウィーだったのでなぎさがトライドロンに乗り込んでシートベルトを
締めて現場のルウィー雪原へ向かったのであった。

もちろん、

「待ってろよ!! デイアーアンデッド!! 変身!!」

『Change!!』

オラリオから超神次元ゲームギョウ界のルウィーを訪れた剣崎一真もその報告を受

けて愛車「ブルースペイダー」に跨りヘルメットを被り現場に直行する前に、ジョーカー
ラウザーでチェンジビートルをラウズしてブレイドジョーカーに変身して現場に向
かったのであった。

「それじゃあ。変身!!」

なぎさも道中で運転しながら左手首のシフトブレスにシフトスピードの赤いシフト
カーをセットして仮面ライダードライブに変身した所で、

「なななぎさ(0w0)ノ!! 15歳だろ(0w0)ノ!!」

「武偵は飛行機以外なら武偵になった瞬間に免許が受理されますから!!」

『一真。キミもいい加減にプレイバックルを貰ったらどうだ?』

「考えておく」

道中で偶然剣崎一真も並走して走るようになったが15歳のなぎさがプロ顔負けの
運転でトライドローンのハンドルを持って運転しているので驚いていたがなぎさに武偵
になって15歳から飛行機や大型船以外の運転免許を受理されることを並走しながら
説明されてベルトさんにプレイバックルを貰ってくるように注意された剣崎一真だっ
たのであった。

そして現場の超神次元ゲームギョウ界で年がら年中雪が積もっているルウィー雪原
に到着したのであった。

「ひとつ走り付き合っつて!!」

「わかったよ!! かわいい後輩のために先輩として助けるよ!! (しかし、初めて見るな、車の仮面ライダーっつて、それに)」

「(OMO) (オレノカラダハボドボドダ (ボロボロ) !!」

「(OWO) (ウソダドンドコドーン (そんなこと) |—?— ● !!」

そしてヘラジカのアンデッドで、◆のカテゴリー6「ディアーアンデッド」を発見して仮面ライダードライブ「タイプスピード」に変身しているなぎさが準備運動し、ハンドル剣という名前なのだが、なぎさがダサイと言い、勝手に「ドライブブレイド」と改名した剣を構えて、ブレイドジョーカーに変身している剣崎一真も剣を構えたがある光景が蘇っていたのであった。

それは以前ディアーアンデッドとの戦いの後に橘朔也を問い詰めてライダーシステムで体がボロボロだと告げられた(実は気にしすぎ)ことを思いだしたのであった。ディアーアンデッドは角に電流を流して戦闘モードに入っていたのであった。

やりすぎなライダーキック

超神次元ゲームギョウ界のルウイー雪原に出現したヘラジカのアンデッド♣のカテ
ゴリー6「デИАーアンデッド」と対面した仮面ライダーダードライブことなぎさとブレイ
ドジョーカーに変身している剣崎一真は共同戦線を張ることにしたのであった。

「!!」

「電撃ならこっちも、雷神剣!!」

「(そういえば、なぎさもカードなしで技が出来るんだった。オレも!!) 虎牙破斬!!」

『そろそろ決めるかい?』

「勿論!! 剣崎さん!! 行くよ!!」

「ああ」

一真&なぎさ「せーの!!」

場所は違えどデИАーアンデッドは二本の角から電撃を放ってきたので雪の上とい
う悪条件でも元ドイツ軍兵士であるなぎさは軍隊仕込みと祖父母直伝の動きで見切っ
て躲して剣崎一真も再戦なのかあつさりと躲してなぎさが雷を纏った突きを繰り出し
てその合わせるように斬り上げて斬り下ろす第一茶熊学園の授業で修得した技でデ

アーアンドレッドの角を切り落としたので、ベルトさんからそろそろ決めるかと聞かれて二人は必殺技兼秘奥義の構えを取った瞬間、ベルトさんの自動操縦のトライドロンがダイアーアンドレッドと二人の周囲を旋回し始めて二人は同時に旋回中のトライドロンに向かって飛んで行って、

「舞い踊れ!!」 桜花千爛の花吹雪!! 彼岸!! 霞!! 八重!! 枝垂!! はあつあつあ!!

「これがわたしの!!」 殺劇舞荒拳!!」

「ウエーイ(owo) / !!」

「うぎやあああつああ!!」

「ドカッン!!」

『スピードドロップと言うのだが、なぎさ、物騒なネーミングだね(・ω・)』

なんとダイアーアンドレッドを軸に幾度となくライダーキックを剣崎一真となぎさが同時に旋回中のトライドロンを足場にしながら蹴りまくるというライダーキック版「漸殺狼影陣」または「翔旺神影斬」をイメージしてもらえばいいだろうあまりにもダイアーアンドレッドが可哀そうになってくる技なのだがなぎさが「スピードドロップ」と元々あつた技名を勝手に「殺劇舞荒拳」と改名したのでベルトさんから物騒だと言われてしまったのであつた。

「あつちやく。封印できますか?」

「やりすぎた（〇w〇）ノ!! やってみるか」

二人分のライダーキックを何度も喰らったディアーアンデッドは完全に緑色の血を流して装甲などが原型をとどめていなかったが、剣崎一真もその光景を見てやり過ぎたと言つてホルダーの鎖の絵柄のラウズカードを手裏剣のように飛ばして、

「よかった。ちゃんと封印できて、けど、オレには複製された物があるしな」

「よし!! 武偵所で報酬を貰いに行きませんか?」

「え(；。∩。()!! 出るの報酬(。∩。()ノ!!」

「ゲームギョウ界は魔物を討伐したらそれに見合った報酬が出ますから」

『道案内はわたしがしよう!!』

ちゃんと封印されて剣崎一真の手元に戻ってきたのでなぎさはディアーアンデッド討伐報酬を貰いに最寄りの武偵所に立ち寄ることを言うと剣崎一真は報酬が出ること驚いていたので説明しながら武偵所へ向かったのであった。

報酬は山分け

なぎさと剣崎一真は超神次元ゲームギョウ界のルウィー雪原に出現したディアーア
ンデッドを討伐した後ラウズカードに封印してルウィーの街の武偵所に立ち寄ったの
であった。

「これで完了!!」

『一真。キミの取り分も振り込まれているぞ』

「いいのか?」

「何言ってるんですか、二人で倒したんですから」

「そうだな」

無事にディアーアンデッドを討伐したことを報告して報酬を振り込む形で受け取っ
たのだが、剣崎一真が報酬について自分も貰ってもいいのかという申し訳なさそうなこ
とを言ったので、なぎさは二人でディアーアンデッドを討伐した以上は当然だと言っ
て、剣崎一真は受け入れたのであった。

「剣崎さん、そのアクセサリー、山田先生も同じものを持ってましたけど」

「(どうする、なぎさは真耶の教え子だしな、デートしてなんて言えない)」

「それ以上は聞かないでおきます。それじゃあまた今度」

「うん。良かった・・・さてオレも寮に帰るか」

ふとなぎさは剣崎一真の身に着けている◆のシルバーアクセサリーのブレスレットを見て山田真耶が同じものを持っていることを思いだして問い出したのである。

いきなりの質問内容に剣崎一真は冷や汗を掻いていたのであった。

それもそのはず、質問している相手は恋人の身近な教え子の一人なのだから、下手に答えを返せば変な噂を流されるのではないかと言うことを予想してしまうのであった。

だがなぎさは敢てそれ以上の追求をしないでそのままトライドロンの運転席に乗り込んで走り去って行ってしまったのであった。

ほっと胸をなで下ろした剣崎一真はそのまま第一茶熊学園の男子寮に愛車のブルースパイダーに跨り戻って行ったのであった。

「剣崎。うまくやっているようだな。まさかあんな少女が車を乗り回しているとは、オレもこの世界の事を調べないとな」

「何やつてるんです？ 橘さん、それとも、仮面ライダーギャレンと呼んだ方がいいですか？」

「!! キミは誰だ？」

「これは失礼しました。ボクはルウィー次元武偵所 本部所長、御子神大龍です。さつ

きの子はボクの姪っ子です」

「どういうことだ（。・。）？」

「そうですね。簡単に言うるとボクの兄夫婦の養子です」

「そうか。オレはこれで失礼する!!」

「それにしても、相川さんが転送装置を借りたんやろ。さてと、ボクは愛香を元の世界へ送らんとな」

物陰からナズエミテルデイスならぬ見ていたのは何と剣崎一真より先に仮面ライダーギヤレンになって戦っていた男、橘朔也だったのであった。

そこに大龍がいつもの関西弁ではなく標準語で話しかけて橘朔也が驚いたので、名乗ることを忘れていたので、名乗ってトライドロンに乗り込んだなぎさが自身の姪っ子だと告げると橘朔也が呆然としてしまったのであった。

大龍は兄夫婦の養子だと説明すると納得した用でそのまま橘朔也が去っていくのを見届けて、受け持っている患者の津辺愛香を元の世界へ帰してあげることにしたのであった。

大龍整体所

超神次元ゲームギョウ界のルウイーの武偵所付近で橘朔也と遭遇した大龍は別れた後、自身が開業しているが第一茶熊学園の女子寮で生活を送っているのだから開けられないがちゃんと整体師として仕事をしているルウイー武偵所本部に隣接されている診療所に到着したのであった。

大龍は白衣に着替えて患者の津辺愛香の元へ向かったのであった。

もちろんほかの患者もいるのでちゃんと整体師として診るのだが、大龍の所に来るのは多くが女性や成長期の女の子までやって来るのであった。

大龍は確かに女の子が好きなのだが、別に此処が女性限定ではないのだが大龍の性格も相まって女性の患者が多いのだ。

「大龍様!! この津辺愛香。この恩を一生忘れません(T|T) /~~~~~!!」

「別に泣かなくても。整体師として当たり前のことをしただけ。さて、そろそろ家に帰らないと親御さん、心配してるよ。武偵所には話付けてあげてるから」

「はい!! 失礼しました(≡◇≡)!!」

『マスター。愛香さん、喜んでましたね』

「話を聞いたときは、あの変態の確かテイルギアやったかいな？ 流石にあればないで、恋龍ちゃん破壊するのは当然やったしな、その代りのインテリジエントデバイスを作ってあげたんやで、それも次元武偵資格を取るって言う条件付きでや、そしたら数時間試験を合格してくるとは思わんかったで〜」

整体施術する部屋の椅子に座っていた津辺愛香は最初に出会った時からまだ一日ほどしか経ってないがまるで別人のように見違えるほどの容姿になったのであった。

悩みのタネだったまな板と評させるほどの絶望的な胸がどこへ行ってしまったかのようにツインテイルズ無双とか言っていたあの白銀のロングヘアの科学者(?)の女ことトウアールといい勝負ができるほどの大きさに成長したのであった。

それと恋龍がポーカーフェイスで破壊したテイルギアの残骸を分析したところ、汎用性がなかったので元時空管理局で現在は時空武偵局のインテリジエントデバイス技術を応用してインテリジエントデバイスを作ることになったのだが、愛香は魔力が低いというより元から格闘術をやっていたこともあってそれ故に低いのだ。

確かに物理型でも魔力が高い者は多いのだがそれはあくまで時空管理局の測定である。

それでもバリアジャケットを纏うことが出来るインテリジエントデバイスを超神次元ゲームギョウ界に支部を置いているヴェスタWSCの技術力で愛香の低い魔力でも

自由に飛行できるバリアジャケットを纏うインテリジエントデバイス「ネフェリイ」と名付けたブレスレット型を愛香は渡されて、そして元の世界へ帰って行ったのであった。

愛香は大龍だけではなく龍美達のこととも神と崇めているのであった。

第三章

統制者の存在と天夏と弥生のパラレルワールド

龍美達は各担当国の自宅で超神次元ゲームギョウ界のルウイー雪原に出現したディアーアンドレッドはゲームギョウ界特有の次元の亀裂からやってきたのだと天界からの解析結果に目を通していたのであった。

「統制者。それがアンドレッドを放った存在で、剣崎さんを魔物化しないとイケない状況にした存在。絶対に倒さないとイケない!!」

「龍美。そう生き急ぐ必要は無いし、それにゲームギョウ界に來ない所を見るとあつちの世界にしかいられないんじゃないかな?」

「そつかく!! ありがとう!! 流石!! ボクの夫!!」

「まだ籍入れてないだろ(=。ω。)/ノ!!」

書類位には統制者というモノリスという黒い石板を通して問答無用のアンドレッドのバトルファイトを裏で操りそして剣崎一真のジョーカーアンドレッド化したことで自分のも思い通りに事が進まないことに現在も別次元からアンドレッドを解放している存在のその正体は欲望と思念の集合体だったことが天界から書類で報告されていたので

あった。

龍美はいつもの顔ではなく真剣そのものを現した顔で書類を見ていたので婚約者の瑠美奈に諭されて元の顔に戻ったのであった。

「愛香。今頃何してるんだろ？」

「狼龍お姉ちゃん。お休み」

「臥龍。お休み」

ラスティシヨン教会の自室で黒髪ツインテール同士で意気投合した愛香と友達になった狼龍は趣味のことを打ち明けた所、受け入れてくれたようでなんだかんで仲良くなり、身を案じていたのであった。

そして就寝したのであった。

姪っ子の星奈とは同い年なのでよく一緒に遊びに行ったりしているほど仲はいいのである。

こうして三日が経ったのであった。

「天夏と弥生は準備は出来てるようね」

「ああ。いつでも行ける」

「うん!!」

「安心しろ。向こうでアンデッドが現れても大丈夫だ」

「はい。わたくし達がお守りします」

天夏と弥生の二人は前もって告げられていた仕事を行うためフラクシナスの転送ルームに別件で仕事があるスミレ達と叔母の剣心と従姉妹達に見送られて転送装置で転移していったのであった。

「そう言えば、天夏と弥生の行くところって伝えたの？」

「言ったら、面白くないじゃない（へ——）——☆ 大丈夫よ、あなた達には後で教えてあげるから!!」

「ダメだ（。D。）ノ!!」

天夏と弥生が転送したのを見届けたまでは良かったのだが剣心が行き先を言っていないことに気付いた龍姫が尋ねると剣心は態と行き先を天夏と弥生に教えないという選択をしたと笑顔で答えて開き直った確信犯丸出しの態度を取ったので一同で呆れるしかなかったのであった。

こうして天夏と弥生の新たな旅は始まったのであった。

並行世界の I S の世界

剣心に行き先を教えてくださいませに転送した天夏と弥生は無事に仕事先の世界へ到着したのであつた。

「あれ？ 弥生は？ なんでオレ、学ランなんだ？ それも空港前？ ん？ I S 学園？ つてことは!!」 あのバカ叔母!!」

「うるさいですわよ!!」

「あ、ごめん・・・(スマイレ? あいつは別件だったような、もしかしてオレって並行世界に来たのか。(㇏) ノ !! 帰ったら文句言つてやるく、く >!!) オレは天河天夏、よろしく」

「これは失礼しましたわ!! わたくしはセシリア・オルコツトですわ。どうやら I S 学園に行くようですね。どうです? お送りしますけど?」

「(学ランでバイク乗るのは不味いしな、それに弥生と逸れちまつたし) お願いしようかな」

【どうやら此処は別世界の I S の世界らしいな】

転移したまでは良かったのだがなぜか着ていた服がいきなり学ランになっておりポ

ケットにはIS学園の生徒手帳が入っていたのだが、肝心のパートナーの弥生がいないことに気が付いたのだがそこにあのスミレになる前のセシリア・オルコットに遭遇したので自己紹介をして一緒にIS学園へオルコット社の車に乗せてもらうことになったのであった。

どうやら天夏と弥生は別の場所に飛ばされてパラレルワールドのISの世界が仕事先になっていたのである。

一方で、

「がくん（。D。）ノ!! ISの試験会場（。D。）ノ!! なんて（。D。）ノ!!」

どうやら弥生はISの試験会場に着ていたジャケットではなくセーラー服に髪型はポニーテールからツインテールに束ねて髪色は黒のまままでISの試験会場に立っていたのである。

「伊達眼鏡掛けてるだけなのに、こんなに印象って変わるんだ?」

「おまえ!!」

「?」

「勝手にうろつくなと!!」

取り敢えずアイテムパックから折り畳みの手鏡を取り出して自分の顔を見た弥生は黒縁の伊達眼鏡を掛けた状態で飛ばされたことを察して移動しようとした矢先に黒服

の男に呼び止められて如何にも捕まえる気満々で掴みかかって来たので、

「あぐう（。D。）ノ!!」

「誰と、間違えてるんですか？ ボクは朝宮弥生ですけど？」

「すいませんでした（。D。）ノ!!」

「おゝい!! 弥生!!」

「天夏!!」

「お知り合いましたの？ わたくしはセシリア・オルコットです。お見知りおきよ!!」

「（スマイレ？）と言うことはパラレルワールド！ 一応名乗っておくか）ボクは朝宮弥生。よろしく」

そのまま腕をひねり上げて関節技を極めて人違いだと認識させて黒服の男はどっかに去っていったところに最愛のパートナーの天夏と合流をして並行世界のスマイレことセシリア・オルコットと遭遇して I S の試験に臨むことになったのであった。

もちろん、

「弱すぎるんじゃないの〜!!」

「弥生様。やりすぎですけど・・・」

「さてと、帰るか」

「顔を洗って出直してこい！」

と一瞬で片付けて問題なしの合格を得て会場を後にしたのであった。
そう天夏と弥生の旅が始まったのだ。

テイルブルー改め

パラレルワールドのISの世界へ転移した天夏と弥生はIS学園に通うことになったのであった。

一方で別件の仕事を受けているスマイレ達は二組に分かれていたのであった。

「此処が変な人達に出会った世界なんだ？」

「思っただけでも嫌なのに」

「わたしは初めて来たんだよ!!」

どうやらスマイレとコンビを組むことになったのはなぎさでスマイレが以前朱音と一緒に来たあのツインテールの女しか襲わない怪人と戦った世界だったのでスマイレは落ち込んでいたが、天真爛漫で自由奔放な性格のなぎさは物珍しそうにしていたのだが、流石にトライドロンを運転するわけには行かず仕方なく左手首にシフトブレスに赤いシフトカー「シフトスピード」を装着した状態でスマイレと一緒にバイクで現場に向かうことになったのであった。

「やっぱりこうなるのね、さてと」

「OK!!」

☒ start!! your!! engine!! speed!! ☒
なぎさ&スミレ「変身!!」

「愛香はどこ行つたんだ。(。D。)ノ!!」

☒ SWORD VENT ☒

「ベルトさん、ひとつ走り付き合つて!!」

「?」

「どうしてこうなるんですか。(。D。)ノ!!」

「いいだろう、相手になつてやるか!!」

現場に到着するなりあの赤いツインテールの少女に変身している観束総二がアルティメギルと刃を交えていたのだが悪戦苦闘していたのでさっさと片付けて帰りたいスミレはバイクのミラーに蝙蝠の模様がある黒い長方形のカードデッキを映し腰にVバックルが巻かれたのを確認していつものようにポーズを決めてカードデッキを差し込んで仮面ライダーナイトに変身し、なぎさはベルトではなく左手首のシフトブレスのレバーを弄つて仮面ライダードライブに変身して助太刀に入つて早々にスミレがバイザーにカードを入れて槍を呼び出して剣を受け止めたのであった。

なぜか津辺愛香の姿が見えないのである。

「行くわよ!!」 ネフェリイ!

『マスター!!』

「セットアップ!」

「愛香さん!! なんですかそれは(。D。)ノ!!」

「空を飛ぶってこんな感じなのね」

「その様子だと、次元武偵の資格を得たのね わたしも」

⊠GUARD VENT!!⊠

「ふざけよって!!」

何処からか声があったのでその方向を向くと高らかと右手首にコバルトブルーの腕輪型インテリジェントデバイス「ネフェリイ」を嵌めた心身ともに成長した津辺愛香の姿がありそして大きくなった胸を隠すように蒼穹の甲冑を身に纏ったツインテールの侍の姿が舞い降りたのである。

スマレは新しい仲間の誕生を喜んでバイザーにカードを入れてマントを身に纏った瞬間、一緒に飛行したのであった。

仮面ライダードライブは空が飛べないので観束総二の護衛に当たっているのであつた。

「行きましようか!!」

「ええ」

☒FINAL VENT☒

「え？ FINAL?」

「なんでドンドコドゥン（そんなこと）。ド。ノ!!」

空を飛んでいるスマレはそのまま一気にかたを付けるためにバイザーにカードを入れて槍を構えた瞬間マントがドリル状になってスマレを守るように纏わりついて「飛翔斬」で、愛香は持っていた槍を構えて一緒にドラグギルデイ目掛けて特攻したのであった。

「ドカゥン!!」

「スマレ!!」

「なぎさ、ごめんなさいね、出番取っちゃって」

「いいの!!」

「どうしてくれるんですか!! またあなた達の所為でツインテイルズが・・・」

「オレの存在意義って」

「これに懲りて、普通に生活しなさい」

「自己紹介がまだね。津辺愛香。よろしく。スマレとは以前に会ってそれから交友してるの」

「わたしはスマレの友達の子神なぎさ。よろしく愛香!!」

ドラッグビルディは二人同時に必殺技を仕掛けてきたので対処できずにそのまま喰らい爆散したのであった。

愛香とスミレとなぎさはいい関係を築いたがトウアールと言う女性に言いがかりをされてしまった上に観束総二の出番を取ってしまったが三人は気にする様子もなくガールズトークをしながら去っていったのであった。

一方で

「まさか、通うことになるとは」

「同じクラスにこの世界の「ボク」がいるんだもん（。・。・）」

I Sの実技試験で打鉄で瞬殺した天夏と弥生はあれから数日経ちI S学園に入学させられていたのであった。

そこにはあのもう一人の弥生こと「篠ノ之箒」そしてもう一人の天夏こと「織斑一夏」が同じクラスになるという状況に置かれてしまったのであった。

念の為二人とも伊達眼鏡を掛けている状態であった。

並行世界の自己紹介

並行世界の I S の世界での出張生活を送ることになった天夏と弥生は二人とも同じクラスになったがまさか並行世界の自分達と同じクラスになったのであった。

もちろん、こっちにも山田真耶がいるは同じで副担任のは最初と同じで天夏と弥生の自己紹介の出番が回ってきて弥生が終わったので、

「同じく織斑と同じく男で I S を動かした。ヴェスタ W S C のテストパイロットだ。趣味は散歩、特技は武芸などだ!! で以上だ」

「婚約者さえいなきや良かったのに（*、ω、*）」

『弥生、なんで婚約者だつて言ったんだよ?』

『いいじゃない、こっちの世界には少しだけしかいられないんだし!!』

『そうだな（〽）（〽）』

天夏は自己紹介を行ったが弥生が婚約者宣言をしたのでクラスの大半が女子のこの I S 学園の空気が重くなったがそんなことを気にするほどの弥生ではなく人格者の「美兔」のこともあつて相変わらずのマイペースぶりだったのである。

そして、

「織斑一夏です・・・以上です!!」

『嫌な予感がするけど、防いでおく?』

『そうだな(・ω・)』

織斑一夏の自己紹介が終わったのだが天夏と弥生はこれから起きる出来事を予知したので、

「シュツ!!」

「誰だ!!」

「織斑先生、なんです? その出席簿は?」

「貴様!!」

「暴力にすぐ出るのは悪い癖ですね」

気配を消して教室に入ってきた織斑千冬が実弟の背後から振り下ろされた出席簿目掛けてシャーペンを命中させて止めたのである。

弥生はいつもの雰囲気ではなく少しだけ気を放って織斑千冬の行為を咎めたのである。

生徒に注意されるという現状を気に入らなかった織斑千冬は弥生目掛けて出席で攻撃を仕掛けてきたのである。

だが弥生そして天夏はこのような攻撃には慣れていたので、

「ドゥン!!」

「うっ!!」

「織斑千冬先生。人と言うものを学んでから教師になるべきですね」

「千冬姉（。口。）ノ!!」

「山田先生。お願いします」

弥生は振り下ろされた腕を掴んでしゃがんでそのまま柔道の一本背負いで投げ飛ばしたのであった。

まさかモンド・グロツソを制覇した織斑千冬がいとも簡単に投げ飛ばされるという光景にクラスは呆然としており投げられた織斑千冬はまさか自分が投げられるとは思ってなかったが受け身を取ったのは良いが気絶して、実弟の織斑一夏はウソダンドコドーン状態に陥っていたのであった。

天夏と弥生は何食わぬ顔で山田先生に進行をお願いしたのであった。
もちろん、

「あの人、ちゃんと教員免許、持ってるのかな?」

「いや、あんなことをするところを見ると持ってないだらな」

BOARDの所長「烏丸啓」のパソコンにその映像が天夏と弥生の伊達眼鏡を通して送られてきたのでその場にいた研究員一同が織斑千冬の問題行動に呆れていたので

あ
っ
た。

三世界の出来事前編

並行世界の織斑千冬を弥生が投げ飛ばして入学して早々に初日からISについての授業が行われたのであった。

『退屈だね』

『全くだ』

天夏と弥生は元の世界でISに関しては熟知していたので今やっている項目は全部覚えていたので一応授業を聞いていたのであった。

一方で、

「ウソですよね」

「済まない君が妹の友でいてくれたことは感謝する。龍姫、星龍」

「では、失礼します」

「龍姫、星龍、お願いだ、妹を、フィルフィを救ってくれ、頼めるのは君らだけだ!!」

龍姫と星龍は土曜日だったので学校が休みだったが急にフィルフィの実姉で王立士官学院の理事長でもあるレイイ・アイングラムに剣心を通じて呼び出されたので二人は衝撃の事実を聞くことになったのであった。

それは二人の共通の友でありルクスの幼馴染のフィルフィの寿命が尽きかけていると告げられたのである。

その事実を聞いた二人は五年前のようなことはもう起きないと決意した顔で理事長室を出て行ったのであった。

レリイは妹の命運を背負わせてしまっている龍姫と星龍に託すしかなかったのであった。

龍姫と星龍はフィルフィが今日飛行島に月を見にルクス達と行くことを知っていたので、夜になるの待ってから飛行島に向かう準備を進めていたのであった。

一方で、

「此処が劍崎さんの産まれた世界か」

「アタシ達の暮らしてる地球と違うわね。たまには星奈と組むのも悪くないわ」

「そう言ってくれると嬉しいよ」

【ディセントと組むのは銀の福音戦以来か？】

【そうですね】

劍崎一真の世界へやって来た朱音と星奈はスクーター型のバイクを走らせてある場所へ向かっていたのであった。

「見つけた？」

「行くわよ!!」

「へ．．．」

「変身!!」

「え?」

「君達!! 此処で何をしてるんだ!!」

「朱音、どうする?」

「勿論!!」

「ベルトが巻かれた(OMG)!!」

その場所は剣崎一真がジャガーアンデッドを封印した場所で近くの駐輪場でバイクを停めてジャガーアンデッドが人を襲う前に討伐または封印をするため朱音は近くにあったバックミラーに金色の龍の顔が描かれた黒い長方形のカードを映そうとしたところで男の声で変身と言い朱音と星奈の前に現れたのであった。

二人に何をしているのかと聞いて来たので朱音は退くに引けない状況に置かれていると判断して、道路のミラーにカードデッキを映して自分の腰にVバックルが巻かれたことを確認して、星奈もゴーストドライバーを巻き「オレ魂」の眼魂をふたを開けてセツトした瞬間、

「アーイ!! バッチリミナー!! カイガン!! オレ!! レッツゴー!! 覚悟!! ゴ・ゴ・

ゴ・ゴースト!!」

星奈&朱音「変身!!」

「んしゃあ!!」

「後で話を聞かせてもらう!! 行くぞ!!」

「ハイ!!」

黒と橙のパーカーが飛び出してきてそのまま星奈に被さって仮面ライダーゴーストに変身し、朱音もカードデッキをVバックルに入れて仮面ライダー龍騎に変身して仮面ライダーギャレンの助太刀に入ったのであった。

赤いクワガタライダーと共闘

剣崎一真のもと居た世界で♣のカテゴリー6の「ジャガーアンデッド」を一足先に見つけた朱音と星奈はいつものように変身しようとした瞬間、背後から男性の声で変身と聞こえた瞬間、仮面ライダーギヤレンの変身者「橘朔也」と一緒に戦うことになったらしく、朱音は持っていたカードデッキをVバックルに入れて仮面ライダー龍騎に変身し、星奈はゴーストドライバードライバーにゴーストアイコンを入れて仮面ライダーゴーストに変身したのであった。

「君達も無茶をするなど言っても聞かないようだな」

「その前にアンデッドを!!」

☒SWORD VENT☒

「剣が(OMO)!!」

「ボクも!!」

☒カイガン!! ムサシ!! 決闘!! ズバット!! 超剣豪!!☒

「なんだこの三人そろって赤い集団は」

「うゝ!!」

「逃がすか!!」

橘朔也は無茶をしないでと言いたいがこの二人が変身した時点でそれは無理だと判断して醒銃ギヤランラウザーを持ち、朱音が左腕のバイザーにカードを入れてドラグセイバーを呼び出し、星奈もアイコンを変えて赤いパーカーのムサシ魂にフォームチェンジしたので三人そろって赤い集団になってしまったのであった。

ジャガーアンデッドは逃げようとしたので朱音が近くにあったカーブミラーに飛び込んで行ったのである。

「ミラーに入って行った!!」

「おりゃ!!」

「ぐにゃああつああ!!」

「星奈!!」

「うん!! 虎牙破斬!!」

朱音は仮面ライダー龍騎の特性を生かしてミラーワールドからジャガーアンデッドに奇襲を仕掛けて見事に成功してドラグセイバーで一撃を入れて星奈が続くように連撃を決めたのである。

橘朔也はまさかの見てるだけになりそうだった。

☒ DROP!! FIRE!! BURNING SMASH!! ☒

「もらった!!」

星奈&朱音 「鳳凰天駆!!」

「橘さん、封印を!!」

「わかった(まさか、こんなになるとは思ってたな)」

流石に自分より歳が下でそして女の子二人に任せてしまっている状況になってしまったので、名誉挽回としてギャレンラウザーに◆5「DROP」◆6「FIRE」を連続でラウズして「バーニングスマッシュ」の態勢に入りそれに続くように二人も同時に飛びあがって鳳凰の形の炎を身に纏ってジャガーアンデッド目掛けてライダートリプルキックをお見舞いしたのであった。

三人分でそれに龍騎のライダーキックの破壊力も合わさってジャガーアンデッドは爆散してしまっただが、星奈が橘朔也に封印をと言うと、ブランクカードが手裏剣のように放たれて無事に封印が完了したのであった。

「済まないが、二人とも話を聞かせてもらおうか?」

「わかりました。ご同行します」

「君は日本語で話してもいいみたいだね」

「大丈夫です(確かにフランス人だけど、両親が日本だし、それに日本の学校に通ってるから日本語は難しい漢字以外はできるからよかった)」

「それじゃあ、BOARDまで案内・・・」

【その必要はありません!!】

【我が御子の案内をおまえのような男に任せられるか!!】

「!!」

「すいません!! 行きましょうか!!」

このまま解散とは言えず橘朔也に同行を求められた星奈と朱音は変身を解いて一緒にBOARDに行くことになったのであった。

並行世界での日常

星奈と朱音が仮面ライダーギャレンこと剣崎一真の先輩の橘朔也に連れられてB O A R Dに向かっている頃、並行世界でI S学園に入学させられた天夏と弥生は織斑一夏が実姉の織斑千冬に出席簿で殴られそうになっていたので毎回それを協力者に配信しながら止めて無事にお昼休みになったのであった。

「なんか今日は出席簿を止めてばかりだね(´・ω・｀)」

「オレもこれには同意する」

「あ、箒!!」

「確か、朝宮弥生だったか？ 何の用だ？」

「一緒にお昼にしない？」

「織斑と一緒に構わないぞ」

「いいのか？」

お昼休みになったので天夏と弥生は相変わらずの雰囲気を出しながら食堂へ向かっている、この世界の自分である「篠ノ之箒」と「織斑一夏」に遭遇したので一緒に食堂に行くことになったのであった。

「さつきはありがとう」

「あれぐらい慣れてる」

「千冬さんがまるで赤子の手をひねるみたいだったな」

「おまえらはなんでそんなに強いんだ？」

「そうかな？ ボク達より強い人はたくさんいるよ」

天夏と弥生の強さにはクラス中の注目の的らしく箒と一夏はその強さに驚くしかなくあったのであった。

そこに、

「あの〜ご一緒にさせてもらってもいいでしょうか？」

「いいよ」

「弥生って、誰とでも仲良くできるんだな（・ω・）」

この世界のスマイルであるセシリア・オルコットがやって来て同席を求めてきたので一緒にお昼を楽しむことになったのだが箒はそんな弥生を見て羨ましそうに見ていたのであった。

そしてその日のHRがやってきたのであった。

「クラス代表を決める!!」

「天河君で!!」

「織斑君がいいです!!」

「オレは・・・」

「推薦された者は拒否権がないだったよな。織斑先生?」

「推薦・・・貴様!!」

「やはり天河さんは鋭いですわ!!　そうですわ!!　天河さん、わたくしと模擬戦をして

くださりませんか?」

「良いぜ!!」

「ブルーティアーズか、我がおまえと出会う前にスマレが転生の代償として支払った！
Sか、一度でいいから手合わせを考えていたしな」

「貴様ら!!　勝手に!!」

「織斑先生!!　落ち着いて!!」

この世界でもクラス代表こと学級員を決めることになったので天夏と一夏が推薦されたのであった。

もちろん織斑千冬の企みを知っている天夏と弥生は先手を打って織斑千冬を制したのであった。

セシリアは空港で出会った瞬間に天夏が物凄い洞察力を持っていることに気が付いたようであらう。手合わせを試みたいと思っていたのでこの状況を利用することを思

いついたように天夏に模擬戦を申し込んだのであった。

自分の指揮権が働かないので痼癢を起している織斑千冬を山田先生が止めていたの
であった。

「ボクもブルーティアーズとやってみたいんだけど!!」

「来週の放課後第一アリーナで模擬戦を行う!! 以上!!」

こうしてこの世界でクラス代表と学級員選抜戦が行われるのであった。

BOARDの所長

◆のカテゴリー6「ジャガーアンデッド」をライダートリプルキックの三倍もとい龍騎のキック力が勝っていたので爆散し、木端微塵になってしまったがブランクカードを手裏剣のように放ってなんとか封印出来たのだが朱音と星奈は橘朔也に同行を求められて一緒にバイクでBOARDに連れてこられたのであった。

「なぎさ!!」

『やれやれ。合流しに来たのだから?』

「君、なるべくこの世界で車は運転しない方がいい。それと一緒に来てもらえるかな?」「いいですよ。スミレはもう実家に帰っちゃったから。ってなんでこれ運転してること知ってるんですか。(。D。)ノ!!」

「(どう説明しよう。まさかあの世界に行つた際に劍崎となぎさちゃんを陰から見つたことは言えない)」

「顔に書いてますよ」

「済まない。では行くとしよう」

橘朔也に同行を求められて渋々バイクでBOARDの駐車場に到着したところでト

ライドロンの運転席からなぎさが降りてきたので赤い仮面ライダーに変身できるメンバーが四人に増えてしまったのであった。

ベルトさんは相変わらずの様子で合流をして帰ろうとしたようだが一緒に烏丸啓の所へ行くことになったのだが、橘朔也にトライドロンを今いる世界で乗り回さないように注意されたので何故運転していることを知っているのかと逆に問い詰めた所、どうした物かと言った感じで考えていたら、元ドイツ軍兵士であるなぎさにはお見通しだったようで謝罪して気を取り直してBOARDの建物内に入ることになったのであった。

ボード内に入った朱音達は受け付けで橘朔也が話を付けてくれて、所長室に向かったのであった。

「失礼します!!」

「え!! 女の子(。Д。)ノ!!」

「まさか、こんなかわいいお嬢さん達が仮面ライダーとはびっくりしたよ。濟まない、この人類基盤研究所ことBOARDの所長の烏丸啓だ。よろしく!!」

「わたしは広瀬葉。烏丸所長と橘さんと同じくこのBOARDの研究員よ」

「どうも。あたしは、明神朱音です。ヴェスタWSCで仮面ライダー龍騎の変身者です」

「同じく、ヴェスタWSCで仮面ライダーゴーストの変身者の獅子神星奈です」

「二人と同じくヴェスタWSCで仮面ライダードライブ兼仮面ライダー555系列の変

身者の御子神なきさです」

「そういえば、スミレと言う子もなのか？」

「なんだ、まあ、その子とはまた今度話をすればいい。さて君達はどのような経緯で仮面ライダーになったのかね？」

ついにBOARDの所長「烏丸啓」にご対面を果たした朱音達はお互い自己紹介をして烏丸からどういった経緯で仮面ライダーになったのかと質問されたのであった。

【妾達が話そう】

「？」

「あのくそこのプロジェクターをお借りできますか？」

「ああ、どうぞ使ってください」

「では」

「ににに日本刀（。㊦。）ノ!!」

「すいません」

【日本人が日本刀が出てきただけで驚くのか？】

「ドラゴンだと（。㊦。）ノ!!」

「まさか、その日本刀に人口AIが搭載されているとはな」

なきぎさの機攻殻剣の人格のクジキリコンゴウが説明すると言ったので広瀬は辺りを

見渡したのだが姿が見えないのでなぎさが部屋のプロジェクターを借りて機攻殻剣を実体化させたので、まさか日本刀が出てくるとは思ってたので驚かせてしまったが機攻殻剣にケーブルを繋いでクジキリコンゴウの立体映像を映し出したのであった。

朱音達が仮面ライダーになった理由&並行世界の筈（弥生）

BOARDの所長と対談することになった朱音達は仮面ライダーになった経緯を説明することになったのだが、珍しくなぎさの機攻殻剣の人格「クジキリコンゴウ」が説明役を買って出たのであった。

「この姿で対面するのは初めてだったの。妾はクジキリコンゴウじゃ、好きに呼ぶがいい。何故、三人が仮面ライダーに成れたのは、妾達、機攻殻剣が選んだ主なのだからな。それと次元武偵の資格を持っている」

「わかった。協力してもらえるかね、BOARDはライダーシステムの適合者を探しているのだが、中々見つからなくてな」

「確か、融合係数が適合しないと大変なことになるって、恋龍さんが言ってたっけ？」

「はい、そうですけど」

「次元武偵か」

「橘、この子達に会えたことでまた剣崎が人間に戻る可能性が見いだせたんじゃないか

「？」

「（劍崎さん。世界を救うために人間辞めたんだっけ）わかりました。ご期待に添えるように頑張ります!! 失礼しました!!」

「やれやれ、上城以来の高校生でおまけにあんな可愛いお嬢さんのライダーが誕生していたとは、味方になってくれてよかったな橘」

「はい。（小夜子。オレは頑張ってるよ。劍崎、おまえを人間に戻せるかもしれない!!）」
クジキリコンゴウが仮面ライダーに朱音達がなった理由が適格者だと判断された者だからと説明したのであった。

次世代のライダーシステムの適合者を募集しているBOARDにとって朱音達はとんでもない協力者だと判断して協力をお願いしてきたので朱音達はそれを承諾して所長室を後にしたのであった。

烏丸は上城睦月以来の高校生で女の子の仮面ライダーが誕生していたことに驚きながらうれしく思っていたのであった。

一方で

「頼むよ!!」

「わか・・」

「自分にできないことを他人に求めているんじゃないかな? 箒、行こう」

「弥生も言うようになったな。これはある奴が言っていたんだが、「何かを得るにはリスクはあるのは当然。結果、何を傷つけても受け入れる。何も傷つけずに望みをかなえようなんてバカは心が贅沢だからできる」んだと」

「わかんねえよ!!」

天夏と弥生は一週間後の模擬戦の準備に取り掛かろうとしていたのだが、一夏が幼馴染の箒に手を合わせて何かを頼み込んでいたので、弥生はアドリブトム組のガラド直伝の天夏はリタが言っていた決め台詞を言つて箒を連れて一夏を一人にさせたのであった。

こんなことになった理由は数分前に遡るのだ。

「おい!! オレの事をほったらかすな!!」

「あ、忘れてた、シスコン」

「何がシスコンだ!!」

「いい気味ですわね!! 精々精進なさってください!!」

「(叔母さん達に出会ってなかったらオレもあんな嫌な奴になってたんだな)」

天夏と弥生とセシリアでクラス代表を決める模擬戦が決まったことを喜んでいたら一夏を干していたことを忘れていたので一夏が怒ったのだが、三人は軽くあしらい、喧嘩を売った人物があつた天夏と弥生だったことに気付き今に至るのである。

「箒、悩みがあるならボクが聞くけど？」

「わたしは……」

「これはオレが尊敬している人が言っていた言葉なんだが、「泣けるときに泣けて」な」
「それに、「周りが不愉快になるの分かって、苛立ちを撒き散らすのは甘えている証拠」なんだから、友達になるのに理由はいらないよ!! 遠慮しない!!」

「わたしのことを友達だと（。口。）ノ!! だが」

「何言ってるの? もうボクと箒は友達でしょ!!」

弥生はこの世界の自分である箒の心の闇を感じ取ったのであった。

弥生は篠ノ之箒だった頃、政府に保護プログラムという名目で強姦まがいな仕打ちを受けていた所為で統合失調症を患い、今はマシにはなったが多重人格つまり解離性同一性障害を患ったままなのである。

今はお人好しの人格者「風沢美兔」の人格になっていたのである。

箒には側においてあげられる人が必要だと弥生は判断して箒を引き入れたのであった。

凛々の明星やアドリビトム組やフラクシナスの人々に触れあつた経験をフル活用していたのであった。

こうして天夏と弥生は部屋割りを知るため教室に向かったのであった。

実家に戻ったスミレ達と龍姫の葛藤

天夏と弥生が並行世界の I S の世界でまた I S 学園に入学させられて別人とは言え元姉の織斑千冬が担任をしている教室へ部屋の鍵を貰いに行っている頃、スミレは実家で久しぶりに義姉のアンナと一緒に帰省していたのであった。

「アンナ、スミレ。お帰りなさい!!」

「お母様、ただいまですわ」

「チエルシーも元氣そうね」

「はい!! お嬢様たちがいない間も屋敷をお守りしてました〜!」

「疲れただろ、仕事もあるだろうがゆっくり休みなさい」

「はい!!」

スミレにとつては亡き実母に等しい存在になった義母が使用人達を連れて出迎えてくれて荷物を使用人に渡す際にナイトのカードデッキと予備のファムのカードデッキ以外を渡してカードデッキは予め着く前にポケットに入れておいたのであった。

アンナも槍が使えるのだが何分、斧が使える仮面ライダーの種類が少ないので槍をメインに使うために義妹と同じナイトとファムを選んで持っているのである。

「姉さんは別に变身しなくても・・・」

「いいえ！ 妹を守るのは姉として当然の務めですわ!!」

「お嬢様!!」

「チエルシー、あなたはまだ免許が取れないでしょ。(。D。)ノ!!」

血が繋がらなくてもアンナにとつては大切な妹であるスマイレがアンデッドや魔物などと仮面ライダーとして戦っているのを黙って見過ごすわけがなく、完全にシスコンを患っているのだが、肝心のチエルシーがまだ運転免許が許される次元武偵特殊免許が授与されるのは満十五歳からなのでチエルシーはまだ十四歳なので仮面ライダーに変身はできるのだが、バイクなどを運転できないのである。

レアバードは運転できるが、流星に地球で空を飛行できるレアバードは警察が許さないのので異世界限定になってしまうのであった。

一方で

「ただいま!!」

「朱音!! お帰り」

「ごめん。遅くなつて」

「急に仕事が入つたつて。明が教えてくれたわよ」

「叔母さんが」

「疲れたでしょ」

・ 軽井沢の実家に無事に戻ってきた朱音は家族に出迎えられて仕事で遅れていたことを叔母の明が知らせてくれていたようで、怒られなくて済んだようでそのまま使用人の千代さんに荷物を渡して自室に向かったのであった。

「ただいま!!」

「おう!! 星奈」

「太陽お姉ちゃんと月華お姉ちゃんただいま!! ヴィヴィオは?」

「ああ、今日はストライクアーツの修行に行った」

「ヴィヴィオも頑張ってるんだ」

超神次元ゲームギョウ界のラストイシヨンの実家に戻ってきた星奈は義姉二人に出迎えられてたのであった。

一方で、

「ヘレナさん!! フィルフィは!!」

「あ、それだったら元の世界へ帰っちゃったけど?」

「ありがとうございます!!」

「待ちなさいよ!!」

「どうしたんだ?」

「龍姫さんと星龍さんがフィルフィさんの事を聞きに来たんですけど、聞いたら急いでフィルフィさんの世界へ行っちゃったんです」

「!!」

「一真!!」

「追かけましょう」

フィルフィを助けるため行き先である飛行島の宿屋に来たのだがフィルフィがいなかったのでヘレナに聞くとなんとフィルフィは敢て龍姫に嘘の行き先を伝えて元の世界へ帰って行ったのだとヘレナに聞かされて龍姫と星龍は急いでフィルフィとルクスの世界へ飛んだのであった。

そこにいつものジャケツト姿の剣崎一真がやって来てキャトラ達に事情を聞いた瞬間に何かに感づいたようで血相を変えて大急ぎで龍姫達を追ったのでアイリス達も付いて行くことになったのであった。

並行世界の I S 学園寮の夜

龍姫達がルクスとフィルフィの世界へ飛んでいる頃、並行世界の I S 学園の教室へ部屋の鍵を貰いに来た天夏と弥生は箒とは別れて先ほど叱咤した一夏と一緒に教室で待っていたのであった。

「良かったです。まだいてくれたんですね。これが寮の鍵です」

「ありがとうございます」

「あれ？ 確か家から」

「んなもん!! 織斑先生が独断決行したに決まってるだろ!! オレの背後で殺気まみれで突っ立ってるんだからな」

「チツ!! 貴様、教師をなんだと思ってる!!」

「織斑先生! 落ち着いて!!」

「行くよ!!」

待っているとこの世界の山田真耶が部屋の鍵を持ってやってきたので受け取ったのであった。

一夏はしばらくは自宅通学のことを思いだったが天夏が一夏に織斑千冬が独断決行

したことを背後に出席簿が変形するぐらいに持つていた織斑千冬に聞こえるように言い、織斑千冬は舌打ちをして、天夏を睨んだので山田真耶が羽交い絞めになっている間に天夏と弥生は教室を出て行ったのだが、いつの間にか一夏はいなかったので先に寮に行ったのであろうと寮に向かったのであった。

「1026か」

「ボクも同じだよ!!」

「(。D。)ノ!!」

「天夏ごめん!!」

寮に着いた天夏と弥生はお互いの部屋の鍵が同じだったのでどうやら同室にされたことに気付いたのも束の間に一夏が部屋のドアをノックしないで開けてしまったのであった。

弥生は縮地で一夏が開けた部屋に飛び込んだのであった。

その一夏を天夏が取り押さえていたのであった。

「落ち着いて(〽)〽!!」

「はあ、はあ・・・弥生か?」

「良かった、あ!!」

なんと弥生が飛び込んで入った部屋は箒の部屋で箒はシャワーを浴びて出てきたと

ころだったので、バスタオル一枚しか巻いていなかったので一糸纏わない状態同然だったので危うく一夏のラッキースケベを起すところだったのであった。

弥生が箒を取り押さえたのだがその状態が、

「済まないが放してくれないか？ アウツ!!」

「取り敢えず、服、着ないと!!」

「済まない」

羽交い絞めにした際に勢い余って箒の胸を鷲掴みにしていたので箒は喘ぎ声を出していたので弥生は急いで解放して服を着るように言ったのであった。

「弥生、すまない。弥生も胸が大きいことが気にならないのか？」

「気にならないかな？ そうだ!! これあげるよ」

「これは？ 下着ではないか（。口。）ノ!!」

「ボクが愛用してるのだよ!! それは新品だから!!」

「いいのか？ もらっても」

「うん」

箒は大きな胸にコンプレックスを持っていたのだが弥生は自分より一回り大きい胸であることに気づいて質問したのだが今の弥生の主人格「鳳沢美兎」のおかげで気にするはずがなく、弥生は自分が愛用しているあの可愛らしい猫をあしらった黒い下着をア

アイテムパックから未開封品を取り出して箒にあげたのであった。
弥生は箒との絆をまた紡いだのであった。

天夏の説教とアイズの経過と新王国での光景

弥生は並行世界の自分である、箒との絆を深めていた頃、天夏はこの世界の自分である一夏に説教をしていたのである。

「おまえは此処が女が大半を占める学校って言う認識はあるのか？」

「それがどうしたんだよ」

「女子と同室ってことになる可能性が高いってことを覚えて置け!!」

「なんで男同士にしてくれなかったんだ？」

「幼馴染だからだろ？（こっちのオレはどうやらあいつの抱えている闇に気づいてやれなかったのは一緒か、オレがあの時、助けられたか？ 違うな、あの出来事があつたら今のオレがいるんだしな）」

「終わった？」

天夏は掛けていた伊達眼鏡を外しているのだが一夏が鈍感なためと髪が腰まで伸ばしているので並行世界の自分と気づかれなかったのである。

大方説教し終わった所で弥生の声がノックと一緒に聞こえてきたので、

「いいぞ。じゃあな、また明日な」

「はあ〜」

「お疲れ。どつちが先に入る？」

「弥生からでいいよ。それにそつちはこつちよりうまくいつてるみたいだな」

「うん!!」

一夏を元の部屋へ帰して弥生が入って来るように言い、弥生が入って来てどちらが先にシャワーを使うのかと聞いていたので天夏は弥生が先に使うように言つて、弥生と箒の関係がいい方向に進んでいることを喜んでいたのである。

一方で、

「アイズさん。調子の方はどうです？」

「今のところは少し動かす際に軽く痛みがあるぐらい」

「あまり無理をすると入院期間が伸びますよ」

天界の病院で入院中のアイズはウダイオスの一閃で急所以外すべて骨折という大怪我をしたのだが、天界の医療技術の高さも相まって今は両手足のギプスが取れれば完治する状態まで回復したのだが、まだ動くと痺れが走るらしいが順調に回復に向かつているのだが怪我と治療の副作用なのか胸が大きくなったとアイズが述べていたのは言うまでもない。

視力は問題ないようで、看護師さんには評判がいいようであった。

一方で、

「どこ？ フィルフィ」

『マスター!! 大変です!! リーシャさんが』

「まさか!! そこにフィルフィが!!」

「行くう!!」

龍姫&星龍「セットアップ!」

アティスマータ新王国にフィルフィを探しにやってきた龍姫と星龍の目の前に広がったのは燃え盛る炎で焼かれている城下町と上空を飛び交う装甲機竜と魔物の群れだったのである。

フィルフィの嘘はこの戦いに友である龍姫達を巻き込ませないためだと察した龍姫と星龍だったが二人のインテリジェントデバイスにリーシャが捕まったことを知らされて脳裏に五年前のことが過ぎり二人はインテリジェントデバイスを掲げてバリアジャケットと神姫化して空を翔けるのであった。

紫龍と黒龍魔王

アティスマータ新王国にフィルフィを探しにやってきた龍姫と星龍の目に飛び込んできたのは燃え盛る炎と魔物の群れと戦う装甲機竜の部隊だったのである。

二人はインテリジェントデバイスに入った知らせ通りにリーシャを助けに向かったのである。

そう五年前の悲劇を繰り返さないために。

「この世界に来るのは初めてだけど、なんでこんなことに!!」

剣崎一真が龍姫と星龍の後を追ってアティスマータ新王国にやってきたのだが目の前に広がる光景に驚きながらも愛車のブルースペイダーに跨り龍姫と星龍が飛んで行ったであろう方角へ走らせたのである。

そう少年時代に燃え盛る炎に吞まれて死んでいった両親の様にはさせまいと。

「見つけた!!」

「おまえ!! 確か!!」

「すいません、お話をしたいのは山々なんです、安全な場所へお送りします。『こちら、テレサ。至急、要救助者の転送をします。よろしいですか?』」

『こちら、フラクシナス、転送許可承認！』

「ちよつと待て！！」

「これで、後はラグリードを逮捕するだけ」

「急ぐよ！！」

この戦いは仕組まれた物だと言うことは龍姫と星龍は気付いていたがそれを敢て逆手にとつて相手が油断する口実を与えるために救助者になっていたリーシャであろう小柄な金髪赤眼の少女と一緒に囚われていた少女もフラクシナスへ転送許可を得た後、転送して、フラクシナスを通じて天界から送られた資料に基づいてこの戦いを仕組んだ主犯格である「ラグリード・フォルス」、そう五年前の事件もこの男の仕業でその際にフィルフィに濡れ衣を着せようとしたが11歳の龍姫と星龍に阻止されてどういう経緯なのか時空管理局と闇取り引きをして罪を隠蔽したのであった。

つまり龍姫と星龍の因縁の相手でもある。

そして因縁の相手が待つ空へ二人はバリアジャケットで飛び立ったのであった。

「ぐおおおお！！」

「キリがない！！（セリス先輩さえいてくれたら！！）」

「天光満るところに我はあり、黄泉の門開く処に汝在り、出でよ！！ 神の雷！！ インディ

グネイション！！」

「え!!」

「ルクス。此処から先はわたし達が行く」

「だから（フィルフィ、お願い）」

「誰だかわからないけど、二人だけじゃ無茶だ!!」

先に戦闘を行っていたルクス達はあまりの反乱軍と魔物達の数に百戦錬磨のルクスでも悪戦苦闘を強いられており、龍姫と星龍は二人同時の上級魔術を詠唱し、一掃した後、ラグリードを逮捕するべくバリアジャケットで空を翔けたのである。

この時、龍姫と星龍は色違いの龍の仮面を被っているので顔を見られることがなかったのでルクスは二人と顔見知りであることに気付かなかったが、側にいたフィルフィは気が付いていたのであった。

「あはっははは（*ゝ*）!!」

「魔神剣」

「!! 誰だ!!」

「ラグリード、はしやぎすぎたな。そろそろ舞台から降りてくれもらいたいんだけど？」

「

龍姫&星龍「さあ。おまえの罪を数えろ!!」

「そんな貧弱な・・・」

「カチツ!!」

「え? 嘘だろ!! お願いだ!! そうだ金が欲しいならいくらほしい!? あああ!! 死にたくない!! 死にたくない!!」

「おまえはその言葉を今まで何度聞いて来た?」

「ラグリード、殺人並びにテロ行為で現行犯逮捕!」

ラグリードは高をくくって優越感に浸っていたのであった。

そこに龍姫と星龍は斬撃を放ってジト目で見て、ラグリードは二人の放つ氣に負けたのか命乞いをはじめ泣き出し、そして龍姫と星龍はラグリードを現行犯逮捕して送還したのであった。

一戦を終えて

アティスマータ新王国でテロを起こしたラグリードは喧嘩を売ってはいけない五年前に出会って痛めつけた少女であり神姫と化した龍姫と星龍によつて装甲機竜の装甲と武装を一刀両断されて命乞いをして大泣きで逮捕されて護送されたのであった。

「たーちゃん、せーちゃん」

「人違いよ」

「ううん、たーちゃんだよ」

「フィルフィ、この二人と知り合いなの？」

「ルー君の鈍感・・・」

「わかったよ。けど、ゲストが来てるみたいね。落ち着けるとこに行こうか？」

「うん」

「フィルフィ、七変化する人と知り合いつて着いてけないよ(・ω・)」

ラグリードを天界の治安部隊に引き渡した所でテュポーンを纏っているフィルフィが龍姫と星龍に近づいて来てて仇名で呼んだので、龍姫と星龍は人違いだと誤魔化そうとしましたが神姫化しようがフィルフィにはわかってしまいうらしく、観念して事情を話す

ことにしたので落ち着ける場所へ向かったのであった。

「劍崎さん」

「えーと、ダリナンダイツタイ？」

「たーちゃん、せーちゃん、元に戻ったら」

「フィルファイが流調に喋ってるのは珍しいな」

「すいませんでした!! 龍姫です!! こつちが星龍ですから!!」

「うん、わかった」

「取り敢えず、王立士官学院へ」

「劍崎さんも、そして、いつまでここで見てるんですか、橘さん!!」

「え？ ダダイバナサン（橘さん）（OWO）？」

龍姫と星龍は地上で避難活動していたブレイドジョーカーに変身していた劍崎一真を見つけて降り立ったのだが劍崎一真は初めて神姫化している龍姫と星龍を見るのでわからなかったたのでフィルファイが神姫化を解くように流調に言ったので幼馴染のルクスは呆然としていたのであった。

劍崎一真と合流した龍姫と星龍は元の姿に戻ったので王立士官学院へ向かうことになったが龍姫と星龍はとくに気づいていたようで路地で傍観していた仮面ライダーギヤレンこと橘朔也がいたことに驚いた劍崎一真だった。

「積もる話があるだろうが、一先ず、王立士官学院に行くんだろ？」

「はい」

橘朔也がなぜかいた理由はさて置き龍姫達は王立士官学院の理事長室へ向かったの
であつた。

一方で

「此処にはもう来ることはなかつたんだけどね。大丈夫、一刀？」

「久しぶりの破軍学園か、桐原は釈放されたらしいけど？」

「まあ、正当防衛が認められたらしいわ。ただし、IS部隊に対してだけど」

一刀と祐姫は仕事で生前通っていた破軍学園に仕事でその近くにやってきたのであ
る。

自分達が亡くなってから時間が経っているので一体どうなってるか調査するのが今
回の仕事なのであつた。

やるしかないならやってみるまでだ!!

一刀と祐姫は生前に通っていた破軍学園の調査に訪れていた頃、龍姫達はアティスマータ新王国の王立士官学院の理事長室に集まっていたのであった。

「は……じ……め」

「まあ、劍崎さん、あなたの事情は大方、橘さんと相川さんに聞いたよ」

「……」

「もう、すべて話していいだろう、フィルフィ」

「うん」

「どういうことだ!!」

王立士官学院の理事長でありフィルフィの実姉であるレリイ・アイングラムの居る理事長室に入った龍姫達はそこにもう一人の仮面ライダーカリスでありそしてジョーカーアンデッドである相川始と再会した劍崎一真は鬪争本能が暴走しないか心配だったが此処に居るメンバーの中には♠のカテゴリーK「コーカサスビートルアンデッド」を神姫化しないで一太刀で抹殺した鳴流神龍美の実妹で同じく実力は流星の絆の中でもトップクラスの鳴流神龍姫とその幼馴染の獅子神星龍が居るのだから。

だがレリイ・アイングラムの口から出た言葉は実妹のフィルファイについての話だったのであった。

それを聞いた剣崎一真は声を荒げるのであった。

「剣崎さん、橘さん、相川さん、実はフィルファイは五年前に死んでるんです」

「ウソダンドドコドーン？ ナニヲジョウコニズンドコドーン（嘘だそんなこと!! 何を証拠にそんなこと!!）フィルファイは生きてるじゃないか!! アンデッドだつていうか!!」

「剣崎さん。フィルファイはアンデッドに近い存在にされてしまったんです。五年前のクーデターで非道な帝国の奴らにユグドラシルの種子「宿り木（ラタトスク）」を埋め込まれてしまったんです!!」

「ボク達はそれを阻止しようと思いましたが、ですが」

「返り討ちにされたんだな。どうして五年前ってまだ11歳の子どもじゃないか!!」

「つまり、この事がこの世界で公になった場合はフィルファイを」

「封印または殺さないといけません」

龍姫は五年前のことを話すことにしたのであった。

アティスマータ新王国になる前のアーカディア帝国だった頃、龍姫達は非道な研究で捕まったフィルファイを助けるべく立ち向かったが返り討ちにされてユグドラシルの宿

り木を埋め込まれて幻獣種モドキにされたことを聞いた剣崎一真達は驚愕していたのであった。

相川は自身もジョーカーアンデッドであるため事の重大さに気が付いていたのであった。

そうフィルフィの事をこの世界で公になれば封印または殺すことになるかと龍姫が述べた瞬間、

「!!」

「フィルフィ!」

「オレ達も行くぞ!!」

「(やらせない!! 絶対に龍姫ちゃんには!!)」

突然角笛に耐性ができたとと言ってもまだ幻獣種化までは抑えきれてないのでフィルフィはそのまま理事長室を飛び出して闘技場の方角へ行ってしまったので龍姫は一瞬で愛刀を四刀一式腰に帯びて闘技場へ向かったのだ、それを追うように残りのメンバー全員が後を追ったのであった。

「た・・・ちゃ・・・ん」

「(もう。あれしかないか)」

「やめろ!! って離せ!! ユーリ!!」

「ありがとうございます。ユーリさん。それにみんな」

「悪いが龍姫の仕事の邪魔は、例えば仮面ライダーでもさせねえ。それに龍姫はとつくに結界を張っちゃった」

「チツ!!」

闘技場のバトルフィールドに到着した龍姫とフィルファイはお互い完全に覚悟を決めていた。

そして、フィルファイの両目の瞳孔は開き、龍姫は愛刀四振り一式の内の一振り絆龍を鞘から抜き八相の構えに構えた所で剣崎一真達が到着して変身しようとした瞬間にユーリが仲間と共に駆けつけてくれて剣崎一真達を止めてくれたのであった。

「ああつああ!!」

「今、楽にしてあげるから・・・」

「やめろく!!」

「ザシユツ!!」

「ウソだろ」

「ありがとう・・・たーちゃん」

「フィルファイの馬鹿あアア!!」

「おい!!」

そして、幻獣種となったフィルフィと神剣「ラグネル」を日本刀に鍛え直した「絆龍」を構えて同時に走り、そして龍姫は見事にフィルフィを絆龍で貫いてそのまま細工を施して気絶したのであった。

「なんで!! 止めたんだ!!」

「一真、龍姫はフィルフィを助けるのはこうするしかなかったのよ」

「待てよ!!」

「なんだこれは!!」

「!!」

劍崎一真はユーリを咎めていたがジユデイスが龍姫がフィルフィを助けるにはこうするしかなかったのだと述べて、そして足元に転送用の魔法陣が展開されてその場に入った全員がフラクシナスへ飛ばされたのであった。

それから数分後

「?」

「龍姫ちゃん・・・」

「え?」

「ルーちゃん (≡◇≡) !!」

「どうなってるんだ (。D。) ノ」

「龍姫が肉体を貸してくれた。大丈夫、龍姫とはいつでも入れ替わるから」
「いや。そこは驚くだろ」

フラクシナスで気が付いた龍姫だったが、ジョーカーアンデッドである二人は何かに気が付いたようだが、なんと龍姫は絆龍でフィルフィを貫いた際に自分の肉体にフィルフィの魂を取り込んでいたのであった。

早い話が肉体さえアティスマータ新王国に渡せばフィルフィを討伐対象から外す目的である時に咄嗟に魂を取り込んでいたのであった。

「世話が焼けるものね。新しい肉体の準備は出来てるから天界に行きなさい」

「は〜い!!」

「誰だ? オレは相川始」

「わたしはさっきの、正確には肉体の主人格の龍姫の母の剣心よ」

「え? ウソダドンドコドーン!」

仕事が早いのか剣心が私服のジーパンにカッターシャツと言うラフな格好でやって来て相川始が自己紹介をしたのだが、剣心が龍姫の実母だと名乗ると剣崎一真はいつものように叫んだのであった。

ファイルファイの今後

幻獣化したファイルファイを殺すと見せかけて魂を自分の肉体に取り込んで肉体を貸し与えた龍姫ファイルファイは天界の病院で用意されていた肉体に魂を移す作業に移っていたのであった。

フラクシナスで鳴流神兄妹の実母と対面した剣崎一真達仮面ライダーはきよとんとしていたのであった。

完全に見た目が十代半ばにしが見えないので、22歳の息子がいるとは思えないのだから仕方ないのだが、アンデッドである相川始は気が付いていたのか驚くことはなかったのであった。

「そうね、論より証拠ね。これでよろしいでしょうか？ この姿では天照大御神と申します」

「アマテラスって、なんですか？」

「剣崎。太陽の女神だ」

「剣崎にそんなことを言っても無理だ」

「解かりやすく言うと、天界の責任者ですね」

「これはどうも、自分はBOARDの研究員兼仮面ライダーギャレンの橘朔也です」

「オレはジョーカーアண்டレッドの相川始だ」

剣心は論より証拠と言ってその場でアマテラスの姿を見せたことで理解してもらったのであった。

お互いが自己紹介をして、

「橘さん・・・」

「つたく、しばらくは茶熊学園で暮らせ」

「はい」

「久しぶりにおまえに会えてよかったぞ、剣崎。お前が元気にいることは伝えておこう」

「まだ、おまえのブレイバックルは調整中だ」

「わかりました」

剣崎一真は久しぶりに一人足りないが共にアண்டレッドを封印して別れた仲間と再会し少しだけ話が出来てそして二人が元の世界へ戻って行ったのであった。

剣崎一真も男子寮に戻るようになったのである。

一方で、

「やつと、動ける。どう、新しい体は？」

「うん!! まさか魂が入った瞬間に胸が元の肉体の大きさに変化するなんて思ってたな

かった!!」

天界の病院で龍姫が取り込んだフィルフィの魂を別の肉体へ移す治療が終わったよう
うで、やっと龍姫は自分の体を動かせるのでほっとしていたのである。

一応神姫なので特異点であるのは神姫の共通体質である。

フィルフィの希望で用意されたクローン人間の肉体はなぜか茶髪のショートカット
で薄紫色の瞳と言う容姿で話し方も龍姫と同じく喜怒哀楽を表現しながら話せている
のであった。

「戸籍は、「小泉花陽」で作っていいの？」

「うん!! お姉ちゃんには悪いけど、戸籍上で幻獣化して討伐されたことにしてもら
うように手回ししてもらって置いた!!」

「なんだか、昔より明るくなったね、花陽」

「うん!!」

龍姫に日本国籍を作って欲しいと言ったので名前はある学園アニメのアイドルグ
ループのメンバーの名前を気にいったらしくそれで戸籍を作ることになったのであつ
た。

アティスマータ新王国には幻獣化して討伐されましたと言う書類上と魂が抜けた肉
体があるので要するに死んだことにしておくようにと実姉のレリィ・アイングラムに手

まわしておいたらしいのであった。

こうしてフィルフィ改め小泉花陽が誕生したのであった。

白狼龍VS蒼い雫

フィルフィは名を「小泉花陽」と改名し新しい体を手に入れて龍姫は無事に自分の体を取り戻してついでに入院しているアイズの見舞いに寄っていたのであった。

「アイズ。寝てるみたいだし帰ろうか」

「うん」

どうやら気持ちよさそうに寝ていたようで起こすのは悪いと思いつまみにして龍姫と花陽は病院を後にしたのであった。

それから一週間が過ぎたのであった。

「天夏と弥生のISスーツって」

「これ、所属先の支給品だけど」

予定通り現在天夏達はクラス代表決定戦の会場の第1アリーナで準備をしていたのであった。

今回は「ワイザードライバー」と「デイケイドライバー」が使えないが「装甲機竜」があるので問題ないのであった。

天夏は黒に白いラインが入った長袖に短パンと言う男性用で、弥生がお腹部分が白く

肩などは赤いボディスリットとアームスリットとレッグスリットの三つに分かれていて女性用の「モーシヨンスリット」を身に纏いピットに向かったのであった。

「天河君に朝宮さんのI Sスーツは変わってますね」

「会社が支給してるオリジナルだ」

「さて、揃ったところで織斑、おまえが一番最初にオルコットとやることになった。一次移行はなんとかしろ!!」

「ええ!! わかった!!」

「それじゃあまたね! セシリア」

「いい勝負をしましよ」

集合場所に到着したところで以前に織斑千冬が独断で倉持技研に作らせたI S「白式」

「逆読みにするとあの「白騎士」になる待機状態の腕輪型が運ばれてきて至急試合が行われることになったので残った天夏と弥生は用意された控室に向かったのであった。

「また、この世界のわたしのI Sが」

「簪ちゃん」

その様子を人目が付かない場所から見ていたのは天夏達の世界の更識姉妹で二人はお揃いの水色のパーカーに身を包んでそのまま転移したのであった。

一方で二夏とセシリアの勝負は一夏が「零落白夜」を使って自滅したという結果で幕が下りて、現在カタパルトに天夏と弥生がいたのであった。

「天夏。頑張つて」

「ああ」

「（こいつらのこの雰囲気は無糖コーヒーがいる）早くしろ」

「さてと、離れてくれ」

「貴様!! その日本刀は!!」

「これがオレの専用機だ!! 聖域の守護竜よ、今こそ我の元へ!! サンクチュアリガ―

ド!!」

「何です。（。D。）ノ!!」

「行くぜ!! サンクチュアリガード?」

『久しぶりに我を纏うのは』

弥生は天夏にエールを送つて天夏はそれに応えて日本刀型機攻殺剣「リアル」を呼び出して抜刀し詠唱して白い装甲機竜を身に纏つたのであった。

そしてカタパルトから勢いよく飛び立ったのである。

「それが、天夏さんの機体ですの。では約束通りに勝負と参りましょうか?」

『これがブルーティアーズか、実際に見ると遠距離型の様だな。天夏。民衆のご期待に

添える戦いをしろ』

「勿論だ!!」

フィールドにブルーティアーズを纏ったこの世界のスマレことセシリアと対面した天夏はブザーが鳴るまでフリートークをしながら試合開始まで待つてそして開始のブザーが鳴った瞬間、同時に動いたのであった。

「ビット兵器だな」

『これがブルーティアーズの武装か』

「ブルーティアーズの円舞曲で踊ってくださいますか?」

「そう言いたいのは山々なんだが、生憎、オレには先客がとつくにいるんでな!! 魔神剣

!!」

「剣だけでブルーティアーズをその場から動かないで!!」

「虎牙」

「ブルーティアーズはそれが全ては無いのですわ!!」

「破斬!!」

ブルーティアーズは牽制にレーザー光線を放ってきたがそれを日本刀「白狼」で切り裂き、そのままブルーティアーズから放たれたビット兵器を斬撃一発ですべて破壊して神速制御まがいの能力で距離を詰めて斬り上げと斬り下ろしの二段構えの「虎牙破斬」

を繰り出した所でブルーティアーズの唯一の実弾兵器のミサイルが放たれたが、

「ウソですわ（。口。）ノ!! インターセプター!」

「カキーン」

「折れてましたわ（。口。）ノ」

「オレはこれ以上するとまずいんだが」

『やはり、剣術を教えなければならんか?』

「参りましたわ」

「勝者? 天河天夏!」

現れたのは全く傷一つないサンクチュアリガードでそのまま斬り下ろしてきたのでセシリアは短刀「インターセプター」を呼び出したが完全に刀身が真っ二つにされて目の前にサンクチュアリガードの日本刀「白狼」の切先があったので天夏から降参するように申し訳なさそうに言われてしまったので、これにはセシリアは笑みを浮かべて棄権して天夏の勝利で終わったのであった。

「次は弥生の番だな」

「うん」

そして次の試合は織斑一夏VS朝宮弥生のカードになっていたので弥生も日本刀型機攻殻剣「ドラゴニック・オーバーロード」を呼び出していたのであった。

一週間前の

セシリアと天夏の勝負はもちろんのことながら天夏の完全勝利で片が付いたので、次は弥生の番が回ってきたのであった。

「朝宮さん。準備してくれますか？」

「はい!! 行くよ。オーバーロード」

『久しぶりの空を満喫したいものですね』

「朝宮? おまえもか!!」

「この世の全てを燃やす黙示録の炎!! 出でよドラゴニック・オーバーロード!!」

「なんですのこの炎は(。D。)ノ!!」

「これは幻だ。行くぞ」

弥生はいつものように紅色の日本刀型機攻殻剣「ドラゴニック・オーバーロード」を呼び出して織斑千冬が怒鳴ったが構わずいつもの詠唱をして炎の幻影を纏いながら弥生の背後に白い爪に刀を持った二足歩行の紅のドラゴンが現れて弥生と融合して装甲機竜に変化して弥生はカタパルトに乗ったのであった。

「行くのか? ボクとオーバーロードの空へ」

『はい。行きましよう!!』

「天夏さんもですけど、弥生さんもかなりの機体ですね」

「弥生の機体はドラゴニック・オーバーロード。あれでもノーマルフォームだ」

「あれでまだノーマルフォームなんですのΣ（。D。）!!」

カタパルトに乗って弥生は一夏が待つバトルフィールドに飛び立ったのであった。

セシリアは天夏のサンクチュアリガード同様に驚いていたので天夏が簡単に説明したのであった。

それがまだ初期状態であることを知ったセシリアは目が点になったのであった。

「弥生の機体なのか？（。D。）ノ？」

「この試合は得物はいらなかな？」

『得物ですか？ もうあるじゃないですか』

紅色の装甲機竜「ドラゴニック・オーバーロード」を纏った弥生と対面した一夏は目が点になっており、弥生はよからぬことを考えていたのであった。

そして試合開始のブザーが鳴ったのであった。

一方で

「珠雫。元気そうだったわね」

「そうだな。オレが兄だって気が付いているようだったけど」

一週間前に破軍学園に調査を依頼されていた一刀と祐姫はそこであの男と再会したのであった。

「久しぶりだね」

「誰だっけ？」

「人違いじゃないの？」

「いいのかな、黒鉄一輝!!」

「それは!!」

「やめるんだ!!」

理事長室へ向かう最中で I S 学園襲撃事件で逮捕して服役しているはずのやつれているが桐原静也が二人の目の前で立ちふさがったのであった。

一刀は人違いだと言うと、桐原静也は何とアーマードライダーに変身できるゲネシスドライバーとメロンエナジーロックシードを手にとっていたのであった。

そして、それを二人が忠告したのにも拘らず装着して、

「変身!!」

「天下御免!」

「これがボクの新たな姿だ!! 黒鉄一輝!!」

「ボクは黒鉄一輝じゃない、通りすがりの仮面ライダーだ!! 覚えて置いて!! 変身!!」

『KAMEN!! RIDE!! DDD デイケイド!!』

「わたしも付き合っただげるわ!!」

『Driver!! ON!! please! シャバドウビタッチヘンション!!』
「変身!!」

『シャバドウビタッチヘンション!! フレイム!! フリーズ!! ヒーヒーヒー!!』
「シヨータムよ!!」

下手すればインベスと言う魔物になるのに抵抗がない桐原静也は仮面ライダー斬月・真に変身してしまったのであった。

それに対抗するべく一刀がデイケイドライバーでダークデイケイドのカードをセットして仮面ライダーダークデイケイドに変身して、祐姫は右手の黒い指輪でウィザードライバーを呼び出して切り替えて独特の音楽が鳴り出して、左手の赤い水晶の指輪の金具を下ろしてバックルになっている手にかざして赤い魔法陣が現れてそれがゆつくりと祐姫を通り過ぎて、祐姫は仮面ライダーウィザードに変身したのであった。

桐原の嫉妬

一刀と祐姫は生前通っていた破軍学園の理事長に依頼された内容を聞きに来たのだが、その道中で桐原が黒鉄一輝時代に勝手に因縁づけられてしまったが後にテロ活動で逮捕されたのだがどういう経緯かわからないが問題なく破軍学園に通っていたのだが、完全に逆恨みに等しい感情を剥き出して、何処で手に入れてきたのかわからないゲネシストライバーにメロンエナジーロックシードをセットして仮面ライダー斬月・真に変身して、手には特異な得物である弓型武装「ソニックアロー」を装備して、一刀に戦えと言い出したのであった。

このままでは何をしでかすかわからないので、一刀はライドブツカーからダークデイクイドのカードを取り出して、「デイクイドライバー」にセットして起動して灰色と黒で装甲には「10」を意味する「十」と「X」の金色のデイクイドの仮面ライナーが入って、頭部は弥生が変身したデイクイドと同じ形だが複眼が水色の仮面ライダーダークデイクイドに変身して、祐姫はウィザードライバーでもう一人の指輪の魔法使いである仮面ライダーウィザードフレイムスタイルに変身したのであった。

「まさか、兄さん?」

「さあ、場所を移動しようか!!」

「わかった!!」

どうやら律儀に場所移動を提案してきたので一刀と祐姫はバトルフィールドに移動したのであった。

変身するまですべて見ていた一刀の元妹の珠雫はいてもあつてもいられず後を追いかけて行ったのであった。

「さあ!! キミ達の処刑タイムだ!!」

「さつきから何を言っているんだ?」

「君達を見てるとイラつくんだよ!!」

「はあ(・ω・)」。完全に逆恨みね。おまけに伐刀絶技まで使ってるし」

「さあ!! 死んでくれ!」

「弓には弓だ!!」

『KAMEN RIDE KKK KARISU!!』

『ドッドツ、ド・ド・ド・ドンドンツ、ドッドツドン!!』

移動したバトルフィールドの観客席はなぜか満員だったがそこは気にするほどではない。一刀と祐姫は桐原静也に質問したところ完全な嫉妬だったようで、そして伐刀絶技「狩人の森」を発動してステルス状態になった桐原静也を相手にすることになった。一刀

はライドブツカーから冷静に仮面ライダーカリスのカードを選択して「デイケイドライブ」にセットして「デイケイドカリス」に変身し、手に醒弓「カリスアロー」を呼び出して構えていたのであった。

祐姫は支援するために得意の火属性のフレイムスタイルから地属性のランドスタイルに切り替えたのであった。

すると、

『「デイフェンド!! プリーズ!」』

「チツ!! 次は」

「そこか!!」

「そこね!!」

桐原静也がステルスで放ってきた矢を、祐姫がランドスタイルに切り替えていた為、地面の土で壁を作って防いだのであった。

そしてウィザードソードガンを銃形態にした祐姫と当たり前のように呼び出した醒弓「カリスアロー」を構えていた一刀は、桐原静也が宣言してくる余裕すら与えずに二人同時に攻撃して桐原静也が落ちてきたのであった。

「まだやる?」

「ボクはああつああ!!」

「きゃゝ（＼／＼）!!」

降参するように説得したがもう既に力に溺れてしまった影響で周りが見えなくなっていたのであった。

『FINAL ATTACK RIDE!! KKK KARRISU!!』

「いい加減にしろ!!」

『ランド!! シューティングストライク!! ドツドツ、ド・ド・ド・ドンツドンツ、ドツドツドン!!』

「死にたくない!!」

「さてと、理事長室へ行かないと」

一刀はライドブツカーからカリスのアタックフォームのカードを^二デイクイドライブ^一バーにセットして、醒弓「カリスアロー」を構えて、風の矢を放ち、祐姫はウィザードソードガンを銃形態にしたままで、地属性の銃弾を放って桐原静也の変身を解除してゲネシスドライバーを破壊して理事長室へ向かったのであった。

「桐原。終わりだ!!」

「」

元妹と

一刀と裕姫は以前のIS学園襲撃事件で逮捕されて服役中であるはずの桐原静也に逆恨みされてまさかのライダーバトルに発展したが桐原が伐刀絶技「狩人の森」を使つて自分の得意な戦術に待ちこんだかに見えたが、一刀は冷静にダークデイケイドからカリスにカメンライドして、矢を放つてくる場所を見破つて、指輪の魔法使いに変身した裕姫との息の合ったコンビネーションショットで仮面ライダー斬月・真に変身していた桐原静也を変身解除に持ちこんで、これで依頼者の元へ向かうことにしたのであった。

「失礼します!!」

「来たか、依頼内容を説明するか、実は桐原静也が保釈されたんだ」

「それが……」

「その様子だと、また桐原静也が暴れまわったんだな」

「はい(・ω・) 返り討ちにしましたけど」

「つてことはもう依頼は終わったのか、後で振り込んでおくよ」

「まさか、依頼つて」

「ああ、桐原静也が変なもので武装して困っていたんだ。助かったよ。黒鉄、ヴァーミリ

オン」

依頼者である破軍学園理事長の神宮寺黒乃に会った二人は懐かしい思いをひた隠して依頼内容を聞くのとつくに片付けてしまったらしく、内容は桐原静也が仮面ライダー斬月・真に変身して学園内で大暴れしているというのでそれを止めて欲しいということだったので、返り討ちにしたことを話したのでいつの間にか依頼を完了していたのであった。

桐原静也がなぜ釈放されていた理由は後程天界治安本部に調べてもらうことになったが、神宮寺黒乃が一刀と裕姫のことを生前の名前で呼んだ。

「確かに、ボクは、「黒鉄一輝」でした、ですが、ボクには新しい家族がいますし「黒神一刀」という一人の男です」

「同じくステラ・ヴァーミリオンでした。ですが、わたしも新しい家族が出来ました、そして「神崎祐姫」です」

「そうか。黒神、神崎、また依頼するからな」

「はい。失礼しました」

二人は生前と決別したことを話して二人は理事長室を後にしたのであった。

「兄さん!!」

「確か、黒鉄珠雫だよな」

「兄さんなんですね!!」

「うわ!!」

「お願いします。わたしも仲間に入れてください!!」

「けど」

「それが命がけの戦いをするくらい承知です!!」

「いいじゃない。けど、無理はしちゃダメよ」

「あなたには言われたくないです!!」

「さあ!! 授業が始まっちゃうわよ!!」

帰路に着くことにしたので校門を出ようとしたところで、一刀が黒鉄一輝だった頃の妹の珠雫が走ってきたのであった。

そして今だに自分のことを兄と呼んでいる珠雫を巻き込ませるわけにはと突き放そうとしたが、先に言われてしまったので珠雫の次元武偵入りが決まってしまったのであった。

こうしてまた新しい仲間が増えたこと、そして、兄妹をやり直せるかもしれないという期待を抱きながらフラクシナスへ戻って行ったのであった。

これから一週間が経ったというのだ。

並行世界の模擬戦終了

珠雫が次元武偵りしてから一週間が過ぎて現在並行世界のI S学園でクラス代表を決める模擬戦真つ最中の弥生は白式を纏った一夏と試合を行っていたのであった。

「得物なら、そこにあるじゃない!!」

【流石。弥生様ですね】

「終わったな」

「織斑先生。確か篠ノ之流の武術を習ってませんでした?」

「そうだが?」

「天夏さんが言いたいののは、弥生さんが、というより見た方が早いですね」

「何が言いたい!! 貴様ら!!」

弥生は流石に腰に装備されている日本刀「千鳥」と「紅葉一文字」を使うまでもないと言い、微動だにせず、一夏が雪片式型を振り下ろしてきたので、実弟の勝利を確信した織斑千冬に天夏がそれを覆すことを言い、セシリアもそれに同意したのであった。

そして、バトルフィールドを見た瞬間、織斑千冬が予想していたことが嘘であることが判明するのであった。

「これ、借りるね（＞|＜）!!」

「後でお返しますから!!」

「返せ（。∩。）ノ!!」

「流石、弥生さんですね。あの雪片を恐れなくて逆に利用するとは、こういう時は、天晴ですね!!」

「虎牙破斬!!」

「ぎゃあつあΣ（。∩。）!!」

「さてと、これ返すね」

「では、失礼します」

弥生はいとも簡単に一夏が振り下ろしてきた雪片式型を持っている腕を掴んでそのまま勢いよく投げて奪い取って、白式のSEを0にしたのであった。

そして奪った雪片Ⅱ型を地面に突き刺して一夏を尻目に弥生はそのままピットに戻って行ったのであった。

「天河!! 朝宮!! 直ちに専用機をこちらに渡してもらおう!!」

「なるほど。織斑先生、こういうのもなんですけど、「変わらない現実に文句を言うだけで、何もしいないのは、卑怯者がすること」です」

「貴様!!」

「朝宮!! 謝れよ!!」

「くだらない、そんな話なら、兄妹でやってくれないかな!! ボク達は織斑家のわがまに付き合うほど、良い人じゃないから!! 行こうか?」

「そうですね」

「それと、オレと弥生の専用機が欲しければ上司が今から数秒後に来るので」

「アンタか? わが社の専用機を寄越せと言ったバカは?」

「貴様!!」

「ドゥン!!」

「織斑先生(。D。)ノ!!」

「アンタを暴行未遂で、務所送りにできるが?」

弥生が模擬戦を終えてピットに戻ってきて装甲機竜を解除すると織斑千冬が天夏と弥生の装甲機竜を寄越せと詰め寄ってきたが、アドリビトム組のセネル直伝の言葉を述べて、一夏は謝罪を求めたが、弥生はユーリ直伝の啖呵を切つて、セシリアも連れて天夏と一緒にピットを出て行ったのであった。

天夏は振り向かないで上司が数秒後に来ることを告げて出て行った瞬間、織斑千冬の背後に、従兄の龍翔が立っており、敢て、ヴェスタWSCの社員を装つて聞いたのだした瞬間、織斑千冬が出席簿で殴りかかって来たので、龍翔はそのまま出席簿を持っている

織斑千冬の右腕を掴んで体落として投げ飛ばしたのであった。
こうして、クラス代表を決める模擬戦は終わったのであった。

イーグルアンデッドと♠と天使

天夏達が模擬戦を終えた頃、剣崎一真は一人でとある島であるアンデッドと遭遇したのだ。

「ジョーカー。野郎じえねえか!!」

「ああ（困ったな。始か、天馬ちゃん達が居たら空が飛べるんだけど）。変身!!」

『Change!!』

「なんだ!! その姿は!! あはははは（≡▽≡）!!」

そう何を隠そうあの♠のカテゴリJ「イーグルアンデッド」で人間体は高原という男に擬態していたアンデッドを封印するべくジョーカーラウザーで変身したのだが、橘朔也と再会した際にブレイバックルはまだ調整中だと言われてしまったので、アブソバがないのである。

つまりジャックフォームに慣れないので飛行できないという不利な状況に置かれてしまったのである。

天馬が装備してくれた翼ユニットは展開の仕方が分からず、最初に封印した際は、ハートの4「FLOAT」を借りたおかげで封印したのだが、今回は完全にアウェイな

のであった。

ましてやスマイレやハルカ達のようにナイトのカードデッキを持つてゐるわけないのだ。

「どうした!! ジョーカー!」

「クソッ!!」

イーグルアンデッドはお得意の上空からの羽根手裏剣で攻撃してきたりと防戦一方に追い込まれてしまったのである。

だがそれも奪回するチャンスがやってきたのであった。

「おい!! 何弱いもん苛めしてんだく、く、く!! やるぞリンデ!!」

「ウエ（owo）? ダリナンダキミタチイッタイ（誰なんだ? キミ達は?）」

「ルカ。ダメね。付き合っただけ」

「女は黙ってろ!!」

なんと運がいいのか水色のロングヘアーの槍使いの女性の天使と守護天使またの名を「男気天使」こと清楚な外見とは裏腹に江戸っ子気質な一面を持つ薄紫色の髪の少女天使「ルカ」が助太刀にやってきたのであった。

二人の助太刀に呆気にとられてしまった剣崎一真は空を飛んでいる二人を見上げてみるとイーグルアンデッドは二人に喧嘩を売ってしまったのであった。

これが、悲劇の始まりとはイーグルアンデッドは思っただろう。

「てめえのようなゾンビ野郎が!!」

「聖戦の予行演習!!」

「ぎやあつアアあΣ（。㇏。）!!」

「お〜い!! 二人ともやりすぎだ（owo）!!（真耶もあんな攻撃をするのかな？ それにあの子、魔道士だよな？ 殴りすぎだよ!! それにあんなデカいで槍で串刺しは見れてたもんじゃないな）」

まさかイーグルアンデッドは天使二人に手も足も出ないという状況に逆に置かれるとは思ってなかったのか、ルカには素手でタコ殴りにされたりビームを喰らったりと、リンデと呼ばれた槍使いの女性天使は巨大な槍をイーグルアンデッドを目掛けて落とすしてそのまま槍で串刺しにしてしまい完全にイーグルアンデッドは見るも無残な姿にされてしまったのであった。

肝心のバツクルが木端微塵に粉碎されてしまったのだ。

完全にカツアゲでボコボコにされている人にしか見えなかった剣崎一真は天使を怒らすとひどい目に遭うと自覚したのであった。

「良し!! 怪我はないか?」

「うん」

「ごめんね。行きましようか？ わたしは天使のリンデ」

「同じくルカだ」

「剣崎一真だ」

「んじや、一真、またひどい目に遭ったら助けてやるからな!!」

「ガレアが一番まともに見えて来るな」

天使二人は剣崎一真と自己紹介を終えて、次の仕事へ向かったのであった。

こうして◆のカテゴリーJ「イーグルアンデッド」は天使二人によって返り討ちに会い、剣崎一真の手によって、弔われるようにブランクカードで封印されたのであった。

並行世界のクラス代表決定

剣崎一真は♦のカテゴリ「イーグルアンデッド」に悪戦苦闘を強いられていたが、思わぬ助太刀が天使二人と言う好条件だったが天使二人にあの上級アンデッドが手も足も出ないでバックルどころか、完全に焼け焦げた何かに変わり果てたイーグルアンデッドを無表情でブランクカードに封印したので、後はアブゾバーがあればジャックフォームにフォームチェンジできるのである。

剣崎一真はブルーペインダーに跨り帰路に着いたのであった。

その日の夜、

「クラス代表は、織斑一夏君に決まりました!!」

クラス一同「ウソダンドドコードン！（嘘だ!! そんなこと!!）」

「おまえ達。本当に良かったのか？」

「別にクラス代表になるために模擬戦したわけじゃないし」

「これでオレと弥生はいつも通りなんだけど」

「それにしても、お二人の機体はスゴイですね」

「ヴェスタWSCがカードゲームのユニットを参考に作ったISらしくてな（本当は異

世界の惑星クレイのドラゴンなんだが」

「それでISにはない機動力でしたの(∥。ω。ノ)」

「セシリア、暇な時でいいから、ボク達と武術の特訓しない？」

「いいのです!! 喜んでお引き受けします」

クラス代表を決める模擬戦は無事に終了したがヴェスタWSCに機体を要求した織斑千冬の処遇は後程理事長直々に決めるということになったらしく、現在はクラス代表に就任した一夏の式典が行われているのだが、天夏達以外のクラスメートがシヨックだったのか両膝を付いてそのまま両手を着いて落胆していたのであった。

そんな一行を尻目に天夏と弥生はこの世界のスミレであるセシリアと楽しい談笑をしていたのである。

「あ!!」

「どうなさったんです？」

「実は・・・」

「それはまずいですわ!! 幾らブリュンヒルデでも実の弟の専用機の為に日本候補生の専用機を凍結させてしまったのは!!」

「(ヴェスタWSCに使ってない、ISがあるからそれを渡した)」

「(あの時の人ですか?)」

「うん。天夏の従兄で、鳴流神龍翔さん。ヴェスタWSCの社員じゃないけどね」
「(なんとなくわかりますわ。あの人の実力を間近で見たのですから)」

弥生は麦茶を飲みながらあることを思い出したのだ。

現在式典で盛り上がっているのです。その事を利用して箒を巻き込んで思い出したことを話すことにしたのであった。

セシリアは白式を造らすために日本候補生の専用機製作を凍結させてまで実弟に専用機を用意させる行為を流石にそれは無いと言い切って、箒は黙って見ることにしたのであった。

天夏の口から所属しているヴェスタWSCに保管されているまだ搭乗者が決まっていない装甲機竜なのだが、ISとしてこの世界の日本候補生の専用機として渡したと告げたのであった。

セシリアと箒は、あの時、龍翔が居た理由がわかったのであった。
こうして一夏のクラス代表の式典が続いたのであった。

奈凰海（ナオミ）の中学生生活

並行世界の I S の世界で織斑一夏のクラス代表決定式が行われている頃、超神次元ゲイムギョウ界のリンボックスの神楽堂家で奈凰海は自分を引き取ってくれた両親と一緒に晩御飯を食べていたのであった。

「奈凰海。学校はどう？」

「ぼちぼちかな？ 龍音達が教えてくれるから、特に問題はないけど」

「良かった。クラスは龍音か春龍と同じなのか？」

「クラスは龍音と同じよ」

「それは良かった」

奈凰海は転入したクラスが龍音達と同じクラスだったので、すぐに龍音達と仲良くできたようで、学校には「両親が死んで血縁者が居ないので、神楽堂龍臣夫妻が引き取った」ということで話は通じていたので、教師達は承諾したのであった。

同い年の義理の叔母になる春龍は隣のクラスだが登下校はいつも世話を焼いてくれるお姉ちゃんならぬ叔母ちゃんらしく、奈凰海はどう接すればいいのか解らなかつたが、結局、春龍が叔母ちゃんていいと言い出したが、流星にそれは不味いと思い、呼び

捨てて呼ぶことにしたのであった。

というのも遡ること、一週間前の転入初日

「今日からこのクラスで一緒に勉強する、神楽堂奈凰海です。よろしくお願いいたします」

「神楽堂の席は、鳴流神の左だ。鳴流神か獅子神に解らないことは聞けばわかる」

「はい（え？ 大丈夫？ この教師？）」

「よろしく、ボクは鳴流神龍音。龍の音って書いて「リオン」だよ。よろしくね」

「よろしく……（この子が、父さんと母さんの親友の妹ね）」

転入初日は慣れない敬語でのあいさつを終えて担任教師に龍音の左が自分の席だと教えられて着席して龍音が自己紹介をしたのであった。

前もって龍音達のこととは聞いていたので一目で龍音だとわかったらしく無事に転入初日は終えて一週間が過ぎたのであった。

一方で

「足が動かせるようになったけど」

「両腕がかなり酷かったと言っていましたよ。後遺症が出なかったのが奇跡だって、龍美先生が言っていましたよ」

現在天界総合病院で入院中のアイズは順調に回復しているようで足首と両腕がギブ

スが巻かれているがそれ以外の箇所はすべてギプスが取れたがまだ全治には至っていないが看護師からは奇跡に近いと評されていたのであった。

ところ変わって並行世界のISの世界では、

「はい!! ありがとうございます」

新聞部がカメラで写真を撮りに来ていたのであった。

もちろん天夏と弥生の写真も撮ったのは言うまでもない。

「待つてなさいよ。一夏」

この世界の朱音こと風鈴音がポストンバック片手にIS学園にやってきたのであった。

パラレルワールドの実技訓練

並行世界の I S 学園で織斑一夏がクラス代表決定してから三日が経ったある日、天夏と弥生は現在織斑千冬監督で実技訓練を行っていたのであった。

「天河君と朝宮さんの I S スーツいいな〜」

「うん!! 可愛いしね」

クラスの女子達は天夏と弥生のモーションスリットを羨ましそうに見ていたのである。

I S スーツと違い弥生のような胸部装甲が大きい人が着ても目立たないように補正機能が備わっている。特に女子達が羨ましくなるのは無理がないのだ。

「さて、専用機持ちは前へ出ろ!!」

「はい」

「それでは、展開してみろ（あの二人はあれがあるから遅いからな）」

『天夏。省略する?』

『ああ。もちろんだ!!』

早速専用機を持つているメンバー全員が生徒一同の前で I S の展開の見本を行うこ

とになったのである。

織斑千冬は天夏と弥生が詠唱をしないと展開できないと踏んでいたが、念話で天夏と弥生は詠唱を省くことを決めたのであった。

「展開しろ!!」

「出だよ!! サンクチュアリガード R I D E !!」

「燃え盛れ!! ドラゴニック・オーバードロード!! R I D E !!」

「この世界で大勢の前で姿を見せるのは」

「初めてですね」

「喋ってる(〃。ω。ノ)」

「そして、いつの間にか展開し終わっている」

「わたくしより早くできるんですね(〃。ω。ノ)」

織斑千冬は天夏達に機体を展開するように指示を出したので、天夏と弥生は詠唱を省略して僅かコンマ一秒で装着し、サンクチュアリガードとオーバードロードがしゃべったのでクラスメイトが呆然としていたのであった。

セシリアはそれから五秒後に展開し終えて、未だに一夏が展開できなかったのだが遅れること約10秒で展開できたが織斑千冬に注意されていたのであった。

「天夏さん、弥生さん、わざわざ、わたくしに合わせてくれてるんですか?」

「普通に飛行すると、セシリアが持たないから」

「そういうことで、授業にならん」

「待ってくれ」

今は飛行演習を行っているが天夏と弥生は装甲機竜と言うこともあつてIS以上に速度が出るので取り敢えずセシリアに合わすことにして、そのままプライベートチャンネルで優雅に会話を楽しんでいたのであつた。

「そこから地上100cmだ!!」

「では、お先ですわ!!」

「弥生。行くぜ!!」

「うん!!」

急降下をしてから停止と言う指示が出たのでセシリアが先に行いそれに続くように

天夏と弥生は続いたのであつた。

天夏と弥生とセシリアは問題なくピッタリ地上から100cmで停止していたが、

「ドゥン!!」

「織斑!」

一夏が地面に激突してクレーターを造つたのであつた。

「各自武装展開してみろ!!」

「これでいいかな?」

「オレはこれで」

今度は武装の出し入れだったので、天夏は「爪牙」を、弥生が弓「天鹿兎弓」を取り出したのであった。

セシリアはいつものライフルを取り出したのだ。

「オルコット!! 次は近接武器を出してみろ」

「(そういえば、天夏の模擬戦の時に破壊されたんじゃ?)」

「ハイ!!」

次も別武装の展開になったがセシリアは以前、天夏との模擬戦で近接武器短刀「インターセプター」が折れたので思わず「折れたツ!」と叫んでしまったので一夏が覚えていたのだが、

「なんだ!! その刀は!!」

「オレが模擬戦で折ったインターセプターの詫びでヴェスタWSCからセシリアに贈呈された刀です」

「これで構いませんか?」

「良いだろ・・・」

なんと天夏と弥生が装備している機竜専用の日本刀をISでも使えるように改良し

た鞘付きのシミレの装甲機竜「トランスコア」の日本刀「海潮」を摸造した物である青い日本刀をいとも簡単に取り出して見せたのであった。

流石の織斑千冬も観念してそのまま授業を終えたのであった。

変幻自在の花陽!

天夏と弥生が並行世界の I S 学園で授業を受けている間もスミレがチーム「無限の世界（インフィニットワールド）」を纏めながら次元武偵の依頼を片付けていたのであった。

「この世界での仕事はアンデッド討伐と」

スミレは単独で剣崎一真の世界へアンデッドの調査に赴いていたのであった。

愛車のスクーター型のバイクに跨りしっかりと顎紐をして青いフルフェイスを被って取り敢えず街へ向かうことになったのであった。

一方で

「これ、わたしがもらっていいんですか?」

「ああ。それは花陽に合わせて作ったんだ」

「ありがとうございます。それしても、恋龍さんて助産師ですよね?」

「確かに助産師を含む医療の資格は持っているけど、そっちは副業のようなもんだね」

「なるほど。わかりました!! それじゃあ!」

『マスター。確かにそうですね』

「さて、戻ろうか」

超神次元ゲームギョウ界のリーンボックスにあるヴェスタWSCの支部の開発室で恋龍はフィルフィこと花陽にある物を渡したのであった。

窪みが三つあり、左から順に対応するコアメダルを入れることで変身するあのオーズドライバーを完成させてしまったのであった。

それは欲望の塊から形成されていたメダルの為に変身者が暴走する代物なのだが、それをゲームギョウ界の技術でコアメダルを作り上げてしまったので、変身者が暴走する可能性を低めたのであった。

それを花陽に恋龍がタカメダルを含む合計23枚をセットにして渡したのであった。こうしてまた新たなライダーが誕生したのであった。

「あれ？なんで23枚？ それもシャチメダルがない」

花陽は恋龍がセットでくれたコアメダルの目録を空中にスクリーンを出して見ているのだがなぜかシャチウタコンボに必要な「シャチメダル」が無かったのであった。

どうやら恋龍はシャチメダルを敢て作らなかつたようで、花陽は別にシャチウタコンボに頼らなくても別のコンボで変身すればいいのだから。

「さてと、わたしもお仕事行かないと!!」

『マスター！ アンデッドの反応を捕捉しました!! 場所は此処から東に2kmです』

「ありがとう。さてと、出発!!」

花陽は早速武偵所へ仕事を受けに向かうためにライドベンダーと言うバイクを呼び出して、紫色のフルフェイスをしつかりと装着して、発進しようとした矢先に、ペンダント型のインテリジェントデバイス「ルー」からアンデッドが現れたと聞かされて、場所が近かったのでそのままライドベンダーを走らせて向かうことになったのであった。

どうやら痺れを切らした統制者の仕業らしく、ジョーカーが生き残っても超神次元ゲームギョウ界が影響がないことを知つたらしく、超神次元ゲームギョウ界を巻き込んだのバトルファイトを開催し始めたと言うのであった。

ジョーカーは元からいるので問題ないがこのままでは被害が出るので現在動ける花陽は単独で現場のガベイン草原に到着したのであった。

「あれがアンデッド」

「ヒヒーン!!」

「それじゃあ!! 行くよ!! 変身!!」

『タカ!! トラ!! バッタ!! タトバタ・ト・バッツ!!!!!!』

花陽はガベイン草原で得物を探していた◆のカテゴリ9「ゼブラアンデッド」を見つけて、恋龍からもらったばかりのオーズドライバーを腰に当てると自動的にオースキャナーとベルトが巻かれて、左から、タカメダル・トラメダル・バッタメダルの順に

入れて傾けて腰に装着されていた円盤型のオースキャナーを持って左腕を上にして、オーズドライバーを傾けて、左から順にオースキャナーでスキヤニングして、独特の歌が鳴り、花陽の周りに上から順に赤・黄・緑のオーラが周りそして花陽は仮面ライダーオーズに変身したのであった。

セイグリッド姉妹の変身

仮面ライダーオーズに変身した花陽はいきなりの初戦が◆のカテゴリ9「ゼブラアンデッド」という速さを武器に相手をかく乱するというずる賢い能力を持っているアンデッドに挑むことになったのであった。

「ヒヒッソーン!!!」

「よし!!! トラクローで!!!」

「ヒヒッソーン!!!」

「まだまだ!!! お次はこれで!!!」

流石、元アティスマータ新王国で戦闘部隊に入っていた経験が役に立ったようで、本コンボの「タトバコンボ」で◆のカテゴリ9「ゼブラアンデッド」を追い詰めたのである。

花陽は別のコンボを試すため、トラメダルからカマキリメダルと交換して、トラクローから両腕にカマキリソードと言う逆手持ちにできる武器が装備されてそのまま、

「龍姫直伝!!! 虎牙破斬!!!」

「ヒヒッソーン!!!」

「そろそろ決めるよ!!」

龍姫から教わったらしい剣技で攻めていきゼブラアンデッドに逃走の隙さえも与えない猛攻を行い、そして、オースキャナーで再スキャンして、基本形態のタトバコンボに戻って、スキャンングチャージをしたのであった。

スキャンングチャージをした瞬間、バツタレツグが変形して、そのまま飛びあがって、喰らえ!! セイヤ!!」

「ヒヒーン……!!」

「よっしゃ!! どうしよう、ブランクカードないけど」

『マスター。別にあの状態ですから、封印しなくてもいいですよ』

「わかった。ルーちゃん、待っててね!!」

剣崎一真や天夏達の片足の跳び蹴りとは違い完全に両足を揃えてのドロップキック型のライダーキック「タトバキック」を決め、見事ゼブラアンデッドに止めを刺したのであった。

花陽は変身を解いたがブランクカードを持ってないので封印は出来ないが倒してしまったので問題なかったのだ、花陽はルクスの元へ帰って行ったのであった。

『スマイレ!! アンデッドの反応を見つけました!!』

「わかったわ!!」

劍崎一真の世界へ来ていたスマイレもアンデッドの反応をトランススコアが発見して早速そこへ向かったのであった。

「堅そうね」

「間に合いましたわ!!」

「姉さん!!」

「妹ばかり活躍するのは姉として羨ましいのです!! ですからここは姉妹で戦いましょ」

そこは以前、ピーコックアンデッドに操られていた研究員がいた研究所跡で、そこにいたアンデッドは♠のカテゴリ7「トリロバイドアンデッド」というまさかの三葉虫のアンデッドに遭遇したスマイレはバイクのミラーにナイトのカードデッキを映して腰にVバックルが巻かれたのを確認して、いつもの変身ポーズを取ろうとしたところで、義姉のアンナがやってきたので変身のタイミングを失ってしまったが、気を取り直して、

アンナ&スマイレ「変身!!」

「グルルル〜!!」

「さあ。片付けて、ハカランダにお茶にしましょう」

セイグリッド姉妹は揃ってナイトのカードデッキを選んで変身ポーズを取ってV

た。バックルにナイトのカードデッキを入れて、仮面ライダーナイトに変身したのであつた。

飛翔斬を喰らった三葉虫のアンデッド

◆のカテゴリJ「ピーコックアンデッド」に操られていた研究員がいた研究所跡で、まさかの三葉虫のアンデッド◆のカテゴリ7「トリロバイドアンデッド」が一体で待ち構えていたので、スマレはバイクのミラーにナイトのカードデッキを映して腰に銀色のVバックルが巻かれたのを確認して、トリロバイドアンデッドを挑発するように右腕を伸ばしながら人差し指で指しながらVバックルにナイトのカードデッキを入れようとしたところで、義姉であるアンナが転移してきたので、入れ損ねたが、姉妹で同時変身したのであった。

「姉さん、戦い方はわかってるの?」

「大丈夫ですわ!!」

☒『SWORD VENT!!』☒

「変身!!」

『Change!!』

「ジョーカー!!」

「相川さん!!」

基本生身での戦闘が多い姉を心配しているスミレにアンナは慣れない仮面ライダーナイトの姿でも持ち前の戦闘センスを生かして、バックルのカードデッキからSWORD VENTのカードをバイザーに読み込んでウィングランサーを呼び寄せたのであった。

背後から変身と男性の声が聞こえて来て、二人の前に現れたのは黒と銀の装甲に赤いハートの複眼をしたカマキリのモチーフの仮面ライダーカリスが現れたのであった。

トリロバイドアンデッドが仮面ライダーカリスの事をジョーカーと呼んだので二人は仮面ライダーカリスが相川始だとわかったのでそのまま共闘することになったのであった。

「オレも協力させてもらおうよ。仮面ライダーとして」

「ご協力感謝します」

「お手並み拝見とさせていただきますわ!!」

☒『GUARD VENT』☒

「君達のカードは違うのか？」

「ジョーカーああつああ!!」

「戦いの最中だったな？」

どうやらジョーカーの能力で察知した場所に偶然にセイグリッド姉妹に遭遇したよ

うで、二人に協力することにしたのだが、二人が使うカードがラウズカードではないことに気付いたのであった。

二人はバイザーにGUARD VENTのカードを読み取って漆黒のマントが装着されたのであった。

「ジョーカー!」

「しつこい殿方はお呼びではないのですの!! ブリリアントアンナビーム!!」

「姉さん!! この世界でそれは(∥。ω。ノ!!)」

「話は後に聞こう(〈∴∴V∴∴〉)」

「相川さん!!」

「睦月か!!」

アンナがトリロバイドアンデッドに問答無用の戦神逆鱗ことブリリアントアンナビームと言うものをウイングランサーだけでやってしまったので、流石のスマイレも呆れるしかなく、そこに仮面ライダーレンゲルの変身者の上城睦月がやってきたのだが、

『FINAL VENT』

「え?」

スマイレは呆れながらも翼召剣「ダークバイザー」に蝙蝠の絵柄のカードを読み取らせてそのままトリロバイドアンデッドに向かって走って行ったと思っただけなら飛びあがって

マントがドリル状に変形し、ウイングランサーを構えてそのままトリロバイドアンデツド目掛けて特攻していったのであった。

「ドゥーン!!」

「えええええΣ(〃。ω。ノ!! アンデツドを殺した!!」

「大丈夫です。まだ封印できますから」

「ああ」

「姉に譲る気はないんですの?」

「ないです!!」

「取り敢えず、変身解いてくれるかな?」

飛翔斬を喰らった♠のカテゴリ7「トリロバイドアンデツド」は上半身が木端微塵にされてしまったのだが、まだ下半身があったので仮面ライダーカリスがブランクカードを放って封印したのであった。

上城睦月は二人に変身を解除するように言ったので、セイグリッド姉妹はVバックルのナイトのカードデッキを抜いて変身を解除したのであった。

「えくと、my name is mutuki kamijyou」

「あゝ日本語で構いませんので」

「あ、ごめん」

「取り敢えず、落ち着くところで話そう」

上城睦月はまさか仮面ライダーナイトに変身していたのが戸籍上だがイギリス人だったので、取り敢えず、英語で自己紹介をしようとしたが、スミレが日本語で話しかけてきたので、ほっとして、相川始の提案で一行は相川始の居候先の喫茶店「JACA RANDA」に向かうことになったのであった。

アンナは一応動きやすいジーパンにピンクのジャケットなので、スミレのバイクに相乗りすることになったのであった。

喫茶店に集いし仮面ライダー達

◆のカテゴリ7「トリロバイドアンデッド」を飛翔斬で倒してしまつたがなんとか封印はできたので、セイグリッド姉妹は喫茶店「JACARANDA」にやってきたのであつた。

「相川！ 睦月!!」

「橘、来てたのか？ それにバイパーまで」

「お帰りなさい、始さん。えくと？」

「ごめんなさい。日本語で構わないわよ」

「すいません。ご注文は？」

喫茶店「JACARANDA」の看板娘である栗原天音の出迎えられたが困つた顔でされたのでここでもスマレは丁寧に日本語で構わないと言うと、日本語で紅茶を二人分注文したのであつた。

そこにちょうど仮面ライダーギャレン変身者の一人の橘朔也と、仮面ライダー王蛇の変身者のバイパーも来ていたのであつた。

「改めて、オレは相川始。さっきの仮面ライダーカリスの変身者だ。よろしく」

「オレは仮面ライダーレンゲルの変身者の上城睦月。よろしくね」

「BOARDの研究員兼仮面ライダーギャレンの変身者の橘朔也だ」

「わたしはスマイレ・セイグリッドです。仮面ライダーナイト、そして、仮面ライダーファムの変身者です」

「わたくしはスマイレの姉の、アンナ・セイグリッドです。同じく仮面ライダーナイト、仮面ライダーファムの変身者です。お見知りおきよ」

此処に仮面ライダーの変身者が6人も揃ったのであった。

「君達姉妹が仮面ライダーになった理由は、朱音ちゃん達が話してくれた」

「それと、オレが話した」

「そうですか」

「気になってるのはそれはどう言う仕組みで変身できるのかだ」

「始、前に説明したんだが？」

「確か、自分が映る鏡やガラスなどに移すと自動的にそのデッキの持っている人物の腰回りに合ったベルトが巻かれて、バックルの部分にそのカードデッキを入れて変身する。合ってるか？」

「はい。それで合ってます。それとこれには融合係数は関係ありません。これは一昔「神崎士郎」が一人で作ったんです。合計で13種類カードデッキを作り上げて、そして

最後の一人になるまで戦わせるライダーバトルに使用された物で、それをモデルにヴェスタWSCが作ったライダーシステムの一つです」

橘朔也は以前に朱音達から仮面ライダーになった経緯を聞かされたのとISではアソッドなどと戦うのは無理と言うことで所属先に懇願して手に入れたことを理解したので

あつた。

二人が先ほど使ったのは融合係数を必要としない代物で最初に使われたのは何とライダーバトルと言う仮面ライダー同士の殺し合いで考案したのは、神崎士郎という男だと言ひ、それをヴェスタWSCが契約ミラーモンスターの代わりに人工AIのミラーモンスターを使役する形になるとスマイレが説明したのであつた。

アンナは蒼嵐波竜「テトラバースト」が、スマイレは蒼翔竜「トランスコア」が闇の翼「ダークウイング」と閃光の翼「ブランウイング」の代わりに担っているの、エサがいらないのである。

「なんだと!!」

「それがあつたら、劍崎さんは!!」

「例え二人のライダーシステムがあつても劍崎は迷わずプレイバツクルを選ぶ」

相川始はそれを聞いて驚き、上城睦月はナイトのカードデッキがあれば劍崎一真が

ジョーカーアンデッドにならなくて済んだと言ったが、橘朔也からそれでもプレイバックルを選ぶと言ったのであった。

橘朔也は二人のライダーシステムがあつた時あつたら自分は最愛の人を死なずに済んだと後悔しているのだから。

ライダーとソウルボードとお弁当

喫茶店「JACARANDA」にてセイグリッド姉妹は自分達が使っているライダーシステムが元は神崎士郎が創り出したバトルロワイヤルに使われていた物を改造して使っている適合者じゃなくても使えるが、次元武偵の資格を要するのだと説明して先輩ライダー達は驚いたのであった。

「なるほど。アンデッドを倒せたのはそういうことか。それとアンナちゃんだけ、カードを使わずに技を使ったのは、もしかして、これかい？」

「相川さん、それなんですか？」

「ソウルボードと申しまして、わたくし達姉妹はこの世界の住人ではないのは、お分かりのはずと思つてよろしいですか？」

「ああ。大丈夫だ」

「ソウルボードはルーンと呼ばれる特殊な石を嵌めることで能力を得ることが出来ます、そして、制限を解除するには協力者が必要です」

「なるほど。仲間と一緒に戦えばこのソウルボードの上限は解除できるのか、ありがとう」

「いえ、当然の事をしたままでですので、お気になさらないでください」

アンデッドを封印ではなく倒せたのは別のライダーシステムという理由で結論付けてアンナが問答無用にウイングランサーからビームを放ったことを思い出したので、相川始はバイパーから教わったソウルボードと言う物呼び出したのであった。

バイパーとスマレは驚く様子はないが橘朔也と上城睦月は驚いたのである。

アンナがそれが自分達がカードなしで技を使うための物だと説明し、ルーンと言う全6色の特殊な石を嵌めるとカードなしでも技を放つことが出来ると答えたのであった。

「あと、武醒魔導器という物も同じことが出来るからな。詳しいことはリタが暇な時にも連れて来る」

「リタって人物が魔導器の専門家なのか？」

「はい」

「では、ご協力出来る限りこちらも協力させていただきます」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます!! ねえ、皆さん、あの人達も仮面ライダーなの？」

「ああ、その通りだよ」

「睦月。じつとしてられないな」

「そうですね。オレと同じく高校生で仮面ライダーに、それも女の子が、オレだって負け

ていられませんか!!」

パイパーが武醒魔導器のことも明かして今度リタを連れて来ると約束してセイグリッド姉妹と一緒に会計を済ませて出来る限りは協力すると言って別れたのであった。

上城睦月は後輩がまさかの高校生にして女の子と言うこともあつて先輩として頑張ることを決意したのであった。

一方で

「天夏さん達のおかげで料理が出来るようになって良かったですわ」

「まさか、画像しか見ないで料理する人は初めてだよ。慣れるまでは誰かに手伝ってもらった方がいいよ」

「そうですね。最近織斑先生が絡んできませんね」

「龍翔兄がこの前の一件で理事長にお灸を据えられたらしい」

「なるほど、それで大人しいのか」

並行世界でお昼休憩を一夏がグランド整備しているので天夏以外女子と言うメンバーで屋外庭園のベンチで弁当を持ち寄って食べていたのであった。

セシリアが料理というより下手するとアーチエに匹敵する物を生み出してしまうので弥生と箒が簡単な料理から手解きをすることになって今では幕の内弁当レベルの料理が出来るようになったのであった。

並行世界の鈴（朱音）

並行世界の I S 学園の屋外庭園のベンチでお昼を楽しんだ翌日、天夏達はいつものように教室で HR が始まるのを待っていたのであった。

「何だろう、なんか胸騒ぎがするんだけど？」

「弥生もか？」

「何事も起きなければいいのだが（・ω・）」

一夏を覗くメンバーは何か起きそうで不安を感じていたのであった。

その不安が嘘でなかったことを天夏達は驚くのである。

「その情報、間違ってるわよ!!」

「鈴か!!」

『この世界の朱音は小柄なんだ』

『相変わらず、おてんばぶりだな』

『そろそろ、あれが来るな』

そうあの天夏と弥生の世界では成長した姿で仮面ライダー龍騎とリュウガの変身者になっている朱音にして今いる世界では生前の小柄で髪型は一緒に性格もお転婆と言

う風鈴音が教室の引き戸を開けてやってきたのであった。

箒は天夏と弥生の助言などで一夏から脱却したようで、今では天夏と弥生のサポート的存在になっているのである。

そこにセシリアが介入したと言うのが現状だ。

どうやらこの世界でも天夏と朱音同様に幼馴染らしくしばらく様子を見ながらある準備をして、

「天河!!」

「織斑先生。いい加減にしたらどうですか」

「ありがとう。逃げるんじゃないわよ!!」

「チツ!!」

鈴目掛けて振り下ろされた出席簿を持っている手の甲目掛けて、咄嗟にポケットに入っていたトレーディングカードを手裏剣のように放ち織斑千冬の出席簿は床に落ちたのであった。

鈴は天夏にお礼を言っつて、自分の教室へ戻って行ったのであった。

そしてHRが始まったのであった。

「つまり、天夏と弥生ちゃんが行っている世界に行つてほしいと言うことか?」

「すいません。急に付き添い頼んでしまって。山田先生のこともあるのに」

「別に気にしなくていいよ。（真耶の事まで謝らせてしまった）」

《なぎさ。わたしでは目立つだろ。どのベルトで変身するのだ？》

「ウエ？ なぎさちゃん、君は何本ベルトを持つてるの？」

「ドライブドライバーとファイズギアとカイザギアとデルタギアとサイガギアとオーガギアで、合計で六本です。といいながらカイザは龍美さんが持つてますけど」

「二人でそれだけのライダーシステムを使いこなすなんて思っただけだよ」

一方で、なぎさはどうやら今度ペアを組むことになったのは、先輩ライダーである剣崎一真で星奈達は別件らしく、後で龍美が同行することになっているのであった。

剣崎一真はベルトさんことクリム・スタインベルトはなぎさにドライブドライバーを巻いたままでは潜入しづらいだろうと言うので、それを聞いた剣崎一真はまさか複数のライダーシステムを使いこなしていることに驚いたのであった。

それもそのはずでブレイド以外のライダーに変身したことがない剣崎一真には驚くなど言うのがむりな話なのだ。

こうしてなぎさは天夏と弥生がいるIS学園へ乗り込む準備を行うのであった。

なぎさの準備と龍姫と龍美の仕事

天夏と弥生がこつちの世界での朱音である鳳鈴音に出会って数分が経ったのであった。

「ボクは朝宮弥生。よろしくね（朱音が小柄だった頃って確か険悪だったしね）」

「よろしく、アタシの事は鈴でいいわよ」

「オレは一夏と同じく男性操縦者の天河天夏だ」

「一夏に似てるわね」

「よく言われるがなんもつながりもない赤の他人だ（並行世界の一夏なんだがな）」

今はお昼ご飯と一緒に食堂で鈴を誘って食べていたようで、天夏と弥生が一応自己紹介をして今いる世界の朱音こと鈴と交流を深めていたのであった。

天夏と弥生の朱音の生前の姿を思いだしながら和気藹々としたお昼となったのであった。

一方で、

「これでよし!!」

【ベルトよ。今回は妾達の出番はないようじゃ】

《たまにはいいじゃないか》

なぎさは現在超神次元ゲームギョウ界ルウィーの実家兼自宅のガレージで仕事に使うベルトを品定めしていたのであった。

選んだのはデルタギアと呼ばれるライダーベルトで変身する際に右腰の無線機のようなデルタフォンに直接「変身」と言って戻すとフォトンストリームが変身者を守るように形成されて変身完了する代物で一応ファイズギアもアイテムパックに収納しておくことになったので合計でベルト数は二本で依頼を行うことになったのであった。

なぎさはベルトの確認を終えて、自分の部屋に戻って行ったのであった。

今は龍臣とはやては戻ってきているので家族団欒を楽しむのであった。

もう一人の自分ことラウラ・ボーデイツヒとして生きた過去を受け入れて、天夏と弥生がいる世界にはもう一人の自分がいるはずだと。

一方その頃、

「お姉ちゃんと一緒に仕事するのって何か久しぶりだね」

「確かに言われてみれば、いつもはユーリさん達もいたしね」

龍姫は姉の龍美と二人つきりである世界へ武偵の仕事へ赴いていたのであった。久しぶりの実妹と二人つきりなので龍美は喜んでいたのであった。

そこに、

「折角の姉妹水入らずだったのに!!」

「仕方ないよ、お仕事で来てるんだし!!」

この世界の魔物として認識されている様々な形の「ノイズ」と呼ばれる異形が二人がいる場所から近い場所に現れたと言うので、龍美は悪態をついていたが、龍姫は切り替えてインテリジェントデバイスを持って

「セットアップ!」

「さっさと終わらせて楽しむぞ」

「お姉ちゃん、行くよ!!」

二人は神姫化してお揃いの紫の龍の兜を被って素顔を隠した状態でノイズが出現した現場に向かったのであった。

この時から運命の歯車が動いていたことに龍姫と龍美は知る由もなかったのであった。

一方で更識姉妹はと言うと、

「お姉ちゃん、頑張ったね」

「簪ちゃん(〽)(〽)!!」

「かんちゃん!! どっか行こうよ!!」

楯無の生徒会の仕事に付き添っていたようで、無事に終わったらしく、のほほんさん

と一緒に出掛けることになったのであった。

ノイズの前に現れたし仮面の戦士

龍姫と龍美は仕事で訪れた世界でノイズと言う異形と戦うことになったのであった。

龍姫は一応仮面ライダーカイザなどに変身可能だが、龍姫自身がバリアジャケットを気にいつているので、今はなぎさから調整のために龍美が預かっているのである。

「立花!!」

「翼さん!!」

「!!」

鳴流神姉妹がノイズ出現地点に向かっている頃、先に戦闘を行っている一人は水色の髪をポニーテールに束ねた日本刀を振るい、立花と呼ばれたクリームブロンドの白と橙の装甲の徒手空拳の少女と、銀髪の二丁のボウガンを持った少女の三人の少女達がシンフォギアと呼ばれる物を纏い戦っていたのである。

ノイズの数はそれほどでもないが流石に三人でも苦戦を強いられていたのであった。

そこに、会心の一手が、

「魔神剣!!」

「えっ？」

「大丈夫？」

「誰だと言いたいところだが、助太刀感謝する」

「さつさと、片付ける？」

「ウソだろ（∥。ω。）ノ もうあの二人だけでいいんじゃないか？」

「幻狼斬!!」

「幻影刃!!」

どつからともなく斬撃が飛んできたのでその方向に視線を向けた瞬間にはとつくに周りにいたノイズが倒されていたのであった。

そんなこんなで出現したノイズを片っ端から倒して行く紫の龍の兜を被って素顔を隠している鳴流神姉妹を見た銀髪の少女はもう二人だけでいいんじゃないかと言ってしまったのであった。

確かに龍姫と龍美は神姫と猫妖怪の血を引いているので感覚が鋭いので仕方ないのだが。

「ねえ、君、ちよつとごめんね」

「え、何するんですか（。∩。）ノ!!」

「お姉ちゃん、何勝手にベルトを人に巻いてるの（。∩。）ノ!!」

《《Standing by!!》》

《COMPLÉTE!!》

「立花の周りに光の線が。(。口。)ノ!!」

神姫「絶剣」状態の龍美は徐にアイテムパックから手慣れた手付きで立花という少女の腰に勝手にギリシャ文字のXのようなマークが付いたカイザギアを目にも止まらない速さで本人の主張を完全無視してカイザフォンに「913」とボタン入力してENTR Yボタンを押して待機音声がしたのでそのままカイザードライバーのバックル部分にセツトして横に倒した瞬間に黄色のフォトンストリームが立花と呼ばれた少女の体の周囲に立ち昇って戦闘服を形成し始めて、流石の龍姫も呆れてしまい、水色の髪の少女は驚いてしまったのであった。

そして光が収まると、

「今日から、君は、仮面ライダーカイザだよ(〽)〽(〽)!!」

「え?」

「お姉ちゃん、早く最後の一体片付けて(。・ω・。)」

「それじゃあ、さっそく一緒に戦うよ(〽)〽(〽)!!」

「わたし、元に戻るのかな?」

黒いスーツに黄色のラインが入った複眼が紫色でギリシャ文字のXになったマスクを被った仮面ライダーカイザに変身してしまったのであった。

元は呪いのベルトと評されていたのをヴェスタWSCが天界が提供した資料を基に作り上げたライダーシステムでファイズより機動力がない代わりにカイザブレイガンなどの武装が初期装備として搭載されているという安全設計にした代物である。

つまり誰でも仮面ライダーカイザに変身できるのだが、一応満十五歳以上からになっているのである。

仮面ライダーカイザに変身してしまったのだが、龍姫が一人で最後の一体まで倒していたようで、さつそく立花と呼ばれた少女は仮面ライダーカイザとして初めての实战をすることになったのであった。

例の約束

並行世界の I S 学園で鈴と出会った翌日、鈴は幼馴染の一夏の元を訪ねていたのであった。

「なんだよ。屋上に連れて来て」

「約束、覚えてる？」

「なんだ、そんなことかよ」

「じゃあ!!」

この世界の鈴も一夏とは幼馴染の間柄らしく、例のあの約束を覚えているか鈴は一夏に訪ねていたのであった。

どうやら一夏は覚えているらしく、鈴は期待に胸躍らせていたのですが、それが一気に崩壊するのはそんなにもかからなかつたのである。

「確か、料理がうまくなったら、酢豚を奢ってくれるって言う約束だったよな」

「.....」

「どうした、鈴、約束覚えてたんだし」

「一夏のバカ!! もうそこで寝てなさいよ!! ;つ皿、)!!」

「なんだよ!! バカはそつちだろ!!」

やはりのこの男はやらかしてしまつたようで、鈴は泣きそうになりながら空手の中段回し蹴りを一夏に叩き込んでそのまま泣き出して立ち去つたので、一夏は蹴られた箇所を抑えながら、自分が悪いことに気が付いてなかつたのであつた。

一方で、

「流石に部活は無理だしね」

「ねえ、その二人」

「確か、生徒会長」

「そうよ、更識楯無よ」

「一体なんですか?」

「生徒会に入つてくれない?」

天夏&弥生「お断りします!!」

「探しましたよ!! では!!」

「そんな〜!!」

天夏と弥生は部活の勧誘を断り続けていたところに、この世界の更識楯無こと刀奈に遭遇して、生徒会に入つてくれと言いつたが二人そろつて笑顔で勧誘を断つて刀奈を落胆させて、布仏虚が刀奈を連れ戻して行つたのであつた。

一方、

「女との約束を曲解するなんて!!」

「なのは!! 間違えてもあつちの世界に行つて、スターライトブレイカーは(。D。ノ
!!」

「完全に姉ちゃんに依存してるだな(・ω・)」

第一茶熊学園の武装開発室のモニターで鈴と一夏のやり取りを一部始終見ていたなのは達は一夏にO☆H A☆N A☆S Iをしに行く勢いだったのでフェイトが止めたのであった。

オウガは完全に一夏に呆れてしまったのであった。

もちろん、そこには、

「(オレも真耶との約束はちゃんとしないと死ねないとは言え、女神の力は目の当たりにしているからな)」

「二真、真耶とはちゃんとしろよ。オレでも助けられんからな」

「バイパー、恐ろしいこと言うなよ!!」

ジョーカーアンデッドで死ねない肉体だが流石に神姫であり恋人になった山田真耶との約束事はちゃんとしないといけないと心に誓ったのであった。

というのも、龍美が神姫であることはこの学校に転入してから資料に目を通していた

ので覚えていたのだが、神姫化しないで、[◆]のカテゴリーK「コーカサスビートルアン
デット」に何もさせないで一刀両断にして、コーカサスビートルアンデットの愛剣「オー
ルオーバー」と盾を戦利品で持って帰還するという偉業を成し遂げているので劍崎一真
は神姫達を怒らせてはいけないと思いつたのであった。

天羽々斬と絆龍の乙女&小さき龍の悩み

神姫化した龍美に無理矢理ベルトを巻かれて仮面ライダーカイザに変身してしまった立花と呼ばれた少女は困惑してしまっただが、龍姫一人で大方ノイズを一刀両断してしまっただので、このまま龍美と二人で戦うことになったのであった。

「取り敢えず、カイザブレイガンで攻撃だよ、右に装着してるそれ」

「これですか？」

「それをノイズに向けて撃ってみて」

「すげえ（。D。）ノ」

「そろそろ、片付けようか。バックルのカイザフォンの表面に着いてるミッションメモリーをカイザブレイガンに差し込めば銃剣モードに移行できるよ」

「何!! 剣と銃が同時に使えるのか（。D。）ノ」

《EHCEED CHARGE》

「そう言えば、この携帯電話のボタン押しちゃったら、ノイズの動きが止まりましたけど？」

「さてと、わたしと合わせて」

「は、こ、!!」

念の為、龍姫はいつでも動けるように帯刀したまま辺りを警戒して、龍美とカイザの戦いを見守ることにしたのであった。

初めての仮面ライダーカイザに変身しての戦いだったが、龍美の指導の甲斐あって早い段階で右腰に装着されていたカイザブレイガンを使いこなして、そして、無意識にカイザフォンのボタンを押していたようで、カイザフォンの音声とともに黄色のラインが光ってカイザブレイガンに装填されてマーカーが射出されてノイズが拘束されて、刀身が光り出したので、そのまま逆手に持ったまま、龍美は愛刀を順手持ちにして、突撃していった瞬間、光になってノイズを突き抜けて、

「わたしが倒しちゃったんですか。(。D。)ノ」

「立花、おまえ」

「さてと、変身解除はこのボタンと」

「教えてないのに変身解除まで出来るようになったんだ(と言いながら変身者にだけ聞こえるように音声流れる仕組みになってるんだけど)」

「響!! それ使いこなすってどんだけ飲み込み速いんだ? というよりおまえら誰だよ!!」

「そうだね、わたし・・・ボクは鳴流神龍美。こつちが妹の」

「久しぶり、翼」

「龍姫なのか。(。口。)ノ」

「翼さん、お知り合いだったんですか。(。口。)ノ!!」

ギリシャ文字のXが刻まれてノイズが灰燼と化して、無意識にカイザフォンを持って変身解除を行っていた少女の名は立花響と言うらしく、カイザギアを巻いたまま立っており、そこに銀髪の少女が二人を問い詰めに来たので、鳴流神姉妹は神姫化を解いて、元の姿に戻ったのであった。

どうやら龍姫は以前に水色の髪の方と同じ髪型の少女と会ったようで、久しぶりの再会に喜んでいたのであった。

一方で

「鈴。どうしたの?」

「(。口。)グスン」

「オレ、先に部屋入ってるから」

「うん。わかった。ボクでよかったら話を聞くよ」

「なんで・・・アンタに話を聞いてもらわないといけないのよ!!」

並行世界のIS学園は夕暮れになっていたので天夏と弥生が寮の部屋に戻ろうとしたところで、通路の壁にもたれ掛って体育座りをしている鈴がいたので、天夏は先に

戻っていると行って立ち去ったので、弥生が鈴に話を聞くことにしたのだが、鈴が弥生を拒絶したのであった。

鈴は弥生のプロポーズにコンプレックスを抱いているのだが、弥生はそこではなく根本的な部分の問題だと気が付いたのであった。

そう今の鈴は生前の「篠ノ之箒」だった頃の自分に似ていたのだ、弥生はこのままでは心に闇を抱えるかもしれないと鈴に歩み寄ったのであった。

「わかったわよ、話すわよ。けどここでは」

「天夏も一緒になるけど」

「天夏ならいいわ」

「じゃあ、行こう」

流石の鈴も弥生には観念したらしく泣いていた理由を話すことを条件に天夏と弥生の部屋に向かったのであった。

「なんだ、連れてきたのか？」

「アンタにも聞いてほしいから」

「なら、話してみろよ」

天夏と弥生が自分の部屋に戻った弥生は鈴を連れて入ってきたので天夏を含めたメンバーで鈴の話を聞くことにしたのであった。

鈴も二人なら話しても構わないと言って、事の真相を話してくれたのである。

「二夏の記憶違いかよ（オレもだけど、後で謝ったつけ）」

「二夏には悪いけど、しばらくはほっといてもいいんじゃないかな？　これはボクに助言してくれたカラス人の言葉なんだけど、「うじうじ悩んでるより体動かしてすすきりした方がいい。そうすればおのずと自信と力が就くからって」

「オレも一つ教えて置くか、これもある人がオレ達に言ってくれた言葉なんだがな「己の進む道は、己にしか決められない。キミはキミのペースでやればいい。他人に合わせる必要などない」と

「ありがとう、アンタ達に話せてよかった。けど」

「今何時？」

「もう大浴場は使えるだろ、行って来いよ。って男子禁制だからな」

「うん。鈴、お風呂まだなら一緒に行かない？」

「そうね、一緒に行くわ!!」

「どうやら昔の約束である「自分が作った酢豚を食べてくれる？」を二夏は「酢豚を奢ってくれる」と言う意味で勘違いしていたらしく、それで喧嘩して泣いていたと言うのであった。

天夏と弥生はそれを聞いて、ふとテルカ・リュミレーズ騎士団隊長首席「シユヴァー

ン・オルトレイン」の顔を持つ神出鬼没で有名なおっさんこと「レイヴン」こと「ダミュロン・アトマイス」に教えてもらった助言を弥生が述べて、ラタトクス艦長代理にしてリーゼ・マクシアの精霊王のミラⅡマクスウエルこと綾瀬Ⅱマクスウエルからの助言を天夏が述べて、鈴は自分が抱えていたつかえが取れたようで笑顔に戻ったが、もう一つの悩みの種である弥生との天と地ほどの差がある体型に悩んでいたように、弥生は天夏に時間を聞いて大浴場が空いていることが分かったので一緒に大浴場に行くことになったので、天夏は一人、部屋のシャワーを浴びることにしたのであった。

□

バリアジャケットとシンフォギアと蛇

龍姫は久しぶりに風鳴翼に再会したのだが、姉の龍美が立花響を無理矢理にカイザフォンに変身コード「913」と早打ちしてバツクルの部分に差し込んでそのまま仮面ライダーカイザに変身させるという暴挙に出たが無事にノイズを全滅させたので良かったのであった。

「これを押せば」

「龍姫、まさかお前までシンフォギアの装者になっていたとはな、それも姉妹揃って」

「翼、ボクのはシンフォギアじゃなくて、バリアジャケットって言うもので、シンフォギアと違って、さつき見せた飛行能力などが装着者の能力に合わせてデフォルトに着いてるんだよ。それとこれがバリアジャケットを装着するインテリジェントデバイスだよ」

『初めまして、イルミナルと申します』

『同じく、龍姫のインテリジェントデバイス、バルディッシュです』

翼一行「喋った。(。D。)ノ!!!」

「そうこれがボクとお姉ちゃんとのインテリジェントデバイスで人工AIが搭載されて、適合者と認められた人物がバリアジャケットを纏うことが出来るんだよ」

『風鳴翼。あなたをフォースマスターに任命しました』

「と言うことは、わたしもバルディッシュを使えるようになるだな。積もる話もあるが」
「翼にも事情があるんだし、またゆっくりできる時にも家事全般教えに行くから!!」
「響。その変身コードは「913」でENTRYボタンを押してベルトにセットすれば変身できるから。それじゃあね、それはもう響のベルトだよ」

翼は龍姫がシンフォギアの装者になったと思っていたが龍姫からインテリジェントデバイスを見せながらバリアジャケットのことを教えてもらい、バルディッシュの四人目のマスターに適合したのであった。

そして、カイザギアは立花響がそのまま使用することになったのだが、なぎさ達用のカイザギアはもう用意しているので問題なかったので、龍美は響に変身コード「913」と教えて、姉妹は元の世界へ戻って行ったのであった。

「まさか、変身コードがわたしの誕生日って」

「仕方ないだろ、数字を打ちこんでパスワードを解除するための数字は適当なんだからよ。早く帰るぞ」

響はまさかカイザフォンに入力する変身コードが自分の誕生日と一緒だったことに驚いていたのだが、銀髪の少女こと雪音クリスは数字で解除するパスワードは基本的に適当になってるから偶然に一致したと言って基地に戻って行ったのであった。

「今日も一仕事するか」

「キヤアあつあΣ（。D。）！！」

「！！」

バイパーは現在劍崎一真の世界に写真を撮りに海に繋がる川辺に来ていたのだが、突如悲鳴が聞こえてきたので、近くに停めてあつた乗用車のガラスに紫色のコブラの絵のカードデッキを映して腰に銀色のVバックルが巻かれたのを確認して悲鳴が聞こえてきたところに向かったのであつた。

蛇VS蛇

自前のカメラをぶら下げて剣崎一真の世界へやってきたバイパーは悲鳴が聞こえてきたので近くに駐車していた乗用車に自分の姿が映っているのを確認してホルスターから紫のコブラのマークのカードデッキを映して腰に銀色のVバツクルが巻かれたのを確認して、現場に向かったのであった。

「あ、変身!!」

バイパーは勢い余ってカードデッキをVバツクルに入れるのを忘れていたようで一旦停止して、誰も見てないことを確認して、自分で考えた変身ポーズを決めてVバツクルにカードデッキを入れて、そして蛇をモチーフにした紫色の仮面ライダー王蛇に変身して現場に向かったのであった。

「ジョーカーはどこだ!!」

「大丈夫か?」

「アンタ仮面ライダーなのか?」

「ああ、今のうちに逃げろ」

《SWORD VENT》

「蛇なら蛇が相手だ!!」

バイパーが変身した仮面ライダー王蛇が到着したところにいたのは通行人を片っ端から襲っていた一応上級アンデッドなのだが、たい焼きの鉄板で焼かれて封印されるという間抜けな◆のカテゴリーク「サーペントアンデッド」がいたので、襲われそうになった通行人を引き離して逃げるように言って、牙召杖「ベノバイザー」にカードをセットして読み取って、ベノサーベルと言う刀身が刃がないが鈍器として使えるサーベル型の武器を呼び出してサーペントアンデッドに殴りかかったのであった。

「アンデッドが出現!! 現在ライダー一名が戦闘中です!!」

「橘さん!! 睦月君!! 至急!! 急いで現場に向かってください!!」

BOARDでもサーペントアンデッドの出現は確認できたようでもバイパーが変身して戦っていることも現在の世界のボードの仮面ライダーの二人に指示を飛ばして、現場に向かってもらったのであった。

「アンタ!! 誰だ!! 邪魔するな!!」

「仮面ライダーだ!!」

「変身!!」

『Change!!』

「始か!!」

「バイパーか、助けに来た」

「おまえが来てくれて、心強い。なんせ、変身したのは今回が始めてだから」

「えらい!! 二人まとめて!!」

『FINAL VENT』

『DRILL TORNADO SPINNING ATTACK』

流石元退魔士と言うこともあって仮面ライダーでも上級アンデッド♦のカテゴリーク「サーペントアンデッド」に何もさせないで圧倒していたのであった。

そこに本物のジョーカーの相川始が仮面ライダーカリスに変身してバイパーに加勢したところにはサーペントアンデッドは満身創痍だったので、止めと言わんばかりに、バイパーがコブラのマークのカードをバイザーに読み取って人工魔物「ベノスネーカー」が現れて両腕を広げながら走って行き、それに合わせる形で、ジョーカーラウザーにカードをラウズしたカリスと一緒に、バイパーがバック宙して、カリスが回転して、

「ぎやあつアあああ!!」

「やりすぎたか?」

「バイパー、おまえ・・・」

ベノクラッシュと言う両足をばたつかせて蹴るのでキャトラ達から別名「バタ足蹴り」と言われるライダーキックと錐揉み回転で蹴る「スピニングアタック」が合わさつ

たライダーダブルキックがサーペントアンデッドに炸裂して問答無用に吹っ飛んで、爆散してしまったのであった。

バイパーは何事もなかったかのように変身を解除していたのを見た相川始は呆れるしかなかったのであった。

それぞれの

元退魔士のバイパーは仮面ライダー王蛇に変身して◆のカテゴリーク「サーペントアンデッド」を慣れていないはずの一刀流で圧倒している所に相川始の変身した仮面ライダーカリスの加勢もあり止めにベノクラッシュとスピニングアタックのライダーダブルキックを決めて、サーペントアンデッドはかなりの距離を吹っ飛んで行ってしまったところで爆散したのであった。

「封印できたようだな」

「バイパーは確か、退魔士だったな」

「覚えてたのか、その通りだ、龍美達に会うまで仮面ライダーの事は知らなかった。これを見た時からオレは仮面ライダー王蛇になることを決めた」

「そうか、また一緒に戦おう。いつか剣崎と一緒に」

「オレもだ」

「どうやら無事に封印は出来たようで、カードはカリスの元へ戻って変身を解いて二人はお互いの事を理解し合っていたのであった。」

「そのあと遅れてギャレンとレンゲルが来たのは言うまでもなかった。」

一方で

「華乃さん。退院、おめでどう」

「まさか、スノーホワイト?」

「はい、本名は姫河小雪です」

「わたしは、細波華乃、リップルよろしく、なんで本名知ってんだ?」

「なんでって、病室に書かれてましたし」

以前、デスゲーム化した魔法少女ゲーム事件で左眼と左腕を失ったが龍音が助けて、今いる天界総合病院へ緊急搬送されてバイオテクノロジーを応用した治療で無事に肉体を取り戻した少女の名は、細波華乃と言うらしく、魔法少女と言うより魔法くノー「リップル」の名で、知れ渡っている少女は今日、退院することになったのであった。

そこに以前同じくデスゲームに巻き込まれて龍音に助けてもらった魔法少女「スノーホワイト」こと姫河小雪が退院祝いをしにやってきたのであった。

華乃は何故自分の本名を知っているのかと思っていると小雪から病室のネームプレートを見たと言って今になって気が付いたのであった。

「アイズさん、気分はどうですか?」

「うん、大丈夫」

「む〜!」

時同じくして入院中のアイズは三日後に退院を控えている所に好意を抱かれています。ベル・クライネルとヘステイアがお見舞いに来ていたのであった。

「士道!!」

「龍姫、仕事は終わったみたいだな」

「タツキ!!」

「十香も士道も終わったんだね」

龍姫と龍美はフラクシナスに戻ってきて龍姫は最愛のパートナーの士道と友達の人にして士道に好意を抱いている一人の精霊の十香と遭遇したので龍姫は三人で帰って行ったのであった。

残された龍美は瑠美奈が待つ超神次元ゲームギョウ界のプラネテューヌへ帰って行ったのであった。

弥生は鈴を連れて大浴場に来ていたのであった。

「笑いなさいよ!! こんな」

「もう!! こうしようかな?」

「何すんのΣ(。□。)!!」

弥生と鈴は大浴場で交流(?)を深めていたようで鈴は自分と弥生との格差に絶望したが、弥生が背後から抱きついて大龍式スキンシップ(?)をし始めたのであった。

クラス代表戦、開始!!

天夏と弥生と仲良くなった鈴はクラス代表と言うこともあつてなかなか付き合えない日々が続いたある日のある場所でこの世界の I S の最重要人物はハッキングして二人を見ていたのであつた。

「なんだよ!! あいつら!! あいつらの I S !!」 それにちーちゃんをボコボコにして!!」

「東様、落ち着いてください」

そここの世界に I S を「白騎士事件」で広めた張本人の篠ノ之東は完全に天夏と弥生に怒りを見せていたのであつた。

ばつちり唯一の親友の織斑千冬が全く持つて齒が立たないことに苛立ちを覚えていたのであつた。

此処にスコール・レオンハートがいたら、絶対に「壁にでも話してろ」と言い捨てるだろう。

そこにクロエ・クロニクルがやって来て落ち着いたのであつた。

そして、クラス代表当日がやってきたのであつた。

「あ、ありがとう」

「確か」

「わたし、行かないと」

「この世界の簪は相変わらずだな」

どうやら先に三組VS四組の組み合わせが行われることになったようで、天夏と弥生は観客席に箒とセシリアを連れて向かっていると、この世界の簪と遭遇して、お礼を言われて見送り、観客席に向かったのであった。

一方で、

「準備できてる?」

「勿論、いつでも潜入可能よ!!」

「作戦開始!!」

「オレは!!」

スマイレ達が剣崎一真に協力を要請して現在、この世界のIS学園の付近までやってきたのであった。

パーティー編成して潜入することになったのであった。

剣崎一真は一人困ったのであったなんせ今いる場所は自分が知っている世界では共学になっているがこの世界は完全に女子高なのだ。

スミレ達に言われるがまま今いる場所に待機することになったのであった。

「流石、この世界のＩＳ学園もセキュリティは穴があるわね」

「そうね、ここなら」

スミレと朱音のコンビはいつもの通りにＩＳ学園に問題なく地下道を通って敷地内に潜入したのであった。

出た先はちょうど現在クラス代表戦が行われているアリーナ前だったので、誰もいないことと防犯カメラがないことを確認して、アイテムパックからカードデッキを取り出して、アリーナの入り口の窓ガラスに移して、Ｖバックルが巻かれて、変身ポーズを取つてなるべく小声で、

スミレ＆朱音「変身!!」

「行くわ」

「ええ」

変身してミラーワールドに入ってしまったのであった。

一方、

「此処なら、問題ないね」

「流石、元ドイツ軍兵士だよ」

なぎさと星奈は誰も目が付けていないアリーナの屋根の上からクラス代表戦の様子

を伺っていたのであった。

そうこの時すでに天夏と弥生は気づいていたことに篠ノ之東は知らなかったの
であつた。

無人機

スマイレとなぎさが二手に別れて並行世界のIS学園に潜入した理由はこの世界のIS学園のクラス代表戦当日に襲撃事件が起きるというタレコミが入ってきたのでIS学園の構造に詳しいメンバーと剣崎一真というメンバーで構成されたのだ。

と言ってもあまり人数が多いと怪しまれるので、五人だが、剣崎一真は一人騒ぎが起き次第乗り込める場所で待機していたのであった。

「三組の代表のIS、凄かったね」

「まるでドラゴンみたいだった」

「(ドラゴンなんだが)」

どうやら三組対四組の試合は三組代表のこの世界の簪が圧勝してしまったようで、観客席では興奮が冷めやまないのであった。

シングセイバードラゴンと言うトレーディングカードゲームのユニットをモデルに開発された物なので、ISとは格が違うのである。

そしていよいよ一組対二組の対戦が始まったのであった。

【あれが甲竜か】

【確か、第三世代のハイブリッドだと聞きましたけど】

「その通りだ」

「一夏。アンタには幻滅させられたわ!!」

「なんだよ!! いきなり!! わからねえよ(。D。)ノ!!」

「約束を守るために、守ろうと努力するために、お互いを信じて交わすものよ!! それえを忘れたアンタは大っ嫌い!!」

「なんか、鈴、ボク達に影響されてない(。.)」

「おまえだろ(〃ω〃)ノ」

開始までの間の時間で鈴は思いつ切り一夏に言いたいことは言って、吹っ切れた様子で、逆に一夏は何故、鈴が怒っている理由がわからなかったので聞き返したが鈴は天夏と弥生に影響されたのか、アドリブトム組の科学者のウイルの言葉を言い放ったのであった。

そして試合開始のブザーが鳴ったのであった。

【なるほど、衝撃砲だな】

【よく、出てますが、まだまだ序の口ですね】

「一夏の奴、全く特訓してないのかな」

「日頃の行いだ」

「そうですわね」

「さあ、アンタの罪を数えなさい!!」

「何を数えるんだ。(。D。)ノ!!」

装甲機竜の二機は相変わらずの感想を述べながら衝撃砲の仕組みを述べており、天夏と弥生は寄り添って完全にバツカプルにしか見えない光景になっているが、箒とセシリアは一夏の日頃の行いが酷いことに呆れて、鈴に至っては二人で一人の探偵の決め台詞をどこで覚えてきたのかわからないが、IS「甲竜」の左指で一夏を差しながらポーズまで決めたので、一夏は自分が何をしたのか解らなかつたので狼狽えたのであった。

そこに、

「何よ!!」

「きやあああつあゝ。(。D。)ノ!!」

「箒!! セシリア。ボクと天夏と一緒に来て!!」

「承知」

「わかりましたわ!!」

アリーナの外壁をバリアアごと破壊して乗り込んできたどう見ても無人ISの出現に観客席は大騒ぎになったので、これに乗じて天夏と弥生は密かに潜入してくれた仲間達に合図を送り、箒とセシリアを連れて行ったのであった。

赤の竜の巫女との遭遇

並行世界の I S 学園で一組 V S 二組のクラス代表戦が行れている最中にバリアごと会場を破壊してきた黒いロボットが侵入してきたのであった。

この緊急事態で会場は大騒ぎになってしまったのであった。

天夏と弥生は箒とセシリアを連れてある場所に向かっていたのであった。

この騒ぎを利用して、なぎさは元ドイツ軍黒兎隊長の経験を活かして屋根からワイヤーで降りて行ったのであった。

星奈もなぎさの後を付いてワイヤーで降りて行ったのである。

なぎさは兎も角星奈がアリーナの屋根から数10mも高い場所から器用にワイヤーで降りられるのはソルジャー I S t のアングールの指導の賜物なのである。

「変身」

【STANDING BY】

【COMPLETE】

先に観客席に降り立ったなぎさはパーカーを覆い被さってなるべく顔を見られない場所でアイテムパックからデルタギアを取り出し腰に巻き右腰の音声入力式のデルタ

フォンを引き抜きトリガーを引きながら小声で変身と入力して「STANDING BY」という音声が出たのでそのままデルタフォンを元に戻して「COMPLETE」の音声と同時にベルトから白のフォトンストリームがなぎさの周りに強化服を形成するように立ち昇り、

『こちら今から無人機との戦闘を開始します』

『わかったよ。オレも急いで行くよ』

なぎさはギリシヤの△をモチーフにした白と黒のシンプルな強化服にオレンジ色の複眼の仮面ライダーデルタに変身したなぎさは外で待機している剣崎一真に通信で指示を送って、なぎさは侵入した無人機に向かったのであった。

「待っていたぞ」

「ごめん!! 急いでるから!!」

「わかっている 皇帝竜の力を貸してやる」

「わたしは一般」

「急いでいるのではないのか!! 早く行け!!」

「行くぞ!!」

天夏と弥生は箒とセシリアを連れてピットへ向かっていたのであった。

その道中で炎のような赤い髪の巫女服の女が何の前触れもなく現れたのであった。

急いでることを察したのか、箒には白と黒のトレーディングカードくらいの裏面に「Z/X」と書かれ表面に箔押しで銀と赤の翼を持ったドラゴンが描かれたカードを渡されたが箒は一般生徒だと言おうとしたが急げと言われてしまったので、出撃準備に向かったのであった。

「待ってた（待ってたわよ）」

「天夏さん、あの方々はお知り合いなのですか。（旦那）ノ？」

「まあくな。言っておくが今回の無人機とは無関係だからな!! 行くぞ!! サンクチュアリガード! R I D E !!」

「行くよ!! ドラゴニック・オーバーロード!! R I D E !!」

無事にピットに到着した天夏達をピットのハッチに掛かっていたロックを容易く解除していた仮面ライダーナイトに変身中のスミレはボイスチェンジャーでテルカ・リュミレース騎士団現団長フレン・シーフォの声で天夏と弥生に話しかけて、殿を買って出て、天夏達は無人機の元へ向かったのである。

「そのカードデバイスを使えばいいよ（使えばいいの）」

「どうすれば使えるのだ」

『我が名を呼べ』

「!! わかった、わたしに力を貸してくれ!! ロードクリムゾン!!」

一人残っていた筈にスマイレはボイスチェンジャーを入れたままカードデバイスを使えば天夏達と一緒に加勢できると言うのと、筈は使い方が分からなかったらしく、それに応えるようにカードデバイスから声が聞こえてきたので、筈はカードに書かれているユニット名を叫んだのであった。

ロードクリムゾンの初陣

並行世界のI S学園のアリーナのバリアごと破壊して侵入してきたのは巨大な無人機らしく、バトルフィールドでは一夏と鈴が戦っていたのであった。

「なんだよ!!」

「なに? 全身装甲!!」

「鈴!! 一夏を連れて逃げろ!!」

「アンタ(。D。)ノ!! 天夏、それに弥生、それがアンタ達の専用機なの(。D。)ノ

!! もちろんよ、アンタ達の邪魔になるだけだし!!」

「ふぎけるなくΣ(。D。)!!」

「これで仕事がやりやすくなりましたわ」

「おい!! 天河! 貴様ら!!」

「(朱音達がミラーワールドから出て来たんだな)」

先に戦っていた二人の代わりに天夏と弥生は装甲機竜を纏い加勢して、遅れる形でセシリアがやってきたのであった。

いつモーシヨンスリットとI Sスーツに着替えたかと言うと、

「どうするのです？ わたくし達 I S スーツを着てませんかよ？」

「そっか、リライズを知らないだっけ」

「リライズとは？」

「詳しい話は後だ!!」

「ほら!! セシリアもこの壁を突き破って!!」

「本当に I S スーツに着替えられましたわ。(。D。)ノ!!」

「急ぐぞ」

ピットへ行く道中の通路でセシリアに指摘されたので天夏と弥生は B O A R D のライダースステムのように、天夏は青白い龍の顔が描かれた壁を走り抜けると一瞬でモーションスリットに着替えたので、弥生は赤に白い龍の絵が描かれたオリハルコンエレメントを突き破って、モーシヨンスリットに着替えて、セシリアは弥生のオリハルコンエレメントを走り抜けて、いつもの紺色の I S スーツに着替えたのであった。

一方で、

「貴様!!」

「(こつちだ(こつちよ!!)」

「えらい退きなさいよ!!」

仮面ライダー龍騎に変身してボイスチェンジャーでルーク・フォン・ファブレに変

わっている朱音が避難誘導をするために非常口のドアを蹴りやぶったことで一斉に生徒を守る立場の教師陣が流れ込んできたのであった。

もちろんこの現場は絶賛超神次元ゲームギョウ界の各武偵所に記録されているので証拠隠滅できないようになっているのである。

一方で、

「此処は？」

『我の中だ』

「本当にわたしは専用機に乗ってしまったらしいな、急ぐぞ!!」

『戦いながら武装展開の仕方をやればいい』

皇帝竜「ロードクリムゾン」に言われるがまま名を呼んだ箒はカードデバイスから放たれた光に包まれて気が付くと周りの景色が映し出されたモニター画面が360度展開しているコックピットのような空間にいたのであった。

ロードクリムゾンの内部らしく操縦席はないが箒かロードクリムゾンの意思で動くよう箒は深呼吸をしてから、天夏達の助太刀に向かったのであった。

「遅れてしまった!!」

「箒さん（。 ㊦。）ノ!! 全身装甲ですのΣ（。 ㊦。）」

「話は後だ!! 変身!!」

『Ch ange』

「あの方は？」

「オレたちの協力者だ!!」

完全にISとは違う皇帝竜ロードクリムゾンの銀と赤の姿を見たセシリアは一瞬驚いたが、気を取り直して、侵入してきた無人機との戦闘に戻ったところで、剣崎一真が堂々とジョーカーラウザーを出現させて、変身と叫んで、●のA「チェンジビートル」をジョーカーラウザーにラウズしてブレイドジョーカーに変身したのであった。

「剣崎さん。朱音と一緒に避難誘導をお願いします」

「わかった!!」

「オレ達はコアを取り出さないとな」

「貴様ら!! 今すぐ!! 退却しろ!! IS部隊を・・・」

「編成している間に終わります。では」

天夏が剣崎一真に避難誘導を頼み、襲撃してきた無人機との戦闘に戻ったのであった。

途中途中で織斑千冬から通信が来たが、構っている暇がなく中断して戦闘に集中したのであった。

「さてと、刀が欲しい」

『抜刀の構えをしてみろ』

「こうか？ !!」

「きいいいい!!」

「はああつああ!!」

「行くよ!! オーバーロード!」

【承知です!!】

ロードクリムゾンの内部のコックピットで箒は取り敢えず刀が欲しいと考えていた所ロードクリムゾンから構えてみると言うので抜刀の構えと取った瞬間、機体に合った白銀の日本刀が鞘ごと現れたので、早速襲ってきた無人機に斬りつけた所、装甲に亀裂が入ったので、弥生がその亀裂からオーバーロードの腕を突っ込んで、

「コア発見!」

「機能停止したようだな」

「あつちはあつちで忙しそうだな」

そして無事に無人機のコアを抜き取ることに成功したので無人機は停止したのだが、仮面ライダーに変身したスミレ達は別の敵と戦っていたのであった。

磁力のアンデット

天夏と弥生はロードクリムゾンに乗り込んだ筈とセシリアの協力の下、問題なく襲撃してきた無人機からコアを抜き取ることに成功したのだが、避難誘導をこの世界のIS学園教員に代わって行っていたスマイレ達は突如出現した敵と一戦交えることになったのであった。

「今度は、アンデットか（ね）」

「♣のカテゴリール8!!」

「ぼおおお!!」

「このアンデッド、磁力を操れる!!」

『なぎさ、ボイスチェンジャーは?』

『わたしは大丈夫だよ』

「避難は・・・!!」

なんとどっから入ってきたのかわからないが、♣のカテゴリール8「バッファローアンデッド」がどさくさに紛れて襲撃してきたが、大方避難誘導が終わったところだったので、スマイレ達がターゲットにされてしまったのであった。

《STANDING BY》

「変身!!」

《COMPLETE》

「加勢する（加勢するよ!!）」

観客席と場所をうまく利用しながら戦うことになったが、なぎさはデルタの主力武器のデルタフォンをブラスターモードにしての射撃を行ったが、危うく引き寄せられかけたので、バッファローアンデッドが磁力が使えることに気が付いたのであった。

なぎさがボイスチェンジャーを通して話してないことを念話で朱音が注意するとラウラ・ボーデイツヒとしての声色が違うため管制室の職員にはばれてないのであった。

星奈はゴーストドライバーでは見立つのでなぎさから借りる形で龍美が持つて行ったのとは別に作ってあったカイザギアで仮面ライダーカイザに物凄い早打ちで変身コード「913」を打ちこんでなるべく小声で変身と言ってカイザファンをバックル部分に差し込んで横に倒して変身完了したのでお得意の銃撃と剣術で翻弄し始めたのであった。

そこにブレイドジョーカーに変身している剣崎一真が避難誘導を終えて、ジョーカーアンデッドの能力でバッファローアンデッドに気が付いたので、加勢に急いで向かったのであった。

「おまえ達!! 何者だ!! 今だけ見逃してやる!! 後はI S部隊に・・・」

「馬鹿野郎!! こいつはI Sじゃあ、敵わない!! アンタ達の方が避難しろ!!」

「貴様!!」

「ブリュンヒルデに逆らったら・・・」

「下らねえ!! アンタ達の愚痴を聞くほどこっちは暇じゃないっての!! (下らないわね!! アンタ達の愚痴に付き合うほど、暇はないのよ!!)」

管制室から織斑千冬が現在バツファローアンデッドと戦闘を繰り広げているライダー達に見逃すという条件でバツファローアンデッド討伐をI Sでさせると言い出したので剣崎一真が逆に警告したが、女性教員達が罵倒し始めたが、ボイスチェンジャーで声を変えている朱音に言い捨てられて黙ったのであった。

「地上じゃ埒が開かない、だったら」

《GUARD VENT》

「封印が優先でいいですか? わたしなら倒せますけど」

「お願いだから、封印させてくれ(アブソーバがあればスマレみたいに飛べるんだけど)」

「こっちも!!」

《STRIKE VENT》

「おりゃ!!」

スマイレはバイザーにカードを読み取らせてマントを装備して飛びあがって空中から止めを刺す体制を整えることにしたのであった。

なぎさは「ルシファーズハンマー」というライダーキックでフォトンブラッドを叩き込めば不死生物のアンデッドも倒せることを言うと、剣崎一真が封印させてくれと頼まれたので援護射撃を続けたのであった。

朱音はカードをバイザーに読み取って、ドラグレッツダーの顔に似た籠手「ドラグクロ」を装着して、そのままドラグクロから火炎放射を放ってバッファローアンデッドを牽制したのであった。

そして、バッファローアンデッドが怯んだので、

《THUNDER KICK LIGHTNINGBLAST》

《FINAL VENT》

「ウエイイ(owo)!!」

「どくん!!」

「封印完了!! 逃げるぞ!!」

「待て!! チツ!!」

スマイレはウイングランサーを構え、バッファローアンデッドの死角になる真上からマントをドリル状にして急降下して、「飛翔斬」を繰り出し、それに合わせるように剣崎一

真がラウズカードをジョーカーラウザーにラウズして、「ライトニングブラスト」というライダーキックを繰り出してバツファローアンデッドは封印可能にバツクルが開いたのでblankカードを剣崎一真が手裏剣のように撃ってバツファローアンデッドが封印されたので、急いで帰還したのであった。

織斑千冬が悪態をついたのは言うまでもなかった。

事件は会議室で起きてるんじゃない

並行世界の I S 学園でアンデットと無人機の襲撃があつたが怪我人は出ていなかったのは不幸中の幸いだったのであつた。

一方で、

「理世!!」

「は〜い!!」 ホール入ります!!」

「理世はここで働いてるのね?」

「そういえば、住んでる所が近かつたよな」

「タスク!!」

龍姫達の世界でいつも通りにバイトを熟している薄紫色のジャンパースカートを着こなして髪をツインテールに束ねている理世は接客を熟していたのであつた。

いつものウェーター姿の男装が基本の龍姫とは違った感じが好評なのか、まるで心がびよんびよんするらしいとあるお客さんからの感想を貰えるらしく、特に理世本人がこの格好を気に入っているらしく、堅苦しい騎士団生活から解放された反動か、超神次元ゲームギョウ界の娯楽にも興味を持ったのであつた。

一応、次元武偵の資格を持っているのだが、しばらくは前線から離れると理世が言ったので、今の時間が理世にとっては楽しいのだ。

そこに偶然、カップル同然にしか見えない素奈緒とタスクが来店しており、理世がご近所であることを述べたので、素奈緒は表情には出していないが牽制したのであった。

一方、

「と言うことです」

「わかりました。では、何か意見がある方は」

「ヴェスタWSCにはとんでもない技術力です。至急天河、朝宮の専用機を要求します

!! それと篠ノ之のそれもだ!!」

「と織斑先生が言ってますが、天河君と朝宮さん、何かありますか?」

「そうですね、では」

天夏と弥生は現在会議室に招集されてしまったようで、もちろん一夏の姿も見受けられ、箒が赤の竜の巫女から受け取ったカードデバイスは今は箒の手元にあるのだ。

無人機にアンドロイドが襲撃して来れば黙ってるわけがないので、簡単に事情説明をして、この世界の響木理事長から意見発言の許可が出た瞬間、待っていましたと言わんばかりに織斑千冬がまたも天夏と弥生の機攻殻剣と箒のカードデバイスも要求してきたのであった。

轡木から反論があるなら言っていないと許可が出たので天夏と弥生は深呼吸をしたのだ。

そして、

「前にも言ったよな、「変わらない現実は何もしないで文句を言う野郎は卑怯者がする」とだ」と

「何かを得るにはリスクがあるの当たり前、その結果何かを傷つけても、織斑先生は受け入れられる覚悟はあるのですか？　そして、何も傷つけずに望みを叶えようなんて、心が贅沢なんですね」

会議室に居る教員一同を前にして、二人は堂々とした態度で織斑千冬の要求を却下したのであった。

「なら篠ノ之のそれは渡してもらおう」

「どくん!!」

「誰よ!!」

織斑千冬は天夏と弥生に言い負かされたのが気に障ったのか箒が赤の竜の巫女からもらったカードデバイスを取り上げようとし始めた所で、勢いよく会議室の扉が開いて入ってきたのは、

「いきなりの訪問で済まない、ヴェスタWSCの者だが」

「ほう、自ら来てくれるとは手間が省けた」

「織斑千冬ですね、恐喝まがいなことをするのであれば、此方も容赦しません。それと、篠ノ之さんはヴェスタWSCで保護させていただきました」

「貴様!!」

『懲りないね（・ω・）』

『ああ』

中性的な顔立ちの所為で完全に背広が似合わない龍臣が関西弁ではなく標準語で入ってきたのだが、入って早々に織斑千冬が突つかかてきたので、龍臣は織斑千冬に言葉で牽制したが、それでも腹の虫が収まらない織斑千冬は身長差があるのにも関わらず龍臣に襲い掛かったのであった。

それが無駄だと言うことにこの場にいる教師達は知ることになるのは、

「そうやってすぐに暴力に出るのはアンタの悪い癖だ」

「うツ!!」

「さつき言ったよな、アンタ達が脅しに来るってならこっちは容赦はしないと。さてと、これで失礼します」

女性教員一同「ウソよードンドコドーン（。D。）ノ!!」

「わたしがヴェスタWSCに」

「ああ、今日から一緒だよ」

「これで懲りたらないんだけど、それでは失礼しました!!」

流石、二元時空管理局員なだけなことはあるようであっさりと織斑千冬が殴りに来た右腕を掴んでそのまま払い腰で投げ飛ばしたのであった。

まさかブリュンヒルデが簡単に地に伏せた現実が信じられない教員達はあまりの出来事に絶叫して、天夏達は会議室を出て行ったのであった。

もちろん、

「また。やらかしたか」

「ただだけ他人のものが欲しんですね」

超次元ゲームギョウ界の武偵所にちゃんと記録されているのであった。

絶剣の保険医、参上!!

天夏達は会議室を後にして廊下を歩いているのであった。

龍臣はそのまま超神次元ゲームギョウ界のルウィーへ帰って行ったのであった。

「来たか」

「確か、赤の竜の巫女だったな」

「その通りだ。わたしは赤の世界の赤の竜の巫女と呼ばれる。名はメイラル」

「オレは天河天夏」

「朝宮弥生」

「篠ノ之箒」

「セシリアですわ」

「凰鈴音」

クラス代表戦は中止になったことで授業が無くなったこともあってやることか思いつかなかった所に、赤い髪の巫女服を着た人物が現れたのであった。

天夏と弥生はこの人物が惑星クレイのような異世界から来ていることは知っていたのであった。

だがお互い名前を知らなかったので自己紹介を行ったのである。

「単刀直入にいうと、箒、それは今日からおまえが使い」

「一体これは？」

「カードデバイス。わたしの世界は赤の世界、そのほかにも青の世界、黒の世界、白の世界、緑の世界が存在するうちの一つがおまえのロードクリムゾンの赤の世界になる」

「つまり、箒のパートナーにロードクリムゾンがなったってわけね」

「その通り。これで説明は終わり、ではな」

「行こうか」

赤の竜の巫女メイラルは箒に渡したカードデバイスに入っているロードクリムゾンは今日から使役できる存在だと言ってZ/Xの世界について簡単に説明して、ロードクリムゾンをパートナーゼクスとして迎え入れることになったのであった。

説明が終わったのでメイラルは異空間に帰って行ったのであった。

天夏達は各教室へ戻って行ったのであった。

「なんだよ!! あいつらは!! それも見ただこともないISまで!!」

基地で癩癩を起していたこの世界の篠ノ之束は無人機で襲撃したが、そこに仮面ライダー達とバッファローアーンデッドが出現し、ロードクリムゾンに乗り込んだ実妹の姿を見て怒りをさらけ出していたのである。

「あいつらのI Sを手に入れて見せる!! 絶対に!!」

完全に機攻殺剣を手に入れたのと、あの手この手で計画を阻止してくる次元武偵に怒っていたのであった。

その翌日、

「皆さん、急な集会ですが、今日から新しい先生がこの学校に来ます。どうぞ」

天夏達はいきなり全校集会になったので体育館に集まっていたのであった。

轡木が今日から新しい教員が入ることを述べて、紹介する教員に出番を回したのである。

この時、まさか天夏と弥生はあの人物が来るとは思っていなかったのである。

その人物は、

「えくと、今日からこのI S学園の保険医をする、鳴流神龍美です。皆さん、宜しく願い致します」

『なんで龍美姉が来るんだよ（。D。）ノ』

『ボクが知る訳ないでしょ（。D。）ノ』

完全な白衣姿の黒髪をポニーテールに束ねている鳴流神家長女の龍美が保険医として赴任してきたのであった。

従弟の天夏はもちろん顔見知りの弥生も念話で驚いていたのであった。

絶剣と模擬戦

天夏と弥生は会議室で事情聴取と織斑千冬が解析を建前に機攻殻剣を要求してきたが、ヴェスタWSCの使いとして龍臣がスーツ姿でやって来て織斑千冬の要求を却下したことが気に入らなかつたのか、織斑千冬はまたもやかつとなつて龍臣を襲つたのだが、龍臣は元時空管理局員の経験で培つた戦闘術で投げ飛ばして織斑千冬を地に伏せたのであつた。

それから翌日の今は何と龍美が白衣姿で保険医で赴任してきたのであつた。

「で!! なんて龍美姉が赴任して来るんだ(。口。口)ノ!! 幾ら医師免許持つてるからつて、まだ18だろ!!」

「天夏、ここでは鳴流神先生ですよ。それに理事長が医師免許持つてるから採用した」「いいじゃない。それじゃあ鳴流神先生」

天夏と弥生は休み時間を使って保健室に居る龍美に会いに来ていたのであつた。

龍美は従弟とはいえ先生と呼べと言ひ、普通に履歴書を書いたら採用されたということだったので弥生は納得してしまつたので保健室を後にしたのである。

「ねえ、天夏のお姉さんなの?」

「父方の従姉妹だ」

「そうなんですのΣ（。D。） そういえば、以前にお会いした男性も」

「その人の妹だよ」

「わかったわ。あの人には絶対、攻撃しちゃいけないってことは」

「ISですら、竹刀で機能停止するくらいだし」

「竹刀で（。D。）ノ そういえば昨日のヴェスタWSCにわたしが所属することになったが」

「いいんだよ。それにおまえのそのカードデバイスは竜の巫女に選ばれた物しか扱えない代物だ」

「箒以外が使えないってことね」

保健室から出てきた天夏と弥生は廊下で箒達と遭遇したので教室に戻る道中で龍美の関係を質問されていたのであった。

天夏と龍美が従姉弟同士であり、以前のクラス代表決定戦時に来た龍翔が龍美の実兄だと明かすと鈴は納得したのである。

ISを竹刀若しくは素手で破壊または機能停止にできるほどの実力を兼ね備えていることを天夏が言うのと、箒が驚き、そして、自分がヴェスタWSCに所属してもいいのかと質問してきたので、天夏は問題ないこととカードデバイスが使える人間は限られて

いると明かしたのである。

「今日は二組との合同訓練だ!! 早速、専用機持ちに模擬戦を行ってもらおう」

「天夏と弥生と箒とはやってみたいのよね」

「甲竜とか、楽しみだな」

「誰がおまえらとやると言った!!」

「R I D E」

「退いてくださいΣ(。Д。)」

「山田先生。何言ってるんですか?」

「朝宮!!」

龍美が赴任してきた翌日は一組と二組の合同訓練だったようで専用機を持っている者が模擬戦を行うことになったのだが、鈴は天夏達とやると思っていたが織斑千冬の独断でこの世界の山田真耶がラファールを纏ってそのままアリーナ目掛けて落ちてきたのが織斑千冬よりも先に気が付いた弥生は機攻殻剣を抜刀して装甲機竜を纏い落ちて来る山田真耶をお姫様抱っこで抱えてゆっくりと降り立ったのであった。

パラレルワールドのセシリアと鈴の模擬戦

模擬戦をすることになり専用機を持つている天夏達の誰かが山田真耶と行うことになったのであった。

それを見ていた第一茶熊学園一行は、

「あれがISなのか？ 大きすぎて戦いにくいだろ」

「流石、現役の仮面ライダーだな」

「そんなことより始まるみたいです」

「なんだよ、天夏と弥生じゃないのか？」

甲竜とブルーティアーズの二対一の模擬戦を見ることになったのであった。

「どうやって見てるかと言うと映像のルーンで水晶玉の魔法のように見ていたのであった。」

「なるほど、わたくし達も甘く見られたものですね」

「言っておくが山田先生は日本代表候補生になったことが・・・」

「それがどうしたんですか？ それよりもスゴイ存在はたくさんいますよ」

「貴様ら!! (ふん、精々今のうちに調子に乗っければいい)」

セシリアと鈴がペアを組むことになったので、天夏と弥生と箒は一般生徒と一緒に観客席に座っており、セシリアと鈴はお互いに専用機を纏って準備万端といった感じだったので模擬戦を開始したのである。

「あいつら、あれから上達してるな」

「そうじゃないと、面白くないよ（〽）（〽）」

「……」

「（ハ）は」

「もらいました!!」

「（終）わったな」

観客席からセシリアと鈴の模擬戦を見ていた天夏と弥生は一緒に特訓していたこともあってかなり実力を上げていたことに気が付いたのである。

ほかの生徒は物珍しそうに専用機が戦っているアリーナを見ていたのであった。

セシリアは何かを閃いたようで、狙撃の構えに入っている山田真耶に向かって天夏が叩き折ってしまった小太刀「インターセプター」の代わりにもらった日本刀を呼び出して、抜刀の構えのまま特攻していったので、狙撃の構えを取っていた山田真耶が引き金を引いたので、織斑千冬はブルーティアーズのSEが0になったと思ったのであった。

それが間違いだとわかるのはそう時間は掛からないのであった。

「すみません、山田先生、撃ち抜いたのはわたくしの残像ですわ」

「え？」

「アンタ、いつの間に剣術がうまくなったのよ？」

「鈴さんが来る前に天夏さんと弥生さんと箒さんに手ほどきを受けただけですわ」

「(ブルーティアーズにはそんな機能は!!)」

態と抜刀の構えのまま加速したと思わせて、セシリアは自身が狙撃型の銃使いのノウハウと天夏と弥生との特訓の成果で山田真耶に残像を見せてそれを撃たせて自分は死角になる銃使いにとって厄介な利き手側から攻撃して模擬戦を勝利してみせたのであった。

まさか一生徒に負けるとは思ってなかった織斑千冬は鳩が豆鉄砲を食ったようになっていたのであった。

『綺凜との特訓が役に立ったな』

『そうだね』

どうやら天夏と弥生はアンジールとジェネシスからの特訓とは別に天然理心流以外で刀藤綺凜と一緒に特訓したことをセシリアと箒に伝授していたのであった。

オリハルコンエレメントの説明と朱音の日常

二対一だったとはいえ元日本候補生の山田真耶に勝利したセシリアと鈴にほかの生徒は驚いていたのであった。

まさかの展開に織斑千冬は頭を抱えていたのだから。

その後の授業は相変わらずの通常の訓練が行われたのであった。

「ねえ、アンタ達のあの機能はすごいわね」

「そうですわね、あれもヴェスタWSCの技術力なんですの？」

「違うよ。元は別の所の技術だったのをヴェスタWSCがいろいろ提供して使わせてもらってるものだよ（流石にBOARDのライダーシステムを応用してるとは言えない）」
「敢て、その会社は聞かないことにしよう。織斑先生の事だ。またその会社に迷惑をかけるからな」

天夏と弥生は訓練が終わって更衣室に行くふりをして自分達しかいないことを確認して、インテリジエントデバイスでオリハルコンエレメントを出現させて通り抜けて制服に着替えたのであった。

通り抜けた後、オリハルコンエレメントは消滅したので、そのまま教室へ戻ることに

したのである。

セシリアはオリハルコンエレメントを最小するヴェスタWSCに興味を示していたが、弥生が元は敢てBOARDと言う社名を伏せて説明して、鈴とはクラスが違うので教室前で別れたのであった。

「天夏と弥生と二人つきりてのは仕方ないわね。さてアタシもお仕事しないと」

「あら、朱音、出かけるの？」

「そうだけど？」

「お使い頼めるかしら？」

「いいわよ」

「これを超神次元ゲームギョウ界のラストイシヨンの龍月の所に。作りすぎちゃったから、越訴わけで持つてってほしいんだけど」

「それじゃあ行つてきます!!」

「あの子が此処に来てから明るくなったわね、母さん」

「そうね、元の世界でISの所為で本当の親が離婚した上にそれで一回命を落としちゃったんだもん。だけど、あの子は立派なこの明神家の娘です」

軽井沢の実家に夏休みを利用して戻っていた朱音は宿題を熟しながら次元武偵として仮面ライダー龍騎として仕事をこなす日々を送っていたのであった。

朱音は午前中は宿題を片付けて、午後から武偵所に行くことにしていたので仕度を終えて玄関から出ようとしたところで現在の義姉の恵都に従姉の龍月に料理を越訴わけしてくれるように頼まれたので、朱音はちょうど武偵所に依頼を取りに行くところだったので、承諾して、料理が入ったプラチック製の容器が入ったビニール袋を受け取って、玄関を出て行ったのであった。

それを見送っていた恵都と義母の卯月は朱音は立派な明神家の一員だと言ったのであった。

赤い龍の仮面ライダーVS象のアンデット

実家から出発した朱音は朱色の背中に黒い蟻局を巻いた龍がデフォルメされたパークワンプと留め金が仮面ライダー龍騎のマークになっているアイテムパックをウエストポーチにして身に着けて茶色のブーツを履いて従姉になる龍月に料理を持って行くことにしたのであった。

「龍月お姉ちゃん」

「朱音、卯月伯母さんからの越訴わけだね。ありがとう、今日は依頼受けるんでしょ？」

「そのつもりよ」

「そういえば朱音指名の依頼が一件入ってるよ」

「本当ね。それじゃあ行つてきます」

「龍美ちゃんがあつちの世界に行つている間、ボク達がやらないとね」

無事に龍月が生活しているラスティション教会に到着して龍月が出迎えてくれたので渡すように言われていた料理を渡して、龍月から朱音指名の依頼が舞い込んでいると教えてもらったのでその依頼書を貰った朱音は早速取りかかることになったので、ラスティション教会を出て行ったのであった。

龍月はその依頼書に書かれていた内容を予め知っていたようなそぶりをしていたが、朱音はそれに気付いてなかったたのであった。

「此処が依頼に在った場所ね」

「きいいい!!」

「アンデットじゃないだけましか、変身!!」

《SWORD VENT》

朱音は依頼書に書かれていたラステーションの街はずれの廃工場にスクーター型バイクでやってきたのであった。

どうやら今回はアンデットではなくゲームギョウ界の魔物退治だったようで、朱音はいつもの通りにバイクのミラーにカードデッキを映してVバックルを巻いていつものポーズで変身宣言をしてカードデッキを入れて仮面ライダー龍騎に変身して、ドラグセイバーを呼び出して装備したのであった。

手慣れた感じで片っ端から機械の魔物を倒して行き、討伐完了した朱音は変身を解除しようとしたが、

「今度は真正正銘みたいね」

「おまえ誰だ? ブレイドじゃない!!」

「いきなり攻撃仕掛けてくるアンデットに名乗る名前はない!! (ないわよ!!)」

【朱音!! 気を付けて、このアンデッド、♣のカテゴリJ「エレファントアンデット」ね】

「つまり、こいつが上級アンデッド!! (だから龍月お姉ちゃん、言わなかったんだ)」

咄嗟に横に飛んで受け身を取った朱音を狙ったのは♣のカテゴリJ「エレファントアンデット」という象の上級アンデッドで人間体は大地と言う男に擬態して、絶対に勝てる時にしか襲ってこないという策略家な一面を持っているのだ。

「なるほど、ハンマーと鎖が武器か? (なのね?)」

《ADVENT》

「卑怯だぞ!! それもカード一枚で(。D。)ノ!!」

「不意打ちしてきたおまえが言うな!!」

【さあ、お覚悟はよろしいですか?】

「ひええっえっえ(。D。)ノ!!」

《FINAL VENT》

朱音はエレファントアンデットの得物を見てどういった戦術で攻撃してくるかわかったようで、バイザーにADVENTのカードを読み取らせて、無双龍「ドラグレッダー」になっているドラゴニック・デイセンダントが現れてそれを見たエレファントアンデットは腰を抜かして情けない悲鳴を上げるといふ醜態をさらし始めたのであった。

もちろんエレファントアンデットは逃げる気満々だったが時すでに遅しで、朱音は龍召機甲「ドラグバイザー」にFINALVENTの龍騎のシンボルマークのカードを入れて読み取ったのであった。

つまりこれが何を意味するかと言うと、

「はあつああつああ!! とりゃ!!」

「ああつああああΣ(。D。)!!」

「どか〜ん!!」

「封印できないか。まあ、此処ゲームギョウ界だから、良かった」

アンデットが不死の生命体だとしてもそれはBOARDのライダーシステムに対してであつて、仮面ライダー龍騎に対してはそんなことはないのです、朱音は独特の構えを取って飛びあがり、そのまま体をひねりながら回転して飛び蹴りの体勢になってドラグレッダーに変身しているディセندانトの力と自身の鳳凰天駆を合わせた「ドラゴンライダーキック」をエレファントアンデットに完全に攻撃できない斜め上からの角度からお見舞いしてエレファントアンデットは象のアンデットなのでかなり重いはずなのだがそのまま後方に飛んで行って、そして爆散したのであった。

朱音はエレファントアンデットの最期を見届けて半透明の立方体に触れてエレファントアンデットのラウズカードを手に入れて、そのまま報酬を貰いに武偵所にバイクで

向かったのがあつた。

白鳥の姉妹

♣のカテゴリージ「エレフアントアンデット」を倒した朱音はそのままバイクで武偵所に立ち寄って実家に戻って行ったのであった。

一方で、

「簪ちゃん!!」

「お姉ちゃん、うるさい」

「(。D)Cグスン」

更識姉妹も次元武偵の仕事を請け負うことになったようで、姉の楯無が妹の簪と一緒になのでシスコ丸出しだったので、簪は困り果てていたのであった。

IS委員会が無くなったことで専用機は今ではヴェスタWSCに預かってもらっており、今は仮面ライダーファムのカードデッキを所持しているライダーとして神姫として天夏達に負けないくらいに頑張っているのがあった。

「行くわよ!! 簪ちゃん!!」

「お姉ちゃん、早く、ベルト巻いて」

「そこは姉妹揃ってでしょ。(。D)ノ!!」

「わかった」

更識姉妹「変身!!」

更識姉妹の仕事先はあの敵味方に難があるあの世界だったのであった。

ついて早々にまたあの集団が襲っていたので、更識姉妹は近くにあつたカーブミラーにファムのカードデッキを映して腰にVバックルが巻かれたのを確認して姉妹揃って仮面ライダーファムに変身して現場に向かったのであった。

「もう!! やだ〜!!」

「ふあははあはあ(〽)〽(〽)!!」

《SWORD VENT》

「この音声は、ああまたあの蝙蝠仮面!!」

「今度は白鳥よ!!」

「この前の蝙蝠と同じく飛行能力も兼ね備えてるのか」

観束総二が変身したテイルレッドとバリアジャケットを纏っている愛香が戦闘中だったようで、エメリアンと呼ばれる怪人らしき存在がいたのだが、それに悪戦苦闘していた所に更識姉妹が変身した仮面ライダーファムがSWORD VENTのカードでウイングスラッシュというウイングランサーの対になる槍を呼び出して装備して助太刀に駆けつけたのであった。

今回の怪人はザリガニのような二足歩行の怪人による数の暴力と言った感じだったのである。

バリアジャケットを纏い始めたばかりなので愛香も苦戦を強いられていたようで、そこに更識姉妹がやってきたのであった。

約一名、トウアールを除いて喜んでいたのは言うまでもなかった。

「また!! ツインテイルズ無双を邪魔するんですか。(。D。)ノ!!」

「どう見たって、こつちの方がかっこいいじゃない!!」

「簪ちゃん、もう決めちゃう?」

「うん」

《FINAL VENT》

「きええつええ!!」

「行くわよ!!」

流石にこんだけの数を相手にするのはこうするしかなかったらしく更識姉妹は一気にかたを付けるために羽召剣「ブランバイザー」の、見た目は完全なナイトの翼召剣「ダークバイザー」の白Versionに仮面ライダーファムのシンボルマークのカードを入れて読み取ってブランウイングが飛んできて突風を起してザリガニ怪人部隊を更識姉妹のいる所に吹きとばして更識姉妹はウイングスラッシャーで飛んでくるザリ

ガニ怪人を斬り捨てて行ったのであった。

光の力

ツインテイルズに加勢に駆けつけた更識姉妹の変身した仮面ライダーファムによって敵は一掃されたのであった。

「あゝツインテイルズ無双がゝ」

「あゝ!!」

「誰、わたしは更識楯無」

「更識簪」

「わたしは神堂慧理那と言います。一つ折り入ってお願いがありました」

「この・・・」

「更識さん達と同じ仮面ライダーにさせてください(☆ー☆)!!」

「どうしてドンドコドーン(・ω・)」

「普通に言いなさい!!」

銀髪の女性、トウアールはまさか自分が作ったテイルギア無双を思い描いていたように更識姉妹の登場によってまさかの展開に思い通りに行かなかったので落ち込んでしまったところに、金髪碧眼の小柄な少女で以前にスマレと朱音が助けた神堂慧理那が現

れて、トウアールが目を光らせてやってきたが慧理那自身は何と仮面ライダー志望だったのでもた落胆してしまったのであった。

それから三日が過ぎたのであった。

「ゴールデンウイークか」

「天夏さん達はどくなさるんです？」

「日数を考えると、一旦、実家に帰ろうか考えている」

「京都と岡山付近だもんね」

「そうか、一度二人の家族に会ってみたかったんだが」

「それじゃあ、ゴールデンウイーク明けに」

天夏と弥生はこの世界でゴールデンウイークを迎えることになったのでこれを利用して一旦帰還することになったのであった。

流石にパラレルワールドから来たとは言えないので箒達には言わずゴールデンウイーク明けにと言つて外出届けを出してIS学園を後にしたのであった。

「お帰りなさい!!」

「叔母さん、その前に言うことあるだろ？」

「別にいいじゃない、時間はこつちじゃ時間の流れは違うんだから」

「わかったよ。今回の仕事の目的は向こうで」

「それもあるけど、実は向こうの世界に光の力を持っている子がいることが判明したの」
「それって」

「そう、あなたよ。弥生、あなたは一度死んでしまったことで光の力が覚醒できなかつたから、光の力が並行世界の弥生、つまり、篠ノ之箒に宿っているのよ」

「なるほど。向こうの世界での目的はあっちの世界の弥生である篠ノ之箒を保護する」

「もし覚醒した場合は、天夏達の一存に委ねるわよ」

「わかりました」

天夏と弥生を出迎えてくれたのは剣心だったので、天夏は並行世界のIS学園に入学させたことを問い詰め出したので、剣心は飛ばした理由を話すことにしたのであった。

それは、元は弥生が篠ノ之箒だった頃に持つていた光の力が一度死んだことで並行世界の自分である篠ノ之箒に移ってしまったことを告げられたのであった。

それを聞いて天夏と弥生は何か気が付いたのである。

剣心は光の力が覚醒した場合、天夏と弥生に判断を委ねると言って話を終えたのであった。

カイザの所有者

天夏と弥生が帰還して来て剣心から並行世界の弥生こと篠ノ之箒に弥生が本来持っていた光の力を弥生が篠ノ之箒として一度死んでしまったことで、覚醒しないはずの並行世界の篠ノ之箒に移ってしまったのであった。

なので赤の竜の巫女にカードデバイスを使う権利を手に入れたのはそれが理由だったのである。

「あ、天夏と弥生!!」

「朱音!!」

「ボク達もいるよ!!」

「この前はお互い忙しかったからな」

「剣崎さんも協力してくれたから、無事にアンデットを封印できたし、急がないと」

「ああ、こつちと向こうじゃ、時間の流れが違うからな」

「仕事終わったら、一緒に食事でもどうかしら?」

「うん!!」

こつちと向こうの世界では時間の流れが違うのは当然で天夏と弥生が向こうの世界

で軽く一か月くらいも暮らしているのだが、こつちではまだ五日しか経ってなかったのである。

なので天夏と弥生は急いで戻ることにしたところにスマレ達が出来て来て、天夏と弥生の仕事が終わりに次第一緒に食事をする事にしたのであった。

天夏と弥生は向こうの世界の I S 学園に戻って行ったのであった。

「戻って来たけど」

「ゴールデンウィークの半日は経ってるね」

天夏と弥生は仕事先になる世界の I S 学園の寮に戻ってきて時間を確かめるとやはり自分たちの世界の方が時間が経つのが遅かったのであった。

「なるほど、それは立花が使うことになったのか」

「はい」

「響が変身するのは慣れたけど」

「それがどう言った仕組みであれを纏うのかわからないが、しばらくはそのベルトは立花が使うことでいいな?」

「はい」

龍美によって仮面ライダーカイザに変身させられてそのままカイザギアを貰ってしまった立花響は現在、特異災害対策機動部二課の基地に集められて変身した経緯を説明

していたのであった。

話を聞いていたのは風鳴翼の叔父になる風鳴弦十郎という屈強な体躯の持ち主で立花響達に戦闘術を叩き込んでいる人物で、鳴流神一家とは面識があるので、カイザギアの事はすんなりと受け入れたようで、様子見としてカイザギアは立花響が所有することになったのであった。

「そのガラケーに入れるパスワードが響の誕生日と同じだしな」

「偶然にもそれはそれですごいな」

「ほかに、ファイズ・デルタ・サイガ・オーガのベルトがあるらしい」

「って、なんで知ってるんですか。(。D。)ノ!!」

「ああ、龍美に直接聞いた」

銀髪の少女こと雪音クリスはカイザフォンに入力するナンバーが「913」だったので、響の誕生日と同じらしく、当の本人も呆れるほどで、そこに弦十郎はファイズギアなどがあると明かすと響達は驚いていたので、弦十郎は以前に龍美からライダーシステムの事を教えてもらっていたのであった。

パラレルワールドのなぎさ（ラウラ）&星奈（シャルロット・デュノア）

天夏と弥生が向こうの世界に戻って行った頃、五反田弾はいつも通りに実家の定食屋を手伝っていたのであった。

マスクドライダーガタツクの資格者だったが、今はそれを返上して民間の協力者としての妹の蘭と家族で暮らしていたのであった。

「お兄、この前の人って」

「確か、人類基盤研究所の橘さんだっけ」

「うん、その人、仮面ライダーなんだってさ」

「ああ、確か、仮面ライダーギヤレンだったな」

「喜ぶと思ったのに」

「オレは今のままでいいと思ってるからな」

五反田兄妹は以前来店した橘朔也のことを話していたのであった。

橘朔也が仮面ライダーギヤレンの変身者であると友達になった美龍飛達から聞いていたので兄の弾に教えたのだが、弾は普段通りの生活の方が大切だと言ったのであつ

た。

それもそのはず、ISが誕生してから女尊男卑の世になってしまった世界だったが、それがまるで嘘のように、IS委員会が崩壊して、ISが普及しなくなり、女尊男卑が薄れ始めてきたのであった。

そんな中で知り合った年上だが布仏虚とは時間さえあればデートに出かけるほどの中になっているのだ。

そんなこんなで向こうの世界のゴールデンウィークが終わったのであった。

「皆さん!! このクラスに転入生が二人来ます」

『この世界の星奈と』

『なぎさだね』

【シャルロット・デュノアとラウラ・ボーディツヒだったな】

【星奈様兎も角、なぎさ様は全く別人と思った方がいいでしょう】

並行世界のIS学園でのゴールデンウィーク中は家族から必要な物は次元転送で送ってもらったりとしていただけで、後はいつも通りに過ごしていた天夏と弥生だったが、クラスに二人の転入生が入って来るとこの世界の山田真耶から宣言されたので、天夏と弥生は念話でこの世界の星奈である容姿は全く変わらない「シャルロット・デュノア」、そしてこの世界のなぎさであるドイツ軍兵士「ラウラ・ボーディツヒ」だろうと考

えていたのであった。

そして、

「どうも、シャルル・デュノアです」

「ボーデヴィツヒ、自己紹介をしろ」

「はい、ラウラ・ボーディツヒだ」

クラスの女子一同「キャアあつアア（>|<）！！ 三人目の操縦者よ（>|<）！！」

『だめだ』

『女の子なのに』

【仕方ないですよ。弥生様】

【嫌な予感が】

『もちろん』

「ん？」

一人はこの世界の星奈と一目でわかる男装している「シャルロット・デュノア」とな
ぎさであるがこの世界でのなぎさはドイツ軍所属の兵士「ラウラ・ボーディツヒ」な
だ。

どうやら第三の男子操縦者としてIS学園に転入してきたようで、クラスの筈とセシ
リア以外が興奮していたのだが、天夏達はとつくに気づいていたので、敢て言わないで

いたのだ。

ラウラ・ボーディツヒが真つ直ぐ一夏の元へ向かつて行ったので、天夏達は、

「バシツ!!」

「貴様!!」

「あのさあ・・・初対面の人に向かつていきなり殴りかかる方がどうかしてるけど（、

——☆」

「!! チツ!!」

「織斑先生、良い加減に担任としての責任を果たしてください」

「・・・」

ラウラ・ボーディツヒが一夏に殴る掛った腕を弥生が掴んで、なのは直伝のO☆H A ☆N A ☆S I Oーラでラウラを席に着かせて、天夏は担任としての責任を果たせと織斑千冬に言ったところで授業が始まるのであった。

新たな陰謀の幕開け

天夏と弥生がいる並行世界の I S 学園にラウラ・ボーディツヒとシャルロット・デュノアの二人が転入してきたのであった。

この二人こそ並行世界のなぎさと星奈の二人なのである。

「では、実技訓練を行うから、I S スーツを忘れた者は、下着でも構わん!!」

『おい。男がいること忘れてないか?』

『この人には基本は何言っても言うこと聞かないからね』

どうやら早速だが授業が行われることになったが、織斑千冬が爆弾発言を真顔で発言してしまつたので、この世界の数少ない男性操縦者二人は呆れてしまい、アリーナに向かったのであった。

「はあく何言ってるんだ、あの教師は」

「同じ女性として恥ずかしいです」

「これで教員免許が取れた者だな（・ω・）」

第一茶熊学園や異世界の協力者達は織斑千冬の爆弾発言を聞いて流石に呆れ帰っていたのであった。

女子一同「きゃあっああ（～／＼）」

「シャル!!」

「え（；。□。）」

「一夏には悪いがオレ達は行かせてもらおうぜ」

実技訓練の為にアリーナに向かう廊下で女子達に追いかけていた天夏達はシャルロットを弥生が軽々とお姫様抱っこで抱えて、天夏もそれに続くように開いている窓から外へ脱出したのであった。

「どうやら抜け出せたみたいだな」

「ああ、このまま更衣室には行かずに」

☒TURN UP☒

「え（；。□。）!!」

「シャル、この事は内密にしてね（～——）——☆」

「うん」

なんとか脱出した天夏達は先にアリーナに向かっていた箒達と合流して天夏と弥生がオリハルコンエレメントを展開してそのまま突っ切って天夏と弥生がモーシヨンスリットに、箒達がISスーツに一瞬で着替えてそのままアリーナに入って行ったのであった。

弥生はシャルロットが男子として偽って転入してきた理由などをつくりに見抜いていたのであった。

「遅い!!」

「天河達が一番乗りだったからな」

「おまえらく、く、く!!」

「自業自得だ」

一番乗りは天夏達だったようで一番遅れたのは一夏一人だけで姉の織斑千冬に叱られていたのであった。

「では、専用機持ちは、一般生徒に教えるように!!」

『コミュ障の箒は大丈夫かな?』

『慣れるしかないだろ』

今回の実技訓練は専用機持ちが教えることになったので、皇帝竜ロードクリムゾンはやんちゃとした赤の世界の生きた竜なのだが、ISと一言することで箒もヴェスタWSCに保護される形で天夏達と同じ専用機持ちとして授業を受けることになったのであった。

その後授業は天夏とシャルロットは分かりやすく、弥生はドラゴニック・オーバードロードに怒られながら教えて、箒はロードクリムゾンの助けを借りながら教えたのであった。

セシリアは丁寧すぎてしまい、鈴に至っては取り敢えずやってみるといふスタンスで一般生徒を教えていたのであった。

ラウラは完全に軍隊のような教え方になっていたのであった。

一夏は、案の定、織斑千冬に怒られていたはの言うまでもなかった。

部屋移動

織斑千冬の爆弾発言から始まった半日が過ぎ、天夏と弥生はいつものようにお弁当を持参して屋上に来ていたのであった。

「天夏と弥生はなんでもできるわよね」

「そうかな？ これくらいはいつもの事だし」

「何を言ってるらっしゃるのですの!!」

「あの料理下手のセシリアを此処まで育て上げる實力を持っているのだぞ」

「確かに」

「料理もやってみないと身につかないものだしな（織斑千冬は全くできないが）」

向こうでも仲間達と妹達と一緒にこうしていることが多いので天夏と弥生の周りには自然と集まってしまうのである。

「（あれは見間違いだな）」

「箒、どうした？ なんか言いたそうだな？」

「いや、少し考えていただけだ。気にするな」

「箒さんがそう言うのでしたら、これ以上は問いませんけど」

「そうしてくれると、助かる（鏡に映った自分の顔に金色の二本の角に赤い目の顔が重なったとは言えん）」

箒は何かを考えていたようだったので天夏が聞くと考え事をしていたと言つてセシリアたちもそれに応じたのであつた。

そんなこんなで今日の授業が終わつたのであつた。

「織斑君、お引越しです」

「はい」

「同室になる人に迷惑は掛けるなよ」

「箒……」

授業が終わつてしばらくして一夏&箒の部屋に山田真耶がやつて来て部屋の移動の指示を出してきたので、一夏に向こうでも迷惑は掛けるなと箒は釘を刺して一夏は荷物を持つて行つたのであつた。

「……だね」

「オレの中には入らない方がよさそうだ。この世界のデユノア社の事を調べさせてくれ」

「お願い」

「はーい。ちよつと待つてて」

「あ、分かった」

一夏が部屋移動を命じられている頃一足先にシャルロット・デュノアの部屋を訪れることにした天夏と弥生だったが、男である天夏が入るのは不味いのでノックは弥生がして天夏は今いる世界のデュノア社の事を調べて、ヴェスタWSCか法王オズマにでも協力を仰ぐことにしたのであった。

部屋の中からシャルロット・デュノアの声が出たのと微かだが水音が聞こえていたのでシャワーを浴びているらしく、部屋の前で待つこと数分、

「確か、同じクラスの、どうぞ」

「それじゃあ、お邪魔します」

部屋着に着替えた並行世界の星奈ことシャルロット・デュノアが部屋に入ってもいいと言ったので、弥生は部屋に入ることにしたのであった。

『星奈は全く変わってないからね。こっちの世界でも一緒の顔だね』

【星奈様の元が良かったのですから】

「さてと、ねえ？ シャルル、それとも「シャルロット」って呼んだ方が良いかな？」

「!! どうしてΣ(。D。)!!」

「だって、お姫様抱っこで抱えて助けたのは誰だと思ってるの?」

「あの時に気づいてたんだ」

「別に話さなくても、目的は織斑一夏のI S「白式」のデータでしょ？ ついでに天夏の「リアル」と」

「うん」

部屋に通された弥生はテーブルの前に座って念話で相棒のドラゴニック・オーバードと話して、自分たちの世界でも星奈だけが性格などが全く変わってなかったの、今いる世界でもシャルロット・デュノアとしての星奈だと認識したのであった。

そして、弥生はいつもと違って真剣な顔になって「シャルル」と一旦読んで、「シャルロット」と呼び直したのであった。

それを聞いた当の本人は驚いていたのは無理はない実父が情報操作して男として転入させられたのだから、知っているのは実父とその関係者しか自分が「女」であることは明かされていないはずなのだ。

だが、実技訓練に行く際に女子達から脱出する際に敢て天夏ではなく、弥生が自分をお姫様抱っこで抱えてアリーナに向かった理由が気に掛かっていたのであった。

一目で自分が女であることに天夏と弥生は気づいていたのだから。

弥生から本当の目的である、織斑一夏の白式と天夏の機攻殻剣「リアル」のデータを盗み出すことも弥生にお見通しだったのでシャルロットは観念したのであった。

「これからどうしたい？」

「多分、強制送還されて牢屋の中だね」

「そのまま、実父の捨て駒に成り下がる訳じゃないよね」

「どうすればいいの(T|T) / ~ ~ ~」

「天夏が今、会社に相談してもらっているから」

「え？」

「まだ、時間はあるから、どうしたいか、気持ちの整理の時間がシャルに必要なだから、整理がし終えたらボクと天夏に教えて」

「うん(〇〇グスン」

弥生に全てお見通しだったのでシャルロットは強制送還の恐怖に怯えていたが一応 I S 学園の制度に三年間だけこんなことがあっても干渉できないという項目があるがそれではシャルロットは実父のトカゲの尻尾切りにされてしまうのである。

そして、シャルロットは弥生に涙を流しながら泣きついたのであった。

弥生は星奈も「シャルロット・デュノア」だった頃に同じ目に遭っていたからほっとけないのだ。

弥生は、天夏が所属先のヴェスタWSCやラタトクスなどに掛け合っただけでなんとかしてもらっていると告げるとシャルロットは泣き止んだのであった。

しばらくは様子見と気持ちの整理が必要だということと弥生はシャルロットに答え

を待っていると告げたのであった。

ラウラの暴走 I

並行世界の I S 学園に「男」と偽って転入してきた「シャルル」こと「シャルロット」は愛人の子であるためか実父からの命令で第三世代の I S のデータを入手するという計画に利用されて危うくトカゲの尻尾切りをされる寸前に弥生と天夏がこの世界での仕事を行うことにしたのであった。

「さてと、ボクは部屋に戻るね」

「ありがとう。弥生」

「うん」

弥生はそろそろ自室に戻るとシャルロットに告げて自室に戻って行ったのであった。

それから数分後織斑一夏がやってきたのであった。

それから数日が過ぎようとしていたのであった。

「どうするんだ？」

「トーナメントだよな？ 此処は別の人と組んだ方がいいよね？」

「オレはそれでも構わないさ」

「オーバードロード。おまえと刃を交える時が楽しみだな」

【ええ、此方もお相手させて頂いていただきます】

学園内ではクラス別トーナメント大会の事で盛り上がりつつあるようで、天夏と弥生は二人でトーナメント大会には別の人と組んで出場することにしたのであった。

今はアリーナのバトルフィールドで特訓をしているのだが、

「クリムゾンとレアルとオーバードって何でもありなのよね？」

「そうだよ!! 遠近中なんでもありだしね(――)――|☆」

「それにどう対処するかが今回の課題ですわ」

装甲機竜とカードデバイスからロードクリムゾンを装甲機竜並の大きさで召喚してオールラウンダーな武装を装備している天夏・弥生・箒相手にどう立ち回るか、一年生の課題らしく、それに加えて、マルチウエポン使いのシャルルがいるのだから、セシリアと鈴が悩むのは無理はないのだ。

そこに、

「おい!! 織斑一夏!! わたしと戦え!!」

「なんでだよ!!」

「わたしには」

「その生徒!!」

「もうそんな時間か」

「待ってくれΣ（。D。）」

ラウラがシュヴァルツ・レーゲンを纏った状態でやってきて、一夏に自分と戦えと要求してきたが一夏は拒否したところで、管制室から教師の声がしたので、天夏達は利用時間が終了寸前かと言つてそのままアリーナを出て行ったので、一夏はそのあとを急いで追いかけて行ったのであつた。

「あの子が、生前のなぎさか、織斑千冬を崇めるが故の暴走か。さてと、ボクは保健室に戻らないと、うるさい人がいるしね」

天夏達が去つていったアリーナを屋根の上から白衣に黒いTシャツに薄手の紺色の長ズボンを履いた姿でラウラ・ボーデヴィツヒを見ていた龍美はラウラがなぎさの元の人物であることを改めて認識して、保健室に転移したのであつた。

教師としての&ラウラの暴走Ⅱの段

ラウラの宣戦布告からこの世界で二日が経って、朱音達も各々に仕事を夏休みを利用して向こうとは時間の流れが違うらしく向こうの世界で一日が過ぎている頃は朱音達の第二茶熊学園の世界はまだ一日も過ぎてないのであった。

「神堂さん、頑張ってますね」

「はい!! もちろん!! いつかわたしも、越されましたが、仮面ライダーのようなヒーローになりたいので!!」

「小さい身体だが、中々筋がいい、いつもの通りに鍛錬を続ける」

「ハイ!!」

「おまえ達は、これから仕事か? 朱音、聞いたぞ、単独での上級アンデッドを討伐した

らしいな」

「ありがとうございます。でも、まだまだ、仮面ライダー龍騎として始まったばかりですから!!」

フラクシナスのトレーニングルームで特訓中の学年が朱音達より上なので、朱音達は敬語で話している神堂慧理那は小柄な体躯と言うデメリットにも屈せずアンジールと

ジエネシスの訓練メニューを片っ端から熟しているのを見て、朱音達は各自の仕事へ向かったのであった。

「茶熊学園での体験は良かったようだね」

「はい。わたし達にとってかなりいい経験になりました」

「うむ」

ゴツドイーターの仕事に戻っているアリサ達はサカキ博士に茶熊学園のことを報告していたのであった。

そこでサカキ博士は剣崎一真が仮面ライダーとして戦っていることを聞いて、使っていたライダーシステムを応用できないかと内心で考えていたのであった。

一方で、

「最近鈴がよく来るな」

『女性としてマスターのプロポーションに憧れているのですから』

「アドバイスが良かったのかな？ 鈴、成長し始めたし」

『当の本人が喜んでいるんですからいいじゃないですか』

天夏と弥生がクラス別トナーメントに向けて特訓している頃、保険医の仕事をしている龍美はインテリジェントデバイス「バゼル」と話をしていたのであった。

どうやら、鈴が弥生を始めに自分よりスタイルがいいのがコンプレックスらしく、そ

れに悩んでいたらしく、清水の舞台から飛び降りる勢いで龍美に相談を持ち掛け、それ以前に、弥生にもそれを克服するために試行錯誤してもらったことで、今ではセシリアには負けるが理想の体型になりつつあると鈴自身が龍美に教えに来るのであった。

一通り片付けた龍美はアリーナに向かったのであった。

「こうして、こう？」

「そうです」

「セシリアのブルーティアーズって確か、遠距離武装が多いのに」

「鈴さんが来るまで、天夏さん達に接近戦の手解きを教えてもらってましたから」

「まさか、相手の武器を奪って、それ使うって、天夏達にしかできないわね（・ω・）」

アリーナではセシリアと鈴が接近戦の特訓をしていたのであった。

セシリアは天夏達に軽く教えてもらった程度だが、鈴が納得する位らしく、天然理心流の内、剣術・体術・小具足術を主に学んでいたようで、弥生がクラス代表決定戦の際に見せた相手の近接武器を奪い取って攻撃するという柔術を鈴に教えていたのであった。

鈴も話を聞いて天夏達にしか思い付かないカウンター技だと評価していたのであった。

「ちようどいい、おまえ達、肩慣らしになつてもらうぞ」

「悪いけど、アンタの八つ当たり構っている暇はないのよ、やりたかったら、一夏とやつてなさいよ!!」

「そうですわね。では」

「ふざけるな!!」

「何が、ふざけるな・・・だつて」

「鳴流神先生（。Ⅱ。）ノ!!」

「二人とも気が立つてる相手に不用意に背を向けちゃダメ。そんでもつて」

「カキーン!!」

二人はほどほどに特訓した後、立ち去ろうとしたところで、ラウラがやって来て、二人に一夏同様に戦うように要求してきたが、以前の二人だったらラウラの挑発に乗っている所を、鈴が、構っている暇はないと言い捨て、セシリアと出入り口目指して回れ右をしたところで、鈴に言い負かされたラウラは血が上ったのか軍人らしからぬ、ISを展開して襲い掛かろうとしたが、ラウラと鈴達の間を風が物凄い勢いで通り抜けたと思つたら地面に何かが通つたような轍が出来て、ラウラのISによる攻撃をいとも簡単に実妹「龍姫」から譲り受けた神代三剣の一振り「天羽々斬」で受け止めて、鈴達に不用意に敵に背を向けないと注意した時だった、龍美は特に気づいていたのだから。

何者かが龍美目掛けて斬りかかって来たのだ。

甲高い金属音がなった瞬間、

「I Sの剣が（。D。）ノ」

「貴様!!」

「織斑先生、以前こう言いましたね、「自分の質問には、「YES」以外の答えは許さない」と、自分の答えは、NOです。教師として、暴力でしかわかり合えないあなたは教師失格です!!」

「貴様!!」自分が何を言っているのかわかっているのか!!」

「ええ、もちろんです。織斑先生は「どんな理想も、人の気持ちを無視して押し付けている意味のない」我儘ですよ。今日は大人しく帰ってね」

セシリア&鈴「ありがとうございます」

I Sの剣が見事に真つ二つにされて地面に刀身が刺さっていたのであった。斬りかかって来たのは、織斑千冬だったのである。

龍美にいともしつに自分の攻撃が無効化されたことに腹を立てていた織斑千冬に龍美は教師として間違っていると叱咤したのであった。

だが、織斑千冬は龍美に叱咤されたことが気に食わなかったが、龍美はいつもの明るい保険医の顔ではなく、少しだけ、戦う顔になって、織斑千冬を圧倒して見せたのであつ

た。

龍美は、鈴とセシリアに部屋に戻るよう言い、二人は頭を下げて、アリーナを出て行ったのであった。

「貴様は18でありながら、わたしに」

「どうぞ理事長に話してもらってもいいですよ」

「このくらいにしてやる。次はないと思え」

「はい。いつでも再戦は受け付けてますので」

織斑千冬は龍美が18歳で医師免許を取っていることを完全に忘れており、龍美は全く相手にする気はないようで、織斑千冬は完全に龍美に敵意を向き出していたが、当の龍美が笑顔でリベンジを受けるととつびきりの笑顔で返したので織斑千冬は一瞬青ざめてアリーナを去っていったのであった。

「あの教師、血迷ったか。(D)ノ」

「完全に殺す気満々でしたね」

「あんなのが人にものを教えているのか。(D)ノ!!」

織斑千冬の行動は次元武偵に協力している異世界に配信されているので完全に証拠隠滅は出来ないようにしていたのであった。

組んでほしい

龍美が並行世界のなぎさである銀髪の眼帯の小柄な少女にしてドイツ軍少佐の肩書きを持つ「ラウラ・ボーデヴィツヒ」の暴走を一振りの日本刀ではじき返してそのまま頭上から襲撃した織斑千冬のISの剣を一刀両断して見せて、織斑千冬の反感を買ってしまったが龍美自身は全く持つて相手にする気はないのであった。

「織斑先生、いい加減にしてください」

「何故です!! あのような小娘を」

「言っておきますが、鳴流神先生はちゃんと飛び級で大学で医師免許を修得して数々の手術もこなしてきた人物ですよ。それにこれはどう説明するんですか?」

「それは・・・」

今現在、理事長室では織斑千冬が理事長の轡木十蔵に龍美を解雇しろと抗議していたのであった。

轡木十蔵は龍美の能力と性格を買っているので、解雇しようがないのであった。

それにこの世界がまだ女尊男卑の世であり、龍美のような分け隔てなく接することができる人材はそういないのであった。

それに轡木十蔵は織斑千冬にある物を見せて黙らせてたのであった。

「これ以上、何か起すというならば、織斑先生には辞めてもらいます」

「はい（あの小娘く、くく>>!!）」

それは、龍美を殺す気満々でI.Sの剣で兜割りを仕掛けている場面だったのである。映像は録画されていないはずと高をくくっていた織斑千冬には致命的だったのである。

これが表沙汰にすると言われて内心で龍美に苛立ちを隠しながら理事長室を出て行ったのであった。

「龍美姉、聞いたぜ。あのブリュンヒルデを軽くあしらったらしいじゃねえか」

「天夏さん。ここでは鳴流神先生ですわよ」

「悪い、いつもの癖です」

「しばらくは大人しくなるけど、問題は」

「ラウラね」

「あの子は、「戦うことですか、分かり合えない」って思ってるんじゃないかな」

「あれ？ 一夏は？」

一方で保健室では天夏達が集まっており、龍美と話していたのであった。

ラウラは織斑千冬に崇拜しているためなのか、自分を表現するには戦うしかないと決

めつけてしまう傾向なのだろうと考えていたのであった。

ふと、一夏がいないことに気付いた瞬間、

一年女子一同「天河君!! 織斑君!! わたしと組んで!!」

「助けてくれΣ(。D。)」

「一夏、おまえはいい加減に成長しろ」

保健室に一年女子一同が流れ込んで、それに巻き込まれる形で一夏が助けを求めていたが、箒が少しは成長しろと、諭したのであった。

「なるほどな」

「わりいな、オレは」

「アタシと組むから」

「それじゃあ、弥生さん、お願いしますね」

「大船に乗ったつもりで任せて(へーへ)」

「ボクは一夏と組むよ」

「そうしてくれ、こいつにはお前しか組めそうにない」

女子一同「いや〜ドンドコドン(そんなこと)Σ(。D。)!!」

「ほら、ここは保健室だよ。用が済んだら部屋に戻りなさい!!」

天夏と一夏が渡されたプリントにダググマツチでの参加になっていたことが記され

ていたので、天夏と弥生はアイコンタクトで、天夏は鈴と、弥生はセシリアと組むと、シャルロットは一夏と組むと言うと箒からお願ひされてしまったのであった。

それを聞いた女子達は両膝を付いてさっきまでの滑舌が嘘のように悪くなって落胆してしまつたのであった。

龍美に保健室から出て行くように言われた女子達はゾンビの如く出て行つたのであった。

天夏達も保健室から出て行くことにしたのだが、

「箒は残つてくれるかな？」

「話が済んだら、帰つて来いよ」

「ああ」

神姫である龍美にはお見通しだったようで、箒に残つてくれるように言つて、天夏達は寮に戻つて行つたのであった。

「やはり、鳴流神先生にはお見通しでしたか、実は以前、自分の顔を鏡で見た際に、金色の角のような物に赤い目の顔が重なつて映つたんですか」

「なるほど、天夏達には相談したの？」

「いいえ。見間違いだと思つていたので」

「取り敢えずは、この事は先生と間で内密にしておこうか、ごめん、呼び止めて」

「いえ、相談できて、助かりました。では、失礼しました」

「まさか、光の力があの子に移っていたのは本当だったんだ」

箒は何度かトイレなどで鏡を見た際に自分の顔と金色の角のような物に赤い目の顔が重なって見えることがあったと話したのであった。

龍美はその事を内密にするように箒に言って、箒はお礼を言って保健室を出て行ったのであった。

箒が出て行ったのを見届けた龍美は、買っていたペットボトルのお茶を飲みながら、天界から送られた資料を見ながら光の力が今いる世界の弥生である箒に移っていることを知ったのであった。

パラレルワールドのクラス別トーナメント

学年別トーナメントがダッグマッチとなったことを女子達から聞かされた天夏達は気にもせず、天夏と弥生はアイコンタクト一つで別々のペアを組んだのであった。

「何故だ」

「ラウラ。どうやらわたしと組むことになりそうだ」

「おまえは、篠ノ之束の」

「その通りだ。ラウラ、織斑先生に何を教わったかは知らないが、一つ教えておく、「自分が出来ないことは、他人に求めるのではないか?」とな、ある奴がわたしと一夏の目の前で堂々と言つてのけた言葉だ」

「いいだろう。おまえと組んでやる。ただし」

「ラウラが決めればいい、「力は所詮力でしかない。すべての判断は他の誰でもない、ラウラ自身が決めればいい」じゃ、クラス別トーナメント楽しみにしている」

「いいだろう。その言葉、わたしに言ったことは覚悟するんだな」

寮の部屋でラウラは一人で龍美にいともしも簡単に日本刀一振りを受け止められて何もできなかつたことに腹を立てていたのであった。

ISが最強というこの世界で、まさか日本刀一振りですべて完封する人物が現れるとは思ってなかったラウラにはショックだったのだ。

ISを兵器であると認識している点はいいのだが。

そこに箒が部屋を訪ねて来て、一緒に組むことになりそうだと言い、そして、弥生がクラス代表決定戦前に言った言葉と、天夏がというより、傭兵である男、リカルドから天夏に言った言葉を天夏から教わっていたようでそれを一字一句間違えないでラウラに言っただけで部屋を出て行ったのであった。

そんなこんなでクラス別トーナメント当日がやってきたのであった。

「本当にいろんな人が来てるんだな？」

「剣崎さん。きよろきよろしないでください」

「ごめん」

クラス別トーナメント当日は各国の著名人が集まっており、それに紛れて剣崎一真を含む朱音達が服装と髪型とサングラスを掛けて潜入していたのであった。

なぎさはとある場所で

「クジキリ」

【主よ】

「そうだったね（もう一人のわたし、ラウラ・ボーデヴィツヒ）」

黒色のアイテムパックからファイズギアを取り出していつでも突撃できるように陣取っており、クジキリコンゴウのAIが搭載されている人型に変形可能なオートバイ「オートバジン」に跨り待機していたのであった。

「一夏とシャルの初戦の相手」

「余程、運に見放されているな」

控室でオリハルコンエレメントを使ってモーションスリットとISスーツに一瞬で着替えていた天夏達は、一夏とシャルの初戦の相手が、ラウラ・箒ペアだったので、天夏達は一夏の運のなさに呆れるしかなかったのであった。

「行くぞ!!」 ロードクリムゾン!!」

【うむ】

「何!! 全身装甲だと(。・。・)」

「説明は後だ」

ピットで準備をしていた箒は順番が回ってきたので、カードデバイスを取り出して、絵柄の方を外に向けて、装甲機竜並の大きさの皇帝竜「ロードクリムゾン」の姿が実体化して光になってロードクリムゾンの体内の異空間のコックピットに乗り込んだので、ラウラですら驚いていたのであった。

ロードクリムゾンに乗り込んだ箒はそのままカタパルトに乗り、アリーナに飛び立つ

たのであつた。

ラウラもシュヴァルツエア・レーゲンを展開して、カタパルトから飛び立ったのであつた。

これが騒動の幕開けの始まりなのであつた。

試合開始!!

並行世界のI S学園で学年別トーナメント当日を迎えたのであった。

観客席には世界各国の軍隊や企業がI S学園の生徒をスカウトしに訪問しているほどの催しなので、剣崎一真を含む異世界人が紛れても問題なかったりするのである。

「(こういうのは、橘さんの専売特許なんだよな・・・。(。))」

剣崎一真はヴェスタWSCの来賓と言うことで来賓席に座っていたのだが、ふと橘朔也のことを思い出していたところに、見慣れた顔がいたのであった。

「まさか、橘さん達だよな。(。))」

「その様ですね。こういう場所はアンデットなどの格好の場所ですし」

「だよな」

ヴェスタWSCの最高責任者であるウォルターも白い背広姿で来賓席に座っているが、冒険者としての感が働いてすぐに橘朔也達を見つけたのであった。

「これがI Sか。しかし、あれで大丈夫なのか。(。))」

「この世界にライダーシステムがない以上は仕方ないだろ」

「あのドラゴンもI Sですか?」

「あれは、機械じゃないぞ。れつきとした生きた生物らしいが、ISとしていているらしい」
「わかりました」

一方、橘朔也組は間近で見たISを見て特にISスーツを見て思った感想を述べて、上城睦月はロードクリムゾンのことを質問して、それに橘朔也が答えたのであった。

「ロードクリムゾン。濟まないがラウラには好きにやらせてやってくれないか？」

「何を言う、あのラウラと言う娘にはそれが一番の道ではないか、いざとなったら、我が意思で止める」

「ロードクリムゾン。搭乗者の筈に従順して、状況に応じて戦うタイプか、ボクと一緒に」

「織斑一夏。貴様とやつと戦えるな」

「こつちから願ひ下げだ!!」

アリーナのバトルフィールド上空ではバリアが展開されて、外部に被害が出ないように施された後、カウントダウンが0になった瞬間に試合開始のブザーが鳴り一斉に両者が撃つて出たのである。

「AICですね」

「AICってなんだ？」

「アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。通称「停止結界」、簡単に言えば、AIC

の範囲に入った場合、強制的に動きを止めることができる機能です。ラウズカードで言えば、「TIME」のカードですね」

「ありがとう。そんなものをISに搭載する時代か」

初めてのISの試合を観戦していた劍崎一真達御一行はラウラが発動したISの機能である「アクティブ・イナーシャル・キャンセラー」ことAICのことを保険医ではない龍美に代わって、天夏達のライダーシステムを設計して開発した恋龍が解説して、劍崎一真は理解できたのであった。

「どうした？」

「チツ!!」

「シャル。悪いがこれは」

「箒、中はどうなってるの。(。D。)ノ!!」

「今言うことか。(。D。)ノ!!」

やはりチームプレイが勝敗を分ける今回の学年別トーナメントではラウラが単騎で戦いだったが、箒はそれをフォローしながらシャルとして最後の戦いになるシャルロットを相手にとつて、ロードクリムゾンと意思疎通を熟しながら状況に合わせて、武装展開をマルチウエポン使いのシャルロットを圧倒する腕前を見せていたのであった。

ISと違ってロードクリムゾンの特設のコックピットは搭乗者の動きとロードクリ

ムゾンの意思によつて動かしているので、ISのような高度な操縦技術はいらないのであつた。

それよりもシャルロットは外から見えないのにどうして自分達を察知しているロードクリムゾンの中にいる筈に試合中であるのにも拘らず、質問し出したので、流石の筈もツツコミを入れたのであつた。

ラウラとなぎさと555として

並行世界のIS学園での学年別トーナメントが行われており、特にロードクリムゾンに各国の来賓達は我が物にせんとしていたのであった。

「ラウラ!!」

「貴様は来るな!!」

「何言ってやがるこれは」

「ダッグマツチだよ!!」

「仕方ない、こうなった以上、わたし一人でも二人まとめて相手にするか」

「ラウラって子が、この世界でのなぎさなんだっけ？」

「はい。なぎさは覚悟はできとる。この御子神はやての娘やで!!」

「頼もしい母親に出会ってよかったな」

現在もアリーナのバトルフィールドではISとロードクリムゾンの攻防が行われていたが、ラウラがペアを組んでいる筈の言葉を聞かないで一人で勝手に戦いだしてしまったが、そこはタッグマツチをうまく利用した一夏・シャルルペアが一枚上手で、シャルロットがサブマシンガンの連射でラウラのシユヴァルツェア・レーゲンのSEを0に

したのであった。

箒はそれをコックピット内で呆れてしまい、こうなってしまうては、二体一という状況でも戦うことは変わらないので試合続行したのであった。

どうやら龍牙・はやて夫妻も観に来ていたようで、なぎさの昔の姿であるラウラ・ボーデヴィツヒを見て自分達に出会わなかったら、あんな風に生きていたのだろうと思っていたのであった。

「!!」

「劍崎さん?」

「(この感じ、上級アンデッド!)」

「(あいつがいるのか?)」

来賓席に座っていた劍崎一真は急に立ち上がってジョーカーとしての能力に反応してしまったようで、その反応が◆以外のカテゴリーの上級アンデッドを察知したのであった。

「この状況で上級アンデッド。◆のカテゴリーJ「ピーコックアンデッド」だよ」

「リュウゲツ。では、わたしが行きましょう」

「わたしも行きませす」

龍月もインテリジェントデバイスでアンデッドの反応を察知したので、自分が召喚し

た黒服を着ている英霊「アトリアル・ペンドラゴン」がアンデッドの反応があった場所へ向かったので、同じく龍美に召喚された英霊「沖田総司」も付いて行ったのであった。だが、この時、すでにシユヴァルツェア・レーゲンに仕組まれたある物が作動したのであった。

「うわあっあああああ!!」

「なんだΣ(。Д。)!!」

「(弥生が言っていたのはこれか!!)」

突然、SEが無くなって戦闘不能になっていたシユヴァルツェア・レーゲンがいきなり起動して、周りに雷が落ち始めてそして見る見るうちに形が変形し始めたのであった。

もう既にSEが零落白夜で残り少ない白式とラファール・リヴァイヴカスタムと、ロードクリムゾンの目の前に現れたのは、

「暮桜・・・」

「うああああー!!」

「!!」

「一夏!」

そう、何を隠そうブリュンヒルデこと織斑千冬のIS「暮桜」に変形したシユヴァル

ツエア・レーゲンがそこにいたのであった。

闇雲に振るわれた雪片の一撃で白式は解除されたのであった。

「ヴァルキリートレースシステム!!」

「わかりやすく説明しますと、IS版のディケイドとジョーカーラウザーです」

「なんだと!!」

「この騒ぎで観客席はパニックに陥ってしまったのであった。

「どこへ行くんです?」

「退け!!」

「悪いが、行かせるわけには行かない!! 変身!!」

《TURN UP》

「何!! IS、それも全身装甲!」

「これはISじゃない、ライダーシステムだ!!」

大龍と運よく合流出来た橘朔也がVTシステムを仕組んだドイツ上層部の面々の前に立ちふさがったが、拳銃を発砲してきたので、橘朔也がやむを得ずギャレンバックルに◆のA「チェンジ・スタッグ」を入れて、腰にベルトが巻かれて、いつもの左腕を前に伸ばし、拳を造った瞬間に右腕で、レバーを引いて◆のマークが現れて、背中にダイヤが刻まれたクワガタムシの絵のオリハルコンエレメントを潜り抜けて仮面ライダー

ギャレンに変身したのであった。

それと同時に、

「行くよ!!」

「え？」

超神次元ゲームギョウ界のルウイーの実家前に待機していたなぎさがクジキリコンゴウの人格を投影したオートバイ「オートバジン」に跨り黒のフルフェイスのヘルメットを被つて、そのままアクセルを吹かせて転送ゲートをくぐつて、並行世界のIS学園の学年別トーナメントが行われているアリーナのバトルフィールドに次元を超えて到着したのであった。

「お願い」

「ああ」

「ちよつと!! 待てよ!! あれは千冬姉の!!」

「済まない!!」

「ごめん」

なぎさはフルフェイスのヘルメットを被つたまま、オートバジンを変形させて、ロードクリムゾンに乗っている筈にアイコンタクトをして、ロードクリムゾンのコックピットにシャルロットが乗り込んで、クジキリコンゴウが変形したオートバジンが暴れてい

る一夏を抱えてピットに戻って行ったのであった。

「バイクが変形した。(。口。)ノ!!」

やはり、バイクが変形するのは物珍しいのであった。

「ねえ、知ってる? 夢って、持つと熱くなったり、切なくなったりするんだ。ボクはその夢を今も叶えようと思ってる。けど、キミはまだ夢は持ってない。だから!!」

《stand by》

「変身!!」

《COMPLLETE》

なぎさはヘルメットを被ったままで暴走している暮桜に今も苦しんでいるもう一人の自分、ラウラ・ボーデヴィツヒに向けて、ファイズギアを巻いて、ファイズフォンに変身コード「555」をゆっくり押しながら話しかけ、入力して、ENTRYボタンを押し、勢いよくファイズフォンを折り畳んで、天高く掲げて、バックル部分に差し込んで横に倒し、赤のフォトンストリームがなぎさの体に立ち昇って行き、

「おまえに夢って物を教えてやるよ!! (教えてあげるよ!!)」

この世界にギリシャ文字のφのようなマスクの仮面ライダー555が参上したのであった。

555とオートバジンと水棲類

なぎさがVTシステムで暮桜に変形したシュヴァルツエア・レーゲンが暴走して苦しんでいるラウラ・ボーデヴィツヒを助けるべく、もう一人のラウラ・ボーデヴィツヒである「御子神なぎさ」がドライブドライバーではなく、ファイズギアを使って、仮面ライダーファイズに変身して、対面したのであった。

「おい!! 今すぐにそこをどけ!! それと、そのISを渡してもらおう!!」

「これはアンタには使えない代物だ!! それに、アンタは高みの見物をしやれこんでるじゃねえか!!」

「ふざけるな!!」

「わあああああ!!」

「今、楽にしてやるよ」

管制室から指示を出している織斑千冬がアリーナ放送を使って仮面ライダーファイズに変身して、ボイスチェンジャーで声を変えているなぎさに直ちにそこから立ち去れと言ったのだが、これはなぎさとラウラ、つまり、なぎさにとっては自分と自分であるラウラとの戦いなのだ。

それに加えて、ファイズギアまでも取り上げようとしていたのだが、なぎさが使っているファイズギアには悪用されないように、クジキリコンゴウのAIが投影されているので、クジキリコンゴウが信用が置ける人物にしか仮面ライダーファイズに変身できないのであった。

つまり、織斑千冬がファイズに変身できないので全く持つて宝の持ち腐れなのであった。

それを指摘すると織斑千冬は狼狽えたが、ラウラが苦しみだしたので、なぎさは助けるべく戦うことにしたのであった。

一方で、

「なんだよ!! このロボットは!!」

「助けてもらったのだぞ。礼を言うべきではないのか?」

「無人機のIS?」

「誰だ!! ISというお粗末な物と評したバカ者は!!」

「え? 喋った。(。㊄。)ノ!!」

「行かなくてもいいのか?」

「どうやら、主の武器は、あれで十分らしい」

「箒!! なんておまえは何とも思わないんだよ。(。㊄。)ノ!!」

「今更、驚くこともないからな」

ピットにオートバジンのバトルモードに抱えられた一夏は床に下ろされて怒っていたがロードクリムゾンのコックピットから降りてきた箒とシャルロットはお礼を言うべきだろうと注意して、IS学園の教員達がやって来てオートバジンを無人機のISだと言いつ出したので、居ても立つても居られなくなったクジキリコンゴウがしゃべり出したので一夏は腰が抜けていたのであった。

箒とシャルロットは前もって天夏と弥生からこういった物をヴェスタWSCが開発していると聞いていたので驚くことはなかったのであった。

同時刻、アテイスマータ新王国

「さて、もう、この人形は用済みだ」

「ん？ なんだ、このメダルは」

「人形に!!」

どうやらまた五年前にフィルフィを殺した研究員は、花陽として生きているフィルフィの元の肉体が用済みと判断した瞬間、そこに一枚の青いメダルが放り込まれたのであった。

それはシャチが描かれたメダルで、そのまま花陽の元の肉体のフィルフィの体内に入ってしまったのであった。

「誰が!! 人形よ!!」

「生き返った。(。口。)ノ!!」

「わたしは、メズール!! この体はありがたくもらって行くわ!!」

「.....」

なんと、フィルフィの遺体が目が開いて、髪がコバルトブルーのロングヘアの少女になったのであった。

メズールと名乗ってそのまま何事もなかったかのように立ち去ったのであった。

「お待たせ。胸の大きさはこれで妥協してあげるわ」

「妹の元の肉体だ。あいつが姿を変えて幸せに生活を送っていることが、姉であるわたしには贅沢な欲望だ。行つてやれ、花陽の元へ」

「ええ」

髪色以外がフィルフィの遺体のまんまだが、花陽の姉であるレリイがどうやらシヤチメダルを投げ込んだ人物だったようで、妹の体をメズールにあげたのは五年前の過去と決別したことなのだろう。

レリイはメズールに花陽の元へ行つてやれと言うと、メズールはそのまま花陽の元へ向かったのであった。

夢の守り人

メズールが花陽の元の肉体に憑依して花陽のいる場所へ向かっている頃、並行世界のIS学園のアリーナのバトルフィールドでは仮面ライダーファイズに変身したなぎさと暴走している並行世界のなぎさである、ラウラが対面していたのであった。

「おりゃ!!」

「何をしている!!」

「やっぱり、ダメか」

そして、二人の戦いの火ぶたが切って落とされたのであった。

暴走しているとはいえ、VTシステムにプログラムされている機能で雪片を振り回してくるラウラに、なぎさはいつものように避けて、刀身の腹を殴ったのだが、ファイズのスペックがいつもの仮面ライダードライブの半分しかないのだが、変身しないよりはましなのと、ドライブに変身するにはベルトさんことドライブドライバーを腰に巻いて、そして左手首にソフトブレスとソフトカーそして何よりフォームチェンジ「タイヤコーカン」にはトライドロロンが必要不可欠なのである。

だが、なぎさは敢て仮面ライダーファイズに変身した理由は、

『なぎさ、別にドライブに変身してもいいのではないのかね?』

「ベルトさん。ファイズでないといけない気がするんだ」

『どうして、そう思うのだね?』

「向こうのわたし、ラウラ・ボーデヴィツヒに会うことになる今回の仕事は、ただ戦うだけじゃだめなんだよ、その答えを見つけるには」

『なるほど、わかったよ。なぎさ、もし君が危ないと判断した場合はわたしの独断で君を連れ帰る』

「ありがとう。ベルトさん」

決行日から二日前の実家のガレージで決めたのであった。

「ああっああっあー!!」

「そんな、刀はいらねえ!! おまえは、そのまま道具として死ぬつもりか!!」

「わたしは・・・人間だ!!」

《EXSEED CHARGE》

「はああっああっあ!!」

「やめろおおおお!! それは千冬姉の!!」

未だに暴走状態のラウラの猛攻を捌きながら攻撃しているなぎさはこのまま道具として死ぬつもりかと問うと、ラウラはVTシステムに逆らいながら自分が一人の人間だ

と叫んだのを聞いた。なぎさは一瞬でミッションメモリーをファイズポインターに装填して右足に装着して、ファイズフォンのENTRYボタンを押して音声の流れ、スーツの赤いラインが光ファイズポインターが光ったので思いつきり高く跳びあがったのであった。

そして、暮桜の雪片の刀身目掛けて赤い円錐状の光がターゲティングして、それに向かって、なぎさはライダーキック「クリムゾンスマッシュ」を繰り出して、雪片と激突したのであった。

それを見た、一夏は姉がモンド・グロツソを制覇した暮桜の雪片を壊す気にいるなぎさに向かって叫んだのであった。

「……お帰り」

『なぎさ!!』

「ごめん、この子を頼む」

『わかった』

【妾達も、退散するぞ。主】

「待てよ!! 返せよ!! 千冬姉の雪片を!」

「くだらねえ、そんな話なら、姉ちゃんともすりやいいだろ。オレたちやおまえの愚痴に付き合うほど暇はないんだよ」

「ラウラは任せてくれ」

「ほんじゃ」

なぎさがすり抜けて着地したと同時に、紅いΦの紋章が浮き出て雪片だけ灰化して、SEが0になって解除されてラウラをお姫様抱っこで受け止めた所で次元の壁を突き破ってベルトさんがトライドロンで駆けつけてくれたのであった。

天夏達も避難誘導が終わったので駆け寄ってきたのだが一夏の怒りは収まらなかった。なぎさは変身したまま言い捨てたのである。

もう一人の自分であるラウラを天夏達に預けてなぎさは転送ゲートを潜って元の世界へ帰って行ったのであった。

I Sじゃない!! 仮面ライダーだ!! の段

並行世界の自分のであるラウラ・ボーデヴィツヒを助け出したなぎさは仮面ライダーファイズに変身した状態で、ラタトスクの戦艦「フラクシナス」に戻って行ったのであった。

同時刻、

「やはり、人間が作った物は」

「あなた様がピーコックアンデッドですね?」

「オレに仮面ライダーに変身しないで近寄って来るとは」

「わたし達は仮面ライダーではありませんから」

「!!」

学年別トーナメント会場が大騒ぎになっている中、一人黒いサングラスに黒いロングコートと言う黒一色の男性がドイツが禁断のシステム「ヴアルキリートレースシステム」ことVTSを見て、嘲笑っていたのであった。

そこに、龍美の召喚した英霊「沖田総司」と龍月が召喚した「アトリアル・ペンドラゴン」が到着したのである。

英霊二人に、男はライダーに変身しなくてもいいのかと言いつ出したが、二人は一瞬で、支給されたスーツから、本来の姿に戻ったのであった。

「ほう、それがおまえらが頼っている物か？」

「伊坂（#OMO）!!」

「どうやら、時間の用だ!!」

「待て（OMO）!!」

「橘さん・・・」

「すまない、オレが来たばかりにあいつを逃がしてしまった」

「過ぎたことは仕方ありません。それにイサカによる被害は出てませんし」

「そうだな（あいつは、封印したはずだ。!! これが龍月が言っていたことか）」

沖田は鯉口を切り、アトリアルは正眼の構えを取った瞬間、仮面ライダーギヤレンに変身してドイツの上層部を追っ払った橘朔也がやってきたところで、伊坂ことピーコックアンデッドは不利と判断して、本来ならば使えるはずがない、転移能力で逃げられてしまったのであった。

沖田とアトリアルは元の黒いスーツ姿に戻って、橘朔也が変身解除して謝って、アトリアルは過ぎたことなら仕方ないと言って、橘朔也は再戦するのが楽しみになったのと、まさか、封印したはずの仇が何故この場にいたのかと考えて、龍月が言ったことを

思い出して納得したのである。

並行世界からやってきたピーコックアンデッドならという仮説が出来たのであった。

「その三人? 特にさつき全身装甲のI Sを纏っていた男!!」

「はあく(・ω・) だから、あれはI Sじゃない!! ライダーシステムだ!!」

「橘!! この世界にそれは通用しないようだ」

「相川、睦月はどうした?」

「それなら、なんとか、龍美が逃がしてくれた」

「そうと決まれば!! 変身!!」

《FIRE》

何処に居たのかと言わんばかりにI S部隊がやってきたが、そこに仮面ライダーカリスに変身した相川始が合流したので、橘朔也はもう一回仮面ライダーギヤレンに変身し、ギヤレンラウザーに◆6「FIRE」をラウズして放ってそれを利用して退散したのであった。

それから数時間後、

「そうか、わたしはシユヴァルツエア・レーゲンが暴走して、気を失ったのか?」

「ラウラ、此処わかる?」

「大丈夫だ。弥生、おまえがわたしを助けてくれたのか?」

「違うよ。ボク達は無理矢理避難させられちゃったから（流石にもう一人のラウラとは言えないよ）」

「トーナメントはどうなった？」

「後日、一戦だけ全ペアするって」

「そうか。あいつにはまた会えるか？」

保健室のベッドで目を覚ましたラウラに制服姿の弥生に介抱されながら、自分を助けてくれたのは弥生かと質問したが、流石に弥生ももう一人のなぎさである目の前にいるラウラに本当の事は話せるわけがなく、ぼかして話したのであった。

ラウラはトーナメントはどうなったと言うので、弥生は後日、一戦だけ全ペアの組み合わせで行われると告げたのであった。

ラウラは仮面ライダー555こともう一人の自分「なぎさ」に会える日が来るのを楽しみにしていたようだった。

並行世界のシャルロット

学年別トーナメントがラウラのシユヴァルトエア・レーゲンがVTSによつて暮桜に変形して、仮面ライダーファイズに変身したなぎさによつて雪片を破壊されて機能停止して、中止になったが、後日、一回戦だけ行うということになったのであった。

「ラウラ、その様子だと、龍美姉の治療が良かったらしいな」

「鳴流神先生は保険医なのか？」

「そうだよ」

「わたしと初めて会った時は、剣術で織斑教官を圧倒したのだ!!」

「龍美さんの実家は天然理心流の道場だし」

「テンネンリシンリユウ？」

「そこは教えてもらえないわけじゃないよね。詳しい話はまた今度ね」

ラウラが起きてしばらくしてから天夏がやって来て、ラウラは不思議そうな表情で龍美が保険医なのかと言いだしたので、弥生がその通りだと答えると、ラウラは初めて会った際に、日本刀でI Sの攻撃を軽々と受け止めた挙句、そのまま織斑千冬の剣を一刀両断にしてしまったことを言うので、弥生は顔を引きつりながら鳴流神家が天然理心

流の道場だと答えると、ラウラはきよとんとしてしまったので、詳しいことは今度は話すと言ったのであった。

「天河君。今日から大浴場が男子も使えるようになりました」

「ありがとうございます」

「どうするの？」

「取り敢えず部屋に戻ろう」

「終わったなら、早く部屋に戻りなさい」

「龍美姉にはそのしゃべり方は似合わねえ」

「仕方ないからね」

「天夏と弥生が保健室を出ようとしたところで龍美とこの世界の山田真耶がやって来て、大浴場が男子でも使えるようになったと知らされて山田真耶が立ち去ったのであった。」

龍美は慣れないしゃべり方なのか、従弟の天夏にからかわれてしまったが、龍美は満更でもないようなので、天夏と弥生は部屋に戻ることにしたのであった。

「待ってたわよ」

「なんだ、みんな来てたんだ」

「うん」

「あ!! そうそう、シャル、今日から自由の身になったぞ」

「え?」

「まさか、天夏・・・」

「ヴェスタWSCに問い合わせて、デュノア社のことを調べてもらったんだよ。出るわ出るわ、経営危機に陥ってる証拠が」

「で、どうするのですか?」

天夏と弥生は自分の部屋に戻ると、セシリア達が集まっていたようで、天夏はシャルロットを自由の身にしたことを明かしたのであった。

それを聞いたシャルロットがきよとんととして、鈴音が天夏と弥生の仕業かと問おうとしたが、天夏がヴェスタWSCを通してダージをはじめとするあっちの世界の忍者達に今いる世界のデュノア社を調べてもらったらしく、どうもイグニツション・プランからフランスが参加できないらしく、それで経営危機に瀕していることを話したのであった。

セシリアははてなマークを出しながら首をかしげていたので、

「それなら」

天夏が話している、並行世界のフランスのデュノア社には、

「わが社と契約してくれば、幾らでも第三世代のデータすべてお譲りします」

「ああ、いいだろ」

「交渉成立ですね」

ヴェスタW S Cの最高取締役社長である、ウォルターがシャルロットの実父のデユノア社長にヴェスタW S Cから第三世代のデータの授与とシャルロットの身柄を解放するという条件で契約させた所だったのであった。

「ボクは？」

「女に戻ればいい」

「ありがとう」

「なんとなく、分かるんだけど（・ω・）」

と天夏から説明を受けたシャルロットは無事に解放されてヴェスタW S Cに所属することになったのであった。

新たな

シャルロットは無事にヴェスタWSCの手によって解放されて事なきを得たのであった。

「大浴場が解禁したけど？」

「一夏が入ってる保証はあるのか？」

「ないわね」

「今日は部屋で済みます」

「そうですわね」

今日から大浴場が解禁されたのだが、流石に女子が大半を占めているIS学園なので、天夏は無難に部屋で済みますと答えて、解散となったのであった。

一方で、

「アイズさん!! 良かったです(T|T)／＼／＼」

「ボクはちつとも心配なんかしてないからな!!」

「素直じゃない」

ウダイオスに負わされた怪我が見事なまでに完治したアイズは仕事に復帰して学園

生活を満喫しているのであった。

ベルはアイズの復帰を喜んでいたのだが、ヘステイアが嫉妬したのかいじけてしまったのであった。

アイズはそんなヘステイアを見て素直になつて欲しいと言つたのであった。

「アイズ、頼んでいた物が出来たから持ってきたぞ」

「ありがとう」

「おまえも!!」

「アイズさんも仮面ライダーになるんですか。(。D。.)ノ!!」

「うん」

そこに恋龍がアタツシケースを持ってやってきたのである。

どうやらアイズは入院中と療養中ずっと自分が足りないモノは何かと考えた結果、恋龍にライダーシステムを懇願したのである。

恋龍は懇願してライダーシステムを渡すような人物ではないのはアイズも百も承知なのだ。

アイズの大決心に恋龍は何も言わずに第一茶熊学園の開発室で作って置いたトランスコアの人格が投影されているスマイル達とは違うが、「ナイト」&「ファム」のカードデッキを渡すかどうかアイズの療養中、幼馴染達と話し合った結果、渡すことにしたの

であった。

元はバトルロワイヤルに使われて契約したミラーモンスターに殺されると言う物をゲームギョウ界の技術で改良した物なので、「戦わなければ生き残れない」と言ったことにならないように開発した物なのだ。

もちろん、ブレイバックルやゼクター各種も揃っているのだが、アイズは迷わず「ナイト」と「ファム」のカードデッキを選んだのだ。

「うん」

アイズは恋龍から託された二つのカードデッキを見て晴れて剣崎一真達と同じ仮面ライダーの仲間入りを果たしたのであった。

それから次の日

「獅子神シャルロットです。みんなよろしく!!」

「実はシャルルさんではなく、シャルロットさんでした」

女子一同「そんな!!」

「天夏、獅子神ってことは」

「ああ、なのはさんが引き取るって。オレ達の仕事が終わる次第、名前を改名することになった」

【空龍の苦勞が絶えないな】

並行世界のIS学園に再転入したシャルロットは獅子神家に養子にもらわれたので、つまり、星奈の双子になるということを天夏が弥生に説明したのであった。

今は「シャルロット」で通すが、天夏と弥生が仕事を終えて、自分達の世界へ帰るときに名前を変えると決めていたのであった。

臨海学校の約束

獅子神シャルロットとして新たな生活を送ることになったシャルロットはなんやか
んやでクラスに馴染んだのであつた。

「天夏と弥生は臨海学校の準備はできてる？」

「箒も専用機組になつてるから、アタシ達と行動するしね」

「うん」

「箒さん、どうなされたのですの？」

「どうやら並行世界のＩＳ学園の臨海学校の時期が近づいて来たらしく、天夏と弥生は
箒も入れて屋上でお弁当を持参して食べていたのであつた。」

箒は目が輝いていたので、恐る恐るセシリアが聞くと、

「あの人たちって、天夏と弥生の知り合い？」

「あの時、ラウラさんを助けてくれた人ですね」

「そうだけど、どうしたんだ？」

「まさか、箒、ＩＳよりも好きなの？」

「うん」

「まあ、簪さんが好きになるのも無理はないですね」

「わたしは、あいつを嫁にしなくては!!」

「ラウラ!! なんてそうなるの。(。口。)ノ!!」

どうやら剣崎一真達をはじめとする仮面ライダー達の知り合いかと聞いて来たので天夏は仕方ないと思って、その通りだと話したところ、簪はISよりも仮面ライダーなどの方が興味があったのは天夏と弥生の世界でも同じなんだなと思っていたのであった。

ラウラに至っては並行世界の自分の事を嫁にすると言い出したので弥生がツツコミを入れたのであった。

「やっと出来た!! 待ってて、簪ちゃん、あんな気持ち悪いのより、この紅椿をプレゼントしてあげるからね」

並行世界の篠ノ之束は妹がロードクリムゾンを手に入れたことが気に入らないようで、紅椿というISを完成させたのであった。

元はと言えば自分が蒔いた種なのだが。

「もしもし」

「簪ちゃん!! お姉ちゃんの束さんだよ!!」

「切ります」

「切らないで!! 箒ちゃんにいいお知らせがあるんだよ」

「なるほど、分かりました話だけ聞かせてください」

「臨海学校の日が箒ちゃん誕生日だから、その時に持って行くからね(―――)―――」

その日の放課後箒ノ之束は実妹であろう箒の携帯電話に電話してきて来たので、出ることにしたのであった。

内容は後日行われる臨海学校に誕生日プレゼントを持って行くという内容なのであった。

そして電話が切れたのだが、

「済まない、弥生」

「どういたしまして」

「向こうから出向いてくれるとは探す手間が省けたな」

「弥生、アンタすごいわね、箒そつくりの声色真似るって」

「それほどでも(本当はパラレルワールドの箒ノ之箒なだけだ)」

なんと箒ノ之束と会話していたのはパラレルワールドの箒ノ之箒でもある弥生が「嵐沢美兎」の人格からなるべく声色が似ている人格「ジャンヌ・カグヤ・ダルク」に代わってもらっていたのであった。

箒ノ之束はすっかり実妹と話していると勘違いして、臨海学校の日自ら出向くと

言ったのであった。

電話が切れると同時にいつもの人格「凰沢美兔（ミュウ）」に戻ったので、瞳の色がセシリアと同じコバルトブルーからエメラルドグリーンに戻ったのだが、箒達が気づいていなかったのであった。

箒は現在ヴェスタW S Cから無料で支給された赤いA n d r o i dのスマートフォンを使用しているので、電話番号が変わっている上にハッキングが出来ないようにしているのである。

こうして、天夏と弥生が並行世界の篠ノ之束に会うことができるようになったのであった。

並行世界での買い物

並行世界の I S 学園で弥生が箒に成りすまして篠ノ之束を臨海学校におびき出すことに成功したのであった。

それから並行世界での日曜日を迎えたのであった。

「天夏と弥生のそのポーチ、一体どうなってるのよ。(。D。)ノ!!」

「初めて見た時から、思っていましたけど?」

「これ? あげないよ」

「ヴェスタ W S C の技術力がずば抜けているのが分かるよ」

天夏と弥生は並行世界のレゾナンスにやってきたのであった。

もちろん、箒達も一緒にいるのだが、天夏と弥生のアイテムパックがどこぞの猫型ロボットの四次元ポケット並みに購入した物が入れられているので鈴がツツコミを入れて、セシリアは初対面の時から気になっていたと言うのだが、流石にアイテムパックはゲームギョウ界の産物なのでおいそれとあげられるわけではないので、天夏と弥生はダメだと言ってシャルロットは顔を引きつっていたのであった。

ラウラは相変わらずの通常運転らしく、

「ラウラ。いつまで包帯巻いてるの」

「これは、わたしの犯した罪へ対する罰だ!!」

「鳴流神先生が直々に治療してくれたのですよ」

「龍美姉の治療は叔母さんには劣るけど、龍美姉曰く、三日くらいで完治するって言ってたな」

「わかった。臨海学校までには取っておこう」

もう完治してもいいのだが学年別トーナメントでVTSで暴走して龍美に治療された超越の瞳が埋め込まれた左眼を未だに気にしているのか自分に対する戒めだと言って包帯を巻いたままにしていたのであった。

流星に龍美の医者としての腕を知っている従弟の天夏は兎も角、箒達も絶賛しているのであった。

ラウラは臨海学校の日までには包帯を外しておくと言ったのであった。

「弥生は水着はいいの?」

「カスミお姉ちゃんと一緒に買ったのがあるから」

「天夏は一夏を見張っててくれ」

「おい!!」

「任せろ」

一行は臨海学校に着る水着を買いに水着売り場にやってきたのであった。

天夏と弥生はお互いに実家のある世界で購入していたので、買う必要はないので、弥生は箒が水着を買うのを手伝ってほしいと言うので同行することになったので、男二人は店の近くのベンチで待つことにしたのであった。

「ねえ？」

「誰だ？」

「これ払って」

「悪いがほかを当たれ。それにアンタは何かをさせるほど偉いのか？」

「<、>、>!!」

「天夏、よくあんなことできるな？」

「当たり前だ。オレの実家じゃあ、あれ恐喝だ」

ベンチで座って待っていた天夏に見知らぬ女性が自分が支払うであろう品物の代金を要求してきたのだが、天夏はきっぱりと言ひ捨て、女性はどこかへ行ってしまったのであった。

これも女尊男卑の世である所為なのだろう。

「終わったよ。箒が元がいいから」

「そういう、弥生も元はいいのに」

「まるで双子のようでしたわ（>|<）!!」

しばらくして弥生達が水着売り場から戻ってきたので、一行は移動することにしたのであった。

二つの世界の合流

並行世界のレゾナンスで臨海学校に持って行くものは買い揃ったのであった。

一方で、

「天夏と弥生はあっちでも臨海学校に行くのね」

「そうよ」

「ボクとなぎさも行くけど」

「わたしも」

「I Sを一目見たいしね」

「スマイレが二人いるみたい」

「いや、ティアさん入れて三人だよ」

「足さなくいいわよく、く、く>!!」

フラクシナスの会議室でスマイレ達は天夏と弥生が行っているI S学園も臨海学校に行くことになるので、スマイレ達は向こうの世界での役割分担を決めていたのであった。

そこには、花陽と、花陽の元の肉体で蘇った水棲系のグリードのメズールも同席していたのであった。

まさか、メズールは二人目の仮面ライダーオーズが誕生していたことに驚いていたが、スマレ同様に冷静になるのも早かったのと、遺体とはいえ人間と同じ五感を手に入れたので、良しとしていたが、声がスマレに似ているので、星奈がスマレが二人いるみたいと言いつ出したが、なぎさが此処にはいないティア・グランツまで数に入れてボケ出したので、スマレが突っ込んだのであった。

ティアがこの場所に居たら完全にとんでもない空間になっているだろう。

「花陽は仮面ライダーオーズになったんだ。あれって確か古代のベルトだよな？」

「ゲームギョウ界の技術力で開発したのよ。コアメダルまで」

「さてと、作戦決行は二日目よ」

「うん!!」

「攻龍の準備はできてるわよ」

「はい!!」

花陽が仮面ライダーオーズに変身できるので？を浮かべていた星奈にメズールが超神次元ゲームギョウ界の技術力で新たにベルトごと開発されたと説明したのであった。

スマレ達は天夏と弥生に合流する日を臨海学校の二日目に決めた所で、会議室に剣心が入って来て、戦艦「攻龍」の搭乗許可をもらったのであった。

一方で並行世界にいる天夏と弥生はと言うと、

「(^ ^ ♪)」

臨海学校当日を迎えていたのであった。

自分達の世界と時間の流れが違うので仕方ないのは天夏と弥生は気にしていないのであった。

「(そっちは、現地に入ったか?)」

「(ええ。もちろん、二日目に合流しましょう)」

「(わかったよ)」

臨海学校の場所へ向かうバス内で天夏と弥生は持っている次元間で通信ができるインターネットジェントデバイスで朱音達と連絡を取り合ってお互いの待機場所を教え合っていたのであった。

「おい!! もうそろそろ、到着する。忘れ物はするなよ!!」

「ハイ!!」

「さて、どんなことが待ってるんだろ?」

「ああ」

そろそろ臨海学校で宿泊する旅館に着くらしく天夏と弥生は忘れ物が無いように確認していたのであった。

臨海学校でどんなことが待ち構えているか楽しみでしかなかった天夏と弥生だった

のであつた。

並行世界の臨海学校 初日 凜とした水着

並行世界のも臨海学校があるようで天夏と弥生はもちろん自分達にとつては二回目だが参加していたのであった。

「お願いします!!」

「今日は一日、自由だ。くれぐれも旅館の迷惑にならないように!!」

「はい!!」

宿泊する旅館の人達に挨拶を済ませ荷物を預けて、初日と言うこともあつてか、珍しく織斑千冬が自由行動を許したので、思う存分楽しむことになったのであった。

龍美は一応保険医なのでバスに乗って同行していたのであった。

天夏と弥生は箒達と共に、

『TURN UP』

「そういえば、なんで、TURN UPと音声が言うの?」

「シャルは知らなかったわね、天夏と弥生、そして箒とシャルが保護されてるヴェスタW SCは、ある企業に自分達の技術を提供する代わりに、さっきのシステムを渡したのよ」
「そうなんだ。鈴、説明ありがとう!!」

「弥生さん、いつもご入浴で見ますけど、その水着で余計に、素晴らしい物が輝いてますね（。・。）」

「箒より持つてるわね」

「鈴だつて、この日の為に大きくしてたくせに、それも龍美さんに土下座までして」

「なんだと（。D。）ノ!! 鳴流神医師に頼めば肉体を改造できるのか（。D。）ノ!!」

「ラウラの想像している肉体改造は違うよ（。D。）ノ!!」

蜷局を巻いた龍が描かれた赤と青のインテリジェントデバイスから出現させたオリハルコンエレメントを通過して、水着に着替えた天夏達だったが、シャルロットはなぜ「TURN UP」という音声ができることが気になっていたらしく、鈴が代わりに説明をして、シャルロットは納得してお礼を言ったのであった。

セシリアは、弥生のある部分を見て自分もある方だが驚愕して、簪に至っては顔には出ないが、怒りをさらけ出していたのであった。

それもそのはずで、白を基調にし淵の部分が金と黒で紐の結び目に鈴（すず）が付いて、下は桜をあしらった黒いリボンが付いた祝儀袋のようなビキニタイプの水着に麦わら帽子という姿だったので、男は元より、女からも見惚れさせるほどの雰囲気を出していたのだから仕方ないのであった。

腰にはいつものアイテムバックを装備しているのであった。

鈴も転入した時期が早かったこともあって、セシリアほどではないが、転入時より大きく成長したが、それでも箒より一回り物を持っている弥生のある部分を羨ましそうに見ていたのだが、弥生に龍美に土下座までして、成長計画をしてもらっていたことを暴露されたのであった。

未だにバスタオルを巻いているラウラはそのまま真顔で別方向に肉体改造を龍美が
出来

ると思いついでいたので、シャルロットがツツコミを入れたのであった。

並行世界の I S 学園の臨海学校く波打ち際く

天夏達は臨海学校の初日が自由行動になっていたので、各々でやりたいことを行うことにしたのであった。

一方で、

「まさか、軍艦に乗ることになるなんて、初めてだな。戦争に行く人ってこんな感じだったのかな？」

「剣崎さん!!」

「あ、ごめん」

軍艦「攻龍」に乗り込んで並行世界の I S 学園臨海学校が行われている海域付近にステルス状態で航海中の艦内では、龍月が龍美に代わって指揮を執りながらの作業を行っていたのであった。

剣崎一真はまさか戦艦「大和」に匹敵するであろう今乗っている攻龍に乗っていることで第二次世界大戦の兵士達の気持ちを感じて、上の空になってしまったので、龍月に呼ばれて我に返ったのであった。

「この世界にも、真耶がいるんだよな？ 臨海学校ってことは……」

「ケンジャキ〜（。D。）ノ!!」

「たたたた!! タデイバナサ〜ン（。D。）ノ!! どうしたんですか（。D。）ノ?」

「何を妄想してるんだく、〜>!!」

「橘さん、劍崎さんは多分、女性の水着姿を妄想してたんです」

「そんなことを妄想していたのか」

どうやら同じ姿と言え並行世界の山田真耶が臨海学校に副担任でいるということとは水着姿でいるのであろうと妄想していたところに橘朔也に呼ばれたことで現実世界に戻ってきて、注意されたのであった。

一方で、

「やよっちの水着、何処で買えるの?」

「実家にいる時にカスミお姉ちゃんと一緒にフローリアさんから御礼にもらったんだけど」

「そうなんだ」

みんなと一緒にビーチバレーなどして楽しんでいた弥生に並行世界の布仏本音が弥生の水着に興味を示していたのであった。

弥生は実家にいる時に姉のカスミが友達の花の付き添いの仕事のお礼にもらったと半ばばかす感じで説明したのであった。

「どうやら、本音もそれで納得してくれたのであった。

「もう!!　いつまでやってるのラウラ」

「まだ!!」

「それ(ゝーゝ)!!」

「恥ずかしいだろ!!」

「似合ってるし、可愛いぞ」

「可愛いだと(。Д。)ノ!!」

砂浜にビニールシートを敷いて座っていた天夏と弥生の前にバスタオルで体を隠しているラウラとそれを剥がそうとしているシャルロットがやってきたのであった。

ラウラはもう包帯を取ったようで両目が元の真紅になっており、髪型はツーサイドアップであった。

恥ずかしそうにしているために油断したのかシャルロットにバスタオルを剥がされて、黒ビキニを着たラウラの姿が現れたのである。

それを見た天夏と弥生は素直に可愛いと述べたらラウラは顔を赤くしたのであった。

「!!　(またか)」

『どうやら、光の力がおまえを導こうとしているのだな』

「そのようだ」

箒は一人砂浜に立って水面に反射して移った自分の顔にまたあの顔が重なったのであった。

カードデバイスのの中に入っている皇帝竜「ロードクリームゾン」はもうそろそろ光の力が箒を導き出すことだろうと言ったのであった。

「ありえねえ（。．．） 鈴の絶壁が」

「どう？ あたしの物を見た感想は？」

「鈴、どうして鳴流神先生にわたしを連れて行ってくれなかったの!!」

「ごめん!!」

一夏はもう一人の幼馴染みである鈴のある部分が転入して再会した時よりセシリアとタメが張れるほどに成長していたので、鈴は橙色のビキニから真ん丸な物のある部分を一夏に見せつけたのであった。

そこに箒が何故誘ってくれなかったのかと問い詰めてきたので鈴は謝ったのであった。

身長は少しだけ伸びた程度であった。

「久しぶりにお刺身だ（――）」

「一体、どこに金を掛けてるんだ（ω・ω・ω）」

時が経ち、天夏達は旅館に戻って温泉イベントは起きなかったが温泉に入って、浴衣

に着替えて、夕飯の席に着いたのであった。

並行世界のI S学園はどこに向かっているのかわからないという夕飯のメニューを見て天夏は呆れていたのがあった。

こうして並行世界のI S学園の臨海学校の初日を終えたのであった。

夜の

並行世界の I S 学園の臨海学校の初めての夜を迎えた天夏と弥生は予め決められていた部屋割りの表を山田真耶から渡されて見ていたのであった。

「やっぱりか」

「天河！ 織斑！ おまえ達はこっちだ!!」

「弥生の事は頼んだ」

「任せろ」

「天夏も無理しないでね」

「ついて来い!!（この二人に出会ってからと言うのも、何処ぞの馬の骨ともわからぬ小娘を保険医も来る始末、はあ〜）」

「織斑先生、まだ、気に入らないんですね。わたしが赴任してきたこと」

「貴様〜!!」

「織斑先生、何処へ行くんです?」

「チツ!! こっちだ!!」

「鳴流神先生に隠し事が出来ないね（。。。）」

案の定、一夏と同じ部屋にされているのと教師達の部屋の隣と言う完全に束縛同然な部屋割りだったのであった。

天夏は箒達に弥生を任せて一夏と一緒に織斑千冬について行くことになったが、織斑千冬が天夏と弥生そして龍美がやって来てから思い通りにならないことを心の中で呟きだしたが、神姫である龍美にとつては相手の心の声つまりテレパシーを聞くのは容易であり、それを龍美に指摘されてまた襲い掛かろうとしたが、先日の事と天夏に呼び止められて、舌打ちをした後、部屋に向かったのであった。

弥生は知っているが箒達は龍美に隠し事は出来ないと言ったのであった。

「鳴流神先生のあの「天は二物を与えず」を覆す、肉体美はすごかったわね（・ω・）」
「童顔に、普段はシャルさんと同じく、ボクっ子でありながら、天夏さんから聞いたんですが、結婚を約束している殿方と一緒に住んで居るらしいのですわ」

「それに加えて、料理・学問・身体能力という才色兼備と文武両道が合体した存在。わが軍に来て欲しい」

「アンタね。鳴流神先生が軍隊に入ると思ってる!!」

「龍美さんは、あれでも努力型なだけだ」

箒達「どこが（ですの）（よ）だ（。ヾ。）ノ!!」

弥生を含む女子達は就寝時間まで時間があつたので、弥生の部屋に集まって、龍美の

話をしていたのであった。

遡る事、数時間前、

「テンテンはいいな〜」

「どうした?」

「だって!! あんな美人なお姉ちゃんがいるんだもん!! わたしのと交換してほしいくらいだよ!!」

「龍美姉は従姉だ。まあ、確かに、間が抜けているが、それ以外で勝てる要素が全くないのは事実だしな」

女子一同「鳴流神先生って、山田先生と一緒に着痩せするタイプ(。D。)ノ!!」

「どうしたの?」

「もしかして、鳴流神先生の恵まれた物を持っているからでは」

箒達と自由時間で遊んでいた天夏に本音がやって来て、龍美のような従姉がいる天夏を羨ましがっていたのであった。

ほかの女子達は、立派過ぎる物を持っている黒紫のビキニを着用している龍美のわがままボディを見て揃いも揃って両膝を付いて両手を砂浜に付けて絶望していたのであった。

龍美は相変わらずのマイペースぶりだったのは言うまでもなかった。

そして今に至るのだ。

「なあ、天夏と弥生はどういう関係なんだ？ 弥生の婚約者ってことになってるが」

「久しぶりに再会した幼馴染みだが」

「そうだったか」

天夏は一夏と同じ部屋で対面して一夏は弥生と天夏の息の合ったコンビネーションを見てどういう関係なのかと質問してきたのであった。

確かに弥生の婚約者と言うことで認識されていたので、天夏は幼馴染みだと敢て答えたのであった。

こうして初日の夜が過ぎて行ったのであった。

パラレルワールドの天災

並行世界の I S 学園の臨海学校の一日目の夜が過ぎて二日目が始まったのであった。

「揃ったな」

「どうやって、着替えてんだ？」

「織斑!!」

「はい!!」

「(オリハルコンエレメントを潜り抜けて一瞬で着替えてるなんて言えない)」

専用機持ちは織斑千冬と共に集められており、一夏はどうやって I S スーツに着替えているのか天夏に昨日の夜から聞き出そうとしていたが毎回のように邪魔が入っているために解らないままだったのであった。

専用機持ちは所属先から送られてくる物資の確認と訓練を行うのである。

なので龍美は保険医なので動きやすい長ズボンとカッターシャツを着ているのであった。

「ん?」

「これを抜けというこららしい」

「そんなじゃ!!」

専用機持ちが集まっている場所に明らかに怪しすぎるウサギの耳を模った何かが埋まっていたので一夏が引っこ抜いたのであった。
すると、

「ハロ〜!! みんなのアイドル!! 東さんだよ (≡▽≡)!!」

「……(; _ ;)」

「おい、東」

「ちーちゃん、みんな可笑しいよ。(。Д。)ノ!!」

天夏達「それをおまえが言うな(ですわ!!)」

巨大なコンテナが降って来てそこからI Sの産みの親である箒の実姉にして自称天災である、弥生の次姉「朝宮睦月」こと並行世界の篠ノ之東が不思議の国のアリスのような服装でやってきたのだが、一夏以外は全く興味を持っていないので、ジト目で見ており、東は織斑千冬に助けを求めたのだ。

「そうそう! 箒ちゃんにプレゼント!」

「もう、わたしにはロードクリムゾンがいますから」

「そんな気持ち悪いのより、こっちの方が!!」

「悪いですが、姉さん。正直に、自分の考えや気持ちを口にするだけが、正しいとは思え

ない」

「篠ノ之!! 姉に向かって!!」

「天災のお姉ちゃんが作ったISだよ!!」

「天災? そんなものは、大昔の負け犬が作った言葉ですね」

「どうして!!」

どうやらまだ弥生が実妹の箒に成りすましておびき出されたことに気づいていない篠ノ之東はコンテナを開けて赤いIS「紅椿」を箒にプレゼントしに来たらしいが、箒には最高のパートナーである皇帝竜がいるのでISはいらないのだが、未だに実妹にISを押し付けて来るので箒は堪忍袋の緒が切れたらしく、それを織斑千冬が注意したが、篠ノ之東はまだ自称天災だと言っていたので、「天災(才)は大昔の負け犬が作った言葉だと」言い捨てたのであった。

そこに、

「織斑先生!!」

「そっちは?」

「ええ。今から数時間後に合流するわ」

『お願い』

『わかったわ!!』

山田真耶が血相変えてやってきたので織斑千冬が話している隙に天夏達は戦艦「攻龍」に居るスマイレ達と連絡を取っていたのであった。

こうして、並行世界のIS学園の臨海学校二日目が始まったのであった。

銀の福音 再び

並行世界の I S 学園の臨海学校の二日目に入った天夏達は専用機組として集められて並行世界の篠ノ之束に出会ったのだが、完全に弥生共々嫌われていたのであった。

「至急!! 専用機持ちは旅館に集まれ!!」

「はい!!」

「貴様。わかってるだろうな?」

「何でしようか?」

天夏と弥生と龍美は戦艦「攻龍」に待機している仲間達と念話で会話し終えたところで織斑千冬が山田真耶と話し終えたので一行は旅館に戻るようになったが、織斑千冬が龍美に敵意を向けていたが当の本人はそれを承知の上で、返事をしたのであった。

「まあいい」

「そうですか」

相変わらず龍美の事が気に入らない織斑千冬だったが、以前手も足も出なかったことがトラウマになっていっているようで、顔には出ていないが内心では恐怖心に満ち足りていたのであった。

龍美が現れるまで自分が正しいはずだったが、龍美に全て否定されたのだから。

そして、あの時、剣術ですら敵わなかったというより、目を遭わせた瞬間にもう勝てる人物ではないことに気付けばよかったのだが、織斑千冬はまだそのことに気づいていないのであった。

「モスクワ付近で試験的に開発されているIS「銀の福音」が操縦者の意志に反して暴走してこちらに向かっていているとのことですよ!!」

「わかったか」

「だったら!! 紅椿の出番だよ!!」

「その必要はないですね」

「アンタは入って来る権限はないんだよ。この天災が作ったISを信用できないんだっ
たら!!」

「束!! やめて置け!!」

「ちーちゃん!! なんで。(。ヾ)ノ!! こんな奴に好き勝手言われて悔しくないの。
ヾ)ノ!!」

「作戦決行は今から二時間後だ!!」

「了解!!」

旅館に集められた専用機組は山田真耶から軍用IS「銀の福音」が原因不明の操縦不

能で暴走して今いる海域に向かっていると告げられたのであった。

天夏と弥生は自分達の世界で遭遇して、天夏は神姫の力の片鱗が現れてしばらくは元の姿に戻れなくなり、弥生は男勝りな人格「八神コウ」から少しひ弱だがボーイッシュな人格「凰沢美兔」に変わっているのであった。

そこに、まだ懲りないのか、篠ノ之束が紅椿を勧めてきたが、もうとつくに皇帝竜「ロードクリムゾン」がいる実妹には必要がないので、龍美がきつぱりと切り捨てたので、篠ノ之束が本性剥き出しで龍美に言い寄ったが、織斑千冬に制止されたのであった。まさか唯一無二の親友である織斑千冬に止められたことに篠ノ之束は怒鳴ったが、織斑千冬がわずかながら龍美に対しておびえていたことに気づいていなかったものであった。

そして、ついに銀の福音停止作戦が決行される時がきたのであった。

復活!! 仮面ライダー剣

天夏と弥生は並行世界でも銀の福音の騒動に巻き込まれることになってしまったのであった。

「スマレ達はライダーシステムは使わないのか？」

「いえ、この世界の流儀に則ってあげるだけです」

【はい。久しぶりに我々の本領発揮です】

【仮面ライダーに変身しないと戦えないとは、誰も言ってないですよ!!】
「ん？」

「そうか、剣崎は初めてだったな。スマレちゃん達の持つる日本刀が喋ってるんだ」
「刀が喋る。(。口。)ノ!! ウソダー!!」

天夏達が旅館で待機している頃、攻龍でも出撃準備をしていたのであった。

剣崎一真はスマレ達がいっものカードデッキで変身しないでいたので、質問したところ、スマレ達は律儀に装甲機竜に乗り込んで合流すると機攻殻剣を見せたのであった。

スマレ達の機攻殻剣に宿っているそれぞれの竜達が意気込みを述べたのだが、剣崎一真はどこから声がかかるのかと思つて目線をスマレ達の機攻殻剣に向けて、橘朔也から機

攻殻剣に人工AIが搭載されていると解説したら、剣崎一真は驚いていたのであった。「ソニックダイバー隊。準備出来ました!!」

「うえ？ ミレイユちゃん達もか。(。D。)ノ!!」

「はい!! もちろん、お兄ちゃんもスタンバイしてますから」

「だけど、キミ達のような幼い子供を死ぬような場所に行かせるわけには」

「相川さん、それでもわたしたちは行きます!!」

「どうやら、オレ達が力を貸せない理由はないな」

そこにアティスマータ新王国に「最弱無敗」のルクスを兄に持つアイリが隊長を務めるソニックダイバー隊が出撃準備を終えてジャケットを羽織ってやってきたのであった。

剣崎一真は自分よりも幼い子が戦場に行くことには第一茶熊学園で7歳でも生活するために戦っていることを知っているのでさほど驚かなかったが、相川始は栗原天音と同じくらいの年頃の少女を行かせるわけにはいかなと言おうとしたが、ミレイユがもう既に双子の兄であるヨシユアも出撃準備を終えていると何を言っても止められない状況になったので相川始は止めることができないことにしたのであった。

「!! 橘さん。(。D。)ノ!!」

「あんな子どもたちが命を懸けてしまった以上、オレ達もやるぞ。睦月はスクール達の

助っ人に回した」

「すいません。レンゲルが飛べないので」

「いや。睦月には来てくれただけで感謝してるんだからな」

「はい!!」

「上城さん。行きましょう」

「失礼します」

劍崎一真の目の前に見慣れたある物が飛んできたので両手でキャッチしたのはその時、あの場所にジヨーカーアンデッドとして生きていくと決めて置いて来た使い慣れたライダーシステムであるブレイバックルだったのである。

アイリ達が命を懸けている以上大人である自分達も黙って行かすわけにはいかない
と判断した橘朔也からブレイバックルを受け取ったのであった。

レンゲルには空を飛べる♣のアンデッドが居ないので、スコール達の助っ人に回るこ
とになった上城睦月は申し訳なさそうにしていたが、劍崎一真は気にしていないと言
い、上城睦月はスコール達と一緒に出撃準備をしに立ち去ったのであった。

「さてと、わたし達も行くわよ」

「花陽。これ」

「ありがとうございます。ソウルセイバー」

『TURN UP』

「BOARDのライダーシステムを利用して着替えるとは」

「ナノスキンジエルを塗布しに行かないと!!」

「確か、本来ならば、開発者のDNAを持った人物ではないと行けなかったと聞いていたが」

「それを改良したんです。カティアさん達が」

「会ってみたいものだ。行くぞ!!」

スマイレ達も出撃するためにインテリジェントデバイスでスマイレが青に仁王立ちのドラゴンで、朱音が龍騎のシンボルマークの赤で、星奈が金色のドラゴン、なぎさが口に刀を加えた龍で、花陽が天使の翼を持ったドラゴン、天馬が紺色の刀を持った龍、瑛夏は黒ずんだ金色のドラゴンのオリハルコンエレメントを潜り抜け、イメージカラーのモーシヨンスリットに着替えたのであった。

理輝と勝美はもしもの為に待機することになったのであった。

橘朔也もまさかBOARDのライダーシステムをこんなことに利用することに驚いていたが、スマイレ達は至って冷静になって、ナノスキンジエルを塗布しに向かったのであった。

本来ならば、開発者のDNAを持った人物それも女性しか塗布できない物を改良した

のがミレイユとヨシユアの保護者であるカティアと、カティアの師である、ユーリエである。

「オレ達もか」

攻龍に設置してあるナノスキンジエルを塗布するカプセルからミレイユ達が出てきたので剣崎一真達も入りナノスキンジエルを塗布してカタパルトに向かったのであった。

「行くわよ!! 天帝の使い、蒼き海より現れよ!! 接続開始!! トランスコア!!」

「うえ。(。旦。)ノ!! スミレちゃんの周りに水流が!!」

【この姿でお会いするのは初めてでしたね。わたしはスミレの守護竜「トランスコア」と言います】

「スミレ・セイグリッド。出撃します!!」

「あれが装甲機竜」

「偉大なる古の竜よ。姿と力を辿り、再び地上に舞い降りよ!! 接続開始!! 抹消者!!」

ドラゴニック・デイセダント!!」

「あれ、朱音ちゃんは確か、龍騎で火属性だよね。(。.)?」

【わたくしは、なるかみの竜ですが、朱音が仮面ライダーに変身する際は火属性に置き換えているのです。ではお先に失礼します】

「出ですよ!! 聖なる竜!! そして、その神秘の力を奮え!! 接続開始!! ソウルセイバー!!」

【待っていました。テュポーン亡き今、わたしが花陽の相棒】

「行こう!! 来れないルーちゃんの分まで!!」

「本当にドラゴンと一体化していると言ったところか、さてと」

「!! 橘さん!!」

「剣崎、変身だ!!」

「はい!! (真耶。オレ、またブレイドとして戦うよ) 変身!!」

カタパルトに到着した仮面ライダー一行が見たのは、スミレ達が次々とカタパルトの発射台に乗って日本刀型機攻殻剣を掲げて、背後に自分達の惑星クレイの分身として使役していドラゴン達を呼び出したところに行くわしたのであった。

初めて見る空想上の生き物が目の前にいたので目を見開いていたのであった。

スミレ達の体に仮面ライダーのように装甲が形成されて、そのままカタパルトで発進したのである。

それに続くように剣崎一真は橘朔也がブレイバツクルを渡して、剣崎一真はいつもの右腕を伸ばしながら指鉄砲のような形にしながら伸ばし切ったところで手首を返して、ブレイバツクルのレバーを引っ張って、のへラクレスオオカブトの絵の青いオリハル

コンエレメントを展開されたのであった。

劍崎一真はここにはいない山田真耶を思いながらカタパルトの勢いでオリハルコンエレメントを潜り抜けて、銀の装甲に蒼いスーツに胸に♠が横られた装甲を纏いマスクは銀の角に赤い複眼の仮面ライダーブレイドが勝美ではなく劍崎一真が変身したのであった。

「みんなが集めてくれたこのカード、使わせてもらおう」

《FUSION JACK》

「スマレちゃん達と合流するぞ（OMO）!!」

「ハイ!!（真耶。オレまた仮面ライダーとして頑張るよ）」

劍崎一真は勝美から受け取った♠のQが左腕に装着されているラウズアブソーバに装填されていることを確認し、空中で、♠のJをラウズして鷲のマークが浮かび上がり装甲が金色に変化して背中に鷲の翼のマントが装備されたことで飛行可能になったのでスマレ達の後を追うことになったのであった。

銀の福音と装甲機竜とソニックダイバー隊

銀の福音が暴走したことを受けて天夏達も現場付近の海域に向かうため、出発地点になる砂浜に到着したのであった。

「行くぜ!! 弥生!! 聖域の守護竜よ、今こそ我のもとへ!!」 接続開始! サンクチュアリガード!」

「この世の全てを焼き尽くす黙示録の炎!! 接続開始!! 出でよ!! ドラゴニック・オーバーロード!」

【うむ】

【弥生様。片付けましょう!!】

「来い!! ロードクリムゾン!!」

【足をすくわれぬよう、全力を尽くす】

「アンタ達が味方でよかったわ!!」

「そうですね。わたくしたちでは天夏さん達の足手まといになるところでしたから」

「わたしも同意だ!!」

天夏と弥生は機攻殻剣を抜刀して、機竜二体が二人の背後に現れて装甲機竜と化した

のであった。

それに続くように箒がカードデバイスを掲げて中から皇帝竜「ロードクリムゾン」が召喚されて箒は光になって中に設けられた特設のコックピットの乗り込んだのであった。

セシリア達もISを身に纏って天夏達の後に続いたのであった。

今回の作戦は白式の単一能力「零落白夜」で叩き落すという完全なる失敗が許されないといんでもない作戦になっているが、一夏以外は既に天夏と弥生が手を打ってくれていることに気付いているのだが、敢て、「敵を欺くにはまず味方から」ということで知らない振りをしていたのであった。

戦艦「攻龍」からの助っ人が出撃する約30分前であった。

そして、銀の福音が通るとされている海域付近に到着したのであった。

「!!!」

「早速、お出ましか」

「作戦はわかっているのか？」

「作戦？ ああ」

「悪いですが、一夏さんの出番はございません!!」

「アンタはこの辺に迷い込んでくる漁船の救助よ!!」

「おまえら!!」

「!!」

「悪いね!!」

現場になる海域付近に到着した天夏達を出迎えてくれたのは、絶賛好評暴走中の全範囲射撃搭載の軍用機 I S 「銀の福音」がやってきたのであった。

一夏が作戦の事を覚えているかと質問してきたが、とつくに織斑千冬と篠ノ之束の作戦など実行する気はもう既になかった天夏達は一夏に現場付近に迷い込んできた漁船などの警戒を指示して、銀の福音と一戦交えることにしたのであった。

「流石、軍用機ですわね!!」

「あの三人くらいじゃないと追いつけない!!」

「レーゲンでも捕らえきれないとは!!」

腐っても軍用機だけあって、まだ高校生達にやらせている時点で可笑しいのだが、そこは、天夏と弥生の装甲機竜と、箒とロードクリムゾンのコンビがそれを I S にはない部分を補ってくれているので、セシリア達もついて来れているのであった。

そして、銀の福音と戦うこと 10 分が過ぎようとした時、

「お待たせ!!」

「誰ですのΣ(。Д。)」

【すいません、詳しいことは後に】

「天夏!! 弥生!! 助太刀に来たよ!!」

天馬&瑛夏 「天夏お兄ちゃん!」

「天夏の妹（。旦那）ノ!!」

「ソニックダイバー隊。到着しました!!」

「今度は、変わったISか?」

天夏の背後から完璧に銀の福音を捕らえた水の弾丸が通過して、天夏と弥生は笑みを浮かべたのであった。

そう、スマイレ達が助っ人に合流したのであった。

銀の福音と仮面ライダー

並行世界のISの世界でも銀の福音が暴走してそれをIS学園に依頼してくるという出来事に巻き込まれてしまった天夏と弥生は自分達の世界の仲間達とその協力者達が助太刀に駆けつけてくれたのであった。

「こんな鉄屑、灰にしてやろう!!」

「カグツチ!! 人が乗っていることを忘れるな!!」

「え!! 今度はドラゴンだよ。(。D。)ノ!! 痛!! 夢じゃない!!」

「ドロちゃん。あれは食べられないよ」

「可愛いうさぎさんですわ!!」

「流れを変える!!」

「オレの出番は?」

全員「ない!!」

それからドラゴンライダー(?)達も駆けつけてくれて戦力は申し分ないくらいになっただけであった。

完全に一夏が干されていたの言うまでもなかった。

一方で旅館に設けられた特設管制室では、

「なんだ!! この魑魅魍魎達は!!」

「あいつら!!」

「ドラゴンですよ(≡▽≡)!! うさぎちゃんが空飛んでる(≡▽≡)!!」

織斑千冬は目が点になって、篠ノ之束はまた痲癩を起している横で大はしやぎするが、こつちの世界でも山田真耶はいつも通りだったのである。

まさかの空想上のドラゴン達が並行世界のISが最強と言われる場所に集結していたのだから無理はないのであった。

「きいいいい!!」

「流石、軍用機だけはあるな」

「き〜!!」

【BULLTE!!】

「え?」

【KICK】

「ウエーイ(owo)!!」

「大丈夫か?」

「ありがとうございます」

「全身装甲 I S !!」

「仮面ライダーだ!! そんなことよりこの状況を片付けるのが先だ!!」

全員 「ハイ!!」

腐っても軍用機だけあるようでドラゴンライダー達の猛攻を物ともしない様で、全方位射程と言う武装まで完備されている銀の福音が暴走している以上は何としても機能停止させなければならぬのであった。

銀の福音の攻撃がセシリア目掛けて飛んできたのを、炎の弾丸が全て撃ち落として事なきを得たセシリアの背後からジャックフォームになっている仮面ライダーギヤレンこと橘朔也が現れたのである。

そして、仮面ライダーブレイドジャックフォームになった剣崎一真はラウズして銀の福音に蹴り込んだのだが、まだ機能停止には至らなかったものであった。

「一気に片付けましょう!!」

【御意!!】

「支援は任せてください!!」

「I S だけど、ボク達は負けない!!」

「そうよ!!」

「ああ。カタを付ける!!」

一気に戦力が増員したことで天夏達も反撃に打って出ることになったのであった。銀の福音の全方位射撃に注意しながら、

「劍崎!!」

「はい!!」

《THUNDER SLASH LIGHTING SLASH》

「天夏!!」

「ああ」

「せいの!!」

「ぶしゅ」

「銀の福音と乗組員は任せてくれ」

「お願いします」

そして、銀の福音の攻撃パターンを一瞬で見切った橘朔也の指示で劍崎一真はラウズカードをラウズして、天夏と弥生はそのまま、持っていた日本刀で斬りつけて見事、銀の福音を機能停止させて乗り込んでいた人も無傷で救出したのであった。

天夏と弥生はそのまま旅館の方へ帰還したのであった。

通りすがりの仮面ライダーだ!!

無事に銀の福音を機能停止させた天夏達は仲間達とは一旦解散して旅館に戻ったのであった。

「誰なんだ!!」

「そうだよ!! さっきから、おまえら二人は何か知っているらしいけど」

「落ち着いてください!! 二人とも。(。D。)ノ!!」

帰還して早々に織斑千冬と篠ノ之束が怒り心頭でやってきたのを山田真耶が制止していたのであった。

「天河!! 朝宮!! あいつらは誰だ!!」

「ただで教えると思いまして?」

「ほう? 教師であるわたしには」

「その答えは、「NO」と答えよう」

「誰だ!! 此処はIS学園が」

「ふん!!」

「ちーちゃん。(。D。)ノ!! なんかやばいよ。(。D。)ノ!!」

天夏と弥生は織斑千冬と篠ノ之束に先ほどの仲間の詳細を教えろと言いつつて来たのだが、そこに、ピーコックアンデッドで人間体は伊坂と名乗っている黒づくめの男が乱入してきたのであった。

そしてついに◆J「ピーコックアンデッド」としての正体を見せた伊坂を目の前にした篠ノ之束は先ほどの態度が一変して織斑千冬の背後に隠れたのであった。

「伊坂!!!」

「橘さん、あいつは小夜子さんの仇じゃないですよ」

「その通り。所詮、ISは人間が作った愚かな産物しかない」

「おまえ!!! 天災を馬鹿にするのかよ!!!」

「くだらん!!!」

ピーコックアンデッドの姿を現した伊坂に先ほど戦艦「攻龍」に戻ったはずの橘朔也が飛んできたのであった。

もちろんほかのライダー達も駆けつけたのであった。

伊坂はISを愚かな産物と称して嘲笑ったので、篠ノ之束が怒りをさらけ出したのであった。

篠ノ之束の怒りを伊坂は下らないと言いつつ捨てたのである。

「天河!!! 朝宮!!! おまえらは一体なんだ?」

「織斑先生、篠ノ之束さん、あなた方二人がISを世に知らしめるためとは言え、白騎士事件を起こしたこと、過去は消せないんですよ」

「世のためだろうが、なんだろうが、誰かを泣かせてるなら意味ないね」

「それを言うおまえらは何なんだ!!」

伊坂を視界に入れながら天夏と弥生は織斑千冬と篠ノ之束に向かって白騎士事件のことを追及したのであった。

追及された織斑千冬と篠ノ之束は天夏と弥生に向かって、何者かと言ったのであった。

その時、弥生の背後に銀色の幕が現れてそこからマゼンタ色のカメラをぶら下げた青年が姿を見せた所で、

弥生&星也&? 「通りすがりの仮面ライダーだ!!」

「仮面ライダー?」

「もしかして?」

「だいたいわかった」

「天夏!! 弥生!!」

「まさか、あの子達とそこにいる人が仮面ライダーなんですか?」

アドリビトム組に所属している見た目はボーイッシュな弥生とタメが張れるスタイ

ルを持ったボクっ子少女にしてデイセンドーと言われる星也も駆けつけてくれて横並びに「通りすがりの仮面ライダー」と決め台詞を言ったのであった。

明かされる真実

ついに並行世界の I S の世界での仕事も佳境に入ったのだが、困ったことにまさかどうやって来たのかはわからないが、よりにもよって任意の相手を洗脳できる能力を持った◆の J のクジャクのアンデッド「ピーコックアンデッド」の姿を見せた伊坂までいるこの状況で、全くアンデッドに目もくれずに織斑千冬と篠ノ之束の二人は激怒して、天夏と弥生に一体何者だというお約束の言葉を言ったので、弥生が言い出すタイミングよく、アドリビトム組のディセンダーと呼ばれる存在である少女である星也と首からレトロなカメラをぶら下げた男と同時に「通りすがりの仮面ライダーだ!!」と決め台詞を言ったのであった。

「あの子達が仮面ライダーなんですか（。D。）ノ!! 士くん」

「どうやらそうらしい」

「仮面ライダーがこんなにも集まったか、ジョーカー!! 織斑千冬、篠ノ之束、貴様らは愚かなことでしか I S を広めることができなかつた罪人ではない」

「なんだよ!! おまえは!! 千冬姉と束さんのことを見下しやがって!! なんで箒は黙ってるんだよ!!」

「一夏、おまえは本当の事を見抜けると思っていた。それも今日までだ!!」

「そうですわね、初めての世界初の男性操縦者として持ち上げられて良いようにされていることに気付かないとは」

「なんで!! 側にいて気づかなかったのよ!!」

「オレは何も知らなかった!! オレはオレは、悪くねええつええ!!」

「無様なだな」

「伊坂。おまえ!!」

「オレは、ISと言う物がどのような物か知りたかったのだが、分かったのはライダーシステムの下位互換だということだ」

「待て!!」

士と呼ばれた男は天夏と弥生が仮面ライダーであることに驚いている同行してた女性にそう答えた所で、ピーコックアンデッドの姿になっている伊坂にやっと気が付いた織斑千冬と篠ノ之束に向かって伊坂は独自のルートで何故ISが広まって女尊男卑の世界になったことを持ち前のマインドコントロールで知ったらしく、学年別トーナメントの時のいたのはマインドコントロールで企業の誰かを操って自ら潜入してそこで白騎士事件を知り、裏まで取って、実行犯が織斑千冬と篠ノ之束の二人のマッチポンプだと突き止めて実弟と実妹の目の前で嘲笑いながら暴露したのであった。

箒はもうすでの実姉と幼馴染みである一夏から脱却したので気にしなかったが、一夏はまさか実姉とその親友が世界を巻き込んだテロ行為を犯していたことを受け入れずに、周りから一線を引かれたことに狼狽えたのであった。

そして、ピーコックアンデッドの姿のまま伊坂は一夏を嘲笑いながら姿を晦ましてしまったのであった。

目覚めよ!! その魂!!

パラレルワールドの伊坂ことピーコックアンデッドに白騎士事件が織斑千冬と篠ノ之東の二人のマッチポンプだと明かされた一夏は受け入れずにいたのであった。

ピーコックアンデッドは銀色の霧のようなもので姿を晦ませてしまったのであった。

「貴様ら!!」

「ちよつと!!」

「アンタらの所為だ!!」

「おまえ達のような世界を巻き込んでISのような物を見つけた奴と一緒にするんじゃない!!」

「オレ達仮面ライダーはそんなものよりも大切な物を守るために居る」

「それは、こつちも同じだ!!」

「違う!!」

「強行な手段は許さないものを生む。わかるよね? 教師になったブリュンヒルデである織斑千冬」

「どうやら、まだいるみたいだぞ。ユウスケ ナツミカン」

「オレはISの事はさっぱりわからないけど、そんなやり方間違ってるよ!!」

未だに織斑千冬と篠ノ之束の二人は天夏達に完全に八つ当たりと言えることを言い出したのだが、それに反論する証拠を持つて以上、天夏達は引くことはなかったのである。

この世界にやって来たばかりの士と、ユウスケと呼ばれた青年も言い返したのである。

その時だった

「危ない!!!」

「ほう、やるではないか」

「なんだ!!!」

「おまえ達はISで秀でているというのか確かめに来たのだ!! 人は人であればいいのだ!!!」

「ちよつと、箒(。D。(ノ!!!」

「行くよ!!!」

「間に合ったわね」

「誰ですのΣ(。D。(ノ!!!」

「アンタ達は下がってなさい!!」

「士! あの子達に巻かれてるベルト!! こうしちやいられない!!」

ピーコックアンデッドが帰って行っと思った矢先に銀色の霧のようなものからたくさんの怪人が現れて隊長各であるう牛の怪人がいきなり生身の人間もいるのにも拘らず躊躇しないで魔術のような物で攻撃してきたのであった。

弥生が間一髪、一夏を抱えて横に飛んでかわして事なきを得たが、戦うしかない様で、そこに朱音達が予め鏡にカードデッキを映して腰にVバックルを巻いた状態で現れたのを見た士達も戦うことになったのであった。

「どうやら、やるしかないようだ」

「え!! 箒、そのベルト」

「箒ちゃん(。D。)ノ!!」

「姉さんを選ばなかったのはこういうことだったんだな!! 変身!!」

「あの子がアギト!!」

「行くよ!! みんな」

天夏達「変身!!」

《K A M E N R I D E D D D デイケイド!!》

《シャバドウビタツチヘンシ〜ン! フレイム! プリーズ! ヒーヒーヒーヒー!》

《start your Engine》

《TURN UP》

《OPEN UP》

《Change》

箒は自分に宿っていた本来ならば弥生の物だった光の力を受け入れる覚悟はできたようでも右腕を斜め下に伸ばして引きゆっくりと伸ばして行った瞬間に腰に金色の水晶が嵌められたベルトが出現したのであった。

そしてベルトの両端のボタンを同時に押して光に包まれて一見、ユウスケのクウガに見えるが良く見ると、金色の二本の角と赤い目は似てるが装甲が金と銀でアンダースーツが黒と言う仮面ライダーアギトグランドフォームに変身したのであった。

それを見た天夏達以外が目を見開いたが気を取り直して自分のベルトを巻いて一斉に変身したのであった。

「箒。アギトに」

「アギト? それが弥生達と言うわたしの仮面ライダーとしての名前か」

「そういう、おまえらも、ディケイドだろ」

仮面ライダーディケイドに変身した弥生は箒が変身した仮面ライダーアギトに近づきながら怪人達を蹴散らしながら横に並び立ったのであった。

砂浜での戦い

天夏達は突如出現した牛のアンノウンであるバッファローロードとアントロード部隊に襲われてしまったのであった。

その時、箒に宿っていた本来ならば弥生つまり「篠ノ之箒」の弥生が死んでいるのでそれが今いる世界の篠ノ之箒に移ったことで、箒は光の力に完全に目覚めてそして金色の装甲に赤い目にクウガに似た二本の金色の角を持った仮面ライダーアギトに変身できてしまったのであった。

「? 良し!!」

「弥生!! そのカード!!」

「ブレイドの!!」

「うえ?」

「今更、どのような力を身に着けようと」

「おまえ確かオレと士に倒されただろうが!!」

「それじゃあ、早速、使わせてもらいます!!」

《KAMEN RIDE BBB BLADE!!》

「姿が変わった。(。D。)ノ!! それもブレイドに」

流石にセシリア達を守りながら戦っていたその時、弥生と星也のライドブツカーから三枚のライダーカードが飛び出してきてそれを見た弥生は笑みを浮かべそのままディケイドライバーに入れてオリハルコンエレメントを潜り抜けて、ディケイドブレイドに変身したのであった。

「ディケイドの力だからな。オレも行かせてもらおう」

《KAMEN RIDE FFF FAIZ》

「あのISは!!」

「仮面ライダーとISは違う!!」

もう一人のディケイドこと門矢士と言う青年は弥生と星也がディケイドライバーの力を使いこなしているのでお手本と評してファイズのカードをディケイドライバーに入れてディケイドファイズに変身したのであった。

ラウラは以前自分を助けてくれた仮面ライダーファイズと思い込んでいたのであった。

「はあっああ 虎牙破斬!!」

「ボクも」

《KAMEN RIDE DEN-O》

「行くよー!!」

「ユウスケ、我慢しろ」

「うん」

「デイクイドブレイドに変身した弥生はライドブツカーソードで仮面ライダーになる前にアンジールとジェネシスの訓練で修得した剣技の乱舞でバツファローロードを攻撃し、星也もどうやら別件で手に入れた電王のカードを入れてデイクイド電王ソードフォームに変身したのだが、以前にとんでもない目に遭った仮面ライダークウガに変身している小野寺ユウスケは落ち着かない様子だったのであった。

「これが仮面ライダーなのか」

「ちーちゃん!!」

「そうですよ、オレ達は、命がけで戦えない人たちの為に戦っているんです。それなのに、あなた方はISを見せつける我儘で世界を変えてしまった」

「ふざけるな!!」

「そいつが言った通りだ。おまえらは自分のやらかしたことに目を背けているだけだ!!」

「貴様ー!!」

アンノウンの部隊と戦っている天夏達を見ていた織斑千冬は仮面ライダーアギトに

覚醒した箒を目の当たりにして信じられないという表情を浮かべていたのであった。

そこに、仮面ライダーレンゲルに変身している上城睦月がやって来て、護衛するついでにISのプレゼンテーションのやり方を間違えていると言われたことに織斑千冬はまた腹を立てて、土が戦いながら自ら犯した過ちから逃げているだけだと言われて激怒したのであった。

《バッチリミナー!! バッチリミナー! カイガン!! ムサシ!! 決闘!! ズバツと!!
超剣豪!!》

「誰だ!!?」

織斑千冬はまた見境なく近くにいた上城睦月に襲い掛かった所に、別件で遅れてきた星奈がゴーストドライバーに直接「ムサシ魂」をセットして仮面ライダーゴーストムサシに変身して織斑千冬のISの剣を分解したガンガンセイバーで受け止めたのであった。

「そろそろ、ファイナーレとしましょう!!」

「ああ!!」

《FIRE GEMINI DROP BURNING DIVIDE》

《チヨロイイネ!! キックストライク!! サイコー!!》

仮面ライダーウィザードフレイムスタイルに変身している天夏と仮面ライダーギャ

レンに変身している橘朔也が同時に、アントロードの集団目掛けて、オーバヘッドキックに影分身を合わせ、天夏はウィザードライバーにキックストライクウィザードリングを翳して、魔法陣を展開して炎を纏いながらまるで体操選手のような動作をした後、そこから同時にライダーキックを放つというとんでもない光景になったが見事アントロードの部隊の一部を片付けたのであった。

二人の「篠ノ之箒」のライダーキック

並行世界のISの世界で偶然にも仮面ライダーディケイドが三人もいるという光景になっている海岸でバツファローロードとアントロードの部隊と交戦している天夏達
はアントロードの部隊を片付けながらバツファローロードに戦いを挑んでいたの
であつた。

やっと剣崎一真が変身した仮面ライダーブレイドに出会えたことで弥生と星也のラ
イドブツカーから仮面ライダーブレイドのカードが飛び出してきたので、弥生がディケ
イドドライバーに入れてオリハルコンエレメントを潜り抜けて、ディケイドブレイドに
変身し、仮面ライダーアギトブランドフォームに変身中の箒と弥生の二人だけでバツ
ファローロードと戦うことになったのであつた。

「どうした？ 所詮その程度のような」

「箒!! フォームチェンジ!!」

「フォームチェンジ? こうか?」

「あの子、スゴイ」

「さて、ボクも 必殺技!!」

《FINAL ATTACK RIDE DDD DEN—O!!》

「その剣どうなってるの。(。D。)ノ!!」

やはりぶつつけ本番での戦闘で剣道全国制覇の筈が剣もなしに素手での戦闘はやや分が悪かったがデイクイドブレイドに変身した弥生との連携で何とか仮面ライダーアギトにフォームチェンジが可能なることを知った筈は無意識に仮面ライダークウガマイティフォームに似てるが右側が赤い火属性のフォーム「フレイムフォーム」にフォームチェンジしてこれまた無意識に使い慣れた日本刀のようなフレイムセイバーを呼び出して装備したのであった。

デイクイドライバー電王ソードフォームに変身中の星也は電王のカードを入れてデングアツシャーソードモードの刀身が宙に浮きそのまま振り回しながら炎の斬撃を放つたのであった。

星也に同行していたカノン・クリスタルは目が点になってしまったのであった。

かなりの範囲を攻撃したので大方アントロードの部隊を壊滅させたのであった。
弥生も、

「ブレイドに変身してるけど!! こういうことできるんだよね(。——)☆」

《ATTACK RIDE》

「あの子……土より使いこなしてるよね(。。。)」

「だいたいわかった」

ディケイドブレイドに変身しているがブレイドに関するカードしか使えないと思われがちだが、弥生の戦闘センスとドラゴニック・オーバードロードと製作者のヴェスタWSCの説明もあつたので、激状態にならなくてもいきなり別の仮面ライダーのカードを使うことを思いつく機転を見せたので、クウガマイティフォームになっているユウスケは弥生の能力を評価したのであつた。

弥生が使ったカードはブレイドではなく、レンゲルの「ブリザード」だったのであつた。

「何故!! あんな物の為に戦うのだ!!」

「ボクと箒はISの為にじゃない!! 今を生きるために戦っているんだ!!」

「凶に乗るな!!」

「さてと、一緒に決めるよ!!」

「ああ」

《FINAL ATTACK RIDE BLADE!!》

バツファアローロードに箒と二人で挑んでいる弥生はバツファアローロードに戦いながら問いかけられて、今を生きるために戦っていると啖呵を切ったのであつた。

そして、箒はフレイムフォームからグラウンドフォームに切り替えた瞬間足元にアギト

の紋章が現れて頭のクロスホーンが展開して六本になって右足に紋章が収束されて、弥生もディケイドライダーにFINAL ATTACK RIDEのカードを入れて、

「ウエーイ!!」

「はあつアアあ!」

「人は・・・」

「ドカ〜ン!!」

「ふう〜。さてと、自己紹介がまだでした。ボクは朝宮弥生です」

「オレが出るまでもなかったか、オレは門矢士だ。こっちがナツミカンとユウスケ」

「ちゃんと紹介してください!! わたしは光夏美です」

「オレは小野寺ユウスケ。よろしくな」

弥生がブレイドのライトニングソニックと同時にアギトのライダーキックの同時攻撃で見事バッファローロードを倒したのであった。

そして、弥生は変身を解き、もう一人のディケイド、門矢士と言葉を交わしたのであった。

いざ!! 異世界へ!!

完全に空気が読む気がないアンノウンのバッファローロード部隊を壊滅させた天夏達に門矢士とその仲間達に遭遇したのであった。

「此処は!!!」

「さつきからなんだよ!!! アンタは!!!」

「ユウスケ!!! どうやらこの人、学校の先生らしいですね」

「だいたいわかった。どうやらこの世界での役割は片付けられたようだ」

「役割?」

「なんだよ!!! 仮面ライダーだからって、天災の束さんに逆らうのかよ!!!」

バッファローロード部隊を壊滅させられたのも束の間、織斑千冬と篠ノ之東の二人のことを完全に忘れていたのと、今はいる場所がIS学園の臨海学校の為に貸し切り状態なので、天夏と弥生は一応生徒になっているので問題はないのだが、朱音達を含むメンバー全員が部外者になるために怒っていたのであった。

「それ以前に、織斑先生は礼を言うのが先じゃないのですか?」

「おまえ、どんだけ、ちーちゃんを苛めれば気が済むんだよ!!!」

「苛める？ 勘違いしないでもらいますか。これを見ても言い訳できるとは思っていないですよね？」

「ややややめろおおおつおおお（。口。）ノ!!」

龍美も天夏達に経験を積ますために倒し損ねたアントロードを倒して愛刀を鞘に納めて、恩を仇で返す織斑千冬と篠ノ之束に叱咤したのだが、篠ノ之束は相変わらずの態度だったので、龍美は空中にスクリーンを呼び出してある映像を流したのであった。

「ウソだろ!! な!! 千冬姉!!」

「一夏。これが君のお姉さんが犯した。罪だよ」

「わたしは!! 何も悪くない!! 悪いのは!!」

「ISを認めようとしなかった連中かよ!!」

「さてと、オレと弥生は箒達と旅館に戻ります」

「わかった。また会えるの楽しみにしてる」

そう、龍美が流した映像は紛れもなく白騎士事件に使われたIS「白騎士」に乗り込む織斑千冬だったのであった。

それを見た一夏は信じられないと言った表情で、姉の織斑千冬に詰め寄ったが、織斑千冬が黙り込んでしまったのであった。

篠ノ之束は自分が犯した罪を受け入れようとしなかったのだった。

「このまま問い詰めても逆効果であると思い、一行は解散したのであった。

「箒も変身しちゃうし」

「いいの? お姉さんが持ってきたIS」

「もう、わたしには、ロードクリムゾンがいるからな」

「そうでしたね」

旅館に戻った一夏は完全に意気消沈しており、天夏達は箒が暴走しないで仮面ライダーアギトに覚醒したと天夏と弥生が仮面ライダーに変身したことに驚いていたのであった。

「この世界でのお仕事は終わったよ 二人ともご苦労さん」

「龍美姉はどうすんだ?」

「どうするこうするも、SEEDからショッカーらしき集団と交戦したって言ってたから、それについて調べないと、もちろん、元の世界に戻るに決まっているじゃない!!」

「そういえば、ディエンドドライバーもあつたよね?」

「それ、向こうの山田先生にあげちゃった(><)」

「大丈夫かな?」

「銃の腕は問題ないとして、身長が」

「ディエンドドライバーで変身したら自動的に神姫時の身長になる機能を搭載してある

よ」

「どちらにしても、山田先生だし、問題ないか」

龍美と天夏と弥生は誰もいないことを確認して人気がない旅館の裏で今いる世界での仕事が終わったことを話していたのであった。

ふと弥生がデイケイドライバーがあるのならデイエンドライバーがあるのではと言うと龍美がウィンクしながら、向こうの世界の山田真耶が持っていると言った。天夏と弥生は山田真耶が子供に見えるほどの身長しかないことを思い出していたが、龍美はデイエンドライバーに神姫時と同じ身長になる機能を搭載してあったのであった。

こうして、天夏と弥生はこの世界での仕事を終えたのであった。

そして、

「さて」

「待ってください！」

「セシリア達だ」

「行っちゃうんだったら、一声くらいかけて行きなさいよ!!」

「ごめん」

「失礼ですが、もしかして、スマレさんって」

「ご名答、あなたよ」

「お願いがあるんです」

翌朝、自由の身になったシャルロットを連れて旅館から直接自分達の世界へ帰るために旅館の玄関から出て行こうとした天夏達をセシリア達が追いかけてきたのであった。

そして、セシリアはもう一人の自分である、スマレと対面したのであった。

セシリアはスマレを見て何か頼もうとしていたのであった。

「わたくしの従姉妹になってくれませんか?」

「いや。そこは、双子だろ」

「ラウラ。それは違うでしょ」

「そうね。いいわよ。折角会えたし、手を貸すわ」

「はい(〽)〽!!」

どうやら、従姉妹として認めて欲しいということだったのであった。

スマレとセシリアと言う二人の自分同士で実の両親を亡くしているため頼れる人物がいた方がいいことは二人とも知っているのだから、次元を超えての従姉妹が誕生したのであった。

「箒、ボク達はこれから先、いろんな世界に行くことにする。このまま、この世界で過すのなら止める気はないよ。選ぶのは箒だよ」

「わたしは……」

スミレとセシリアが従姉弟になったので弥生は箒にこれから先いろんな世界へ行く
と告げて、このまま世界にとどまるかの選択を箒に委ねることにしたのであった。

箒はしばらく考えて、出た答えは、

「わたしは本物の世界を知りたい!!」

「そう来ないよね（――）――☆」

自分を縛っていたISは必要ない以上そして弥生に自分も連れて行ってほしいと言
い、弥生が差し伸べた手を掴んだのであった。

「待つてよ!! 箒ちゃん!!」

「待つて!! 政府との約束を忘れたのか!!」

「わたしはもう「篠ノ之束」の妹でもない!! それに自らが歩み寄らなければ何も得られ
ない!! それを天夏達が教えてくれた! だから!! だからわたしは自分の意志で選
んだ道だ!!」

「箒ちゃん!!」

「ほうきいいいいいい!!」

やはり織斑千冬と篠ノ之束の二人は追いかけてきたがとつくに転送魔法陣が作動し
て外から手が出せないようになっていた状態だったのであった。

箒は自ら「篠ノ之束の妹」ではないと言い、そして、自らの道を歩みと言って天夏達と一緒に旅だったのであった。

こうして、天夏達を巻き込んだ異世界見聞録は始まったばかりなのだから。